

# 初音島物語

akasuke

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

D・C・I Iに転生した男の物語。

死を覚悟しつつも、精一杯生きる青年と、その周りの人達の日常を描きます。

# 目次

## 初音島物語【前編】

prologue	「願い」	1
episode 1	「物語のはじまり」	9
episode 2	「ゆめ」	18
episode 3	「それぞれの」	24
episode 4	「彼方」	33
episode 5	「後悔なき」	40
episode 6	「ほんとは」	54
episode 7	「朝の出来事」	61
episode 8	「助手」	67
episode 9	「白雪」	74
episode 10	「雪月花」	84
episode 11	「小さな一歩」	92
episode 12	「必要なのは」	100
episode 13	「ふたりの歌姫」	109
episode 14	「大きな一歩」	123
episode 15	「不安」	128
episode 16	「彼と彼女と」	138
episode 17	「あなたの未来は」	146
episode 18	「夢よりもっと幸せになるから（前編）」	155
episode 19	「夢よりもっと幸せになるから（後編）」	164
episode 20	「そんな日常」	184

初音島物語【後編】

episode—21	「物語のはじまり」	194
episode—22	「会長と副会長」	202
episode—23	「バナナ好きな少女は、未来の夢を見るか」	210
episode—24	「過去と、現在と」	219
episode—25	「偶然か、必然か」	231
episode—26	「お節介な人間たち」	241
episode—27	「違いは」	254
episode—28	「いなくなるから」	262
episode—29	「美秋」	277
episode—30	「桜もなく、奇跡もなく」	289

302 episode—31 「少女とロボットは、希望の夢を見るか」

episode—32	「俺たちの幼馴染は」	317
episode—33	「一緒に、回らない？」	323
episode—34	「あの時から、きつと」	334
episode—35	「みんな、誰かを想っていて」	344
episode—36	「ふたりのものがたり」	362
episode—37	「恋人のはじめかた（前編）」	383
episode—38	「恋人のはじめかた（後編）」	396
episode—39	「誰かの、その夢は」	411
episode—40	「夢の足音」	416
episode—41	「そうだと、嬉しいな」	431
episode—42	「目にほこりが入った、だけですから」	



## 初音島物語【前編】

prologue 「願い」

「冬に桜っていうのも、何だか慣れちゃいましたね」

「そうかしら？ わたしは今年から初音島に来たから、すごい不思議な感じがしちゃうけどなあ」

「やっぱり、本島の方からしたら珍しいものなのですか？」

「そりゃあ、冬に桜咲かないもの。神秘的だから、冬の初音島の観光は大人気みたいよ？」

それなら、毎日見れることに感謝しないとですね、と。

病室の窓の向こうの景色を見ながら控えめに笑う少年を見て、看護師の女性——鈴木 葵は大人びているなど何回目になるかの感想を抱いた。

葵は看護の専門学校を卒業し、今年から初音島の病院で働き始めた。

小児科に配属された彼女であるが、子供と接する機会が少なく、嫌いとまではいかないが苦手意識があった。

自分で務まるだろうか。

そんな不安を抱えた彼女の最初の担当が、現在話している少年——初音 彼方である。

昔から堅物と呼ばれていた葵は、明るく話したり笑ったりが得意ではなかった。

だからこそ、彼方との初対面の際、どういう風に話し掛けようかと悩んでしまった葵は、

『本日から担当になりました、鈴木です。よろしくお願いします』

言ってから、自分は馬鹿なのだろうか、と内心で自分自身を罵倒する。

子供相手にも堅苦しい挨拶をしてしまった。

もつと言い方とか、喋り方とか、表情とか子供に向けるべきものがあるだろうが。

どうしよう、こんな挨拶されても困っちゃうよね、苦手意識もたれちゃうよね、どうしよう、いまから頑張ればいいのか——

頭の中で思いがぐちゃぐちゃになってしまっていた葵であったが、目の前の少年から控えめな笑い声が聞こえた。

『ふふ、うー丁寧にありがとうございます。 初音 彼方です』

これからよろしく願いますね、と。

真つ直ぐに、自身の目を見て笑顔で応えてくれた彼方に、今までの不安感が取り除かれた葵であった。

そこから、葵の看護師としての生活が始まった。

元来の性格のせいか、相も変わらず堅さは抜けなかったが、少しは子供への接し方を身に付けることができた。

——いや、彼方以外の子供への接し方だろうか。

彼方以外の子供に対しては、小さい子を安心させるような喋り方を心掛けた。

ただし、初対面が初対面だったせいだろうか。

敬語ではないが、同世代と話すような喋り方が定着してしまった。

隣の病室の裕太くんが云うことを聞いてくれない、

305号室の佳苗ちゃんがわたしを見ておびえてしまう、

どうすればいいだろうか——

そういう相談を彼方が嫌がらずに真面目に応えてくれるせいで、彼方と他の子供たちを同一に出来なかったというのが原因であった。

ただ、この奇妙な関係がなんとなく、心地がいいと感じる、葵であった。

「——さん、葵さん？」

「ん、えっ、彼方くん？ あれ、ごめん、ぼーっとしちゃってた」

「いえいえ、そういえば、何か話そうとしてましたよね？」

話している途中で昔のやり取りに思い出していた、というのも恥ず

かしい話しである。

葵は恥ずかしくて頬が熱くなるのを感じつつ、  
自分が先程まで話そうとしいたことを思い出す。

「そうそう、彼方くんって魔法の桜って知ってる？」

「……魔法の、桜、ですか？」

「そうそう、魔法の桜。 病院の近くに公園あるでしょ？ その奥に  
大きな桜の樹があるんだけど、その樹にお願いすれば叶えてくれるん  
だって」

わたしも昔に聞いたしね、と付け足しながら、葵は言った。

その話を聞いて、彼方は驚いた表情を浮かべ、質問を投げかける。

「昔って、一年中桜が咲きはじめてのは最近のことですよ？ それ  
に、葵さんは本島出身では？」

「お婆ちゃんが初音島出身なんだ。 お婆ちゃんが学生の頃は、今と  
同じように、一年中桜が咲いてたらしいんだ」

葵がまだ小学生の頃であっただろうか。

葵は祖母から昔の初音島のこと、そして魔法の桜のことを教えても  
らった。

彼女はその話が大好きで、何回も同じ話を聞いていたのである。

「お婆ちゃんがね、昔、その魔法の桜に願いを叶えてもらったんだっ  
て。 小学生の頃らしいんだけど——」

昔、1人の少女がいた。

その少女は、気が強く、意地っ張りで、本音を伝えることが苦手で  
あった。

謝りたいけど謝れなくて、もう少し素直になりたいけどなれなく  
て。

周りに上手く馴染めずに、距離を置かれてしまうことが多かったと  
のこと。

そんな少女は、魔法の桜にお願いした。



本音を伝えられるようになりたい、と。  
お願いをした後からだろうか。

素直になれず、友達と喧嘩した次の日に、  
友達から謝られたらしい。わたしもごめん、と。

意味もわからず、ただし、何回も同じことがあった後に少女は友達  
に尋ねた。

そうすると、友達は少女にとある手紙を渡した。

それは、少女の字であった。

書いた記憶がない手紙には、彼女が素直になれず、伝えたいけど伝  
えられなかった内容が書いてあった。

そこで、自身が魔法の桜にお願いしたことを思い出す。

——嗚呼、わたしのお願いを叶えてくれたのだ、と。

ただ、中学生の頃に魔法の桜が枯れ、願いは終わってしまった。

でも、そのあとは彼女自身の努力で素直になれるようになったら  
しい。

「——この話がね、大好きだった。今でもね、その話が本当なんだっ  
て信じてる」

大きい願いではない。

でも、大丈夫だよ、と。

悩む少女に、そっと背を押してくれた奇跡は、なんだか優しくくて、素  
敵だと思ったのだ。

「そう、なんですか……初音島…魔法の桜……」

葵の話を、彼方は、真剣な表情で聞いていた。

そして、何かを考え込むようにつぶやく彼方を、葵はただただ見つ  
める。

——あのね、彼方くん

彼女は、この話をした後に、言おうと思っていた言葉がある。

彼方くんの願いもきつと叶えてくれるよ、と。

葵は看護師であり、彼方の病気についても聞いている。

不治の病というわけではない。ただし、治療には手術が必要であり、成功率が高くない。

そもそも、子供である彼方の体力が持たないかもしれないという懸念がある。

彼方の両親が病気を彼自身に伝えてはいないと思うが、何処か達観した雰囲気を漂う彼が察しているような気がした。

——この先に、いっぱい楽しい人生が待ってる筈だよ

諦めないで欲しいと思った。

そんな、彼方の、最期を感じさせる穏やかさが、葵を不安にさせる。看護師として、人の死を看取る機会があるのだと覚悟はしていたつもりだ。

しかし、それでも——

魔法の桜が、もしも、本当に願いを叶えるのであれば。

——彼方くんを救ってください、と。

prologue 「願い」

初音 彼方は、転生者である。

いや、憑依者であろうか。

少なくとも、自身の前世と呼べる、昔の自分を思い出したのは最近のことである。

特に、前世と呼ぶときの自分が不幸だったと思うことはない。

ただし、幸せとも言いきれる人生ではなかったと思える。

だからこそ、今度は後悔しない人生を過ごそうと思った矢先のこと。

倒れてしまい、現在は入院生活である。

両親から何かを聞いたわけではないけれど、隠れて泣いていた母親と、そんな彼女を抱き締める父親をみて、理解ってしまうことはあった。

色々と思うことも感じることもあるが、

二度目の人生という気持ちが強いせいであろうか。

第一に思ったことは、両親への申し訳ないという気持ち。

そして、看護師として初の担当で看取らせてしまう、葬への申し訳ないという気持ちだ。

ただ、その前に自分でも出来ることをやってみるかな。

そう思えたのは、昨日の看護師の葬と話していた内容である。

ひとつ、普通では考えられない筈のことについて、自身の中で確信に至った。

——D・C・(ダ・カーポ)

それは、前世と呼べる自分が見ていたアニメであり、好きであったシリーズである。

初音島という場所が舞台の、少年少女たちの恋愛物語である。

魔法というファンタジー要素もあったが、基本的には日常的な生活を描いたものだ。

ギャルゲーということもあり、美人に囲まれるとかは、非日常と言えるかもしれないが。

前世で高校生の頃、深夜に偶然テレビを見たとき、D・C・というアニメを見たのだ。

彼の中でアニメは熱血物などが思い浮かべるイメージの中心であり、可愛い女の子との恋愛ものを見て凄くドキドキしたのである。

深夜アニメⅡエツチなアニメという印象がついた瞬間であった。

余談ではあったが、彼にとっては強い印象があった為、この世界がD・C・の世界なのだと思います。

ただし、死ぬ自分にはあまり意味がない話だと感じていた。

それが変わったのは、葬が語った、彼女の祖母の話である

『お婆ちゃんがね、昔、その魔法の桜に願いを叶えてもらったんだって』

彼方からしてみれば、盲点であったのだ。

魔法の桜については、アニメやゲームの臆気な知識で覚えている。

だが、魔法の桜で願いが叶うのは、D・C・作品で登場していた少女たち、という思い込みがあった。

だからこそ、作品に登場していない人々の願いを叶えていたことは、青天の霹靂であった。

「場所は、こっちで間違いないよね……」

後で叱られるだろうなどと、彼方は今頃騒ぎになっているだろう病院の人や両親に内心謝る。

それでも行くべきだと、自分自身の衝動をおさえることが出来なかったのだ。

勿論、これから行く場所は。

「――あった」

神秘的だと、目の前の光景を思った。

木々が沢山生える先に、ぽっかり穴が空いたように、ひらけた場所がある。

そして、その中心には、ぽつんとひとつの大樹が存在した。

大きな桜の樹に、雪が降る景色は、本当に非日常を感じさせる光景であったのだ。

その大樹に近づき、そっと触れる。

「いつか、枯れてしまうのか」

桜を見上げながら、彼方はつぶやいた。

葵の話が確かなら、今はD・C・IIに時系列は近いのだろう。

この桜は、不具合があり、枯らさざるを得ない状況になってしまうのだろうか、と。

「——それでも、」

そもそも、魔法の桜は、純粋な願いを叶える筈であった。

自分の願いが物語の人々と同じように、純粋である自信がなかった。

「——それでも、」

それに、願いが叶って病気が治っても、枯れてしまったら自分は――

「——それでも、」

こんな優しい世界に生きてみたいです、と。

数日後、病院には、さまざまに強い感情が溢れていた。

奇跡だと驚きを隠せない医者、

神に感謝する両親、

嬉しそうな表情で、泣きながら彼方に抱きつく葵の姿があった。

これは、死を覚悟する少年と、その周りの人々の日常を描いた物語である。

## episode 1 「物語のはじまり」

「んー……この場所に馴染む自分が不思議かも」

染まってきてるのかも、彼方は今の状況を見て思わず笑ってしまった。

初音島の風見学園は、現在の彼方が通う学校である。

中学と高校が付属校と本校として分かれており、初音島に住む学生がほぼ所属するマンモス校だ。

そして、彼が現在いる場所は、風見学園の多岐にわたる『地下室』の内の一室。

部屋の入り口近く、プレートに『非公式新聞部第二執筆室』と書かれている。

色々とツツコミどころが多いのであるが、そんな状況が前世と呼べる場所とは違い、少しの非日常を感じて嬉しくなってしまう彼方であった。

——優しい世界に生きたいです。

彼方の願いが叶い、既に10年の月日が経つ。

両親が、看護師や患者の方々が治ったことを喜んでくれたのをみて、幸せな気持ちを感じた。

そして、魔法の桜に感謝した。

いや、魔法の桜ではなく、芳乃さくらにであろうか。

勿論、物語を知ってるだけであり、直接はお礼をできなかったのであるが。

彼方は、魔法が解けるまでの期間に何をしたいだろうかと考えた。

日常生活を謳歌したいという気持ちは勿論ある。

そしてそれ以上に何かできないだろうか、という思いがある。

そのときに、真っ先に浮かんだこと。

それは、

——魔法の桜に願いを叶えてもらった人たちに、後悔しないように

伝えたい、と。

そんな気持ちであった。

ただ、何から始めれば良いのか迷い、まずは魔法の桜についての情報を集めたいと思った。

彼方自身の前世の記憶は、そこまで残っていない。

そして、アニメやゲームと違い、現実なのだから色々違いがあるだろう、と。

小さい頃は、いざやろうと思いつつも、中々できることはなかった。

しかし、後悔しないように自分なりに人の為にやれることはやった。

そして、彼が風見学園付属に入学し、目的の為に向かったのが、非公式新聞部である。

非公式新聞部。

風見学園が設立する当初から存在する非公式部活の一つである。

表向きはネッシーやUFOなどの非科学的な事件を調査して記事を書いたりしているが、真相は謎に包まれる組織だ。

ただまあ、体育祭やクリスマスパーティー（通称、クリパ）等で面倒を起こす厄介集団というのが大半の認識である。

関わると危険人物扱いを受けそうであるが、魔法の桜などを調べるにはうってつけな場所でもあった。

しかし、非公式新聞部に所属するには暗号などを解く必要があるという部分で、自分には無理じゃないだろうかと諦めている気持ちもあつた。

『……………ふむ、採用』

しかし、彼方を見るなり、非公式新聞部所属の杉並に採用されるという不可思議なことがあり、非公式新聞部に入部することが叶ったのであつた。

（何故同じように入学したばかりの杉並が所属しているのか、また、彼方が所属したいという前に採用を言い渡したのかは謎である）

非公式新聞部に所属したことにより、色々な珍事件に巻き込まれたが、情報を集めたり、人と知り合うことが出来たのは良かったと素直に思えた。

さて、そんな過去があり、非公式新聞部に所属する彼方であるが、所属するからには普通に仕事をする必要がある。新聞である。

非公式新聞部なので一応、新聞を作って載せるのだ。

大半はゴシップ記事であることから、見るのはマニアックな人達ばかりである。

「さてと、何を書こうかな……」

記事の内容に悩んでいた彼方であったが、

ふと、書く内容について一つ思い浮かんだ。

——ゴシップ記事なら、正直に書きたいことでも何とかなるかな  
散々、ネツシーやUFOなどの超常現象を書いているのである。

それならば、見る人が見れば感じるものがあるけど、大半は素通りする内容として書きたいことが書けるのではないかと。

そうして、彼方は記事のタイトルに早速文字を入力する。

『魔法の桜が枯れる!? 後悔する前にやっておくべきこと』

大半にはネタ話で終わってしまうだろう。

だけど、自分と同じように、魔法の桜に願った人たちには考えほしい内容である。

一人でも何かを感じてくれたら嬉しい、と。

彼方はこのときは思いも寄らなかつただろう。

この記事がきっかけで、自分のまわりが一変してしまうとは。



あれ、珍しいなど。

桜内 義之の、思わぬ場所に、思わぬ人物がいたことによる感想である。

平日の昼休み。

悪友の板橋渉と共に、学食で食事を済まし、教室に戻る途中であった。

その途中の廊下に、白い物体が立ち尽くしているのを見つけた。

いや、人形と例えた方がいいだろうか。

背が低く、髪が白い女性など、一人しか浮かばなかった。

「あれ、あれって杏だよな？ 何であそこにつっ立ってるんだ？」

義之と同じように、隣の渉が疑問を投げ掛ける。

そう、紛れもなく、自分たちの視線の先には、白い少女―雪村 杏がいた。

基本的に、いつも雪月花（彼女らの頭文字をとった総称）でセットなので単体な自体が珍しい。

更には言えば、無意味なことはしない彼女がその場で立ち尽くしているのも珍しいのである。

「おーい、杏！ そんなところで何でつつ立ってるんだ？」

「……………」

「あの、杏さん？」

「……………」

「あんずさまー！」

声を掛けて尽く無視されて涙目になる渉であるが、割と通常営業である。

確かに、渉の扱いは無視か毒舌で珍しくないのであるが、本当に聞こえてないように見えた。

よくよく見ると、普段と同じ無表情ながら、真剣に何かを見てるこ

とに気付いた。

「ん? ……新聞?」

その視線を追うと、壁に貼っている新聞が目に入る。  
義之は、そこで新聞について思い出す。

——この新聞は、杉並のどこか。

悪友の内の一人―杉並が所属する部活である、非公式新聞部。  
そういえばゴシップ記事とか書いて貼ってるよな、と。

思い出したからこそ、尚更ゴシップ記事に興味なさそうな杏が真剣に見ていることに驚きを感じる。

一体、どんな内容なんだ、と。

杏と同じように記事の内容に視線を向けようとした矢先、抑揚のない声が横から聞こえてきた。

「……あら、涉いたの?」

「おーい、ずっと声かけてたよな!」

「聞こえなかったわ、たぶん、耳が拒否したのね」

「……おれ、いつもこの扱いなのな」

「ほら、さっさと行きましょ」

涙目の涉と無表情の杏の、いつも通りの漫才に安心してしまう義之であった。

ほら、義之いくぞー、という涉の声に返事をし、向かう前に記事のタイトルを横目で見る。

『魔法の桜が枯れる!? 後悔する前にやっておくべきこと』

なんとというか、いつも通りのゴシップ記事な気がするんだが、と。  
タイトルのゴシップ感に、杏の興味ひく箇所疑問が出てくる義之であった。

「そういえば、杉並は?」

「え、知らね。なんか調査行くとか何とか言ってたけど」

「……そう。やっぱり渉は渉ね、安心したわ」

「え、なんで今バカにされたの!？」

漫才を聞きつつ、杏と渉と一緒に教室へと戻るのであった。

義之にとつて、いつもの日常の一コマである。

「わたし、少し行くところあるから」

あれ、珍しいと。

月島 小恋の、教室から出て行く親友の杏に対する感想である。

放課後。

普段なら途中まで一緒に帰るのだが、珍しく急いで出て行く杏に目を丸くする小恋であった。

「あれえ、杏ちゃんなんだか急いでたねー。用事でもあったのかなあ?」

同じ疑問を浮かべていたのであろう。

杏と同じく親友の一人である花咲 茜が小恋に疑問を投げ掛ける。

「月島も分からないよー……でも、なんだか今日ちよつと変じやなかった?」

今日というより、午後くらいから?と。

小恋は、杏の今日の雰囲気を感じ出しながら茜に答えた。

小恋は、午後の杏の授業中の姿に違和感を覚えた。

彼女自身は、勉強がそこまで得意ではない。

暗記物なんて壊滅的とは言わないが、苦手であると断言してしまうほどである。

それに比べて、杏は勉強に、特に暗記物については間違えたのを見

たことがない位である。

『板橋には無理かー。それなら、雪村、答えてくれ』

『……え、あ、すみません。わかりません』

教師からの質問に杏が答えられなかったのだ。

珍しいと思ったのは、小恋に限らず、生徒、教師全員の感想であったろう。

答えが分からないというよりは、集中しておらず、聞いてなかったのだろう、というのが小恋の推測であった。

「んー、たしかに、授業では杏ちゃん珍しいなあーって思ったけどー」

「なんか午後から集中してなかった気がするんだよね」

「そうそう！ 杏、今日おかしいよな！ 昼休みなんて呼びかけても無視されたんだぜー」

茜と話している最中に、肯定しながら会話に入ってくる渉。

それはいつものことでしょう？

なんでだよー！

茜と渉のやり取りを見つつ、考えていた小恋に、今度は義之が思い出したと言わんばかりに情報を述べた。

「そういうえば、なんか非公式新聞部の記事を真剣に読んでたな」

「あん？ 杉並のとこの新聞？ 杏が興味もつなんて珍しいな」

「タイトルが、ゴシップ感満載だったから杏が興味もつとは思えなかったんだけどな」

義之と渉のやり取りを聞いて、新聞について小恋が一つ思い出したことを伝える。

「ああ！ それって魔法の桜が枯れるとかって記事？」

「確か、そんな感じだった気がする。内容は見てなかったけど、何かいつもの通りに胡散臭いんじゃないか？」

「んーとね、中身はすごいマジメに書いてあったよー」

月島は隣のデザート特集見てたついでに目に入ったんだけどね、と。

若干、照れた表情を浮かべながら小恋は話した。

内容は、魔法の桜は願いを叶えてくれる、でも枯れたら願いは解けるから後悔しないように。

要約すると、そういう内容だった。

そもそも非公式新聞部の記事をはじめた見た小恋であるが、彼女は記事について、一つ感じたものがあつた。

——この記事書いたひと、優しいひとなんだろうなあ、と。

内容が真実なのか否かは分からないが、誰かに向けて伝えたいという気持ちが溢れてたように感じた。

何だか、文字なのに人の気持ちが感じられるっていいなーって、新聞をまた見ようかなと興味をもつ小恋であつた。

その感想を義之たちに伝えながら、さらに情報を付け足す。

「あ、それに、書いたひと自身が願いを叶えてもらったんだってー」

「へー、じゃあそいつは、エロい願いが叶ったんだな！ 羨ましいぜコンチクショー！」

「もうっ！ 最低だよ、渉くんは！」

「え、ちよっ、男なら誰でも思うって！ 義之もそう思うよな？」  
「思わないな」

義之の裏切りものー！と、泣きながら出て行く渉を見ながら、小恋は疑問を感じた。

そういえば、茜から何も返事がないと。

茜の方に振り返ると、そこには顔を俯かせる茜の姿があつた。

「茜？ え、どうしたの、大丈夫？」

「……………」

「え、茜！ あかねっ！」

「…え、あ、うん。大丈夫だよー」

半ば取り繕うように笑顔を浮かべる茜に、小恋が心配してさらに声を掛けようとするも、わたしも用事があるからと茜は足をふらつかせながら出て行った。

「茜、どうしたのかな……」

「すこし様子がおかしかったな、気になる話だったのか？」

小恋と義之は、出て行った茜に心配しつつも、同じように教室を出て行くのであった。

そして、ひよんなことから好意を寄せる義之との二人きりの帰宅に胸の鼓動が早くなっている途中のこと。

「あれ、そういえば……」

「ん、忘れ物か？」

「ち、ちがうよ！ ちょっと思い出しただけで大したことないから」

義之に否定しつつ、ひとつ、先程の話で思い出したことがあったのだ。

——そういえば、ななかもあの記事を真剣に見ていたな、と。

## episode—2 「ゆめ」

『もともと、分かっていたことですから』

こちらに向けて微笑みながら話す青年の姿をみて、

朝倉 由夢は、自分が夢を見ていることを認識した。

とある病室の風景。

由夢が見慣れてしまうほどに、何回も見た場面である。

『不安がないわけじゃないですけど、後悔しないように精一杯やりました』

だから仕方ないですと、病室のベッドに横になる青年は由夢の頭を優しく撫でる。

青年との顔の距離がすごく近く感じられる。

おそらく、自分は青年に抱き着いているのだろう。

青年の吐息を感じる近さに、胸の鼓動が高鳴るのを感じる。

それ以外に感じられるこの複雑な気持ちは何だろうか。

安心感と空虚感、好きという想い、混ざり過ぎて何がなんだか分からなくなる。

これは夢だ。夢なのだ。

分かっている筈なのに、何でこんなにも感情が高ぶるのだろうか。

何で、あった事もない筈なのに、こんなにも気持ちいが

混乱する自分とは別に、夢の自分は、手を伸ばし、青年の頬に添える。

——好きです、好きなんです。

言葉で伝えようとしても、想いが伝え切れていないと感じてしま

う。

だから、少しでも伝わりますようにと。

自分から彼の唇に近付けていき、そして——

episode—2 「ゆめ」

「ほーら、由夢ちゃん！ そろそろ準備しないと遅刻しちゃうよ？」  
「うー、うー」

ああ、今日はネコ由夢ちゃんなんだ。

朝倉 音姫は、こたつで唸る由夢を見て、定期的にやって来る日をあらためて感じた。

ネコ由夢の日（音姫が勝手に付けた名称）。

月に1度か2度であろうか。

定期的に、朝の由夢に見られる光景である。

普段は低血圧なのか、朝はテンションが低い由夢なのだが、たまに全く逆のテンションの時があるのだ。

義之とさくらの家に行き、こたつで丸くなるのは、いつものこと。

同じ姿勢なのだが、違うのは、行動。

たれパンダの様にぐでーっとするのがいつもだが、珍しいときは常に唸るのだ。顔を真っ赤にし、恥ずかしそうな表情で。

よくよく観察すると、たまにぼーっとしたかと思えば、頭をぶんぶん横に振り、唇を触る、そして唸るの繰り返しである。

音姫的には可愛いので、見る分には飽きないのだが、ギリギリまで出てこないで遅刻しないかヒヤヒヤするのである。

妹を遅刻させる訳にはいかない、と張り切るものの、本人が落ち着くのを待つしかないのが現状だ。



——なんで、こんなに恥ずかしがるのかな。 ……もしかして、おねしょとか？

本人が聞いたら激怒しかねないことを考える音姫だが、流石にそれはないだろうと、否定する。

だとしたら、他に何があるだろうか。

音姫の思考にひとつの推測が思い浮かんだが、突然、顔を真っ赤に染める。

——も、もしかして、ええええつ、エツチな夢を見たのかな

自身で考えたことに対して異様に恥ずかしくなってしまう音姫。

いや、由夢ちゃんはマジメさんだから弟くんとは違って見ないよね、と思い直す。

理由はともかく、学校に行く準備を急がせようと頑張る音姫であった。

実を言うと、最後の推測は惜しいとこまでいってるのだが、本人に確認しなかったことは正解であろう。

---

「おはよー、朝倉さん」

「おはようございます、由夢さん」

「はい、おはようございます」

心を落ち着かせないと。

周りのクラスメイトへ挨拶をしながら、由夢は頬が熱くなりそうな自分に対して喝を入れた。

頬が熱くなってしまう理由。

それは、自分がみた夢が原因である。

そう、自分が青年にキ——

「……ああ、もう、思い出しちゃだめだつて！」

「あ、朝倉さん……？　どうかしたの？」

「え、あ、何でもありませんよ、あはは」

驚いた表情で心配の声をなげてくれるクラスメイトに取り繕いつつ、意識は別のことに向いてしまう。

——なんで、あの夢は何回も見ちゃうのかな  
眠る際に見る夢。

普通のひとなら特に思うことはないかもしれないが、由夢にとってみれば、特別な意味を持つ。

自分には、不思議な力がある。

予知夢と言うのが正しいのだろうか、

自分が見た夢が実際に起こってしまうのだ。

そして、それは覆すことができない。

誰かが危険な目に遭う。

基本的には、誰かの危機的な、そして不幸な場面の出来事が、夢で見る内容なのである。

回避させたい、と。

そう思い、夢見た内容をメモするのだが、ひとつも回避出来たことはない。

夢の出来事は覆らないのだ。

そう、半ば、諦めてしまったときからだろうか。

今までとは少し違う夢を見るようになったのだ。

あったこともない、見たこともない、青年と由夢のやり取りを。

今朝見た夢のことである。

1度見た夢は基本的にはまた見ることはなかった。

しかし、青年との夢は何回も同じ場面を見る機会があった。夢だと認識できてしまう程に。

それだけでなく、もう一点、他と違う点がある。

それは、人の不幸な場面であるか否かである。

『不安がないわけじゃないですけど、後悔しないように精一杯やりました』

『好きです、好きなんです』

病室の風景。青年とのやり取り。

なるほど、確かに死を連想させる場面なのかもしれない。

でも、青年の幸せだという顔、自分の感情、そのどちらも不幸と呼ぶには、なんだか違う感じがしたのだ。

見た夢はそれだけでない。

それ以外にも、最期から遡る様に、彼とのやり取りを夢で見たのだ。どれもが不幸は場面には思えず、むしろ、逆の様に思えた。

「あなた、さん」

夢で、青年を呼ぶ自分がいて、思わず、その名前を口に出してしまふ。

名前も、学年も、既に分かっちゃまっている。

でも、何故か、会おうとは思わなかったのだ。

会いたくないとかではなく、まだその場面ではないと。

夢で見た初対面の場面まで待たなければならぬと。

そう思ったなか、自分の思考で、ふと、重大な事実気付く。

他の夢と違い、自分が行動すれば回避できてしまうことに。

いつ起きる出来事なのか分からない。

だからこそ、夢で出てくる場所の光景や天気、人などをメモに残し、その状況に備えるのだ。

しかし、夢の青年との初めての出会いなどに関しては、自分が会いに行けば、夢と違うことになるだろう。

夢の出来事を、回避できたと、言えないこともない。

そのことに、本当に気付かなかっただろうか。

——わたし、回避しないように、してた？

夢は覆らない。

回避できることを望んでた筈なのに、覆らないことを無意識に望んでた自身に、愕然とした。

でも。

だって。

仕方ないのだ。どうしても思ってしまう。

夢で感じた、あの嬉しさ、切なさ、悲しさ、それ以上の幸せな気持ちを抱きたい、と。

夢じゃなくて、現実でも、ああいう風にキスした――

「だからなんで、またそこに行っちゃうの!!」

同じ思考に戻ってしまい、思わず叫んでしまう。

何をやっているのだろうか、わたしは。

もうすぐ授業がはじまるのに、と。

そして、由夢は今の状況に違和感を覚える。

――あれ、授業前なのに、静かすぎるような……

思考の波から戻ると、異様に静かな教室で、クラスメイト全員と教師の視線を感じたのであった。

あれ、いつの間に先生が、あれ、いま授業中なのだろうか。

混乱する由夢に、教師は気まずげに、尋ねる。

「……あー、朝倉、なんというか、大丈夫か？」

頬が熱くなるのを抑えることが出来なかった。

## episode—3 「それぞれの」

『そう、アナタも、願ったのですね』

これは過去の出来事。

彼方が小学生の頃のことだ。

退院しても交流のあった看護師―鈴木 葵に頼み込み、とある人物と知り合うことが叶った。

『まさか、再び咲きはじめて桜にも、願いを叶える力があるとは思いませんでした』

鈴木 友美。

葵の祖母にあたる人物である。

葵から聞いた過去の話では強気な性格というイメージであったが、真逆の様に感じられる。

物腰が柔らかく、人を安心させる笑みを浮かべる、優しそうな女性であった。

魔法の桜に願いを叶えてもらった人物。

彼方にとっては、このとき会った頃から中学生になる現在までずっと尊敬し続ける女性だ。

彼方は、同じように願いを叶えた人と直接話してみたかったのだ。いや、それだけでなく、自分が何をしていくべきか、相談したかったのかもしれない。

彼方は友美に打ち明けた。

自分が病気であったこと。

魔法の桜に願い、病気を治してもらったこと。

これから何をしていけば良いのか悩んでいること。

友美が彼方の話を最後まで聞き、

その後に行ったことが、先程の言葉である。

これはわたしの推測ですが、と。

前置きをして、彼女は述べる。

『あの桜は、シンデレラに出てくる魔法と同じ様なものだと思うので  
す』

童話「シンデレラ」で登場する魔法の魔法は、午前零時に解ける。  
いつか、解けてしまう願いなのだと、友美は言った。

友美が、彼方を対等の人物だと思ったからこそ、正直な思いを述べ  
たのだ。

『だからこそ、後悔しないように生きなさい』

友美なりの、彼方への励まし。

そして、魔法が解けた友美が過ごした50年間の、自身の半生の結  
論であったのかもしれない。

その言葉は、彼方にとって心にずっと残り続ける、大切なもの  
になった。

その後も、彼方は友美に自身の思いを伝え続けた。

前世と呼べる記憶があることにより、見た目以上に精神的には大人  
びていたが、不安があつたのだろう。

信頼できる人を目の前にし、言葉をとめることが出来なかった。

そして、信頼に応えるように、友美もまた自分なりの助言をしたの  
だった。

『あとは……そうですね、私以外の、魔法の桜に願った人に会ってみな  
さい』

一通り話し終わった後、唐突に言ったのだ。

そして、付け足すように、紹介しますね、と。

そう告げる友美に、彼方は驚き、思わず立ち上がってしまう。

そんな彼方の表情を見て、笑いながら友美は話す。

私がそれを知ったのは、大人になり、同窓会で会ったときのこと  
で、と。

酔って想い出話に花が咲いたとき、思わず願いが叶ったことを話し  
たのだと言う。

そのときに、わたしも魔法の桜に願ったのだと、教えてくれた人が

いたのだ。

友美からしてみれば、驚きの人物であつたとのこと。

彼方はその人物について尋ねた。

友美は目を瞑り、懐かしいと思ひながら答える。

わたしが中学生の頃に憧れた、学園の歌姫です、と。

### episode 3 「それぞれの」

「ふむ、いいぞ」

「……ほんとに?」

自分で望んでいたことだけど想定外だ、と雪村 杏は思った。

放課後。

目的の人物に会う為に、ホームルームが終わり次第、急いで教室を後にした。

本当はクラスメイトなので教室で声を掛けようと思ったのだが、何かやらかしたのか、ホームルームを出席せずに何処かへと去ってしまっていた。

おそらく、生徒会を挑発したのだろう。

今日一日中、生徒会の面々が探して駆け回っているのを目撃した。以前、目的の人物が利用していた逃走ルートを記憶から引っ張り出し、可能性が高い場所を風潰しに杏は回った。

そして、目的の人物―杉並を、ようやく杏は見つけ出したのだった。杉並に声を掛け、杏は尋ねた。

魔法の桜についての記事を書いた人物に会うことは可能か、と。その回答が最初の場面である。

杏としては、はじめから肯定が返ってくることを期待して居なかった。

非公式新聞部は秘密主義を徹底しており、メンバーは杉並を除き、基本的に公になっていない。

だからこそ、どうやって言い包めるか考えていた分、肩透かしを食らったのであった。

そんな杏をみて、杉並は高らかに笑う。

「フーハツハツハ、どうやら雪村に一杯食わせることが出来たようだなっ！」

「……うるさいわよ」

こちらを見て笑う杉並に言葉を返しつつ、改めて問う。

ほんとにいいのか、と。

「本来であれば、雪村相手に情報を公開するのは危険なんだがな」

「それなら、なんで？」

「面白半分で聞いたようには思えなかったのにな」

それに、やつ自身も否とは言わんだろう、と。

杉並は付け足しながら答えた。

杏は、確かに興味半分で聞いたわけではない。

しかし、記事を書いた人物に会って如何するかは、実を言うと考えてなかった。

壁に貼られた新聞を目にしたのは、偶然だった。

しかし、記事の内容を読んでいく中で、様々な感情が浮かんでは消えた。

そのあとで、最後に思ったのだ。

この記事を書いた人物に会わなければいけない、と。

何故その結論に至ったのかは、あまり自身でも分かっていない。

しかし、何かが変わることになるのだろう。



場をセツティングするから明日まで待つが良いと、一言残してから去る杉並を見ながら、漠然とそのように思うのであった。

『お姉ちゃん、またぼーつとしてるよ?』

「ん、んーん、そんなことないよっ」

絶対そんなことある、と。

花咲 藍は、茜が無理して浮かべる笑みを感じながら、心の中で思う。

藍は、自身が特殊な状況に置かれているのを理解している。

昔、自分は既に水難事故で死んでいるのだ。

死ぬ直前までの、溺れ苦しんだ、あの苦い記憶を忘れることが出来ない。

そんな自分が何故か、茜と話すことが出来る状況にある。

幽霊の自身が、茜に取り憑いたのか、はたまた茜が作り出した二重人格でしかないのか。

考えることは多かったが、それでも自分という存在を喜ぶ茜を見て、望まれる限りは一緒に居たいと思う藍であった。

そして、長く一緒にいるからだろうか、茜が考えていることは手を取るように分かるのだ。

『そんなに、記事のことが気になる?』

「……そっ……そんなこと……」

ないと否定しようとしたのだろうが、茜は最後まで言い切ることは出来ない。

そして、そんな茜をみて、仕方ないだろうなと藍は思った。藍自身も気にならずにはいられなかったのだから。

藍が言った記事とは、今日の放課後に小恋たちと話していた、非公式新聞部の記事のことである。

直接は見えていないが、小恋から聞いた記事の内容は、茜と藍にとってみれば小さくない衝撃を受けた。

——魔法の桜、ねえ

茜には伝わらないように、あくまで内心で記事の内容をつぶやく。

魔法の桜、願いを叶える、枯れる、魔法が解ける。

超常現象、そして非現実な内容という意味では、今までの記事と大差ないかもしれない。

しかし、茜からしてみれば笑い話にはならなかったのである。

——そういえば、願ったって言ってたもんね

昔、藍は茜から自分が死んだ後についての話を聞いた。

その中で、茜が魔法の桜について噂を聞き、藍の存在を願ったのだという話を聞いていたのを思い出す。

自身の存在が、魔法の桜のおかげであるかは半信半疑であったが、同じように願いが叶った人物がいるのであれば可能性は高いのかもしれない。

魔法の桜の願いで、茜に宿ったのならば、魔法が解けたら、私は――

『ねえ、会ってみよつか、あの記事を書いた人に』

どのみち、あの記事が真実なのか否か、確かめる必要があるだろう。茜も同じことを思っていた筈だ。

しかし、確かめることが怖くて、言い出すことが出来なかったのだと思う。

であるならば、背中を押してあげるのが自分の役目だと、藍は感じた。

『会ってみないと、何もはじまらないよ。　ね?』

「う、うん……」

頷く茜を見て、そして、ふと思う。

——いつまで、茜の背中を押してあげることができのだろうか、と。

芳乃家での夕食後。

その日にあった出来事を話すのは、朝倉姉妹や義之にとっては毎日の日課となっている。

何を話そうかな、と。

音姫や由夢がひと通り話した後、義之が話すことを考えた際、一つ話す内容を思い出したのだ。

それは、放課後に小恋から聞いた、非公式新聞部の新聞記事の内容についてである。

直接読んだ訳ではないが、話すネタにはなるだろう、と。

そう思い、音姫と由夢に話したのだ。

「んー、そういえば、魔法の桜の話は友達から聞いたことあるなあ」

恋が叶うっていう話を中心だったけどね、と。

音姫は、以前の友達との会話を思い出すように答えた。

学生の間では、この様に願いを叶えるおまじない等の話は、よくある話である。

だからこそ、音姫からしてみれば、以前聞いたときも話半分で聞いていたのだ。

「弟くんは、その話がほんとうだって思うの？」

「あくまで小恋から又聞きしただけだからなあ——」

「だから——って——」

「そんな——と——」

音姫と義之の声が遠く感じる。

——ついに、来た

居間で義之が語った内容を聞いて、由夢は確信した。

夢で見た、彼と知り合う最初のきっかけである、と。

普段は自分の夢の内容を忘れないようにメモし、デジヤブを感じたら、メモ帳で確認する。

しかし、この場面だけは、何回も忘れないようにメモ帳を見て記憶していた。

——ようやく、会えるんだ

夢で何回もみて、何回も聞いて、何回も会って。

文字通り、彼と会うことを夢みていたのだ。

まだ対面していないのに、胸が高まるのを止めることができない。可笑しいのだと分かっている。

でも、仕方がないのだ。

夢では感情が現実と変わらないように感じられてしまう。

そのときの寂しさや楽しさ、嬉しさ、愛しさが。

——そっか、そうなんだ

由夢は、自分の想いに気付く。いや、既に気付いていた。

もう好きになっちゃってるんだ、と。

自分の想いを押し止めつつ、そろそろ始めようと由夢は行動に出る。

『ねえ、兄さん』

「ねえ、兄さん」

あの夢の通りに。

『わたし、その人に会ってみたいな』  
「わたし、その人に会ってみたいな」  
由夢自身の、物語の始まりを。

## episode 4 「彼方」

「おい、まず理由を話せよ」

各自、今日の放課後に時間を空けておけ、と。

朝のホームルーム後、義之や渉、雪月花の面々に突然言い出した杉並に、義之は言葉を返した。

「ふむ？ 同志桜内であれば察することが可能だと思ったけどな」

「どこに察する要素があつたんだよ」

「そうか、仕方ないやつだ」

大仰に肩を竦めるしぐさを見せる杉並に、こいつ殴ろうかなと思わず考えてしまう義之。

そんな義之の気持ちを察知したのか、前置きをやめて答える。

紹介したい人物がいる、と。

その言葉に驚いたのは義之だけでなく、他のメンバーも全員である。

「おいおい、お前からそんなこと聞くの初めてだな。なんつーか、意外だわ」

最初に言葉を発したのは、渉だ。

渉の言葉通り、人を紹介すると言うこと自体が初めてであり、秘密主義の杉並が言うのは、素直に珍しいと思つた。

「まあ、良いんだけどよー。もしかして女の子でも紹介してくれんの？」

「安心するが良い、板橋よ。お前は一生独り身だ！」

「そうかあ、それはよ…くねえ！ 何を安心すれば良いんだよっ！」

「まあ、わたるくんはあ、いい友達どまりだもんねー」

「きつと、好きな人に告白できずに応援しちゃうタイプね」

水を得た魚のように、渉に向けて話す杏と茜。

何で俺そこまで言われんだよと、叫ぶ渉を見ながら、途中であつた

話へと戻そうと、小恋が喋る。

「それで、杉並くん。結局、紹介したい人って誰なの？」

「フツ、それはだな。俺と同じく、入学当時から非公式新聞部に所属する、我が優秀な同志である！」

まあ、あまり非公式新聞部の活動に参加しないがな、と。

そう付け足す杉並を見ながら、嫌そうな表情をする義之。

杉並に面倒なことに巻き込まれている義之は、また何かあるんじゃないかと警戒する。

他のメンバーも、何か裏があるんじゃないかと警戒する中、ただひとり、杏は何かに気付いた様に杉並を見つめる。

「……杉並、そういうこと？」

「フツ、言ったであろう」

場をセツティングしてやると、と。

杏の漠然とした質問に、杉並は分かっていたかのように返答する。

杏と杉並のやり取りを疑問を抱きながら見る面々。

そんな周りを気にせず、杏は自身の答えを返す。

「わかったわ、会いましょう」

「おいおい、さっきの会話はなんなんだ？ あれで何か分かったのか？」

「まあ、ね」

渉が疑問を投げ掛けるも、それ以上は語ろうとしない杏。

そこからは、じゃあわたしも行くー！という小恋を筆頭に、渉、茜、義之もなし崩しに参加の意を述べるのであった。

その後、授業が始まるからと皆が席に戻る中、義之がふと思い出したかのように、杉並に話し掛ける。

「そういえば、杉並。由夢がお前んこの——」

魔法の桜の記事を書いた人物に会いたいらしい、と。言葉が続けようとした義之の言葉を遮り、杉並は分かっていたかのように言葉を返す。

——それでは放課後に朝倉妹も呼ぶがいい、と。ニヤリと笑いながらこちらを見て、自分の席へと戻る杉並であった。

義之は、杉並の後ろ姿を呆然と見ながら考える。

放課後に会うのは、魔法の桜の記事を書いた人物なのか？

いや、昨日のあのとき居なかったよな。

というか何で由夢が会いたかった——

色々と疑問が出てくるが、教師が入ってくるのを見て席へと戻る。

そして、最後に義之はつぶやいた。

あいつ、やっぱ分かんねえ、と。

これは余談であるが、

昼休みのときのこと。

「ねえ、杉並くん……あ、あのね」

「花咲よ、お前が会いたい人物は放課後まで待つといい」

呆然とする茜と、高らかに笑って去っていく杉並の、そんなやり取りがあつたとか。



放課後。

義之たちに加え、慌ててやってきた由夢は、杉並に連れられ、非公式新聞部の隠れ家へと向かった。

「さて、ここから入るぞ」

そう言いながら指し示した場所は、グラウンド近くのごみ焼却炉。その裏側の地面には、扉の様なものが付いており、開けると地下へと降りる階段があった。

ごみ焼却炉の裏側に地下へと続く道があることに驚きを隠せない面々であるが、そんな義之たちを面白そうに見ながら、行くぞと声を掛けて降りていく杉並であった。

「なあ、非公式新聞部ってなんなんだよ」

「……ふむ、秘密組織だと言っておこう」

渉の質問に、そう返す杉並をみて、なおさら非公式新聞部について謎が深まる面々であった。

地下室の複雑な道連れられながら歩く中、キョロキョロと周りを見ていた由夢が言葉を発する。

「それにしても、こんな地下があったなんて。お姉ちゃんたち、絶対

知らないだろうな……」

「まゆき先輩たちから逃げられるのも、分からなくはないわね」

杏と由夢が話している中、名案だとばかりに渉が自分の考えを打ち明ける。

「いいこと思いついたぞ！　この場所を音姫先輩たちに伝えれば、きゃー渉くん、ステキーってなるんじゃないやね？」

「ないな」

「ないかなー」

「ないわね」

「ないと思います」

即否定するなよつ、と周りに返す渉を見ながら、杉並は余裕そうな表情を浮かべて告げる。

「ふはは、別に逃走ルートは此処だけではないから知られても問題ない！」

「ふあー、ここだけでもこんな広いのに、他にもあるんだ」

「これ、杉並に置いてかれたら戻れない自信あるぞ、俺」

各々の思いを語りながら、まだもう少し先だと話す杉並に着いていく面々であった。

目的地に辿り着くまでに長いからか、道中ずっと話し続けていたが、ようやく杉並の足が止まる。

「さて、諸君、着いたぞ」

ここに紹介したい人物がいる筈だ、と杉並は告げた。

杉並の視線の先には、一つの扉があり、その横のプレートに『非公式新聞部第二執筆室』と記載されている。

そのプレートを見ていた義之が、杉並の言葉に引っ掛かるものがあったことに気付く。

「待て、いま、はずだって言わなかったか？」

「言ったぞ。 やつの日々の行動を考えると、ここに居る可能性が高いな」

淡々と告げる杉並に対して、手で頭を抑える様にした仕草をしながら

ら、杏は尋ねる。

「待ちなさい、あなた、場をセッティングするって言ったわよね？ 向こうに了解を取ったんじゃないの？」

「最初は連絡しようと思ったんだがな…しかあし！」

その方が面白そうな気がした、と。

ジト目の杏や呆れた目を向ける他の面々など意に介さないかの如く、堂々と言う杉並であった。

「まあ、居ないときは次の候補に行けば良いのだ…おーい、同志初音よ！ いるか！」

ノックしながら大声で扉の向こうに呼び掛ける杉並。

すぐに開けないのだな、と意外な律儀さに義之が感心しているのを他所に、一拍して落ち着いた男性の声が扉越しから聞こえた。

杉並さんですか、手が離せないので少し待ってください、と。

「…なんだ、男かよー」

「渉はひとりで帰ってなさい」

「そうだよお、興味ないなら帰っていいんだからねー？」

「あれ…なんか、いつも以上に辛辣じゃね？」

それに一人じゃ戻り道わかんねーよと、杏と茜の冷たい対応に涙しながらつぶやく渉。

杏と茜からしてみれば、目的の人物に会える直前に水を差す渉にはちよつと怒りがあつたのだ。

言葉は発しなかったが、後ろにいた由夢も渉に冷たい視線を向けていた。

後ろの渉たちの漫才を気にせず、杉並は返答した。  
分かった、と。

「中で待たせてもらおうぞ」

おい、ノックの意味ないだろそれ。

義之のツツコミを無視して中に入っていく杉並。

杉並が扉を開けた先には、

至るところに新聞記事が貼られている壁。

中央にある机を囲うようにして重ねられている本の数々。

そして、机の上の書類に何かを記載している男子学生の姿があった。

「杉並さん、それじゃあ私の返答の意味が……」

ないじゃないですか、と続けようとしたのだろう。

杉並を呆れた目で見ようと思った男子生徒は、視線を机から扉側に向け、杉並以外にいたことに目を丸くする。

「同志初音の記事に興味をもったみたいでな、会わせに来た」

そんな大雑把な紹介でいいのかと内心思う義之だが、その話を聞き、嬉しそうな表情を義之たちに見せる。

席から立ち上がり、こちらに向けて、男子生徒は言葉を発した。

——はじめまして

新しく人と知り合うことを喜んでいるのだろうか。

義之や渉、杏、茜、小恋、そして由夢を一人ひとりをしつかりと見ながら告げた。

——わたしの名前は、初音 彼方です、と。

## episode—5 「後悔なき」

「それにしても、色々と凄いな」

お茶を出しますから少々お待ちください、と。

そう告げてから出ていった彼方を見送った後、部屋の中を見渡しながら義之はつぶやく。

義之からしてみれば、新聞記事や地図、手書きメモなどが至るところに置かれている部屋を初めて見るので新鮮に感じたのである。

「確かに凄いねー、新聞部って記事を書く為にこんなに沢山調べるの？」

義之の曖昧な物言いに対して頷きながら、壁に貼られる記事を興味深そうに見る小恋。

義之や小恋だけでなく、他のメンバーも壁の記事やホワイトボードのメモ、積み重ねられているファイルを見たりしている。

そんな面々を面白げに見ながら、杉並は小恋の疑問に返答する。

「確かにネッシーやUFOを調査しているメンバーの部屋も似たようなもんだな」

しかし、と。

ひと区切りさせてから、杉並は言葉を付け足す。

この部屋の資料は、記事を書くことが目的ではないだろうがな、と。

その回答に、目を丸くして杉並を見つめる小恋。

「へっ、そうなの？」

「そうだと思うぞ。この部屋の資料は、記事を書く為というよりは、やつ自身の目的の為であろうな」

今回、珍しく同志初音は記事を書いたがな。

そう語る杉並に、今度は杏が質問を投げ掛ける。

「杉並、この部屋は彼だけが使っているものなの？」

「ここ暫くはそうだな、やつの物が多くなったので一室専用として貸し与えたのだ！」

「あん？ 随分と優遇されてるな？」

「入学当初から非公式新聞部に入った同志だ、多少は優遇するさ」

「入学からこんな怪しいところに入るなんて、人は見掛けに寄らないものね」

杏と渉、杉並が話している中、茜が少し緊張した雰囲気を漂わせ、杉並に質問する。

「ねえ、杉並くん。 初音くんが調べてることって……その、魔法の桜のこと？」

「それは……フツ、本人に聞くべきであろう」

杉並は何かを答えようとし、途中で止める。

そして後ろへと振り返りながら、ニヤリと笑い、言葉を発する。

「出番であるぞ、同志初音よ、と。」

杉並の言葉と視線を追うようにして義之たちが振り向くと、そこにはお茶を運ぶ彼方と由夢の姿があった。

「そんな、如何にも出番待ちしてたみたいない言い方しないでくださいな」

ちょうど朝倉さんと一緒にお茶を持ってきたばかりなんですから、と。

ジト目で杉並を見る彼方と、彼方の言葉に同意する由夢の姿をみて、ふとした疑問を浮かべる義之。

「あれ、由夢はいつの間と一緒に行ってたんだ？」

「かな……初音先輩がお茶を取りに行くって言ってた初めからですよ」

「人数が多いから手伝う、と言ってくれさって」

助かりました、と。

礼を述べる彼方に、当たり前のことですからと由夢は頬を赤くしながら嬉しそうに告げた。

「あれ、ふだ……いや、何でもない」

普段は手伝わない由夢が珍しいなと言おうとした義之だが、余計なことを言うなと視線で語る由夢を見て話すのを止めたのだった。

そして、彼方と由夢が皆にお茶を配る最中、茜の疑問について彼方は言葉を返した。

「花咲さん、でしたよね？　確かにわたしは魔法の桜について調べていました」

「その……どうして調べようと思ったの？」

さらに質問を投げ掛けた茜に、彼方は言葉を返した。

願いを叶えてくれた魔法の桜について、知りたかったからでしょうか、と。

その言葉に、少し表情を堅くさせる茜と杏に気付かず、渉はあー、と思いついたかのように喋る。

「あー、そういえば小恋が記事に願いが叶ったって書いてあったって言うってたな」

それじゃあお前は何を願ったんだよ、と。

そうですね、と言葉を置いてから少し悩む仕草を見せる彼方。

そんな彼方を見ても躊躇なく質問しようとする渉に、杏は視線を向けながら、止めさせるかのように強い口調で渉の名を呼ぶ。

「渉」

「え？　いや、だってよ……」

「渉くん！」

尚も聞こうとする渉に、今度は大きい声で止めるように名前を呼んだ茜。

二人からしてみれば、無遠慮に聞こうとする渉に怒りを止めることができなかったのだ。

そんな杏と茜の怒気を感じた渉は、戸惑うように二人を交互に見る。

戸惑いを見せたのは渉だけでなく、義之や小恋もそんな二人の様子に驚きを見せた。

「え、えーつと……」

「……………」

小恋がなにかを言おうとするも言葉が続かず。

そこから少しの間沈黙が続いたが、その沈黙を破ったのは彼方であった。

大丈夫ですよ、と。

周りを安心させるよう、笑いながら義之たちに伝える彼方。

言うのが嫌だった訳ではなく、どこから始めようか考えてたんです。

そのように言いながら、困ったように、頬を指でかきながら笑みを浮かべる彼方。

そんな彼方をみて、凍った空気が和らいだように感じられたのであった。

「さてと、それじゃあ話しましょうか」

魔法の桜に願ったときのことを、と。

彼方は、目を瞑り、その時の光景を思い出しながら話し始めるのであった。



何故だろうか、と。

彼方の話を聞きながら小恋は思った。

何故、こんなにも穏やかな表情で語れるのか、と。

彼方が話してくれたのは、彼が小学生の頃について。

昔、病気を抱え、入院生活を送っていたこと。

重い病気であり、助かる可能性が低かったこと。

看護師から魔法の桜の話聞いたこと。

ひとり、魔法の桜に向かい、生きたいと願ったこと。

その翌日、病気が突然治ったこと。

その内容は、病気も熱とか風邪しか体験したことがない小恋からしてみれば、遠くの世界に思えるような、とても重い話。

だけど話はそこでは終わらなかった。

「50年以上前も、いまと同じく、願いを叶えてくれる魔法の桜があったみたいですよ」

退院した後、かつての魔法の桜に願いを叶えてもらった人に会ったという。

「その方は、わたしに、こう言いました」

——魔法の桜は、シンデレラと同じ魔法のようなものなのだ、と。

小恋も童話『シンデレラ』については知っている。

灰かぶりと呼ばれた少女が、魔女に魔法でドレスやガラスの靴、カボチャの馬車を出してもらい、お城の舞踏会へと向かう。

しかし、その魔法は、午前零時に解けてしま——

そこまで思い出し、小恋は、その女性の言った意味について理解する。

思わず、彼方の方を見つめてしまう。

小恋以外にも、意味を悟ったのか、それぞれが複雑な表情を浮かべ、彼方を見ている。

そんな面々を見ながら頷き、彼方は告げる。

「いつか、魔法は解けて、願いは終わってしまうのだと言っていました」

そうしたら、病気が再発してしまうのでしょうか、と。

穏やかな表情を崩さず、重い事実を告げる彼方。

その表情をみながら、杏が一つ質問を投げる。

「……でも、病気が再発しても、治る可能性があるんじゃないかしら？」

「ええ、治療して、治る可能性がゼロではありません。でも、手術が成功する可能性は低く、治っても以前と同じように歩くことが出来ない場合もあるらしいです」

中学生になってから、仲の良い看護師を通じて、病気のことについて聞いたのだと、彼方は語る。

その返答に、杏だけでなく、小恋や他の面々も何を言えば良いのか、分からなかった。

小恋は、もし自分が同じ境遇であれば、辛くて、不安がずっと渦巻いて、ずっと泣いてしまうかもしれないと思った。

いまでも、想像しただけで泣きそうになってしまう。

だからこそ、心の中で思う言葉が、つい溢れ出して口に出してしま

う。

——何で、そんな表情で言うことができるの、と。

あくまで穏やかで、話している過去を懐かしそうに語る彼方に聞かすにはいられなかったのだ。

そんな泣きそうな表情の小恋を見た後、彼方は、かつて話した女性との会話を、再び話し出す。

「以前の魔法の桜は、何の予兆もなく、突然枯れて、願いは解けたそうです。 現在咲いている桜が、いつ枯れるのか分かりません……数年後かもしれないし、明日かもしれない」

だからこそ、と。

だからこそ、その女性が言ってくれた言葉は、忘れることが出来ません、と。

『後悔しないように生きなさい』……私の胸に、心に、ずっと残り続ける、大切な言葉です」

胸に手をあて、大切なのだと、本当に嬉しそうに言う。

そして、更に彼方は話す。

「いっぱい泣きました、苦しみました。 でも、そんな私の思いを受け止めてくださる方がいました」

彼方は心の中に、両親や看護師の葵、尊敬する友美を思い浮かべる。受け止めてくれた人たちがいるからこそ、今の自分がいるのだと思っている。

自分自身では、後悔しないように生きてきたつもりだ。

だからこそ、知ってほしいのだと。思っしてほしいのだと。

「魔法の願いは関係なく、どうか皆さんも、後悔しないように生きてください」

これを、きつと伝えたかったのだろう。

微笑みながら皆を見渡す彼方を見て、小恋は悲しく感じていた思いが解けていくのを感じた。

彼方の言葉に思うところがあつたのだろう。

それぞれが自分の中で何かを思い浮かべる中、渉が困ったように、

彼方に質問する。

「その、さ……後悔しないようにって、実際、なにをすれば良いんだ？」  
渉自身も感じるものがあったが、実際に何をすれば良いのか、始めれば良いのか分からなかったのだ。

そんな渉に、彼方は自分の経験をもとに話す。

「別に、そんなに大きなことをする必要はないんです。例えばですが、道中で困っている人に声を掛けたり、バスでお年寄りに席を譲るなどからでも良いと思います」

「え、そんなことから良いのか？」

「ええ、そうです。誰かがやるからと、やらなかった小さいことが、きつと死ぬ間際に、シコリに残ったりするんだと思います」

そんな他愛のないことが後悔に繋がるんです、と。

彼方自身の経験なのか、少し悲しそうな表情をしながら告げた。  
それだけでなく、と。

「恥ずかしいかもしれませんが、両親や友達に普段は言えない感謝をしたり、想いを告げたりするのも大事なことだと思います」

こういうクサイ話をするのは本当は恥ずかしい気持ちがあるんですよ、と。

恥ずかしそうに、照れた表情で話す彼方。

恥ずかしくても言葉にするのが大事なのだと、態度で示そうとしていたのである。

「私に出来ることがあれば、何でも言ってください」  
いつでもお待ちしています、と。

一人ひとりをしつかりと見渡した後に彼方が言い、今回の初対面は、終わりを告げたのだった。

彼方との対面後。

地下から地上に戻った頃には、既に日が暮れていた為、義之たちはそれぞれの家に帰宅していく。

その道中、渉と小恋は、自宅が近いこともあり、二人で帰っていた。

——後悔しないように、かあ。

彼方が話した内容を思い浮かべ、内心でつぶやく渉。

渉は、朝に杉並から誘われたときには、こんなに色々考えることになるとは思わなかった。

普段は、軽薄で調子がいい性格であったり空気が読めなかったりする渉だが、決して真面目に話す人を茶化したりはしない。

そして、彼方が話したことは、渉自身にも感じさせる何かがあった。

『想いを告げたりするのも大事なことだと思えます』

彼方の言葉を思い出しながら、ちらりと、隣で歩く小恋を見る。

出会って時間が経たない内に彼女のことが好きになり、今でも想いを渉は告げられなかった。

でも、と。

後悔しないように、俺も頑張らないといけない、と。

これから告げようとする想いに、緊張で震えそうになりながらも、意を決して渉は小恋に話し掛けようとする。

「あの……………」

「あのさ、月島は、私は、ヘタレなんだ」

話し掛けようとした渉であるが、その前に、小恋が渉に話し掛ける。  
いや、渉だけでなく、自分自身に対してなのかもしれない。

小恋は、渉の方を見ずに、ただ前を見ていた。

「でもね、今日の話を書きいて、後悔だけはしたくないって思ったの」  
本当は、まだ不安で仕様がなないけど、と。  
渉の方に振り向いた小恋は、泣きそうな表情を見せつつも、何かを  
決意したかのような強い目をしていた。

——わたしね、義之のことが好きなんだ

そう告げた小恋に、渉は頭が真っ白になるのを感じた。  
だけど、何かを言わなければ、と。

まだ迷った表情を見せる小恋に何かを言わなければ、と渉は思っ  
た。

「お前はヘタレなんかじゃねえよ、大丈夫だ」

きつと義之を振り向かせることが出来るさ、と。

そう告げた渉は、泣きそうな気持ちを隠し、必死に笑みを浮かべた。  
ちゃんと背中を押してあげられるように、勇気を出させてあげる為  
に。

笑顔を見せてあげられているのか、不安になりながらも。

『好きな女の子に告白できずに応援しちゃうタイプね』

いつか、杏から言われたこと。

確かに、そうだなんて渉は思う。

本当にその通りだと。

そして、今はこの場にはいない、新しい友人に内心で思いを伝える。

——後悔しないようになって難しいな、初音。

「ただいまー……って、もう、寝ちゃってるよね」  
もう深夜だもんね、と。

自身の家の扉を開けながら、芳乃 さくらは寂しそうにつぶやいた。

芳乃 さくらは魔法使いである。

そして、現在の魔法の桜を復活させた張本人であった。

かつてのように、皆の願いを叶えようとした為に。

いや、自分自身の願いをであろうか。

目的のために、初音島に戻った彼女は、サンプルとして残っていた魔法の桜の枝を利用し、再び桜を咲かせようとした。

目的を果たすことが出来た。

しかし、自分が植え込んだ魔法の桜は、純粋な願い以外にも叶えようとする不具合があった。

その調整するために、魔法の桜の樹に遅くまでおり、家に帰宅するのは日付を跨ぐことが多かった。

自分自身が巻いた種である。

でも、義之くんと一緒にご飯を食べれないのは寂しいな、とさくらは思った。

「あ、あはは、そういうえば昼から何も食べてないや」

静寂が辺りを包む中、ぐーっとお腹が鳴るのを感じ、さくらはひとり恥ずかしそうに笑った。

何か冷蔵庫にご飯ないかな、と。

キッチンに行く前に居間の電気を点けると、こたつの上に、ラップでラップされた、おにぎりが二個置いてあるのを見つけた。

「あはは、義之くんが作ってくれたんだね」

遅くなるから夕飯は大丈夫だと告げたのに作ってくれていた義之に、思わず笑みが溢れる。

「ん？ あれ、なんだろう、メモかな？」

おにぎりの隣に、ノートのページを破いたのだろうか、二つ折りになっていた紙を見つける。

その紙を広げて、さくらは、無意識につぶやいてしまった。

「あつ……つ……よし……ゆき、くん」

その紙には、義之からの短い、メッセージが書かれていた。

『遅くまでお疲れ様です。身体を壊さないか心配です。あまり無理しないでください、母さん』

「……あれ、どうして」

おかしいな。

メモに水滴が点いてしまうのを感じ、自分が涙を流しているのを感じた。

大事なメモなんだから汚したくない、そう思っても、溢れ出す涙を止めようとしても止めることができなかった。

——お母さん

昔、間違えて呼ばれたことを思い出す。

あのとき、義之は別に本当にさくらを母と思っていたわけではないだろう。

でも、それでも、義之から母と呼ばれたのが凄く嬉しかったのを覚えてる。

それでも十分に嬉しかったのに。



義之が母と想ってくれなくても、見守れるだけで嬉しかったのに。

「義之くんのおにぎり美味しいな」

義之がこんな自分のことを母親だと思ってくれていた。

「美味しいな、ほんとに」

今すぐにも部屋に行って義之に抱き着きたい。

直接、お母さんと呼んでほしいと。

でも、これだけで力が湧いてくるのを感じた。

「お母さん、こう見えてすごいんだから！ 大丈夫！」

今までは自分以外の、全てを救わなければと思った。

だけど、そうじゃなくて、自分の命を掛けてでも救いたいと思えるものができた。

義務感じゃなくて、

使命感じゃなくて、

ほんとに救いたいのだと。

息子の為に、頑張ろう。

さくらは、あらためて決意する。

——だって、義之くんの結婚するところ、一番前で見ないといけないんだから、と。

義之たちの帰宅途中に遡る。

渉や小恋とは別の帰り道で、家が近かった彼方と茜は一緒に帰っていた。

もう少ししたら茜の家に到着する、そんなときのこと。

茜が彼方に言った。

少し別の場所で話さないか、と。

彼方が茜の言葉に了承し、茜が向かった先は公園であつた。

「それで、話とは何でしょうか」

彼方に背を向け、こちらを見ない茜に、彼方は質問した。

暫くして、茜が言葉を発した。

自己紹介してもいいかな、と。

茜の言葉に彼方が戸惑う中、背を向けるのを止めて、振り返つた。

何故だろうか、彼方は疑問に思った。

先程までの彼女と何かが違うと思つたのだ。

そんな彼方を、悪戯げに、笑いながら見つめていた。

そして、彼女は、彼方に告げた。

——はじめまして、私の名前は、花咲 藍です。

目を見開き驚く彼方を見ながら、更に言葉を付け足した。

——わたしは、願いを叶えてもらつて茜に宿つた、妹です、と。

## episode 6 「ほんとは」

「なんで」

杏は、自分の感じている気持ちに戸惑う。

放課後、義之たちと彼方に会った後、義之たちと別れて杏は自宅に戻った。

そして、いつもの様にキッチンでレトルト食品を使って料理を作り、食べる。

その後に、日記を書く。

いつもと変わらない作業。

いつもと変わらない部屋。

それなのに、何故だろうか。

必要最低限しか置いていない、殺風景とよべる部屋でも、杏は慣れてきた筈だ。

それなのに、何故か今までより広く感じてしまう。

「なんで」

何故か、ひとりでいることが不安に、

そして寂しく感じているのだ。

自分の気持ちを分析し、原因を探ろうとする。

「やっぱり、魔法の桜の話、かしら」

昨日と今日の違いと言えば、放課後のこと以外には考えられなかった。

願いが解けてしまうことを、不安に感じているのだろうか、と。

杏は、自分自身に問うように口に出す。

しかし、これという、確証を得ることが出来ず、答えを見つけないことが出来なかった。

どうすれば良いのか、分からなくて。

——いつでも、お待ちしています。  
そんなとき、今日の帰り際、杏たちに伝えていた、彼方の言葉が頭をよぎる。

決して、その場限りの言葉ではなくて、嘘で言ったわけではない。今日会ったばかりなのに、彼なら大丈夫だと思える何かがあった。

「明日、訪ねてみようかしら」

あの執筆室に、と。

桜の願いにより叶った、この残り続ける記憶が、今日のルートを覚えていられるのだ。

向こうも戸惑うだろうと思う。

なにせ、自分自身が何を言いたいのか分からないのだから。

少し、心が軽くなるのを感じた。

そして、今日、彼方が話していた、とある言葉を思い出す。

『恥ずかしいかもしれませんが、両親や友達に普段は言えない感謝をしたり、想いを告げたりするのも大事なことだと思います』

「お婆ちゃん」

思わず、つぶやいてしまう。

養子として雪村家に入った杏。

杏を大切にしてくれて、既に3年前に亡くなってしまった、大切な存在。

そんな大切な人を思い出し、そしてぽつりと言葉が出てしまった。

——そういえば、一度もお婆ちゃんのこと『お母さん』って呼んであげられなかったなあ、と。

「あらためまして、 初音 彼方です」

公園にて、対面している女性―花咲 藍に、彼方は改めて挨拶を交わした。

そんな彼方の対応に、藍は悪戯げな笑みから一転、目を丸くして驚いた表情を見せた。

「……もっと、驚くと思ってた」

最初は驚いた表情を見せたものの、すぐにこちらに笑みを向けてきた彼方。

藍からしてみれば、想定したものと違い、落ち着いている彼方に驚いてしまっていた。

「まあ、確かに驚きはしましたが、そういうこともあるのだろうなつて」

私自身が不思議な体験をしていますからね、と。

彼方は、言葉を付け足した。

彼方自身が願いを叶えてもらっているのに加え、他にも魔法の桜に叶えてもらった存在を知っている。

だからこそ、驚きはしても、大概は受け止めることが出来るのであった。

「ぶーぶー、私としては、お姉ちゃん以外に初めて打ち明けたのに。そんなにリアクションが低いと寂しいなあ」

頬を膨らませ、睨み付ける藍に、ごめんなさいと謝る彼方。

まあ仕様がなか、と藍は仕切り直す。

そして、藍が自身のことを話し出す。

藍と茜は双子の姉妹であったこと。

藍が水難事故で死んでしまったこと。

気付いたときには、枯れない桜―いや、魔法の桜の前に佇む茜に宿っていたこと。

「最初はねー、お姉ちゃんが作り出した性格、二重人格なのかなって思ったの」

でも、それは違うかなって思ったの、と藍は言う。

茜が作り出した存在であれば、茜がない時の藍自身の思い出がある筈がないのだ。

でも、自分の中には、茜が熱を出した時に父親とふたりで出掛けた記憶がある。

「だからねえ、藍さんとしては、桜の願いで死んだ自分が宿ったって方がシツクリくるんだよねー」

最初は半信半疑であったが、彼方の存在を知り、彼方の話を聞き、悟ったのだ。

——嗚呼、わたしは魔法の桜のおかげで存在しているのだ、と。

「その話を……なぜ、私に？」

「だって、初音くんが教えてくれたのに、私たちが黙っているのは不公平かなって思ったの」

お姉ちゃんには、わたしが伝えたいってお願いして、代わってもらったんだ、と付け足す藍。

「それでは、今は…えっと、お姉さんは一緒にこの話を聞いてるんですか」

「んーと、どちらも意識あって聞いてたりするときもあるんだけど、今はお姉ちゃん、眠っている状態だね」

彼方の質問に、自分の状況を考えながら伝える。

なるほど、と。

藍がいて、茜がいま話している内容を聞いていないと知り、ひとつ尋ねる。

——私は、酷なことを話してしまいましたか、と。

誰かが後悔しないように。

願いが解ける前に、やり残したことがないように。

そんな思いがあり、彼方は、自分の過去や魔法の桜の話をした。

しかし、願いが解けたら消えるのだと告げられた藍の気持ちは。

藍の思いは。

苦しそうな、そして悲しそうな表情の彼方をみながら藍は質問に返した。

「大丈夫だよ、もともとは死んでる存在だもん」

彼方の方を見ず、背中を向けて、空を見上げる藍。

「今は人生のロスタイムなんだろうなって、心の何処かで思っていたから」

「花咲さん」

呼び掛ける彼方の声に返事をせず、

藍は話すのを続ける。

「お姉ちゃんに、また逢うことができたから」

「花咲さん」

「それだけじゃなくて、杏ちゃんや小恋ちゃん、義之くん、渉くん、杉

並くんとか、みんなと逢えることができたん——」

「花咲さん！」

続けようとする藍に、彼方は強く名前を呼び、言葉を止める。  
そして、彼方はひとつ問う。

——ほんとに？ と。

一度死んでるから大丈夫。怖くない。

そんな筈がないのだ、と彼方は思う。

前世を知っている、いや、一度死んでいる彼方だからこそ。

後悔しないように、と。

悔いのない人生を送ろうと思っけていても、寂しいと、不安と感じないわけではない。

前世では、彼方は三十代まで生きていた。

しかし、藍は幼い頃に死んでしまい、精神年齢で言えば茜たちより下の筈だ。

だからこそ、そんな女の子ひとりで抱え込まないで欲しいと思う。

だからこそ、彼方は聞いた。

聞かせてください、と。

いまは私と貴女しかいません。

だから、本音を聞かせてくれませんか、と。

暫く、公園が静寂で包まれる。

「わたし」



そんな中、ポツリと藍がつぶやく。

「わたし…わたしね……」

今まで我慢していたものが溢れてしまうのを、藍は感じた。

もう止められない、と。

彼方の方に振り返った藍の目には、溢れるように涙が流れていた。

「ほんとは、怖いよ、辛いよ、寂しいよー」

別れたくない、ずっとお姉ちゃん側の側にいたい、と。

堰（せき）を切ったように、本音が出てくる藍。

茜の前だからと見栄を張っていたのだが、本音を伝えられる存在を前に、気持ちを収めることができなかつた。

「わたし…：…っ、ずっと…：…そばに…：…」

「大丈夫ですよ」

全てを出し切るように、泣き出す藍にそっと近づき、彼方は安心させるように頭を撫でつづける。

「大丈夫」

彼方自身も同じように、不安に押しつぶされそうになったときがあった。

そんな時に、看護師の、そして姉のような存在である葵はただただ受け止めてくれて、大丈夫だよと撫でつづけてくれた。

こんな自分が同じことをしてあげられているか分からないけれど、と。

せめて彼女が後悔しないように。

そう願う彼方であつた。

## episode—7 「朝の出来事」

### episode—7 「朝の出来事」

珍しいな、と。

いつも通り、朝に芳乃家に向かった音姫が、キッチンであまり見ない人物がいたことにより抱いた感想である。

「あれ、さくらさん。 おはようございます」

「あ、音姫ちゃん？ おはよー！」

音姫の挨拶に、料理をしながら顔だけ振り返り、さくらは笑みを浮かべながら挨拶した。

「さくらさんが朝食つくるなんて、珍しいですねー」

「にははは、久しぶりにご飯つくりたくなっちゃってね！」

朝早く起きて作ってるんだ、と。

音姫の問いに、張り切った様子を見せるさくら。

普段は起きる時間も少し遅いので、あまり見掛けることもない。

なので、朝に会うこと自体が珍しいのだが、朝食を作るのなんて特に珍しいと思う。

張り切った様子も、音姫には何だか気になった。

「さくらさん、何だか今日はやけに機嫌がいいですね。何かあったんですか？」

「あはは、ちよつと、いや、すつつごく嬉しいことがあってね！」

それが何かを聞こうと思ったが、

もうすぐ朝食できるから居間で待ってて、と言うさくらに、音姫は返事をしながら居間に向かった。

その居間には、由夢と義之がいたが、義之は何だか少し落ち着かない様子を見せていた。

「あれ、弟くんどうしたのー?」

「い、いや、なんでもないよ音姉」

音姫が尋ねるも何でもないと言われ、疑問に思いながらも普段の定位置に座る。

そのタイミングで、できたよーと、さくらが朝食を持ってやって来たのであった。

並べられる朝食のおかずを見て、由夢が驚いた表情を見せる。

「あれ、なんだか今日の朝食、品数が凄いいですね」

由夢が驚くのも無理ないな、と音姫は思った。

何せ、音姫も同じように思ったのだから。

音姫や義之も朝食は手を抜かず毎回作っているが、その品数より3、4品多いのである。

しかも朝から重くならないように気を遣った品々であり、これを作るのに時間が掛かっただろうな、と思った。

さあ食べて食べて!と急かすさくらに、音姫や由夢、義之は食べ始める。

「うわっ、美味しいです、さくらさん」

「ありがと、由夢ちゃん!」

料理を食べた由夢が、素直に食べた感想を述べる。

嬉しそうにお礼を言うさくらを尻目に、確かに凄い美味しいなと思う音姫。

そして、さくらは今度は義之の方に視線を向け、尋ねる。

「義之くんは? 美味しい?」

美味しいですよ、と何故か照れた様子を見せながら感想を述べる義之。

そんな義之を嬉しそうに見つつ、これも食べてと色々な料理を差し出すさくら。

義之に甲斐甲斐しく世話をするさくらの様子に、何かあったのかな

と疑問に思う由夢と音姫。

そして、音姫は、キッチンで話した内容について改めて質問を投げる。

「そういえば、さくらさん。凄く嬉しいことがあったって言っちゃったけど、何があったんですか?」

「うんっ! 今までで一番嬉しかったって言えることがあったんだ!

聞きたい? 聞きたい?」

「は、はい、聞きたいです」

どうしようかなーと、にやにやした表情で言うさくら。

音姫も由夢も、悩んでいるように見せながらも本当は言いたいんだろうな、と理解する。

「さ、さくらさん、ご飯のおかわりが欲しいです!」

何かを遮るように、大声で言いながら、茶碗をさくらに差し出す義之。

え、もうっ、すぐに持ってくるからっ、とさくらは嬉しそうにキッチンへと向かう。

「……で、何をやらかしたんですか、兄さん?」

そんな一連の様子を眺めていた由夢が、ジト目で義之を見ながら尋ねる。

明らかに、さくらの張り切った様子は義之が何かしたからだと理解したからだ。

「し、知らない」

「ほんとーですか?」

「気になるなら、さくらさ…いや、機嫌が良いんだから問題ないじゃないか」

この話は打ち切りとでも言いたげな義之に、溜息を吐きながら由夢は、わかりましたよ、と返した。

その直後に、もってきたよー、と大盛りのご飯を差し出すさくら。茶碗に盛られるご飯の量をみて、冷や汗を流しながら義之は礼を言う。

——仕方ないから、お姉ちゃんが一肌脱ぐかな。

そうだ、さくらさん、と。

先程の話はして欲しくないという様子の義之をみて、音姫は別の話題をさくらに振る。

「この煮付け、以前食べさせていただいた時より美味しいんですけど、何か味付け変えたんですか」

「ん、これ？ そうだなあー」

一瞬考えていたさくらだが、思い出したのか、音姫に伝える。

今日は、隠し味を入れたよ、と。

その隠し味について音姫が尋ねると、さくらが満面の笑みで答える。

「お母さんの、義之くんへのたっぷりの愛情！」

「お母さん？」

「ブホッ！」

話題が変わったことに安堵し、お茶を飲んでいた義之だが、さくらの発言を聞いて思わず吹き出してしまった。

ちよつと、兄さんきたない！

弟くん大丈夫ー!?

ティツシュ、ティツシュ持ってくる！

このあと、居間の慌ただしい状況は続き、先程の話は有無やむになつたのであつた。

「は、早くしないと遅刻する。い、いってきます!」  
「ちよつと待つて弟くん!」

「はあ……それじゃあ行つてきますね、さくらさん」  
「あはは、いってらっしやいー」

出ていく義之たちを、重役出勤のさくらは玄関で見送る。

そして居間に戻ったあと、張り切りすぎたと、さくらは反省した。  
昨日の夜に義之から大切なメッセージをもらったさくらは、お返しをしてあげたいと、朝早くから料理を作った。

義之に喜んで欲しくてやったことだが、自分の行動が空回りしてしまったことに気付く。

——そうだよね、急に呼ぶのは恥ずかしいよね

今まで名前で呼んでいたのに、急にお母さんと呼ぶのは、学生の義之くんには照れ臭く、恥ずかしいのだろう、と。

ましてや、由夢ちゃんや音姫ちゃんがいるなら尚更だ、と。

——うん、そう、急ぐ必要はないよね

さくらは義之の心情を察し、呼んでくれるのを待とうと思ひ直すのであった。

そんな時、  
ガラガラ、と。

玄関からまた扉が開く音がして、気になって向かうさくら。

さくらが向かった玄関には、先程出ていった義之の姿があった。

「あれー、義之くん、忘れ物?」

「あ、いや……その……」

すぐに戻ってきた義之に、さくらは目を丸くする。  
そんなさくらを見ながら義之は言い淀み、そして言葉を発した。

——今日は一緒に夕飯食べましょうね、母さん  
い、いつてきます、と。

慌てて喋りながら扉を閉じた義之に、一瞬さくらは呆然とし、そして義之の言葉を理解すると、駆け出して外に出る。

「うん！ 今日絶対早く帰ってくるから！」

照れながら手を振る義之に、満面の笑みを浮かべながら手を振り続けるさくらであった。

## episode—8 「助手」

「義之、今日ってお昼どうするの？」  
昼休み。

いつも通り、渉と昼飯を食べに行こうと席を立った義之に、小恋は緊張した様子で尋ねた。

そんな小恋を不思議そうに見つつ、答える。

「あー、学食に行こうと思ってるんだが」

小恋も一緒に行くか、と。

普段は弁当だが今日は違うのかなと思い、義之は誘った。

その回答に、小恋は、違うの、あのね、と何か言おうとしながらも躊躇った様子を見せる。

そして、何かを決心したのか、小恋は後ろに回していた手に持つものを義之の前に出した。

「あのね、今日ちよっとおかずを作り過ぎちゃって…もし良かったら義之、食べてくれない？」

はい、と。

目の前に差し出されたのは、ヒヨコのキャラクターが描かれた、可愛い弁当箱。

いきなり渡された弁当に、義之は目を丸くしつつも、貰えるなら、と受け取る。

せっかくなら、皆で食べようぜと、周りにいる杏や茜、渉に言う。

小恋は一瞬悲しそうな顔をするも、そうだねと肯定する。

小恋の内情を察して、すぐに答えたのは、杏と茜。

「素直に受け取っておきなさい」

「そうだよー？ 私と杏ちゃんはあ、今日はシェフのお任せ定食を食べるつもりだからね」

それなら、渉は食べるか、と。



今度は渉の方を見るが、渉はいや無理だわ、と苦笑しながら返事を返す。

今日の昼は初音と食べるって約束したからよ、と。

「あれ、いつの間にそんな約束したんだ？」

「朝にばったり会ってよー。そんじゃあ、悪いな」

行ってくるわ、と教室から出ていく渉だった。

ほら食べて、と期待するような目を見せる小恋に、義之は渡された弁当を食べ始めるのであった。

教室から出た渉は、少し離れたところで足を止め、溜息を吐く。

そして、渉はつぶやいた。

俺にしては、頑張ったんじゃないか、と。

「まあ、及第点ね」

「渉くんにしては上出来だと思うよー？」

つぶやいた言葉に反応があり慌てて振り向くと、そこにはニヤニヤと笑う茜と杏の姿があった。

何でここに、と渉は驚く。

「何でってー、学食行く途中だからねえ」

「初音と約束してるんじゃないの？」

その話が本当ならね、と。

何処か確信したように言う杏に、嘘がバレていることを悟った渉は、落ち込む様子を見せる。

「さつき杉並が、初音を連れ回しているのを見たからね。　嘘を吐くならバレないようにしなさい」

でもまあ、と。

落ち込む渉を見ながら、言葉を付け足す。

立派だったわよ、と。

杏は、渉は空気を読まずに小恋の弁当を食べてしまうと予想していた分、渉の反応に幾分か感心していた。

茜も杏と同様の気持ちである。

「ほらあ、可愛い女の子ふたりと一緒に食べに行つてあげるから」

「ふふ、渉にはもう一生ない光景ね」

うるせえ、と叫ぶ渉を両側で挟みながら学食へ向かう杏と茜であった。

## episode—8 「助手」

「あれ、さつきの場所を確か右で……あれ？」

どうしよう、と。

由夢は、自分の状況に対して、途方に暮れていた。

放課後。

ホームルームが終わり、由夢が友人の誘いを断って向かった先は、地下室の『非公式新聞部第二執筆室』であった。

勿論、向かう理由は、その部屋を専用として利用している彼方に会う為である。

単純に会うだけであれば、教室へと行けば確実だ。

しかし、上の学年の教室というだけで抵抗があるのに、初めて行くとなると変に注目されそうで嫌だった。

地下室に再び行くことになる和理解していた為、昨日、杉並に案内されてた際に、道順を頭の中で暗記した。

暗記した、つもりだったのだ。

——わたし：覚え、間違えた？

暗記した通りの道順で向かったのだが、目的の場所に辿り着くことが出来なかった。

何個か覚え間違えてそうな場所に戻り、行き先を変えたのだが、着かない。

——仕方ない、今日は戻ろう。

一旦、目的地向かうのは諦めて地上へ戻ろうと思ったのだが、色々と試行錯誤したせいか、暗記した筈の道の戻り方を忘れてしま

う。そして、冒頭の状況へ戻る。

「これ…わたし、もしかして」

迷子なのでは、と。

現在の状況を認識し、呆然とする由夢。

まさか学校で迷子になると考えていなかったのである。困った。

非常に困った。

「か、かくなる手段は……」

恥ずかしいが叫んで助けを呼ぼうとささえていた由夢。  
その直後、夢で聞き慣れた声がした。

あれ、朝倉さん、と。

瞬時に振り返った由夢の視線の先には、求めていた人物の姿があった。

思わず安心して力が抜けてしまうのを感じた。

「はっね、先輩……」

「こんな所で、どうかしたんですか？」

驚いた表情をしながら、彼方は由夢に尋ねる。

その問いに、由夢は俯きながら答える。

「その、昨日の場所に行こうとして……その……」

迷子に、なりまして、と。

恥ずかしくて小声になってしまう由夢。

そんな由夢の表情をみながら、彼方は言葉を発する。

一緒に行きましょうか、と。

はい、とか細かい声で返事をしながら、由夢は彼方の後ろについていくのであった。

「それで、(っ)用件は？」

執筆室に着き、由夢にお茶を渡しながら、彼方は質問した。  
ありがとうございます、と。

お茶を受け取ってお礼をいいながらも、彼方の質問に返さず、どこか落ち着かない様子を見せる由夢。

「その……あの……」

彼方は、由夢が何かを言おうとして、躊躇しているのを感じた。

そんな由夢に、ゆっくりで良いですよ、と。

子供をあやすように、笑いながら伝えた。

彼方の笑みをみて、決心した様子を見せる由夢。

「わたし…わたしを、その」

——助手にしてください、と。

その発言に目を丸くする彼方。

そんな彼方に、恥ずかしそうな表情をしながらも自分の気持ちを伝えた。

「昨日、初音先輩の話聞いて、凄いと思いました」

彼方からしてみれば、杉並を除く他の人達は初対面であった筈だ。

それでも、記事の内容に興味を持ってもらったからと、自分の過去を含めて思いを伝えた。

由夢は、予知夢で彼方の性格も、想いも知っていたからこそ、彼方の話した内容を真正面から信じる。

しかし、もしかしたら、彼方の話をまったく信じないで嘘と思われる可能性だつてあった筈である。

それでも、伝えたいと。

自分の思いを伝えた彼方を、由夢は凄いと思った。

そして、そんな彼方のことを手伝いたいのだ、と。

「その、お手伝いさせてください」

力になりたいんです、と。

照れたように笑う由夢。

さきほど彼方に対して話した内容は、本音である。

しかし、それだけではなくて。

少しでも側にいたくて。

一歩踏み出したい、と。

自分の気持ちに正直になりたいと、由夢は思ったのであった。

そんな由夢の言葉、その想いを聞いて。

何だかすぐつたいな、と彼方は照れながらも嬉しく感じられた。

そして、その気持ちを由夢に伝える。

「あの…なんて言えば良いんでしょうか」

素直に嬉しいです、と。

由夢と同じように、照れた表情を見せながら答える彼方。

そして、よろしくお願いします、と由夢に伝えるのであった。

episode—9 「白雪」

「私は彼方さんのお手伝いをして、良いんですよね？」

不安そうに見る由夢に、照れた様子で頷きながら、お願いしたいですと述べる彼方。

そんな彼方の様子に、よしと由夢は気合いを入れて踏み出した。

「手伝いをするのに、遠慮しあつてたら駄目だと思っんです」

「え、ええと…そうです、かね」

絶対そうです、と。

由夢の発言に思わずという感じで肯定する彼方に、押せ押せと言わんばかりに話す由夢。

ですから、と一拍置いてから由夢は彼方に言った。

「か、かなた先輩」

「あ、え…えーつと…」

「彼方先輩って呼びします」

彼方先輩も私のこと、下の名前で呼んでくださいね。

反論は許さないとはいいたげな雰囲気、下から睨むようにして由夢は話す。

——いきなり過ぎたかな

自分で言ったことではあつたが、自身の発言を思い浮かべ、不安になつてしまう由夢。

本当は由夢は彼方のお手伝いをお願い出来たことで十分だった。

しかし、照れた表情を見せた彼方に、由夢はもう一步踏み出したくなつたのだ。

由夢からしてみれば、彼方とは何回も見て、聴いて、会っている。

しかし、彼方にとつては、由夢は会って2回目ではない。

慣れ慣れしかつただろうか。

嫌な女だと思われていないだろうか。

それに、自己紹介した際はほかの皆と一緒にだったから、名前覚えてもらえてないかも。

考えれば考えるだけネガティブな思考に陥り、涙が出そうになってしまう。

そんな由夢の表情をみて、戸惑っていた彼方は少し落ち着くことが出来た。

由夢の、涙目で睨むように見上げる表情が、昔入院していた際の照れ屋な女の子と同じだったからだ。

——ありがとっ

お礼を言いたいのに言えなくて。

強気な口調になってしまう女の子。

その女の子に話しかけたように。

安心させるように微笑みながら、伝えられるように。

由夢さん、と。

嬉しそうに頷く由夢をみて、自分の行動は間違ってたのかな、と思った。

そこから暫く沈黙が続いたが、

お互いにその間が不思議と嫌ではなかった。

ただ、由夢と彼方はお互いに、何となく顔を見合わせて照れながら笑うのだった。

ガチャリ。

そんな時、執筆室の扉が開き、その先には白い存在があった。

「失礼するわ……あら」

白い存在——杏は、執筆室の彼方と由夢を見て、表情を少し驚いたものに変えた。

そして二人に話し掛けるのであった。



——お邪魔だったかしら、と。

episode「白雪」

「……………そう」

由夢が執筆室にいた経緯を説明したあとに、杏がはじめに回答した言葉である。

その後に、由夢の方を見てつぶやく。

ニヤリとした表情を見せながら。

「義之と同じで、エロエロなのね」

「ちよっ、なんでそうなるんですかっ—」

兄さんと一緒にしないでください、と。

杏の発言に、立ち上がりながら叫ぶ由夢。

義之がその場にいたら、俺のも否定しろよと言ったであろう。

「ほんとに初音を手伝いたいんだなって思ったわ」

でも、それだけじゃないでしょ。

由夢に、付け足すように、杏は言った。

経緯を説明する間の由夢の表情をみて、彼方のことを手伝いたいという気持ちを悟った。

そして、由夢の秘める想いも。

杏は、由夢の耳元に口を寄せ、彼方に聞こえないようにしながらつぶやく。

「初音の側にいたいって思ったんじゃないの？」

「そつ！……そんなことないですよ」

由夢は思わず大きい声で返そうとし、途中で彼方の視線に気付いて小声で杏に返す。

まあいいわ、と。

からかつてある程度満足した杏は、本題に入るために話を切り上げた。

「実は、相談したいことがあるの」

今までのふざけた様子とは一変し、真剣な表情に変わる杏。

「それなら……わたしは、席を外したほうが」

本当の相談なのだと言いつつ、自分が居ると話せないだろうと執筆室から出る為に立ち上がる由夢。

だが、ここに居て良いわよ、と言う杏に止められる。

そんな杏に、心配そうにしながら由夢は尋ねる。

「でも、わたしが聞いていいんですか……？」

「由夢さんは他人に漏らさないでしょ。それに」

こういう機会はきつと増えるわよ、と。

推測という言葉ではありつつも、どこか確信した様に言葉を返した。

昨日の彼方がデフォルトであれば、相談する人は来るだろう。

ある、特定の事情を抱える者にとつては特に。

自身の秘密を打ち明ける彼だからこそ、それこそ駆け込み寺の様に。

だからこそ由夢はそんな彼方の側に居るのであれば慣れたほうがいいと、杏は思った。

そして、杏は話し始めるのであった。

「わたし、昔は物覚えがよくなかったの」

「え、雪村先輩がですか？」

由夢からしてみれば、義之を通して杏が如何に記憶力がいいかを聞いている。

だからこそその驚きであろうか。

「雪村流、暗記術でしたっけ。それのおかげで記憶力がよくなったんですよね」

雪村流暗記術。

杏自身が、義之たちに自分の記憶力の良さを語る際に話したものだ。

そのおかげで何でも覚えていられると。

そう納得している由夢の質問にはこたえず、

杏は過去の話が続けた。

過去を思い出すように、少し天井の方に顔を向けながら。

「凄いきらキラして見えたの」

杏が幼い頃。

自分が覚えられないからこそか。

世の中に存在するもの全てが輝いて見えたのだ。

杏は、その世の中を覚えることができなものが悲しかった。

だからこそ、すべてのものを忘れずに覚えていられたら、きっと素晴らしいのだと感じた。

「だからね、お願いしたの」

過去の杏は、道を覚えるのも一苦労だった。

それでも必死に、大きい桜の樹へと向かった。

そして、桜の樹に願った。

——すべてを忘れないようにしてください、と。

息を呑む音が聞こえた。

由夢は、杏が言いたいことがわかったのだ。

杏も彼方と同様に願ったのだと。

そして、望み通りに何でも見たことを覚えることが出来る様になった。

きつと、これからは素晴らしいものを見ることが出来るのだと。

そう、思っていたのだ。

「でもね、違ったわ」

世の中には、覚えていたこと、忘れたことの種類があった。人の醜い部分を知ることになった。

杏を育ててくれたお婆さんが亡くなった後の、親族同士のやり取り。

その時の声、表情。

忘れたくても忘れることができない。

「……願ったことを後悔していますか？」

「そう、思ったこともあったわ」

彼方の問いに、肯定をしながらも、それだけではないと言う。

色々之恩恵はあった。

しかし、ネガティブな内容の方が積み重なっていくのだ。

そのせいか、歳をとる毎に、寝ることもままならなくなった。

だからこそ。

だからこそ、昨日に彼方の魔法の話聞いても、そこまで考えないと思っただ。

むしろ解けた方が良くはないかと。

「願いが解けるとしても、仕方ないって思ったはずだったの」  
でも、違った。

彼方の話を聞いたその夜のこと。

いつも通りの家。

いつも通りの部屋。

慣れてた、はずだったのに。

「広いつて感じたの」

大丈夫なはずだったのに。

「寂しいなって、感じたの」

どうしてか分からなくて。

どうすれば良いか、分からなくて。

漠然とした不安を抱きながらも、何を行うべきか悩んだときに、彼方の言葉を思い出した。

——いつでもお待ちしてます

だから、今日も彼方のところに向かったのだ。

杏が語った後、暫く辺りが静寂に包まれる。

由夢は、何と言えば良いのかわからず、

彼方は何かを考えるように、目を瞑る。

そんな二人の姿をみて、杏は仕方ないだろうなと感じた。

「ごめん、分からないわよね」

聞いて欲しかっただけかもしれない、と。

最後に締めくくるとる形で言葉を終わらせる杏。

そんなとき、彼方は突然口を開く。

「平気なんてこと、ないですよ」

願いが解けても平気だと杏は言った。

しかし、そんな筈はないのだと彼方は、言葉を発した。

ずっと覚えていられることなんてない。

彼方自身、今まで辛いことや苦しいことがあったが、その記憶もいつか忘れる。

その嫌な記憶を鮮明に思い出せてしまうのは、どんなに辛いことだろうか。

忘れたい記憶があるから、願いが解けても良いという気持ちを抱くことも、あるかもしれない。

でも。

それでも。

「覚えていたいことも、あったはずです」

杏は言った。

世の中には、覚えていたいことと忘れたいことの二種類があると忘れたいことがあった。

だが、忘れたくないこともあるのではないかと。

「わたしも」

わたしも、そう思います、と由夢は言った。

由夢は杏とは義之を通じての関わりでしかない。

しかし、義之から杏たちの話を聞いている。

芳乃家で語られる義之たちの日常は、毎日が何かないといけなのではないかと思われる程に、慌ただしくも騒がしい。

だけど、そんな義之たちの日常が眩しく感じた。

「兄さんや杏先輩たちが羨ましいって思いました」

「由夢さん……」

「だって、すごく毎日が楽しそうなんですもん」

由夢だって友達がいけない訳ではない。

しかし、義之たち程の友情があるかと言われれば、ないと言ってしまふ。

それぐらい、義之や杏、小恋、茜、渉、杉並の友情は、絆は強いと

感じられるのだ。

だからこそ、由夢は杏に問う。

兄さん達との日常は、忘れたいことなんですか、と。

「それは……それは、は」

言葉に詰まる杏。

ただ、杏の脳裏には、記憶が残り続ける脳裏には、義之たちとの日常が蘇る。

——ふふっ、義之つたら姉妹だけじゃ飽き足らず、無口美少女まで攻略したいのね

——いや、攻略してないから、てか由夢に聞かれたらヤバイ  
義之の呆れた表情が。

——おい、俺のせつかくのハーレムルートが！

——大丈夫よ、渉の人生はノーマルルート以外、攻略できないもの  
なんでだよー、と涙目で叫ぶ渉の様子が。

——フハハッ、まさか雪村嬢が生徒会共と協力しているとはな

——たまには、ね：観念なさい

残念だったな、と高笑いで逃げ去る杉並の姿が。

そして、

——ほら、杏、いくよー！

——杏ちゃん、はやくうー！

大切な親友である、小恋と茜の笑顔が。

どれもが鮮明に思い出すことができる、大切な記憶。

宝箱にずっと入れておきたい、大切な思い出。

それをはつきりと認識したとき、杏は自身の思いを理解した。

「そう、そうなのね」

わたしは、怖かったんだわ、と。

杏はふたりに伝えた。

杏には、忘れたいと思うことがあった。

でも、それ以上に忘れたくない思い出が沢山あったのだ。

願いが解ける可能性を聞き、

杏は大切な記憶がなくなることが寂しかったのだ。

大切な記憶を忘れてしまったら、大切な絆もなくなる気がして。

そう語る杏は、どこか泣きそうで。

それでも、どこか大切なものを見つけられた喜びも感じられた。

そんな杏をみて、よかったと、彼方は内心でつぶやく。

自分の本当の思いも願いも、気付くのは大半が後になってしまう。

彼方自身が、過去に、前世で経験したことだ。

後に悔やむからこそ、後悔なのだ。

だからこそ、今のうちに気付けた杏に、嬉しいと思う以上に眩しく

感じられた。

そんな杏に、自分が言えることは。

「雪村さん、これは私のアドバイスですが——」

杏に、彼方は自分なりの助言を送るのだった。

彼女が少しでも後悔しないように。

そう、願いながら。



「急にどうしたんだ？」

授業後の休み時間のときのこと。

近い内に泊まりに来て、と杏が義之たちに発した言葉に、義之が目を丸くして尋ねた。

「どうって言われても、そのままの意味だけど？」

おかしいかしら、と。

逆に不思議そうに見られたことで混乱する義之。

杏としては意図的に言ったのであるが。

「杏が今まで自宅に誘ってくれたの初めてじゃん！」

そんな杏に今度話し掛けたのは、小恋である。

小恋も杏と仲良くなってから時間が経つが、一回も行ったことがない。

だからこそ、杏の誘いに驚いたのだ。

小恋の驚いた表情を見つつ、返事を行う。

「レトルト食品とか、期限が近いのが多いのよ」

ひとりで食べ切るのは難しいから消費して欲しいのよ、と話す杏。

実際、ひとりで暮らす杏の食事量では、買った食品を全部使い切るのに時間が掛かる。

食料の賞味期限が切れそうになり、食べ切れないので弁当に詰めて義之たちに食べさせることも何回かあったのである。

食べてもらおうついでに、家にも呼びたいだけ。

そう語る杏に納得するように、なるほどと、義之や小恋も頷く。

しかし、その説明で納得せず、心配そうに見つめる存在がいた。茜である。

「杏ちゃん、ほんとにいいの？」

ええ、是非来てほしいと頷く杏に、茜は嬉しそうな表情を見せるのだった。

「それじゃあ、明日なんてどうかなあ？」

土曜日だから泊まりやすいし、と。

そう提案する茜に、大丈夫よと伝える杏。

わたしも大丈夫ー！俺も俺もー！と、小恋を皮切りに全員が了承するのであった。

## episode 10 「雪月花」

深夜。

杏は、家の中で騒ぐ義之たちを置いて、ひとり外に抜け出した。

「はあ、何でかしら」

杏は自分自身に対して問いかけた。

なんで、今まで自宅に友達を誘わなかったんだろうか、と。

今日始めて義之たちを家に招待した。

杏や茜、小恋で夕飯をつくり、義之や渉、杉並が美味しそうに食べる。

各自で持ってきたお菓子やジュースを食べ飲みしながら、皆で面白い騒ぎながら話す。

凄く楽しくて。

嬉しくて。

幸せで。

今日家で起こった出来事すべてが、すごく、凄く。だからこそ、今まで家に連れて来なかったことを後悔した。

——せっかくお婆ちゃんが残してくれた、大事な家だったのね残してくれた大切なものを有効に使わなかったことを悔やむ。そして、ふと、彼方の言葉を思い出す。

『想い出を、増やせばいいんですよ』

彼方が言ったアドバイス。

普通の人からすれば当たり前の話である。

杏は願いが解けたら、他の人よりも記憶が忘れやすくなるのかもしれない。

しかし、みんなが大小はあれど、昔の記憶は薄れていってしまうのだ。

それにより、友達と疎遠になってしまうと不安になることはあるだろう。

『でも、だからこそ、作っていくんです』

後悔しないように。

友達との大事な想い出をどんどん作っていけば良いのだ。

たとえ、過去の記憶が抜けていくのだとしても。

新しく出来た想い出が更新される。

それを続けていけば、友情が、絆が切れることはないんだから、と。

——そうね、ほんとに、本当に、そうだった

彼方の言うことを実感する杏だった。

そんなとき。

「杏ちゃん」

「杏」

「あっ……茜、小恋」

杏が振り返ると、そこには心配そうにこちらを見つめる茜と小恋の姿があった。

二人は、杏の両隣に立つ。

暫く三人とも話さず、辺りが静寂に包まれる。

「実はね、心配だったの」

その静寂を破ったのは、茜だった。

杏が茜を見ると、少し寂しそうな表情を浮かべる茜の姿があった。

「今まで一回も家に来たことなかったでしょ、だからね」

親友だと思ってたのは自分だけだったのかなって思ったの、と茜は告げた。

茜は今まで杏の自宅に行ったことがなかった。

だからこそ、自分と杏はほんとに親友なのか、そう思っているのが自分だけなのかと、不安になったのだ。

「そんなこと、そんなことない！」

寂しそうな表情の茜に、杏は真正面に見つめて、自分の本音話す。

杏にとって茜と小恋は大切な親友で、二人といる時間はどれも閉じ込めておきたい、大切な記憶だ。

だから、勘違いしないで欲しい。

知っていて欲しい。

そう思いながら、杏は二人に伝える。

「わたしは、小恋と茜が大好き。大切な、親友よ」

あんずっ、と小恋は泣きながら杏に抱きつく。

その後小恋と杏の二人に抱きついた茜は、涙を流しながらも、嬉しそうな表情を浮かべていた。

小恋は、泣きながら茜と杏に言葉を発した。

「うん、うんっ！……だって私たちは、わたしたちは」

——雪月花だもんね、と。

いつも三人で一緒に居るからと、それぞれの頭文字を取り、周りから一括で言われる言葉だ。

その呼び方が、三人とも何だか嬉しくて、好きだった。

三人の絆が、周りからも認められている気がして。

杏はそんな大切な親友たちを見て、ひとつ決意した。

自分の過去、願い、すべてを知って欲しい、と。

「あのね、わたしね——」

その日、杏と茜、小恋は朝まで語り合った。

それぞれの想いを打ち明けて。

この日以降。

雪月花の三人、いや四人は更に絆が強く結ばれるのだった。

「まったく、主賓たちに置いていかれちゃったな」

雪月花の三人が話しているのを影で見ながら、

苦笑した義之は、渉と杉並の二人に話し掛けた。

「あはは、まあ仕方ないんじゃないの？」

「雪月花の絆には、我々は勝てんだろうしな」

渉は嬉しそうに笑い、杉並はやれやれと肩をすくめた。

そんな二人も義之も互いに顔を見合わせ、笑い合った。

杏と茜と小恋の笑顔を見ていたら、間に入ろうという気持ちは抱かなかったのだ。

杏が突然家に招待してきた時は何事かと思ったが、杏宅で皆で一緒にいた際の嬉しそうな表情をみて、来て良かったと思った。

「男たちで寂しく食べ飲みしてるか」

「はあー、華がないのは悲しいぜ」

「フハハハッ、朝まで語り合おうじゃないか！」

もう一度、雪月花の様子を見てから、三人は杏宅に戻るのであった。

これは義之たちが杏宅に宿泊している日のこと。

土曜日であるにも関わらず、彼方と由夢は「非公式新聞部 第二執筆室」にいた。

「そういえば、今日雪村先輩の家に皆でお泊りするらしいですよ？」

昨日兄さんが言っていました、と。

由夢は書類を整理しながら、思い出したように彼方に話す。

それを聞き、本を読んでいた彼方は顔を上げた。

「そうですか。 さっそく、みなさんで思い出作りしてるんですね」

よかったと、嬉しそうに話す彼方。

そんな彼方を見ながら、同じように由夢も喜びの表情を浮かべる。

そして、由夢は自分の内に感じていたものを伝えたくて、彼方に話  
す。

「わたし、杏先輩の感謝が凄く嬉しかったんです」

由夢は、杏が執筆室に来たときの帰り際を思い出す。

『貴方たちと話して自分の気持ちを理解できた。 だから——』

ありがとう、と。

こちらに感謝する杏の顔は、本当に嬉しそうで。

同性の由夢でさえも綺麗と感じるくらいなの、素晴らしい笑顔だっ  
た。

由夢は、自身の予知夢で見る不幸な場面を救うことが出来たことは  
一度もない。

だけど、そんな自分でも誰かを助ける手伝いが出来たことが嬉し  
かったのだ。

「ああ、そうなんだ」

由夢は自分のこの気持ちを感じ、ひとつ思うことがあった。

もしも。

もしも、魔法の桜に意思があるのならば。

「きっと、魔法の桜も、誰かが喜んでくれるのが嬉しくて、願いを叶え  
てるんだろうなあ」

思わず自分の考えをつぶやく由夢。

そのあとに、笑い声が聞こえて振り向くと、彼方が控えめに笑って  
いる姿を見つけた。

「なっ、わ、笑うことないじゃないですか!」

急に恥ずかしくなってしまう、由夢は笑う彼方に怒ったように言葉を  
投げる。

しかし、彼方は違うんです、と言いなながらも笑うことをやめない。

由夢は、再び言葉を発しようとし、彼方の表情をみて止めた。笑う彼方の表情は、凄く嬉しそうで。馬鹿にしている訳ではないのだと分かった。

「ええ、きっと魔法の桜は、そう思っているはずですよ」  
だから、魔法の桜に伝えましょうと、彼方は述べる。  
どうか願いと同様に届いて欲しいと思いつつながら。

——桜さん ありがとう、と。



episode 11 「小さな一歩」

——あわわわわ  
き、気付いてと。

小恋は、自分の前に座っている人物の行動に対して慌てていた。

とある日の授業中。

昼食を食べ終わった後の授業ということもあり、小恋は小テスト中であつたが、軽い眠気に襲われていた。

——んー、ねむい

食欲が満たされ、窓からの日差しを浴びている小恋は、頑張つて起きないと思いつながらも、眠気に勝てずにそのまま寝そうになつていった。

途中までは。

ヒラリ。

小恋の机近くの床に、前に座る茜のテスト用紙が落ちるのを目にした。

ごめんねー、と茜は小さい声で謝りながら用紙を拾い上げる。

その際、何となしに、視界に入った茜のテスト用紙に記載された名前を、心の中で読み上げる。

——はなさき、あい……ん？

読み上げた内容に何故か違和感を覚える小恋。

眠気で半分意識が朦朧している頭で、違和感の原因を考える。

——花咲あい……えっ、藍！

小恋は、眠気が一瞬で覚めてしまい、思わず立ち上がってしまう。月島、どうかしたかー、という教師の声に、謝りながら椅子に座り

直す。

恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じたが、小恋からすればそれどころではなかった。

——いま、藍がテスト受けてるんだ

前に座る茜の左手首に付くアクセサリーを見ながら、小恋は目の前の人物がいまどちらであるか悟る。

杏の家に泊まった際に、小恋は杏と茜が魔法の桜に願いを叶えてもらったことを知った。

小恋は二人の話を信じたが、ひとつ問題があったのは、茜と藍の見分け方だ。

藍はずつと茜の振りをバレない様にしていたので、見分けはつき辛い。

杏は願いにより全てを記憶しているから微かな違いで判別できるらしいが、小恋は出来なかった。

二人を判別したいという小恋に希望もあり、手首に付けるアクセサリーで茜と藍を分けることにしたのだ。

茜が表に出る場合は右手首に、藍が出る場合は左手首にアクセサリーを付けることを決めて行動する様にしたのであった。

そのような経緯があり、手首のアクセサリーの位置で藍と判断したのだ。

「ふんふんふふーん」

もう、鼻歌を歌っている場合じゃないよ、と。

テストを解きながら鼻歌を歌う藍を恨めしげに睨む小恋。

テスト用紙の名前が藍になっていてことを伝えたいが、声を出すと注意されるので何か方法がないかを考える。

——そうだ、いいこと思い付いたっ！

机の中にあるノートの手前を破り、その切れ端に小さく文字で『名前

まちがえてる』と書いた。

気付いて、と。

小恋はノートの切れ端を丸め、藍に読んでもらおうと前に投げる。しかし、運動音痴の小恋が投げた切れ端は、藍ではなく、となりの渉の席に飛んでしまったのだった。

——ああ、渉くんじゃないよー…

違う場所にいつてしまったことに落ち込むが、その間に切れ端に気付いた渉が紙を広げ、内容を読んでからハツとした表情を浮かべた。そして、斜め後ろの小恋に口パクで言葉を告げてから、テスト用紙を書き直し始めた。

——あり、が、とつて、渉くん名前間違えてたの！　　というか、そつちじゃない！

渉の反応に驚きつつも、なんとか藍に気付いて貰おうと他の方法を必死に考える小恋であった。

そんな慌てる小恋を後ろから笑いながら見つめる杏。

実を言うと、昼飯後に既に寝そうであった小恋をみて、悪戯を思い付いたのは杏である。

わざと名前を間違えた用紙を小恋に気付かせて慌てさせよう、と。面白がった茜と藍は了承し、今の状況に至る。

藍の存在を認識し、四人となった雪月花であったが、小恋がからかわれるのは変わらないのであった。

「それでね……あれ、ななか？ 聞いてる？」

「う、うん」

よかった、と笑いながら再び話す小恋を見て、白河 ななかは内心で思う。

最近、小恋は綺麗になったな、と。

普段から明るくて元気な小恋だが、最近になって更に明るさと元気があがっていると感じたのだ。

「小恋、最近なにか良いことあった？」

「ん……色々とあり過ぎたかも」

詳しくは話せないけど、と小恋は言いながら、嬉しそうに笑う。

——何があったんだろう？

その理由が気になったななかは、何気なく小恋の手を握って彼女の心を確かめた。

ななかは彼方や杏、茜と同様に、魔法の桜に願いを叶えてもらった内のひとりである。

彼女は願いを叶えてもらった結果、相手に触れることで

心の中を知ることが出来るようになったのだ。

それにより、使い慣れているななかは、気になると相手の手を握るようになっていた。

そして、ななかは最近の小恋が変わった理由を知る。

——え、花咲さんと雪村さんが……わたしと同じ？

普段は、漠然とした気持ちしか読めないが、相手が強く印象に残っているものは鮮明に読めることもある。

小恋にとつては大切な想いであるからこそ、鮮明に読むことができた。

小恋から伝わってきたのは、茜と杏のふたりの秘密。

ななかは小恋を通してでしか関わりがないこともあり、心を読んだことがなかった。

だからこそ、自分以外にも桜に願った人が居たことに少なからず衝撃を覚えたが、最も驚いたのはそこではない。

——あの二人は話したんだ、小恋に、願いのことを

ななかは、願った能力も、理由も人に打ち明けることは一切考えてなかった。

たとえば一番仲の良い、小恋だとしても。

そう思っていたのに。

あのふたりは伝えたのだ。

杏と茜は親友の小恋に願った能力も、理由も、すべてを。

その結果、小恋と杏と茜の三人は、いや四人は、更に絆が深まったのだ。

今その場にはいないのに、心の中で意識しているくらいに。

——ずるい

嫉妬。

小恋と杏、茜の絆を知ったことによる感情。

同じように、魔法の桜に願ったのに。

何故あの二人と自分とでは違う場所にいるのだろうか。

——花咲さんと雪村さんは沢山友達がいるのに

男女問わず相手の手を握って心の中を読み、嫌われないように行動

してきた。

ななかは男子からは絶大な人気を誇る。

しかし、ななかの容姿と男子の手を握ったりするスキンシップをみて、女子の大半からは嫌われていた。

そんな自分とは異なり、茜と杏は男女問わず人気を誇っている。

更に言えば、小恋だけでなく、義之や渉、杉並とも強い絆で結ばれている。

——わたしには、小恋しかいないのに……

ななかにとって、小恋は数少ない同性の友達である。

大切な友達だからこそ、杏や茜と同じように絆をもっと深めたい。しかし、能力を打ち明ける勇気がななかには持てなかった。

小恋なら心を読んでたことを許してくれるかもしれない。  
でも。

もし、嫌われたら。

——わたし、ひとりぼっちになっちゃう

内気で、弱くて、怖くて。

嫌われたくないから、願った。

それなのに、また一人になる可能性が少しでもあるのなら、打ち明けるのは、怖い。

でも、もっと仲良くなりたい。

でも——

思考が同じところでぐるぐると回ってしまう、ななか。

そういえば、と。

ひとり思考の渦に沈んでいたななかに、小恋が何か思い出したかように話し掛けた。

「ななか、魔法の桜の記事を真剣に見てたよね？」

「えっ……あ、うん」

小恋のいきなりの問いに、思わず素直に頷くななか。それを見て、小恋はななかに伝えた。

「わたしね、その記事を書いた人に会ったよ」

そして、さらに言葉を付け足す。

わたしから紹介しようか、と。

——そうだ、そっちもあった……

杏と茜の秘密の方に思考が行ってしまったが、

小恋の心を読んだ中で、もうひとつ気になっていたことを思い出した。

いや、こちらもななかには重要であった。

魔法の桜のことが書かれた記事。

その記事には、魔法の桜が枯れたら願いも解けると書いてあった。ななかは、その記事を読んで驚き、この記事を書いた人物に会わなければと思った。

しかし、非公式新聞部というのは本当に謎の部活であり、所属している人物はほとんど知られていない。

唯一知っている人物は杉並であった。

だが、以前小恋を通して会話した際のこと。

初対面の人物の場合、ななかはどんな人かを知るために手を握ろうとしてしまう。

杉並にも手を握ろうとしたとき、避けられ、ひとつ質問を問い掛けてきた。

『白河嬢よ、何故手を握ろうとするのだ？』

手を握ることで何かあるのか、と。

ニヤリと笑いながらこちらを見る杉並に、ななかは秘密が知られるような気がした。

その場は何とか誤魔化したがる、それ以降、杉並に少し苦手意識を持つてしまう、なかなかであった。

そんな経緯もあり、杉並には魔法の記事を聞くことができず、手詰まりとなっていたのだ。

——小恋はその人とあったんだよね

杏や茜の秘密程ではなかったが、小恋の心から読み取ることができ

た。  
読み取れたのは、小恋たちに自分の秘密を明かし、後悔しないようにと伝える姿。

そして、小恋たちを見送る際の言葉。

『いつでもお待ちしております』

——わたしも、会えば変わるのかな

こんな弱いじぶんでも。

花咲さんや雪村さんのように。

「小恋、わたし、その人と会ってみたい」

ななかは、小恋に思いを伝えた。

こうして、一歩踏み出すのであった。



## episode—12 「必要なのは」

「最近変わりましたね」

朝の芳乃家。

居間で食事をする最中、音姫は自分が内心で思っていたことを口にした。

「んん、なんのことー?」

音姫の言葉に、出し巻き卵を食べていたさくらが疑問を投げ掛ける。

そんな彼女に、さくらさんのことですよ、と音姫は返した。

「ほら、最近まではこうやって一緒に朝食たべたりも滅多になかったじゃないですか」

夕食もですし、と言葉を付け足す。

実際、さくらは最近までは音姫たちが学園へ向かうタイミングで起きることが多く、一緒に食べる機会が少なかった。

夜も同様で、音姫や由夢が夕食を芳乃家で食べる最中に帰宅するとは滅多になかった。

しかし、ここ最近朝食や夕食の両方ともさくらは一緒に音姫たちと食べている。

嫌という話ではなく、純粋な興味であった。

その音姫の言葉に、そういうことかあ、と納得した表情を浮かべるさくら。

「なにかあったんですか?」

「んー、なんて言えば良いのかな……思い出した、からかな」

「思い出した、ですか?」

「うんっ!」

わたしの願いをね、とさくらは満面の笑みを浮かべて答える。

ここ暫く、義之と一緒に朝食や夕食をとり、その日起こったことを

話した。

そんな楽しい団欒の一時を過ごし、さくらは気付いたのだ。

これが私が望んでいた願いなのだ、と。

家族が欲しいと願った。

実際に義之が現れて、さくらは喜んだ。

しかし、魔法の桜に不具合があるのを知り、それを調整する為に日々遅くまで作業をしていた。

義之と一緒にいれる時間は少なかったが、仕方ないのだと思った。

しかし、違ったのだ。

母さんと呼んでくれて、心配だと気遣ってくれる義之。

そんな義之―家族との、他愛もない日常が、何よりもさくらが求めていたものなのだ。

それを疎かにすることなどあつてはいけない。

それに、と。

さくらは音姫に向けてた顔を義之の方に向け、笑みを浮かべる。

義之はそんなさくらに照れたようにして笑う。

――息子のお願いを叶えられないなんて、母親失格だもんね

一緒にご飯を食べたいと言ってくれた義之のお願いは、さくらにとって一番優先するべきことなのであつた。

---

さくらとの会話が終わった後のこと。

そういえば、と音姫は思い出したかの様にして喋りだした。

「変わったといえは、由夢ちゃんもだよね」

今まで黙々と朝食をたべていた妹に視線を向ける音姫。

さくらだけでなく、由夢も変わったなと思っていたのだ。

急に話題にあがった由夢はびっくりした表情を浮かべる。

「え、わたしも?」

「そうだよー、朝も早くから自分で起きる様になったし、夜も何だか帰るの遅くなったよね」

何かあったの、と質問を投げ掛ける音姫。

その問いに、慌てたように手振りを加えながら由夢は答えた。

「や、たまたまですよ。 帰るのが遅くなったのも友達と話してたりして遅くなっただけですし」

「……ほんとに?」

目を細くして懐疑的な表情を浮かべる音姫に、必死になって否定する由夢。

そんなふたりを見て、義之は由夢の帰りが遅い理由を思い出し、話し出す。

「杉並から聞いたんだけど、初音のて——あちいつ!」

「あー、てがすべったー」

初音の手伝いをしてるんだよな、と言おうとした義之に、由夢の湯呑みの熱いお茶が降り掛かった。

あつつ、顔が、かおがつ!?

ちよつ、弟くん大丈夫なのっ。

義之くん、タオルタオルー!

義之と音姫とさくらが慌てたように動き出す。

その姿をみて、話が途中で終わったことに安堵を浮かべる由夢。

由夢としては、彼方の手伝いは恥じることでは何らないと思っっている。

しかし、音姫には言えない理由があった。

自分のポケットに入れていた、ある手帳を取り出す。

その表紙には、こう記載されている。

『非公式新聞部 仮部員用マニュアル』

彼方の助手をすることを嗅ぎ付けてきた杉並から渡された手帳である。

初めは要らないと断ろうとした由夢だが、その手帳には彼方が利用する部屋までの地図も記載されていた。

色々と悩んだ末に由夢はその手帳を受け取り、結果としては非公式新聞部の仮部員となったのだ。

——お、お姉ちゃんには流石に言えない……

音姫が所属する生徒会に敵対する組織に仮としても入っていることは言えるはずもなかった。

内心で謝る由夢と、どたばた慌てる義之たち。

芳乃家の日常はこうして始まるのだった。

## episode 12 「必要なのは」

「あ、初音くーん！」

昼休み。

学食で同じクラスの友人と食事をしていた彼方は、途中で別れ、第二執筆室に置き忘れたものを取りに行こうとしていた。

その最中、自身の名前を呼ばれて振り返ると、そこには小恋ともうひとりの女の子がいた。

「あれ、月島さん？」

「もー、ようやく見つけたよー」

探したんだから、と息を整えながら話す小恋。

杏や茜、渉などのメンバーからはすれ違う際に話し掛けられることが多かったが、小恋ははじめてなので、彼方は目を丸くする。

そして、彼方は小恋に尋ねた。

「何か用事でもあったんですか？」

「うん、ちょっと友達を紹介したくて」

ほらっ、ななか、と小恋は後ろに隠れていた人物を前に押し出す。

その人物は急に押し出され、慌てたような挙動をしてから、彼方の方に視線を向けた。

髪を黄色のリボンで束ねた、ツインテールの少女。

桜色の髪。小恋に呼ばれた、ななかという名前。

そこから、彼方は目の前の少女が誰であるかを悟った。

「あなたは……白河 ななかさん、ですよ？」

「あの、そうです…その、はじめまして」

彼方に問いに頷き、そして緊張した様子でお辞儀するななか。

白河ななか。

風見学園のアイドル的な存在である。

男子からの人気は絶大だ。

直接顔を合わせるのが今回で初めてであるが、同じクラスの男子からはよく口にでる名前でもあった。

——そっか、彼女が……

彼方は白河ななかという人物を知っている。

それは、周りの男子生徒の話聞いて、ということでもあるが、その前から知っている存在でもあった。

前世的な意味でも然り。

それ以外でも然り。

義之たちと知り合ったことにより、いつか会う機会があるのかもしれないという気持ちはどこかにあった。

そして、その際に考えるべきことがあった。

どう行動するべきか、である。

彼方は前世と呼べる記憶があり、それにより『ダ・カーポ』と呼ばれる作品を知っている。

初音 彼方として生きて時間が経ったことにより大分知識は曖昧なところがある。

しかし、ある出逢いを機に、

白河ななかと、その願った能力について思い出したのだ。

読心というのがどこまで知られるのか、彼方はあまり分からなかった。

前世や今のことを知られる可能性がある。

しかし。

しかし、それでも。

もし彼女が桜の願いで困っていたとき、自分が出れることは何なのかを考えた。

そして決めたのだ。

——わたしが、やるべきことは

ななかと知り合ったとき、彼方は自分がどう行動するのかを。

伝えなければいけないことも。

「はじめまして、初音 彼方です」

彼方は挨拶をし、

そして、ななかに手を差し出した。

差し出される手に、ななかは驚いたような表情を浮かべる。

そんな彼女をみて、彼方は笑みを浮かべながら、言葉を付け足す。

わたしの伝えたいことは、握手してくださればわかります、と。

——な、なんで……  
ななかは戸惑っていた。

会うことを決意し、小恋に紹介してもらい、彼方と面を合わせるこ  
とが叶った。

しかし、彼方の行動は、ななかが全く予期せぬものであったのだ。  
目の前に差し出される、彼方の手。

ななかは心を読む為、相手の手に触れたりすることが多い。  
しかし、それはあくまで自分から行動して、である。

確かに下心を持つ男子生徒が、ななかに触れたがろうとして来たと  
きはあった。

だが、今回のように、挨拶として握手を求められるのは初めての経  
験だった。

それだけではない。

——わたしのこと、知ってるの……？

彼方が手を差し出す際の言葉。

『わたしの伝えたいことは、握手してくださいださればわかります』

その言葉は、ななかには自分の能力のことを知っての言葉に思え  
た。

何故、知っているのか。

いや、それだけではない。

知っているのだとしたら、何故、自分に手を差し出してくるのだろ  
うか。

知ってて、心を読んでも良いと、言うのだろうか。

——でも、怖いよ

何もかもが初めての経験で。

初めての経験が、怖くて。

そんな風に悩むななかを、小恋はどこか心配そうに見つめ、彼方は

笑みを浮かべながら待つ。

そのふたりの様子を見て意を決したななかは、彼方の差し出した手に近づく。

そして彼方の手を握った。

彼方の手を通して伝わってきたのは――

「な、なにがあつたの」

わたし行かなきゃ、と走り去るななかの後ろ姿を見送りながら、小恋は呆然とした表情でつぶやく。

彼方にななかを紹介し、握手をふたりがして、その後には走り去るななか。

一部始終を目撃していた筈の小恋だが、それでも何が何だか分からなかつたのだ。

「彼女は、会いに行つたんだと思います」

まさか、今から行つてしまうとは予想外でしたが、と笑いながら話す彼方。

小恋は、その話にも尚更疑問が増えてしまう。

「だれに…それに、ななかに何を渡してたの？」

ななかが去る前に、彼方は手帳を取り出し、何かを書いたページを破って渡していた。

それについて質問する小恋に、彼方は答えた。

「白河さんが、会うべき人です」



「なかなか、会うべき、ひと？」

「はい…きつと、彼女のことを一番わかつてあげられる人。それは

——」

彼方は、なかなか悩んでいるのであれば、解決するのは自分の役目ではないと思っていた。

彼女をちゃんと理解してあげられる人。

それは——

彼方は最後に答えた。

——白河　ことりさんです、と。

episode—13 「ふたりの歌姫」

「ここら辺のはず、なんだけど……」

ななかは紙に書かれた住所と地図を見比べながらつぶやいた。

午後。

学校では昼休みが終わり、既に授業が始まっている頃。

ななかは学校ではなく、別の場所にいた。

それは、とある住宅地の一角。

渡された紙には、ななかが会うべき人物の住む場所が記載されていた。

その情報を頼りに、ななかはここまで来たのだ。

この紙をみて脳裏に蘇るのは、渡してきた彼のこと。

——初音くん……

昼休みに小恋に彼方を紹介してもらった際、彼の心をななかは読んだ。

いや、読ませてもらった、と言うべきだろうか。

彼方の表情や言葉から、自身の能力が知られている予感はしていた。

だが、実際に読めた心は、ななかが想像していた以上のものがあったのだ。

——初音くんは、知ってた

彼方を通して伝わってきたのは、彼方の過去や、ななかの能力について。

彼方が魔法の桜に願ったときのこと。

かつて願った人物から、魔法がいずれ解けるのだと告げられたこと。

自分ができることを精一杯頑張っていたこと。

そして、同じように魔法の桜に願った人達に、後悔しないようにと

必死に伝えていたこと。

ななかにも後悔しないで欲しいと。  
直接心に伝わってきたのである。

もう一つは、ななかの能力のこと。

魔法の桜に願ったことにより備わった、読心能力。

彼方から伝わってきたのは、彼女の能力による恐れや嫌悪感ではなく、心配。

——心配してくれてた、わたしのこと

強い想いがなければ曖昧な感情しか浮かばない筈なのに。

小恋の心を読んだときと同じように、伝わってきたのだ。

読心能力は辛くないだろうか。

相手のいやな部分ばかり見えてないだろうか。

ひとりで苦しみを抱え込んでいないだろうか。

彼方が何故ななかの能力を知っているのかは靄がかかっているが、読み取れなかったが、能力について純粹に心配しているのだと感じることができた。

それは、ななかにとって心が暖かくなる嬉しさがあった。

そして、最後に彼方から伝わってきたこと。

彼方自身の過去、ななかの能力、そして——

「……、だよな？」

立ち止まった先には、白い外観の一軒家。

ななかと同じ名字の『白河』という表札があることから、此処に目的の人物がいることと推測される。

——わたしの親戚、なんだよね

白河という姓、彼方から読み取った心から、ななかの親戚であることが分かった。

だからこそ、ななかにとっては驚きは大きかった。

そして、チャイムを押そうとして。  
ななかの手が止まる。

——いきなり来て、なんて言えばいいんだろう…  
会わなければという思いに押されてここまで来た。  
しかし、ななかはもともと人見知りであり、更に臆病な性格だ。  
親戚とはいえ、初対面の人物に会うとなると、急に弱腰になつてしまふ。

そもそも、居ないかもしれない。  
それに、居てもいきなり来たら困るよね。

初音くんに住所と一緒に電話番号ももらつたのに、連絡してない。

それに——

目的を目の前にして、自分の中でマイナスな気持ちがどんどん浮かび上がってしまう。

それでも、会わなければ。

自分の中で気持ちが葛藤していたとき。

ガチャリと。

目の前の家の扉が開いた。

そこに現れたのは、妙齢の赤い髪の女性であった。

「あ、あの、その……わたしっ!」

突然のことで頭が真っ白になりながらも何か言おうとするななか。

そんな彼女をみた女性は、ななかに対して笑みを浮かべながら話しかけた。

「貴女が、ななかちゃんかな?」

「えっ…は、はい! あれ、でも、なんで……?」

名前を言われて疑問に思うななかに、女性は笑いながら答えた。

彼方くんから先程電話があつたのだ、と。

——よ、よかったー……

慌てて出て行った自分をみて、彼方が気を利かせて連絡を取っておいてくれたのだろう。

心の中で彼方に感謝を述べるななか。

「ふふ、詳しい話は中しましょう」

ほっとした表情を浮かべるななかを見ながら、赤い髪の女性は、自身の家へと誘う。

お礼を述べて着いてくるななかに、女性はそういえばと、思い出したかのように話し掛ける。

そして、自己紹介しないとね、と言葉を付け足してから振り返った。

「ちわつす、わたしは白河ことりです……なんちゃって」

悪戯げな笑みを浮かべながら、彼女は言ったのだった。

「紅茶でいいかな？」

「あ、ありがとうございます！」

どこか落ち着きの無いななかに、笑いかけながら紅茶を差し出す。どこか借りてきた猫のような様子に、懐かしさを感じてしまうことり。

「昔と同じで恥ずかしがりやなのかな、ななかちゃんは」

「え、えっと、会ったこと…ありましたっけ？」

初対面ではないように話すことりに、ななかは疑問を浮かべる。

ななかにとつては記憶になかったが、ことりとしては一度あったことがあったのだ。

「あはは、ななかちゃんにね一回だけ会ったことあるんだよ？」

「え、ほんとですか！ あれ、でも、わたし……」

会った記憶が思い出せないことに申し訳なさそうな表情を浮かべるななかに、ことりは仕方ないよと告げる。

実際、彼女が会ったのは親戚の集まりで一度だけ。

しかも、まだななかが五歳にも満たないときのことだ。

それを覚えている方が難しいだろう。

ことりは昔会ったときのななかを思い出す。

まだ幼かった彼女であったが、今と同じように、いや、それ以上に恥ずかしがりやであり、母親に隠れるようにしていた。

そんな幼い彼女をみて、ことりは思ったのだ。

過去の自分に似てる、と。

その、昔の自分に似ていた彼女が、こうして今はここにいる。

それならば、自身のことを教えることが彼女の為になるのだと、漠然と感じた。

『わたしは、自分と同じような人が後悔しないように、助けてあげたいです』

昔、友人から紹介されて知り合った男の子。

会ったときはまだ小学生だったのに、自分より他人を心配していた優しい子だった。

その男の子が自分にななかを紹介したということは――

「ななかちゃんは、わたしの叶った願いについて知りたいってことでいいのかな？」

「え、あの！ その…は、はい」

ななかからは切り出し辛かったのだろう。

ことりから言われて慌ててはいたが、戸惑いながらもしつかりと頷いていた。

「うん、それじゃあ話そうかな」

魔法の桜に願ったときのことを、と。

彼女は、目を瞑り、懐かしいと思いつながら過去のことを話し始めるのであった。

---

似ている、と。

ななかはことりの過去の話を聞きながら思った。  
わたしとことりさんは似ていると。

ことりが話し始めたのは、小学生の頃のこと。  
小さい頃の彼女は、内気な性格で、人と上手くお話することが出来なかった。

そのせいかな、友達には居なく、周りからは暗いやつだと言われていた。  
そんな彼女は、周りの人と仲良くなりたくて。

もつと周りの人のことを知りたい。

そして、周りの人から好かれないと願った。

そう桜に願った結果、

彼女は人の心が読めるようになった。

「みんなの心を読み取って行動していったらね、沢山の人と仲良くなれたんだ」

色んな人と仲良くなり、周りからも明るくて付き合いやすいと言われるようになったのだと。

昔の自分とは決別し、新しい人生を送れていると感じた。

しかし、問題はあった。

彼女の読心の能力はオンオフが効かず、常に周りの心の声が聞こえてしまう。

自分に話し掛けてくる人の言葉とは真逆の想い。

嫌う人の心の声が否応なく聞こえてしまうのは辛かった。

それだけではなく、

ことりが周りから人気者になり、学園のアイドルと言われ、一目置かれる存在となった。

「学園のアイドルとして見られることがね、辛かったんだ」

学園のアイドル。

クラスメイトや初めて会う人にまでアイドルとしてのフィルターを通して見られるのが、彼女には悲しく、辛いことであった。

本当の自分は必要ないのだと言われている気がして。

悲しそうな表情を浮かべて話すこりに、ななかの胸の奥が苦しくなるように感じた。

——わたしとは別の苦しみを感じてたんだ。

周りから好かれないと願ったことり。



周りから嫌われたくないと願ったななか。  
願ったことで得た能力は似ていたが、ことりとななかで別々の苦しみがあった。

いや、常に周りの気持ち伝わる方が辛いことは多かつただろうと、ななかは思う。

「でもね、悪いことだけじゃなかったんだ」  
学園付属3年生の頃。

ことりは、とある同学年の男の子と出逢った。  
その男の子は周囲とは異なり、分け隔てなく接してくれたのだ。  
それがことりには凄く嬉しかったのだ。

「その男の子の周りにはね、惹かれるように色んな人達がいたんだ」

笑顔が絶えない元気なツインテール少女。

強気な女の子と、おっとりとした女の子の姉妹。

周りに気を配る優しい男装の女の子。

問題を起こして周りを騒がす男の子。

そして、その男の子には意地っ張りな部分を見せる妹。

特徴的な人たちに常に囲まれていたのだ。

彼だけでなく、周りの人たちも同じように、等身大の自分と接してくれていた。

それが心地よくて、幸せだと感じていた。

その頃に、ある事件が起こった。

「枯れない桜がね……枯れちゃったんだ」

自分が生まれた頃から常に咲いていた桜。

その桜が予兆もなく、突然枯れたのだ。

そのとき、ことりは言い知れぬ不安を感じた。

——桜が、枯れると……

枯れない桜―魔法の桜が枯れた結果、何が起こったのか。  
彼方が書いた記事が頭に浮かび、口を震わせながら、ななかは言葉に出した。

「願いが、解けたんですか？」

「うん、わたしの心を読む力がね、なくなっちゃったんだ」

頷いて話すことりに、ななかは自分のことではないにも関わらず、目の前が真っ暗になるように感じた。

いや、自身の願いが解ける可能性があるのだと、本当の意味で知ったのだ。

「その、怖くなかったんですか？」

「もちろん、急に読めなくなつて……凄く怖くなった」

自分の半身がなくなったように、ことりは感じた。  
心が読めないのが怖くて。

相手の気持ちに分からないのが辛くて。

それで怯えてしまい、一時期は学校に行けずに休んでしまう日々が続いた。

「そんな自分をね、心配してくれる人たちが居たんだ」

佐伯加奈子と森川知子。

ことりの親友であるふたりが、家まで心配して観に来てくれた。  
た。

大切な友達だったが、心が読めないことが不安になってしまい、会わずに追い返してしまった。

それなのに。

「何度も、何度もお見舞いに来てくれたんだ」

自分が拒否して会わなかったのに。

そんな自分を心配して、毎日ふたりは来てくれていた。  
会えずに追い返しても、何度も、何回も。

カーテンから窓の外を覗くと、そこには心配げに自身の部屋をみつめる、みつくんともちやんの姿が。

ことりが見ていることに気付いたふたりが、下から大声で話し掛けてきたのを覚えている。

『わたしたち、待つてるから!』

『ことりがいないと落ち着かないの!』

その言葉が。表情が。

心がもう読めない筈なのに、自分の中に伝わってくるものがあつたのだ。

どうしようもなく

胸の中が暖かくなり、

嬉しくなり、

溢れ出てくる涙をおさえることが出来なかった。

そして気付いたのだ。

「きつと、心が読めなくても、言葉や表情とか、それ以外でも、心に伝わるものがあるって」

心を読んだことがあるからこそ、心の内と言葉で違う人を何人も見ってしまった。

だが、逆に心と言葉が一致する人たちも何度も見てきたのだ。

大事な親友である、みつくんともちやん。

それに――

「言葉じゃなくて、行動で伝えてくれる人もいたんだ」

かったるいが口癖な男の子。

面倒だと口では言うくせに、何度も家に心配して観に来てくれた。た。

家に帰る途中だからと言っていたが、家が真逆だったことをことりは知っていた。

誰かが困っていたら放っておけない彼。

そんな彼だからこそ、ことりは大好きだった。

「そのおかげでね、能力がなくなっても、頑張つて生きていこうって思えたの」

もう心は読むことができない。

それでも、言葉や行動で心に伝えることが出来るのだと、彼女は親友や好きな男の子から教わった。

だからこそ、彼女はその心に伝わってきたものを信じて、今まで幸せな人生を謳歌できたのだと。

ことりは、ななかに満面の笑みを浮かべて言った。

そんなことりの言葉や表情を見て、色んな感情が混ざり合い、気持ちがちがごちやごちやになるのを、ななかは感じた。

その戸惑った様子のななかに近付き、彼女の手を包み込むように両手で握った。

そして、ななかの目をしっかりと見つめ、ことりは伝えた。

「あなたにも、いる筈だよ」

——あなたを大切に想ってくれる人達が。

ことりの声と心から伝わってきた言葉。

その言葉を聞いた瞬間、ななかの中に浮かび上がるものがあった。

『あんま、無理すんなよ』

軽音楽部で見せた、渉の気遣う言葉を。

『ななか、だいすきっ！』

抱きつき、溢れんばかりの笑顔を見せる小恋を。

そして。

——そうだね、そうだったんだね、初音くん。

『わたしの伝えたいことは、握手してくださればわかります』  
彼方からの、歩み寄ろうとしてくれた行動を。

それらが信じられるものなのだ。

大切な言葉や行動だったのだと、ななかは気付いた。

「…っ、はい…わたしにも。わたしにもっ…いてくれました…っ」  
ぽろぽろと溢れてしまう涙。  
でも、それでも。

そんなことが気にならないくらい、胸の中が暖かくて。

嬉しそうに泣くななかを、ことりは幸せそうに見てから、優しく抱  
きしめた。

そして、泣く彼女に言葉を掛ける。

「大丈夫。きつと、信じることができたら、大丈夫だよ」

——たとえ、願いが解けてしまったとしても。

ななかは久方ぶりに大声で泣いた。

でも、そこから感じられるのは、嬉しいという気持ちで。

不安や苦しみは、涙と一緒に出てしまうように感じられた。

「その、ありがとうございます」

「ふふ、わたしも会えて嬉しかったよ」

目を腫らしたななかの感謝に、ことりは嬉しそうに言葉を返した。  
あの後、ななかはことりに自分の過去や願いのことを全て伝えた。

それを受け止め、ことりは似た能力を持つななかに出来る限りの助言をしたのだった。

それ以降も色々と二人で話をしていたのだが、時間も遅いということとで帰ることとなったのだ。

ななかは、玄関で見送ってくれていることりに、自分の決意を伝えた。

「わたし、この能力を使わないで頑張ってみようと思います」

まだ少し不安はあるけれど。

それでも頑張ってみようと思うことが出来たのだ。

その言葉を聞いて、ことりは嬉しそうに頷いた。

そして、頑張つてと、ななかを応援したのだった。

「あ、そうだ、ことりさん」

そういえば、と。

ななかはひとつだけ、帰る前に気になっていた疑問をことりにぶつけた。

「あの、結婚をしようとは思わなかったんですか？」

先程、リビングに飾られていた写真には、昔のことりが写っていた。

同性である自分でさえ可愛いと思う女の子。

そんな彼女がいままで結婚してなかったのに驚き、つい聞いてしまったのだ。

その問いに、ことりは考えるようにしながらも話す。

「何人かから真剣に言われたことはあったけど」

結局は断っちゃった、と彼女は言った。

妙に気になって、ななかは何故かことりに問い掛ける。

ことりは目を瞑り、大事なものを思い浮かべるようにしながら伝えた。

——初恋の人以上に想える人が居なかったからかな、と。

episode—14 「大きな一歩」

episode—14 「大きな一歩」

「聞いたか、同志初音よ」

そういえば、と。

杉並が何か思い出したかのように、彼方に話し掛けた。

とある日の放課後。

非公式新聞部の第二執筆室で魔法の桜について調べる彼方と由夢のもとに、杉並が押し掛けていた。

ノックもせずに入ってくる杉並に対して由夢が文句を言うのは既に恒例の出来事になっていたのである。

「何の話ですか？」

「最近の話題と言ったら決まっているだろう」

白河嬢のことだ、と杉並は疑問に思う彼方に答えた。

その言葉に彼方は目を丸くする。

白河が姓の女性で言えば限られてくる。

彼方としては姓が白河の女性は二人知っているが、杉並から語られるとすれば白河ななかだろうと推測した。

「それで、白河さんがどうかされたんですか？」



「ふむ、相変わらず噂には疎いのだな。　白河嬢がここ最近で変わったとな」

「変わったですか。　明るくなった、もしくは元気になったとか、ですか？」

どちらかと言えば逆だ、と杉並は否定する。

内気な性格に変わったのだと。

今までは誰に対しても明るく元気な姿を見せていたなかなかであったが、不安な表情や挙動不審な姿が多く見られるようになったのだ。仲が良い小恋や渉に対しては今までと態度は変わらないが、他の人と話すときは弱気な面が見えるとのこと。

「急に人見知りになるといっなのは中々に興味深いな」

「それは……あの、周りの反応は如何でしょうか？」

些か不安そうな表情を浮かべて尋ねる彼方。

なかなかの印象が変わることにより、周りから変な目で見られていなか心配になったのだ。

そんな彼方の不安を解消させるかのように、杉並は問いかけに答えた。

「オドオドした様子が逆に可愛いと、男子からは更に人気が高まっているとのことだ」

「わたしも白河先輩の噂は聞きましたよ。　男子に触れたりする姿を見なくなつて、同性からも好意的な人が増えたみたいですね」

杉並と由夢の返答に安堵の様子を見せる彼方。

そして、なかなかの最近変わったと言われる様子について考える。

おそらく、変わった直接的な理由はことりに会ったからだろうと彼方は思った。

何の話をしたかは分からないが、なかなかの中でことりと話したことで変わろうと思えたのだろうと。

——それに、白河さんは読心の力を……

内気な性格。

ななかから人に触れなくなった。

杉並と由夢の話に出たキーワードから、彼方はななかについて予想できるものがあつた。

きっと、彼女は読心能力を使うことを控えようとしているのだと。

内気な性格になつたのは、変わったのではなく、本来の面が表に出始めたのであろう。

——まったく、眩しいな

魔法の桜に願つたことにより叶つた能力。

ずっと頼っていた能力は、いわば自分の半身とも言えるだろう。

自分に宿る能力に頼らない。

言うは易く行うは難し、である。

願いが解けて使えないのではなく、使えるけど頼らない。

そのななかの行動が、彼方には眩しく感じられた。

「さて、そんな白河嬢だが、ここ最近一日だけ午後から無断で授業をサボったらしい。そして——」

そのサボる直前に同志初音と白河嬢が話している場面が目撃されている訳だが、と。

彼方に向けて杉並がニヤリと笑みを浮かべながら話す。

今までの話はこの情報を話す為の前振りだったのだろう。

杉並が言いたいことを彼方は察した。

ななかが変わつた理由は自分にあるのではないか、と言いたいのだろうと。

だからこそ、彼方は答える。

「残念ながら、私ではないですよ」

杉並の問いを否定する。

私はあくまできつかけを作っただけである、と。

今回、白河ななかに必要であつたのは、彼女のことを理解してあげ

られる人であった。

それは、ななかの気持ちや能力を含め、白河ことり以外には考えられなかったのである。

——今度、ことりさんにお礼を言いに行かないとですね

必要であったとはいえ、最終的にことりに丸投げしてしまった彼方。

後悔はなかったが、感謝は直接言いに行く必要があると感じた。

そして、ことりと話し、大きな一歩を進んだななかも話をしたと思うのであった。

——はあ、まったく、彼方先輩は。

嬉しそうな表情を浮かべる彼方をみて、いつものことかと溜息を吐く由夢。

由夢が彼方の助手として書類の整理や調べ物を手伝うようになってまだ一ヶ月も経っていない。

しかし、彼方の側に居る間は、色々と驚きの連続だったと由夢は感じる。

魔法の桜のこと自体が驚きではあるのだが、それだけではなく。

——彼方先輩や雪村先輩だけじゃなかった。

杏からの相談以降、杉並を経由し、付属と本校から数人が彼方のもとへ訪ねてきたのだ。

内容は、魔法の桜の記事について。彼らも彼方たちと同じく魔法の桜に願った人達であったのだ。

魔法の桜への願い。

叶ってしまったからこそ、不安が沢山あつて。

でも、そんな異常な力を打ち明けられる人がいなくて。

——雪村先輩の言うとおりだったな。

『こういう機会はきつと増えるわよ』

杏が彼方に相談する前に、由夢に話した言葉。

実際に、杏と同じように願いが叶った人たちが彼方のもとへ来たのだ。

やって来た人たちの顔は、みんな不安そうな表情で。

そんな人たちに対して、彼方は自身のことを話し、出来ることを一杯やっていたのを由夢は側で見っていた。

そして感謝の言葉を述べる人や泣く人たちを見て、由夢は彼方の様なが必要なのだと感じた。

今回のななかについても、きつと。

由夢は、そんな彼方を手伝えることが嬉しかった。

そして、彼女は彼方の助手である為に、とあることを決意する。

——わたしも、一歩前に進まないで。

自分の予知能力について。

その力が、魔法の桜によって与えられた願いかは分からないけれど。

この能力のことを打ち明けることを決意するのであった。

## episode—15 「不安」

「なんか風見学園ってイベントが多いよな」

「どうした、急に……というか、口にタレがついてるぞ」

団子を食べながら呟く渉に、呆れた口調で義之はツツコミを入れた。

とある日の放課後。

渉、義之、杉並、杏、茜、小恋の面々は、甘味処「花より団子」に寄っていた。

雪月花が義之を誘い、渉と杉並が便乗して付いてきたのである。のんびり各々が他愛ない話をしている中、渉が話題の1つとして挙げた。

「いや、考えてみるよ。 体育祭やったと思っただらすぐに文化祭だぜ」

「それに、文化祭が終わったらクリパも準備しないとだしねー」

渉の話す内容に共感を示すように、茜も頷きながら話す。

義之は渉と茜の話聞いて、今更ながらも確かにその通りだと思う。

義之たちが通う学校である、風見学園。

この学園は一年間の行事が多い。

修学旅行、体育祭、文化祭、クリスマスパーティー、卒業パーティー。それだけでも多いのに、手芸部主催のミス風見学園コンテスト等の、生徒が立案するイベントもある。

改めて数えると二ヶ月に一回は行事があるというのは凄いなど、義之は過去を振り返りながら思った。

「本島から来た引越してきた人は凄いビックリしてるよね！」

「クリパと卒パは、普通はないわよね」

小恋の言うとおり、他の学園から来た人は行事の多さにまず驚きの声をあげる。

文化祭は分かるけど、何故クリスマスと卒業式にもパーティーをするのか、と。

昔からの伝統という話もあるが、生徒が学園生活を楽しめる様という学園長の想いが形になっているとの噂もある。

義之自身、さくらに直接確かめたことはない。

しかし。

『にやはは、みんな楽しめる方がいいよね！』

言いそうなのが目に浮かぶ義之であった。

「まあ、イベントがないよりは多い方が良いではないかっ！」

「杉並くんはあ、生徒会との追いかけてっここが楽しそうだもんねー」

非公式新聞部と生徒会の対決は、クリパや卒パなどの楽しみの一つにすらなっている。

生徒だけでなく、教師でさえ注意しつつも楽しそうにしているのを義之は見た覚えがある。

何だかんだで皆それぞれが行事を楽しんでいる。

それはきつと良いことであると、義之は思う。

「ま、学園祭も委員長だけに任せないでやるとしますかね」

「あら、義之にしては珍しいわね」

義之の眩きを拾った杏は目を丸くする。

別に義之が今までサボっていた訳ではないが、杏や茜たちが言わなければ積極的には手伝いをしなかったのだ。

だからこそ、珍しいと感じたのである。

確かにそうだけどな、と杏の言葉を否定しなかった。

しかし、義之は空を見上げながら、杏に言葉を返した。

「付属も今年で終わりだし、後悔しないように楽しまないと、な」

付属を卒業しても、来年からそのままエスカレーター式に本校に入学する。

あまり変わらないのかもしれない。

しかし、どうせなら今あることは楽しまないとな、と義之は思うのであった。

ふと、周りから返答が何もないことに違和感を覚え、視線を杏たちに向ける。

そして、杏、茜、小恋、杉並、渉の全員の視線が自分に向いていることに気付いた。

「な、なんだよ……」

無言で見られて義之が少しどもりながら周りに尋ねる。

質問された義之以外は顔を見合わせ、そして笑い合うのであった。

「いや、あれ……なんか変なこと言ったか？」

何故みんなが笑っているのか分からず戸惑う義之。

そんな彼に、杏と茜が笑いながらも理由を告げる。

「ふふ、後悔しないように、ね」

「いったい誰に影響を受けたのかなあって」

ふたりの言葉を受けて、義之は周りが笑う理由を悟った。

後悔しないように。

自分が発言で無意識に使ってしまった言葉。

『魔法の願いは関係なく、どうか皆さんも、後悔しないように生きてください』

それは、その言葉は。

義之を含め、今ここにいるメンバーからしてみれば、とある人物を思い出してしまうのだ。

しかし。

しかし、それは。

彼らがそれだけその人物の話に影響を受けたということでもあつ

た。

「否定はしないや」

義之は影響を受けたということを否定しなかった。

実際に彼の話を受けて、行動したのだから。

そして、それは間違っていないかったと義之は自信を持って言える。だって。

『うん！ 今日絶対早く帰ってくるから！』

——さくらさんの、いや、母さんの本当に嬉しそうな表情を見ることが出来たのだから。

## episode 15 「不安」

おや、珍しいなど。

彼方の、思わぬ来客が訪れたことによる感想である。

非公式新聞部 第二執筆室。

彼方に見れば放課後の定番の作業場となっている。

しかし、場所が場所だけに、執筆室に訪れるメンバーというのは驚くほどに少ない。

非公式新聞部のメンバーがたまに来ることを除けば、杉並と由夢のみである。

そんな場所に訪れたのは、茜であった。



「すみません、お待たせしました」

「んーん、お茶ありがとねえー」

差し出されたお茶に礼を述べる茜。

彼女がここに来たのは、最初に杉並が義之たちを連れてきたのを含め、二回目である。

しかも、今回は茜のみで訪れたのだ。

それを聞いて、彼方はひとつ疑問に思う。

「それにしても、よくこの場所に来れましたね」

非公式新聞部が利用している地下室は広く、道も複雑な構成になっている。

部員の彼方は地図があるから問題ないが、地図がないと場所を把握するのが困難である。

実際に、非公式新聞部の仮部員となる前の由夢は、第二執筆室に来ようとして迷った。

だからこそ、ひとりで訪れた茜に驚きを感じていた。

「ふっふっふ、茜さんにはこれがあるんだー」

「これは……手書きの地図、ですか？」

彼方の疑問に答える為に見せてきたのは、ちぎられたノート。

そこには、部分的ではあったが、この執筆室に来るまでの地図が描かれていた。

「しかも、正しいですし……すごいですね」

正確に描かれていることに感嘆の声を漏らす彼方に、茜はこれを描いてくれた人物を述べる。

「これはね、杏ちゃんお手製なんだー」

「なるほど、雪村さんでしたか」

自身で描いた訳ではないのに得意げに話す茜に可愛いと思いがながらも、納得する彼方。

願いにより何でも憶える杏であれば確かに可能であろう。  
改めて凄い能力であると感心するのであった。

「杏ちゃんも嫌なことはあるかもだけど、便利な力だよねー」

「はい、確かにそうですね」

相槌を打つ彼方であったが、先程の言葉について気付いたことがあった。

今、茜は杏について言った。

記憶力が良いとかではなく、便利な力である、と。

「花咲さん、あなたは雪村さんの願いのことを」

「うん、教えてもらってるよ」

彼方の問いに、嬉しそうな表情で肯定する茜。

彼女は杏の願いを知り、そして自分も願いのことを打ち明けたと告げる。

そして、それは小恋にも話したのだと。

「そこからね、もっと仲良くなれたんだ」

杏の家に泊まりに行った夜。

杏と茜は、自分が魔法の桜に願ったことを打ち明けた。

茜と杏はそれぞれお互い願っていたことに驚いたし、小恋は更けにふたりの秘密に驚いていた。

だけど受け入れてくれて。

杏、小恋、茜、藍の四人は更に絆を深めることが出来た。

そのきっかけは、彼方である。

だからこそ、言いたいことがあったのだ。

「わたしね、嬉しかったんだ」

彼女は席から立ち上がり、彼方のもとに近付く。

そして、座る彼方に真正面から抱き着いた。

「あ、あの！ 花咲さん！」

「ほんとに、嬉しかったんだ」

杏の家に泊まる前も十分に仲良しだった。

しかし、隠していた秘密を打ち明けて。

受け入れてくれて。

「お姉ちゃんの振りをした私じゃなくて、本当の私として認識してくれて……」

「藍、さん」

もともとは死んでいる筈な自分だ。

それなのに、学園に通えて、杏や小恋と仲良くなれて。

例え、藍としての自身を知ってもらえなくても満足だった。

満足だと、思っていたのだ。

なのに。

それなのに。

『もう、藍ったら！ わたしハラハラしたんだからね！』

『ごめんね、つい楽しくって』

大切な友達が認識してくれて。

『ふふ、いま藍の方でしょ』

『杏ちゃん、何でわかるのー！』

大切な友達が気付いてくれて。

そして、思ったのだ。感じたのだ。

それをどうしても彼方に伝えたくて。

「あ……ありがとう……」

彼のおかげで知ってもらうことが出来た。

彼のおかげで藍自身に、大切な親友が出来たのだ。

嗚呼。

わたしは、花咲 藍は、ほんとに。

「しあわせ…だよ…っ」

いつか枯れるのかもしれない。

いつか、願いが解けてしまうのかもしれない。

それでも自分は幸せ者だと思う。

妹と、親友と、藍として側にいれるのだから。

「そっかあ」

その嬉しさを、喜びを、感謝を。

彼方に少しでも知ってほしくて。

あなたのおかげで幸せなのだと伝えたくて。

「それなら…僕も、嬉しいな」

「うん…うんっ…っ！」

そして、いつかもう一つの想いも伝えたいな、と藍は思った。

姉の身体であるけれど。

願いが解けたら居なくなってしまうかもしれないけれど。

——あなたのことが好きです、と。

扉越しの泣く声を聞きながら、由夢はただ呆然と佇んでいた。いつもの様に、由夢は彼方を手伝う為、授業後に執筆室へと向かった。

目的の場所に着き、扉を開こうとしたとき、彼方と茜の声が聞こえたのだ。

最初は大事な話なら聞かずに帰ろうと思った。

しかし、ついどんな話をしているのか気になり、誘惑に負けて聞いてしまったのだ。

『しあわせ……だよ……っ』

彼方が困っている人を助けた。

ただそれだけのことだ。

それは由夢からしてみれば嬉しいはずなのに。

誇らしいと感じるはずなのに。

由夢は、何故か不安を感じてしまっていた。

——わたしは、この場面を知らない

由夢が見る予知夢は、誰かが不幸が訪れてしまいそうな場面。

もしくは、彼方と由夢のふたりの場面。

都合の良い能力ではない。

だからこそ、知らなくても可笑しくない。

しかし、茜と彼方の声を聞いて不安が止まることはなかった。

『それなら……僕も、嬉しいな』

彼方が自身のことを『僕』と言っているところ。

彼方が敬語ではないところ。

それを由夢は今まで聞いたことも見たこともなかった。

それがどうしようもなく、心が揺さぶれる。

しかし、由夢は自身の夢で見たのだ。

自分と彼方が寄り添う場面を。

——予知夢は、覆らない。

誰かが不幸になる姿をみて、予知夢を覆そうと何度も行動した。それでも、覆せなくて。

予知夢を覆すことができなくて欲しいと望んだはずであった。

——予知夢は、覆せないはずなのに。

予知夢を覆したいのか、覆したくないのか。

由夢自身はどちらを望んでいるのかが分からなくなってしまった。

episode 16 「彼と彼女と」

「それで、何かあったのか？」

「何か、とは？」

放課後の第二執筆室。

図書室で借りた文献を読んでいる彼方に、いつの間にか来ていた杉並は質問を投げ掛けた。

「ほう、まったく普通に対応するとは……これでも気配を消して入ってきたのだから」

「いや、何回もされたら流石に驚かなくなりますよ」

どこか感心した様に声を上げる杉並に、呆れながらも言葉を返す。

杉並が突如現れるのは日常茶飯事であり、彼方だけでなく、義之や渉達も慣れてしまい、どこから入ってきたのか等はもはや突っ込まないものである。

「……ふむ、もう少しバリエーションを増やす必要があるか」

「ないですから、やめてくださいいね」

周りに被害が起こりそうな予感がした為、とりあえず彼方は釘を刺しておく。

それで、と。

話が脱線していたことに気付き、当初の質問に戻す為に杉並へ話を促した。

「最近は何日入り浸っていた、朝倉妹のことだ」

「入り浸るって……私のお手伝いをしていただいていたんですよ」

由夢が彼方の助手になると告げた次の日から、由夢は放課後になると此処に訪れ、書類整理や調べ物の手伝いを積極的に行っていた。

その為、杉並の言葉にツッコミを入れる彼方。

しかし、その返答を意に介さず、杉並はそのまま話を続ける。

「どちらにせよ、今まで毎日来ていた朝倉妹が、今日までの三日間は一度も訪れていないではないか」

毎日来ている訳でもない杉並が何故知っているのかは、最早問わない彼方。

確かに杉並の言う通り、今まで用事がある時以外は基本的に毎日来ていた由夢であつたが、ここ三日は執筆室に来ていなかった。

「なんだ、喧嘩したのか？」

「特にその様な覚えはありませんが……」

実際、彼方が記憶している限り、由夢と最後に話した時まで喧嘩や口論すらも起きていなかった。

だから急に来なくなつたことに心配し、体調を崩したのではと思つたが、義之からは特に休んでないという話を聞いていた。

「そもそも、毎日来てもらつていたことが申し訳なかつたですからね」  
放課後といえば、部活動に精を出す人もいれば、友達と遊んだりしている人もいる。

その時間を自身の作業のサポートにあててもらうのは、申し訳ないという気持ちだが彼方にはあつた。

一度その話をしたとき。

『私がお手伝いしたいからやつてるので』

由夢は笑顔で彼方にそう告げたが、彼女自身が何か他にやりたいことが出来たら、それを優先して欲しいとは思っていたのだ。

だからこそ、彼方は杉並に告げた。

「由夢さん自身がやりたいことがあれば、仕方ないかなつて思います」  
少し寂しいですけどね、と。

若干、曇り気な表情で言葉を足した彼方に、ふむ、と言いながら杉並は何か考え込む。

「どうかしましたか？」



「朝倉妹は……いや、まあ、いいか」

彼方の疑問を他所に、杉並は何かを言い掛け、そして途中で言葉を止めた。

「言い掛けられると気になるのですが」

「大した話ではない……む、そろそろ調査に行かねば」

腕時計を見てから、さらばだと言いながら出ていく杉並。

唐突に来たと思えば、唐突に去る杉並に呆れながらも、再び文献に目を通すのであった。

どこか、落ち着かないという気持ちを抱きつつも。

「同志初音も仕方ないやつだな」

地下室を歩きながら杉並はひとりつぶやく。

杉並は先程の彼方とのやり取りを思い出す。

由夢が来ていないことを仕方ないと言っていた彼方であったが、杉

並はお茶が二つ用意されていたことに気付いていた。

杉並自身に用意されたものではなく、その前から置いてあったものだ。

「朝倉妹が来るかもしれないから用意したのか、もしくは無意識に淹れたのか」

どちらにせよ、口では仕方ないと言いつつ、居て欲しいと思っっているのだろうと推測できた。

仕方ないご兩人だと、杉並は彼方だけでなく、もう一人の方につい

でも考える。

『由夢さん自身がやりたいことがあるれば、仕方ないかなって思います』  
「やりたいこと、か」

先程の彼方の言葉を頭の中で反芻する。  
その後、杉並は呆れた口調でつぶやくのであった。

——暗い表情でぶらぶら街を歩くのが、やりたいことだとは思えんがな、と。

episode 16 「彼と彼女と」

——何をやってるんだろうな、わたし。  
自嘲するような薄笑いを浮かべる由夢。  
彼女は、いま現在、目的もなく街を歩いていた。

放課後。

彼方の助手になって以来、他に用事がなければ基本的に彼の手伝いをしていた由夢。

嫌々手伝っていた訳ではない。

頑張っている彼方を手伝うことに喜びを感じていたし、側にいれるだけで嬉しかった。  
だけど。

何故だろうか。

『それなら…僕も、嬉しいな』

扉越しに聞いてしまった茜と彼方のやり取り。

あの話を、言葉を聞いてから、どうしようもなく由夢は胸が苦しくなってしまった。

今まで通り彼方の手伝いをしていたら、あの場面を否応なしに思い出してしまう気がした。

それが嫌で。辛くて。

あの、第二執筆室に向かうことが出来なかった。

だからと言って、放課後に友人と遊ぶ気分にもなれず、自宅にそのまま帰り一人でいるのも嫌で。

意味もなく街をただただ歩いているのが現状である。

明日は行こうと思いついたが、いざ行こうとすると足取りが重くなり、既に三日目となってしまうていた。

——こんなこと、意味がないんだって分かってるのに。

街を歩いて何か変わる訳でもない。

まだ、胸が苦しくなったとしても彼方に会った方が良いつて、分かっているのに。

頭では分かっているけど、決心が出来ずにいた。

「……………ん、あれ？」

思考の渦に埋もれていたせいか、由夢が気付いた時には商店街を通り過ぎ、普段あまり行かない方面に来ていた。

見上げると、目の前には長い上り階段。

「あれ、ここって……」

由夢は自分が来ていた場所を知った。

胡ノ宮神社。

初音島に唯一存在する神社ということもあり、初詣には数多くの人  
が参拝に来る。

由夢も家族で毎年初詣で訪れている。

——行ってみようかな

特に此処に来るつもりはなかったが、何となしに階段を上るので  
あった。

「この時間って人いないんだ……」

上りきった由夢は、閑散としている神社を見て思わずつぶやく。

普段神社に行くときが初詣以外ないからか、参拝客が誰もいないの  
を見ると何だか不思議に感じる由夢。

しかし、平日などこういうものなのだろうと納得し、神社の方へ歩  
き出す。

——神社：本来なら、願いを叶えてくれるのはこっちなんだよね  
願い。

最近まで毎日彼方の手伝いをしてきたからか、願いというと魔法の  
桜を連想してしまう由夢。

そのせいか、今まで深く考えていなかったことも考え出してしま

う。

わたしが視るこの予知夢は何なのだろうか。

以前まで予知夢を視る理由や原因など考えなかった。

考えても分からなかった、と言った方が正しいかもしれない。

しかし、最近になって不思議な力を持つ人達を由夢は知った。

——雪村先輩みたいに、私も願ったの……？

杏は魔法の桜に願い、すべてを記憶する能力を得た。

彼方は魔法の桜に願い、自分の寿命を延ばした。

不思議な力が魔法の桜に関連しているのであれば、自身も願ったのだろうか。

あの、魔法の桜に。

由夢は自身が願った記憶はないが、小さい頃だから思い出せないだけなのだろうか。

それに、もう一つ疑問があった。

「なんで私は彼方先輩との未来を視るの……？」

予知夢は誰かに不幸が訪れる場面しか視ていなかった。

しかし、いつからかそれとは別に、彼方と一緒に居る未来も視る様になった。

それは何故なのか。

そもそも自分が視る予知夢は回避できるのか、できないのか。

——私は、わたしは……。

考えることが多過ぎて、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまっそうに感じる由夢。

そんなとき。

「あら、お参りですか？」

由夢は、後ろから声を掛けられ、考えるのを止めて慌てて振り返ると、そこには巫女服の女性が佇んでいた。

「ああー、ええつと、その……」

何も考えずに来てしまったとは言い辛く、戸惑う由夢であったが、巫女服の女性は由夢の顔を見て驚きの表情を浮かべていた。

「もしかして、音夢様のご親戚ではありませんか？」

「えっ……あ、はい。わたしのお婆ちゃんですが」

音夢という名前を聞いて、一瞬戸惑ったが、自身の祖母の名前だと気づき、頷く。

その返事を見て、まあ、と両手を合わせながら嬉しそうな声を上げる。

その女性は、由夢に笑顔を浮かべ、自身のことを伝えるのであった。

——私は胡ノ宮 環と申します、と。

episode—17 「あなたの未来は」

episode—17 「あなたの未来は」

「いま、お茶を用意いたしますので」

「いえいえ！ そんな、お気遣いなく！」

何だか落ち着かない。

それが由夢の、今の現状についての感想である。

たまたま寄った場所である、胡ノ宮神社。

その場所にいた巫女服の女性——胡ノ宮 環に案内され、由夢は神社の中の一室に居た。

「こうして神社の中に入るのは初めてです」

「ふふ、遠慮せず入ってきてくださっても大丈夫ですよ」

初めて入る場所だからというのものもあるが、やはり自身と年齢が離れている人と話すのが幾分か由夢にとってみれば緊張してしまうのだった。

ただ、緊張と同じくらいに、環に対して興味もあった。

「あの、お爺ちゃんとお婆ちゃんの、昔からのお知り合いなんですよね？」

「はい、純一様と音夢様とは学生の頃からの付き合いとなります」

祖母と祖父の同年代の友人。

さくら以外では二人の昔について話したこともあまりなかった為、何だか新鮮に感じるものがあったのだ。

「あの、二人は昔はどういう感じだったんですか？」

「そうですね……音夢様は学生の頃は風紀委員を努めており、成績も優秀で真面目で優しく、皆さんに慕われておりました」

「あ、分かる気がします」

今は海外で暮らしている音夢だが、たまに初音島に戻ってきて由夢や音姫に会いに来てくれている。

そのときに会う音夢は、優しくもあるが、自身が休みに家ですっと寝ていたりすると注意されたのを思い出す。

——お婆ちゃんは、昔から変わってないんだなあ  
優しく真面目で周りから慕われている。

学生時代の音夢の話を知っていると、姉の音姫が音夢の血を引いているのだな、と感じた。

「お爺ちゃんはどうでした？ お爺ちゃんは学生時代はやんちゃしてたって言ってましたけど」

由夢は純一自身から聞いた話では、学生時代は悪友と馬鹿騒ぎをしており、音夢達に迷惑を掛けていたと言っていた。

「ふふ、杉並様と純一様で皆様を楽しませようとしておりましたね」  
「杉並、さんですか……その名字を聞くと、楽しませ方が想像できそうなんですが」

環の話を知り、由夢は頭の中では今の生徒会と非公式新聞部のやり取りを思い出して、呆れた声を出してしまう。

環は良いように言葉を変えていたが、何となく想像出来てしまったのである。

その由夢の表情を見て、環は上品に笑う。  
そして、純一の別の面について話し出す。

「あとはですね、純一様はとても面倒見の良い性格で、周りで困っている方がいると手を差し伸べる方でした」

「そう、なんですか……」

わたしも何回も手を差し伸べていただきました。  
環は懐かしそうに、そして嬉しそうに話す。



由夢は、純一自身からは、昔から面倒臭がりであり、料理以外は何もかも音夢に任せていたと聞いていた。

しかし、それは本人だからこそその評価であり、他の人の視点では違かったのだろう。

そういえば、と。

環の話聞き、以前にさくらに純一のことを言っていた内容について思い出した。

『お兄ちゃんの「かったるい」は照れ隠しなんだよね』

『照れ隠し、ですか?』

さくらの言葉に由夢が聞き返すと、うんっ、と嬉しそうに頷きながら続きを話す。

『そう、照れ隠し。だからね、口では「かったるい」と言いながらも周りが困ってたらほっとけなくて助けてたんだ』

だから、みんなお兄ちゃんのこと大好きだったんだと満面の笑みを浮かべながら話していたのが印象に残っていた。

『お爺ちゃんは、凄かったんですね』

私とは違うんだな、と由夢は思った。

由夢も純一と同じように、『かったるい』という言葉が家族の前では使っていた。

口癖というよりは、純一の口癖を真似して使うようになったという方が正しいだろうか。

——ほんとに、わたしとは違う……

しかし、純一とは違い、由夢は『かったるい』という言葉逃げとして使っていたのである。

姉の音姫は成績優秀であり、炊事洗濯などの家事も卒なくこなすことが出来る。

自分は姉の様に何でも上手く行うことができない。

だから、『かつたるい』という言葉を使った。  
かつたるいと言えば、誰にも期待されないから。  
かつたるいと言えば、頑張ってる様には見えないから。  
由夢は、周りと自身に対して言い訳をする為に、逃げる為に使っていた。

——そして、今も、わたしは逃げてる  
彼方から。

自身が視る予知夢から。  
行動することが怖くて。  
真実を知るのが怖くて。

だけど、何よりも、そんな自分が——

「昔、予知能力を持つ、ひとりの女性がいました」  
「……えっ」

突然話を切り出してきた環にも驚いたが、何よりも内容に胸がドキツとした。

しかし、そんな由夢も意に介さず、話を続ける。

「その女性は、純一様と音夢様が結ばれる未来は視えてなかったそうです」

「だけど、純一と音夢は結ばれた。  
それを見て、予知能力を持つ少女は悟ったのだと環は言う。

予知能力で視た未来は、あくまで可能性の1つでしかないのだということを。

そして、人の意志、強い思いこそが幸せな未来を切り開くのだということを。

「知ったからこそ、その女性は後悔したそうです」

「後悔、ですか？」

「ええ、自分が視た予知など考えず、自身がやりたいことをすべきだったのだということを」

未来を視て何もせず諦めてしまったことが辛かった。

後悔しないように、自分の想いを、やりたいことをやるべきだったのだということを。

「……なんで、それをわたしに言ったんですか？」

「さあ、何故でしょうか」

あえて言うなら、いまの貴女に必要なだと思えたからですと。

環は由夢に返答してから、最後に問い掛けた。

——貴女がやりたいことは何ですか、と。

『わたしは、好きな人の助手として、自分自身も一歩踏み出そうとしていたのを忘れていました』

好きな人、という部分で照れながらも、環の瞳を真っ直ぐ見つめて伝えてきた。

『まだ不安もありますし、胸が苦しいのは変わりません』

……けど、後悔だけはしないようにしないと』

後悔しないように、というのは彼の象徴でもあり、口癖でもあった。助手として、同じく後悔しないように行動したいのだと由夢は言った。

『「かつたるい」ですけど、頑張つてきます！　また今度、神社に来るので改めてお話させてください』

ありがとうございます、と。

お礼を言つてから走り去る由夢の後ろ姿を見ながら、環は自身の役目は果たせたことに安堵する。

「やはり、音夢様や純一様の血を継いでいるのですね」

真つ直ぐな性格であり、何よりも意志が強い。

そんなふたりの面影を由夢に感じた環は、嬉しくもあり、懐かしくもあつた。

あの彼女の強い想いがあれば、きっと叶うだろうと環は思った。それに、環は由夢を通して未来の可能性のひとつを視たのだ。

「あなたの未来は、とても幸せそうでしたよ」

ふと、由夢が途中で聞いてきた話を思い出す。

その予知能力を持つ女性は今は幸せですか、と。

「ふふ、幸せですよ」

好きな人と結ばれはしなかったが、好きな人が幸せそうな表情を浮かべているのを見て、嬉しく感じたのを覚えている。

それに、友人にも恵まれ、仕事もやり甲斐があり、彼女は十分に幸せだった。

しかし、今回のことで昔のことを久しぶりに思い出す。

『あなた達は深い絆で結ばれている』

母が昔に環に告げた言葉。

何か見えていたのかもしれない。

きつと、未来の内の1つではあった筈だ。

——わたしも行動すれば変わっていたのでしようか  
環はかつての過去に想いを馳せたのであった。

時刻も六時を超えたこともあり、彼方は第二執筆室から自宅へ帰宅しようとした矢先のこと。

「かな…彼方先輩っ！」

扉が急に開かれ、彼方が視線を向けた先には由夢の姿があった。  
走ってきたのだろうか、胸を抑えて、息を整えようとしていた。

その由夢の姿をみて、彼方は目を丸くしつつも、嬉しいという気持ちを感じた。

「由夢さん、そんなに慌ててどうし——」

「最近これなくて、ごめんなさいっ！」

質問しようとした彼方であったが、それより先に由夢は泣きそうな表情で謝ってきたのだ。

その表情に驚き、慌てた様子で彼方は語りかける。

「そんな、そこまで謝ることではないですよ……由夢さんにもやりた  
いことがあるでしょうし」

「ないですー！」

助手以上にやりたいことはないです、と由夢は言葉をすぐに返した。

「わたし、今日までの三日間、なんで手伝ってないで街を歩いて……  
いったい何してるんだろって後悔ばかりしてました」

放課後のこと。

第二執筆室に行く勇氣は持てなくて。

でも、友人と遊ぶ氣も起きなかったし、他にやりたいことが思いつ  
かなかった。

「それに、わたしっ、家でジャージで布団の上でぐーたらするのが好き  
だったのに、それも嬉しく感じなかったんです！」

「えっ、えっと、由夢さん、とりあえず落ち着いて」

「落ち着けないですー！」

自分が何を言っているのか気付いてないのか、隠したい筈のことを  
カミングアウトする由夢に彼方は止めようとしても、落ち着く様子を  
見せない。

泣きそうで、そして不安そうな表情で話す由夢に、彼方も何も言え  
なくなってしまう。

「だから、ここに来ました！」

彼方と対面して、胸が苦しくなるのを感じる。

どうしようもなく、不安な気持ちになるのを感じるのだ。

それでも。

「このままじゃいけないって分かったから！」

彼方が言うように、後悔したくないから。

だからこそ、不安な気持ちを抑え、自分の思いをそのまま言葉に出  
した。

「わたしのこと、知ってほしいですー！」

予知夢のこと。

それによって悩んでるのを、自分ひとりで抱え込むだけでなく、知って欲しいと思った。

「だから……」

魔法の桜への願いを伝えた杏達のように。  
自分の秘密も知ってほしくて。

「だからっ！」

もう少し、距離を縮めたくて。  
一歩踏み出したくて。

「わたしの秘密、きいてくれますか？」

episode—18 「夢よりもっと幸せになるから  
(前編)」

episode—18 「夢よりもっと幸せになるから (前編)」

「それにしても、文化祭はあまり面白そうな催しをやってるクラスはなさそうだな」

義之は、文化祭の冊子をパラパラと捲りながらつぶやいた。

文化祭前日。

周りのクラスがラストスパートを掛けて慌ただしい中、義之たちのクラスは準備を早めに行っていたこともあり、他のクラスを気に掛ける余裕があった。

「まあ、張り切って変わったもんをやるのは、基本的にクリパか卒パだからだろ」

「文化祭は前座で、そのあとが本番なのよね」

渉の言葉に同意する形で、杏も答える。

確かにそういう感じだよな、と義之は頷きながら納得した。

特に誰が言い出した訳ではないが、文化祭とクリパが時期的に近いこともあり、文化祭はあくまで普通に抑え、クリパで張り切る生徒が多い。

義之たちのクラスも文化祭では喫茶店という、特に捻りのない出し物になっていた。



「まあ、毎回イベントで張り切り過ぎたら疲れるしな」

「そーだぜ、俺や月島たち軽音部も次のクリパに備えて練習してるしな」

「ちよつと、アンタ達！ まだ完全には準備終わってないんだから、だらけるの止めなさい！」

自分たちに振られていた仕事が終わったこともあり、ゆっくりしていた義之たち。

だが、流石にクラスで堂々とだらけている姿が目に残ったのか、クラスの委員長―沢井 麻耶が注意しに来ていた。

そして、だらける義之たちに不満に思ったのは、何も麻耶だけではない。

「もう、義之くん達だけじゃなくて杏ちゃんもゆっくりしてズルい！」

エプロンを身に着けた茜が頬を膨らませながらやって来た。

外装などの準備は前から行えるが、料理は腐るために前以て出来ない為、料理組が一番時間が掛かっていた。

それで忙しいのに、自分を放って呑気に話している親友たち面々に少しムツと不満に思ったのだ。

「だって俺たちの仕事は片付けたしな」

「義之くんは料理できるんだから、手伝ってくれても良いでしょー」

「いや、デザートとかは専門外だよ」

家で朝食や夕食を作る為に普通の料理は出来るが、あまり甘味などは作っていなかったのである。

その為、義之は無理だと否定したが、茜としては自分以外で仲良く話しているのが羨ましくも妬ましかったので怒ったままだった。

「そんなに怒るならもっと簡単なメニューにすれば良かったんじゃないね」

呆れた様に渉は茜に言った。

最初はサンドイッチとか簡単な軽食だけで良いのでは、という意見もあった。

しかし、それを否定し、もっと凝ったものを作るべきだと言い出したのは茜自身であった。

「むー、料理は美味しいのだったんだから！」

料理部としては譲れない部分であったし、何より藍の存在を杏や小恋達に知ってもらった後の初めてのイベントだったので頑張りたいという気持ちがあったのだ。

「ふふ、あなた達二人でレシピも考案してるんだから、美味しいに決まってるじゃない」

「杏ちゃん、もー、可愛いんだから！」

「いや、花咲さんまでコイツ等と一緒に休まないで欲しいんだけど」

杏の言葉に嬉しくなった茜は彼女に抱き着いた。

それを杏は仕方ないわねと言いながらも頭を撫でていた。

その光景をみてミイラ取りがミイラになったと、麻耶は頭を抱えてつぶやいていた。

「あん？　　そういや、『あなた達二人』って、茜以外にもいるのか？」

「渉……あなた、時折無駄に気付いたりするの止めなさい」

「そうだよお、渉くんはそんな役割じゃないでしょー」

「待つて、何で俺、ダメ出しされたの……」

そんな中、先程の会話に疑問を持った渉が突っ込むも中途半端にスルーされて涙目になる。

たまに茜と藍のことを匂わす話をしてしまうも、渉相手だと適当にスルーすれば大丈夫と思っている杏だった。

そんな漫才を繰り広げる中、義之はあることに気付いた。

「なんでこんな平和なのかと思ったが、杉並が居ないからか」

「ああ、確かに。杉並が普段は騒動起こすのに、してないからこんなに落ち着いてるのか」

義之の言葉に、渉や杏、茜達が納得していた。

クリパや卒パなどのイベントでは生徒会との追いかけて慌ただしい杉並の存在がいけないのだ。

それに、安心していられるのも訳がある。

「クリパや卒パじゃないから非公式新聞部も動かないだろうしな」

「だから平和なのか、それはそれで物足りない気もしてくるけどなあ」  
非公式新聞部が騒動を起こすのは基本的にクリパや卒パのタイミングである。

特に決まっていた訳ではないが、杉並自身もクリパに向けて準備中だと言っていたのを義之は思い出していた。

義之の言葉に、渉は去年などの馬鹿騒ぎを思い出しながら話していた。

渉の言葉は、意外にも他の生徒の一部も思っていることである。

騒動を起こして迷惑を掛ける非公式新聞部だが、何だかんだでそれを楽しみにしている生徒も多いのだ。

口では平和は良いことだと言う生徒会副会長―高坂 まゆきも物足りなさを感じていたのである。

「フハハ、期待に応えようではないかっ！」

出待ちしていたのではないか。

そう思えるくらいのタイミングで突如、杉並が義之たちの前に高笑いをしながら現るのであった。

どこから来たのよ、と突っ込む麻耶とは違い、慣れてる面々は平然と杉並に話し掛ける。

「いや、やるつもりなかったんだろ？」

「うむ、なかったぞ……さつきまではな」

明らかに何かやりますと告げる杉並に義之たちは呆れた視線を向ける。

「ほら、渉があんなこと言うから」

「あーあ、渉くん知らないからねえ」

「いーたーばーしーっ！」

「待って、俺のせいなの!?!」

杏と茜、麻耶に理不尽に怒られる渉は、俺関係ないじゃんと呼ぶ。そんな光景を尻目に、義之は改めて問い掛ける。

「渉が言ったからじゃないよな？ 何で急に？」

「なに、同志初音に頼まれてな」

「へっ？」

意外な人物の名前に、義之は目を丸くする。

何も驚いたのは、義之だけではない。

「まっって、彼方くんにお問い合わせされたの？」

「あいつが？ 何だかそんなイメージじゃないけどな」

茜と渉は自分が想像する人物がやらなそうなことなので、何かの間違えじゃないかと思っていた。

「……なるほどね。 ねえ、杉並」

ただし、そんな中で何か悟ったのか、杏だけはどこか理解した様子を見せ、杉並に問い掛ける。

「それは、誰のためなのかしら？」

「……………さてな」

杏の問いに肩をすくませ、言葉を濁す杉並。

ただ、杏の言葉に他の面々もどこか納得の様子を見せていた。

第二執筆室で彼方と話した義之たち面々からしてみれば、誰かの為にという理由だと納得できるものだったのだ。

理解する面々を他所に、杏は更に杉並に問い掛けた。

「これ、私たちにわざわざ言ったのは何で？」

「……なに、色々手伝って欲しくてな」

何か騒動を起こすのであれば、普通ならばそれを話すメリットなどある筈がない。

それを話すということは、要は協力して欲しいということだ。

騒動に加担するということは、周りに迷惑を掛ける可能性がある。しかし。

「だれかの為……なんだよね？」

「おそろくな」

真剣な表情を浮かべて問い掛ける茜に、杉並は肯定する。

そして、暫く沈黙が続いたが、その空気を破ったのは義之だった。

「はあ、色々と助けられたし、初音が困ってるならやるさ」

彼方の話を聞いたからこそ、さくらに言えたことがあった。

それは、義之にとつて大事なことだったし、恩を返したいと思っていたのだ。

「わたしも出来ることがあるなら手伝う！」

「杉並だけだったら断っていたけど、初音には借りがあるからね」

「へっ、友達のためならやってやんよ！」

参加の意を示す義之の言葉に続くように、茜や杏、渉の面々も手伝うと述べた。

それを聞いた杉並は、ニヤリと笑みを浮かべながら、他に手伝いをして欲しい人物を述べた。

——あとは、月島嬢と白河嬢だな、と。

「わたし、聞かなかったことにしたいんだけど」

一方、杉並たちのやり取りを聞いてしまった委員長の麻耶は、生徒会に伝えるべきか頭を抱えながら真剣に悩んでいた。

---

文化祭当日。

由夢は、美少女コンテストが行われる講堂にいた。

彼女は、彼方に自身の予知夢の話を打ち明けた時のことを思い出していた。

『不幸な未来は覆せるって証明してみせます』

彼方は、由夢の話を聞いたときに真っ先に言ったことがある。

それは、同日に胡ノ宮神社で知り合った環が言ったのと同じこと。夢で見た誰かが不幸になるという未来について。

未来は変えることが出来るのだと。

由夢の瞳を真っ直ぐに見つめながら伝えてきた。

証明してみせると断言したのだ。

『そして、由夢さんがやってきたことが無駄じゃなかったんだって証明します』

由夢の手帳に書かれた内容を見ながら、彼方は信じて欲しいと言った。

「あなた先輩……」

彼方のことを信じたい。

だからこそ、由夢は指定された場所にいた。

講堂。

文化祭1日目は手芸部主催の美少女コンテストに使用されており、由夢が予知夢でみた場所でもある。

美少女コンテストの看板。

そして、そのコンテストの最中に誰かが下敷きになって倒れているという姿。

時間帯は分からなかったが、そんな場面を彼女は見た。

他の内容とは違い、まだ場所などは分かりやすい。

しかし、わかったからと言って、どうやって止めれば良いのか分からなかった。

美少女コンテストの最中に上の照明が落ちてきて下敷きになるから止める？

それを誰が信じるのだろうか。

照明が落ちるタイミングで助ける？

何時に落ちてくるのか分からないのに、どうやって助けられるのか。

由夢には、どうすれば良いのか分からなかったのだ。

だからこそ、由夢は彼方を信じて待つしかなかった。

「さて、お待たせしましたー」

しかし、無情にも、美少女コンテストは開始されようとしていた。

「これから、手芸部主催の美少——」  
そんな時のこと。

「ちよつと待ったああ！」

普段から聞き慣れた、義兄の声が聞こえてきたのだった。



episode—19 「夢よりもっと幸せになるから  
(後編)」

「まったく、今回は出てこないかと思えばっ」

文句を言いながらも、嬉しそうに、そして獲物を見付けたと言わんばかりにニヤリと笑う高坂 まゆき。

そんな彼女の前には、彼女たち率いる生徒会の天敵とも呼べる存在が姿を現していた。

「フハハ、誰も文化祭は動かないとは言っていないのだがな！」

特に示し合わせた訳ではない。

しかし、非公式新聞部が動き出すのはクリパや卒パがメインであり、今まで文化祭はあまり騒動を起こしていなかったのだ。

だからこそ、杉並への監視は最低限に押し留めていたのだが、そんな時ばかりに動き出していたのだ。

「弛んでいるのではないか？」

「ハッ、そうじゃなきゃ、張り合いがないっての！」

ほら、行くよ、と。

まゆきが生徒会と風紀委員に指示を出しながら追い掛ける。

天性の勘か嗅覚でもあるのか、的確に杉並を追い詰めようとするまゆきに、杉並は甘いと言いたげに不敵に笑う。

——ふむ、これで生徒会や風紀委員はこちらに注目するだろうな。

逃走する為のルートを考えながらも、別の場所にいる非公式新聞部の部員を浮かべながらつぶやく。

「さて、貸し一っだな、同志初音よ」

——好きにやるがいい

episode—19 「夢よりもっと幸せになるから（後編）」

「これから、手芸部主催の美少——」

「ちよつと待ったああ！」

講堂全体にとある声が響き渡る。

その声に司会進行役だけでなく観客も戸惑う中、叫んだ人物が姿を見せる。

いや、叫んだ人達と言うべきだろうか。

観客の前に現れたのは義之や茜、杏の面々であった。

「割り込みさせてもらおうよ」

「わたしたちは、非公式新聞部ぶらすαです！」

「この講堂は、われわれ、非公式新聞部ぶらすαが占拠する！」

その言葉に、観客である生徒一同は、クリパや卒パで騒ぎを起こす非公式新聞部の仕業であることを理解した。

普段ならばこういう時に来る生徒会はまだ誰も姿を見せない。珍しく高笑いをしながら囿を務める存在が原因である。

——さて、第一段階は成功だな

周りの観客の視線を集める義之は、ひとまずは上手く興味を引くことが出来て安堵する。

こういう騒動に巻き込まれるのに慣れていない新入生以外は、驚きつつも楽しみにこちらを見ている。

基本的に、騒動に慣れている生徒達なので、面白ければ無理に止めようとしなのが大半だ。

だからこそ、美少女コンテスト以上に楽しませる必要がある。

その為には。

「われわれは、美少女コンテスト以上に、とあるサプライズを用意した！」

「ふふーん、楽しまなきゃ損だからね！」

「それじゃあ……後ろを見なさい」

杏が指を観客の後ろに指し示しながら言う。

観客がその指に釣られて後ろに振り返る。

「あとは頼んだぞ」

すると、そこには――

「ななか、月島……割りと一発本番って感じだけど大丈夫か？」

「あはは、わたしは、ちよつと不安かも」

観客の視線に緊張しながら小恋が弱音を述べる。

文化祭では出る予定がなく、クリパに向けて練習していた為、まだ練習は完全とは言えなかったのだ。

しかし。

「でも、頼まれちゃったしね」

仕方ないかなと言いながら、ななかは彼方をお願いされた時のことを思い出す。

『すみません、助けたい人が居るんです』

自分が変わることが出来た切っ掛け。

その人からお願いされたのだ。

ななかはことりに会わせてくれた彼に感謝していた。

だからこそ、彼が困っていたら今度は助けてあげたいと思っていた。

その機会がすぐに巡ってきたのだと、ななかは思った。

『美少女コンテストが開催されるっていう未来を変えたいんです』  
何故その様なお願いをされるのか分からなかった。  
しかし、困っていた人を助ける為なのだと言ったのだ。  
きつと、自分のときと同じ様に。

『割り込んでください、そして魅了してください、あなたの歌で』  
軽音部の音楽で。

ななかの歌で。

周りの視線を、注目を集めてほしいと。

「あとで怒られるけど、仕方ないかな」

皆で怒られようと、彼方に皆で笑いながら言った。

悪いことなのかもしれないけれど、嫌な気分ではなかった。

「私たち、非公式新聞部プラスαが占拠して独占ライブをしちゃうから！」

「いくぜっ！」

今は、大事な友達たちと一緒にやれることをやろうと、ななかは思う。

「だから——」

だからこそ——

「わたしの歌をきけえーっ！」

どンドン変わっていく展開に、由夢は呆然としていた。

「え、なんで、兄さん達が」

「みなさんに手伝ってもらったんです」

呆然とつぶやいた言葉に返答があり、驚いて後ろを見ると、そこには彼方の姿があった。

混乱する由夢を見ながら、彼方は話を続ける。

「由夢さんの見た夢では、講堂の美少女コンテスト中に事故が起きたんですよね」

由夢に借りた手帳にメモされた内容。

美少女コンテストの看板。

そして、衣装をきた女生徒たち。

ステージの上の生徒が下敷きになっている姿。

その周りで騒いでいる観客。

「講堂で美少女コンテストをしているのは、文化祭の1日目のこの時間だけです」

「ただ、時間が長いので、どのタイミングか分かりませんでした」

それぞれの人達が連続で審査等を行う為、2時間もある。

由夢がメモした中には流石にどのグループのタイミングで倒れるかが分からなかった。

特定のグループの時間帯だけを監視する、ということが出来ない。

だからこそ。

「美少女コンテスト自体をなくす」

その為に占拠した。

ただ、それだけだと周りからすぐに止めに入ってくる。

しかし、そのコンテスト以上に盛り上がれば、周りは面白がってそのまま行こうだろう。

だからこそ。

「美少女コンテスト以上に、盛り上がるものを用意する必要があるかもしれません」

それをお願いしたのが、渉や小恋、そしてななか。

学園のアイドルのライブは美少女を観に来た観客たちにも満足してもらえるものであった。

納得するも、由夢には1つ不安要素があった。

「でも、美少女コンテストがなくても、照明が落ちる危険があるんじゃない

……」

「その危険はどうしても残ります、なのでお願いしました」

芳野学園長に、と。

彼方は、お願いした人物について述べた。

「え、さくらさんに、ですか?」

「はい、今回の講堂の占拠についても言う必要がありましたから」

義之たちに手伝ってもらったが、主犯はそもそも彼方自身である。

だから、他のメンバーの罪は軽くして欲しいと、さくらに言いに行っただけである。

『もう、どんな理由があってもそんなことしちやダメなんだからね!』

今回手伝った皆は反省文とボランティア活動をすること、とさくらに言われたのであった。

本来であれば、もっと問題になったかもしれない。さくらの温情に感謝する彼方であった。

更に、由夢のことは濁しつつ、さくらに1つお願いもしたのだ。

『講堂の照明が落ちるかもしれないから点検してほしい？ 理由とかは、言えないの？』

『ほんとうに申し訳ないのですが、確証がある訳ではなく……』

自分で言っていて呆れてしまう彼方。

普通に考えれば、そんなこと信じて貰えず、一蹴りされて終わりになるだろう。

しかし、それでもさくらは了承してくれたのだ。

『むー、万が一でも生徒の皆が危ない目に遭うのは嫌だからね……占拠してライブするときは、講堂の前じゃなくて、入り口付近でやるんだよね？』

『は、はい。照明が落ちてくる危険も考えて、ライブは後ろでやろうとしています』

『じゃあ、その間にすぐに業者に確かめて貰えるように依頼しとくね』  
何から何までありがとうございます、と彼方はさくらに感謝の意を述べた。

生徒を第一に考える学園長だからこそ、いや、さくらだからこそ叶ったのである。

今度あらためてお礼を言いに行こうと、彼方は誓った。

こうして、色んな人の助けを借りることで、変えることが出来たのだ。

「由夢さんが見た中で一番止められそうなものを選びました」

他の内容はもっと時間や日付が分かりづらく、止めるのは難しいかもしれない。



「だけど、一人なら難しくても、みんなで力を合わせれば止められると思います」

そして何より、まずは証明したかったのだ。

「あなたが見る夢が、必ず現実になるわけじゃないってことを」  
不安そうに話してきた由夢に、安心して欲しいのだと、彼方は伝え  
たかったのだ。

「予知夢で視た未来は、覆すことができるんです」  
「そう、みたいです」

彼方の言葉に、由夢は頷いた。  
証明されてしまった。自分の目の前で。

必ず視た未来が起きてしまう訳ではないのだと。  
ここまでしてくれて、信じない筈がなかった。

「なんで、ここまでしてくれるんですか？」

だからこそ、由夢は聞きたかった。

どうしてここまでしてくれるのかと。

嬉しかった。

嬉しくない筈がないのだ。

でも。

例え予知夢を信じてくれたとしても、反省文やボランティア活動な  
どの大事に発展するまでの覚悟で臨んでくれたのが、分からなかつ  
た。

「……何でしょうね」

自分のことなのに、まるで己に問うかのように、彼方はつぶやいた。  
彼方自身が明確にこれと言えたものがなかったのだ。

だが、それでも言葉にしようとしていた。

「自分が出来ることを、やりたかったんだと思います」  
こんな自分でも。

こんな自分でも、出来ることはあるんじゃないかと。  
そして、話しながら思い付いた言葉は、やはり。

「後悔、したくなかったんです」

彼方は、由夢に思い浮かんだ言葉をそのまま告げた。

——後悔、かあ

由夢は彼方が告げた言葉を反芻する。

後悔。

最初に彼方と会ったときから、彼が話していたキーワードである。

由夢は、彼方が話していた内容について思い出す。

『その、さ……後悔しないようになって、実際、なにをすれば良いんだ？』  
それは、由夢や義之たちが彼方と初対面したときのこと。  
渉は、彼方に後悔しない為に何をすれば良いのか聞いたのだ。

『別に、そんなに大きなことをする必要はないんです。例えばですが、道中で困っている人に声を掛けたり、バスでお年寄りに席を譲るなどからでも良いと思います』

『え、そんなことから良いのか？』

『ええ、そうです。誰かがやるからと、やらなかった小さいことが、きつと死ぬ間際に、シコリに残ったりするんだと思います』

そんな他愛のないことが後悔に繋がるんです、と。

彼方が悲し気な表情で述べていた。

まるで、そういう経験を実際にしたかのように。

——踏み込んで、良いのかな……

彼方を傷付けることにならないか、不安になった。  
でも。

それでも、由夢はもつと彼方のことが知りたかった。だから、一步踏み込むことを決意した。

「彼方先輩は……後悔したこと、あるんですか？」

由夢の質問に、一瞬口を噤んでしまう。

しかし、一拍間があつた後に彼方は答えた。

「……ありますよ」

彼方が思い出すのは、今ではなく昔のこと。

前世と呼べばいいのだろうか。

彼が、初音 彼方として生きる前の時のことである。

彼の人生は漫画やドラマの様に、人とは違う人生ではなく、普通の人生だった。

彼は、普通に小学生、中学生、高校生、大学生と進んでいき、社会人へとなった。

「自分に自信を持てなかったからか、今となっては分かりません」

原因が何なのか分からない。

いや、原因など無かつたのかもしれない。

「普通の親切が出来なくなっていました」

たとえば。

電車の中で年配の方が大変そうに立っていて。

座っている自分が譲れば良かったのに、何故か声を掛けることができなかつた。

音楽を聴いて、気付いてない振りをして。

寝たふりをして。

「誰かがやる、やってくれる……そうやって、自分に言い訳して、動くことが出来ませんでした」

周りと違うことをするのに羞恥心があつたのか。

それとも、勇気がなかったのか。

「そんな、当たり前のことさえ、出来なくなっていました」

子供の頃に当たり前前のようにやっていたことが出来なくなっていた。やろうとすると、足が重くなるように感じた。

そんな自分が死んで。

何故か『D・C』というゲームの世界に転生して。

前世を振り返ったとき、分かったのだ。

「驚くほどに、何もなかったんです」

振り返れる程の大事な想い出など、ほとんどなくて。

思い出すのは、自分が出来た筈なのにやらなかった、小さい後悔の数々だけ。

「自分は誰かのために本気で何かをやってあげられなかったことに気がきました」

どんな時も、その場だけを乗り切ろうとしていた。

本気で、誰かのために行動をしてなかったのだ。

「そんなやつ、いなくても良いですよね」

誰かの為に本気で行動できない。

そして、誰にも必要とされない

その事実は、死んだこと以上に辛かった。

「だから——」

だからこそ、今度こそは。

「こんな自分でも誰かの為に何かをやれるなら、やってあげたいと思えました」

——D・C（ダ・カーポ）

学生時代にやっていたゲーム。  
詳細には覚えられていないのかもしれない。  
それでも、ゲーム自体を覚えていたのは、きっと羨ましかったから  
だ。

あの優しい世界観が。

みんながみんな、純粹であり、誰かの為に行動していたことが。  
何で自分がここにいいのか、まだ分からない。

でも、この優しい世界ならば、自分でも他の人達みたいに何か出来る  
のではないかと思った。

「自己満足でしか、ないのかもしれないね」

自分なりに出来ることを本気でやったつもりだ。

しかし、それはちゃんと誰かの為になったのだろうか。  
ちゃんと役に立ててるのだろうか。

そんな不安は、なくなることにはなかった。

「そんなことないですっ！」

近くで聞こえる大声により、思考の渦から意識を上げる。

そこには、肩が触れるのではないかという位に近い距離に由夢の姿  
があった。

瞼に溢れんばかりの涙をためて見つめていたのだ。

「なんでっ…何で、そんなこと言うんですかっ！」

由夢は涙が溢れそうになるのを必死に堪えながらも、彼方に自分の  
気持ちを伝える。

「まだ、彼方先輩の話を全部理解できてないです……わかつてあげられてないです」

彼方はきつと、自分と同じように秘密を打ち明けてくれたのだから。

その話を完全に理解してあげられてないのかもしれない。

「でも、それでも言わせてくださいっ！」

それでも、自分の気持ちを伝えるべきだということは分かった。

「杏先輩は、感謝してたじゃないですかっ！」

杏が自分の悩みを、能力を打ち明けたときのこと。

彼方と話したことにより大切なものを見つけられたと、嬉しそうに泣いていたのだ。

そして、ありがとうと感謝してくれた言葉は、由夢自身も凄く嬉しかった。

「他の人たちもいっぱい感謝してたじゃないですかっ！」

杏以外にも魔法の桜の記事をみて、同じく願った人たちが打ち明けに来てくれた。

その時も、彼方が真摯に対応したからこそ、皆が感謝したのだ。

「そもそも、何も感じてなければ、兄さん達がこんなこと一緒にしてくれる筈がないじゃないですか！」

杉並、義之、杏、茜、渉、小恋、ななか。

後で何かしらのペナルティを受けると分かっている、彼方の為に行動している。

それは、彼方の今までの行動があったからこそだ。

そして何よりも、由夢は言いたかった。

「私がどれだけ助けられたと思ってるんですかっ！」

由夢は生まれながらにして、普通の夢を見ることはなかった。いつも見るのは、誰かに不幸が訪れる場面。忘れないように必死に見た内容をメモして。それでも助けられなくて。

嫌だった。

辛かった。

そして、いつしか寝るのが怖くなった。

そんなときに、彼方との夢を見たのだ。

誰かが不幸になる夢じゃなくて。

そこには、嬉しそうな自分がいて。

幸せそうな自分をみて。

そのおかげで、寝るのが怖くなくなった。

全部、

ぜんぶ。

「あなたに、救われたんですよっ！」

もう我慢することが出来ず、由夢の瞳からは涙がこぼれ落ちていた。

「分かってください！ 私はあなたのおかげで、救われたんです！  
前も、今も！」

最初の涙がこぼれてしまうと、後はもうとめどがなかった。

ただ、由夢はもう気にする余裕もなかった。

それでも、これは言いたくて。

「あなたのおかげで、わたしは、幸せになったんです」  
どうか。

どうか少しでも、気持ちが伝わって欲しいと思った。

「そっか、そうなんだ」

泣きながらも必死に伝えてくれた由夢をみて。

「私は、誰かの為に、行動できたと思いますか？」

「はい」

彼方はちゃんと感じる事が出来たのだ。

「わたしは、誰かの役に立てましたか？」

「勿論です」

由夢や他の人達の感謝を、想いを。

「ぼくは、誰かに必要とされる人になれましたか？」

「はい、私は——わたしは、彼方さんが必要です」

「そっか……」

そして、彼方はようやく実感したのだ。

「そっか……そっか……」

自分が前世の頃より変わることが出来たのだと。

そう、思えることが出来て。

嬉しくて。

彼方は、久方ぶりに泣いたのだった。

その姿を同じように泣きながらも、由夢は嬉しそうに笑ったのだった。

あの後について。

ななか達のバンドは大歓声の中、無事に幕を閉じた。



美少女コンテストは結局中止となったが、観客としては美少女であるななかや小恋、そして占拠した杏や茜の姿を見て大半が満足していたのだった。

その間に業者が照明を確認していたのだが、少しネジが緩んでいたのを発見し、それを修理することで危険を回避することが出来た。

反省文やボランティア活動など、終わってからやることがあると分かりつつも、各々のメンバーは後悔などなかった。

由夢も、自分の見る夢が回避出来ることを知り、更に彼方のことを知り、後悔はなかった。

なかったのだが。

一つだけ失敗したと思ったことが、由夢にはあった。

「いや、なんというか、見えて恥ずかしかったわ」

「う、うっ、うううううう」

「分かった、失言だった……だから、その手にある置物を机に置くんだ」

顔を真っ赤にして唸りながら睨む由夢に、義之は必死で宥めようとしていた。

——ばしょ、場所を忘れてたああ……

彼方と由夢が話していたのは、講堂だった。

義之たちがいる、講堂だったのだ。

ななか達のバンドが演奏してたこともあり、基本的に観客の視線は向いていた。

しかし、由夢の大声に反応した周りの人達や、彼方を探していた義之や杏、茜は目撃していたのだ。

由夢は、恥ずかし過ぎて、死にそうだった。

「あ、あー……でもまあ、由夢の泣いた姿は桜の樹で見る以来だった

な」

「…… 兄さん、投げて欲しいなら、言つて下さいね？」

「悪かった、俺が悪かったからやめてくれ」

頬を赤くしたまま、ニッコリと笑いながらこちらを見る由夢に、義之は本気で謝っていた。

笑顔は威嚇なのだということを、義之は初めて経験するのだった。

反応した様子を見せる義之に、由夢はとりあえず置物を机に戻し、落ち着く様子を見せる。

そして、一つ話していて気になったことがあつた為、義之に質問した。

「そういうえば、さつき私が桜の樹で泣いてたつて言つてましたけど……いつのことですか？」

「んー、確か二年くらい前だったか」

由夢自身が泣いた記憶が思い出せなかったが、義之は結構印象的だったらしく、すぐに返事が来た。

「ありましたっけ？」

「あつたよ、朝から急にいなくなって、音姉たちと心配して探し回つたんだからな……最後はあの枯れない桜で見つけてさ」

「枯れない桜で？ ……ああ」

由夢はようやく思い出した。

二年前のこと。

『……いやだよお、もう、みたくないよつ……』

桜の樹にもたれ、うづくまる。

由夢は、助けられない夢を見たくなかった。

見るのが辛くて、逃げていた。

寝ることが怖く、部屋にさえも居たくなかつたのだ。

そして、歩き歩いた先に辿り着いたのが枯れない桜―魔法の桜だった。

特に何か意味があつた訳ではなかつた。

『こわいよっ…つらいよ…』

単に、弱音を吐いていただけだった。

『見るなら、違うのをみたい…』

『幸せな未来をみたいよっ！』

不幸じゃなくて。

幸せな夢を、未来を見たい。

そう、願っていた。

「そっか、そうだったんだ」

由夢は、思い出したのだ。

何で急に彼方との夢を、未来を見るようになったのか。

――わたしも、叶えてもらったんだね

杏や彼方と同じく。

あのとき、桜の樹で泣いて願ったことが、叶ったのだと。

――ありがとう、魔法の桜

由夢が見た夢が必ず現実になるわけではない。

彼方が証明してくれたのだ。

それは、不幸な未来も、幸せな未来も同じ話。  
でも、由夢は、そんな可能性を見せてくれた魔法の桜に感謝する。  
そして心の中で誓う。

「わたし、頑張るね」

「ん、何か言ったか？」

「何でもないっ！ あー、もう、『かったるい』なあ」

今までの様に逃げとして使うのは止める。

これからは祖父のように。

そして、頑張る誓いとして。

！  
——わたし、見せてもらった夢よりもっと幸せになってみせるから

episode—20 「そんな日常」

「弟くん、ちょっとそこに座りなさい」

正座だからね、と。

頬を膨らませながら音姫は義之に対して言うのであった。

芳野家の居間。

文化祭が終了し、生徒会の仕事を片付けて帰宅した音姫は帰ってくるなり、義之に目の前に来る様に命じた。

義之は素直に指示に従う。

——そりゃあ、そうだよな。

如何にも、これから説教しますよ、と言わんばかりの雰囲気を漂わせる音姫。

その理由について、義之は悟っていた。

「お姉ちゃんが何を言いたいのか、わかるよね？」

「ああ、もちろん」

原因は勿論、本日の文化祭のこと。

講堂の占拠。

これが生徒会の音姫に伝わらない訳がなく、怒らない訳がないのだ。

そのことについて義之は覚悟をしていた。  
だからこそ。

「……………ごめん、音姫」

義之は正座の姿勢のまま、頭を下げ、誠心誠意に謝罪した。

例え美少女コンテストを見に来た観客を楽しませることが出来ても、教師や音姫たち生徒会に迷惑が掛かるのは分かっていた。

「悪いことだったのは分かってる……………だけど」

でも。  
それでも。

「後悔は、してないんだ」

誰の為かは分からない。

しかし、困っている人を助ける為に彼方は行動したのだと、義之は理解していた。

『恥ずかしいかもしれませんが、両親や友達に普段は言えない感謝をしたり、想いを告げたりするのも大事なことだと思います』

彼方が最初に会った時に話したこと。

その話を聞いて、義之はさくらに感謝を、そして母と呼ぶことを決意した。

彼方の話を聞かなくても、いつかは同じことをさくらに伝えていたかもしれない。

しかし、それは今じゃなくて、大分あとになってしまっていたらうと義之は思った。

義之は彼方に感謝し、彼に借りがあると思っっている。

それこそ、彼方が感じている以上に。

だからこそ、今回のことで少しでも力になれたのならば、そこには後悔がある筈がなかった。

「待って、お姉ちゃんっ！」

義之が頭を下げる中、途中で横に割り込んでくる存在があった。

それは、由夢であった。  
なぜ由夢が、と義之が疑問に思う中、由夢が口を開いた。

「今回のこと……わたしの為に、みんながやってくれたの」  
彼方が由夢の予知夢を覆せることを証明する為に、義之を含む色々な人達に助けを求めたのだ。

実際に証明してくれて、由夢は嬉しさと喜びでいっぱいだった。  
しかし、今回のことの発端は自身である。

彼方は自分が主犯だと言うだろうが、まず叱られるべきは自分である筈だと思っていた。

「ごめんなさい、お姉ちゃん」  
だからこそ、由夢は義之の隣に正座し、同じように頭を下げた。

——彼方が助けたい人は、由夢だったのか……  
それを聞き、驚きを感じつつも、納得した様子を見せる義之。  
講堂を占拠し、なかなか達がライブする最中。

義之が彼方を探して目撃した光景は、彼方に涙を流しながら何かを叫ぶ姿。

そして、その後に彼方と由夢の二人で泣きながら嬉しそうに笑う姿で光景であった。

由夢が何に困っていたのか、助けを求めていたのかは分からない。  
彼女の兄として、気付いてあげられなかったのは反省すべきことだろう。

しかし、あの講堂での幸せそうに笑う様子の由夢を見れば、きつと助けにはなれたのだろうと感じた。

「……はあ」

辺りが静寂に包まれる居間。

その沈黙を破ったのは、音姫だった。

「由夢ちゃんも、弟くんも、顔を上げて」

音姫に言われ、顔を上げる義之と由夢。

二人が顔を上げた先には、まだ少し怒った様子を見せる音姫の姿。

「講堂の占拠については、罰として反省文とボランティア活動をする  
ことつて、さくらさんから聞いてるよ」

帰宅する前に、さくらから罰として反省文とボランティア活動をさ  
せるという話は既に聞いている。

それに彼女から、何か事情があつたみたいだから怒り過ぎないであ  
げてね、と言われていたのだ。

「そのことじゃなくてね、お姉ちゃんが怒っているのはね」

だからこそ、音姫は占拠したこと自体をガミガミと叱るつもりはな  
かった。

彼女が怒っているのは――

「お姉ちゃんに、相談しなかったことだよ」

自身に一言も伝えなかったことであつた。

確かに、占拠しますと事前に言われ、生徒会長として良いですよと  
は言えなかつただろう。

しかし。

「本当に困ってるんなら、何かしら力になることは出来たはずだよ」

音姫は、義之や由夢が何も理由もなく、今回の講堂を占拠したとは  
思っていない。

何かしら事情があつたのだろうと思う。

これでも生徒会長として他の生徒よりは権限がある。

相談してもらえれば、少しは力になることが出来た筈だと音姫は考  
えていた。

それに、二人に相談してもらえなかつたのは姉として寂しくも思  
う。



「だから、次から困ったことがあったら、お姉ちゃんにちゃんと相談すること！」

返事は、と述べる音姫に、義之と由夢は承諾の意を示した。

その二人の言葉に、よろしいと満足気に頷くのであった。

これで一旦話は終了、かと思われたが。

「あ、でも！ 非公式新聞部に入るなんて、お姉ちゃん許さないからね！」

もう暫く、夕食前の姉弟たちの話し合いは続くのであった。

episode—20 「そんな日常」

「納得いかねー」

公園に落ちていた空き缶を拾いながら、渉はひとり不満の表情を浮かべてつぶやいていた。

日曜日の桜ヶ丘公園。

渉たちは先日の文化祭での講堂占拠の罰として、町内のゴミ拾いの参加をさくらから命じられていた。

現在は何人かで分かれながら公園のゴミ拾いを行っている。

その最中に、つぶやいていた渉であったが、それが聞こえたのか、杏が渉に言葉を返した。

「なに？　罰を受けること自体の覚悟はあった筈よ？」

「いや、そこは良いんだけどよ」

今更不満に思うなら罵倒しようと思っていた杏であったが、渉が言っていたのは別のことであった。

「あ のとき、俺たちが何て名乗ったか覚えてるか？」

「当たり前でしょ？」 『非公式新聞部ぶらすα』よ」

渉の質問に、能力で記憶を忘れない杏は即座に返答した。

非公式新聞部ぶらすα。

それは、義之たちが講堂を占拠するにあたり、観客に名乗ったものである。

そもそも非公式新聞部ではないし、今後もなる予定がない為、名乗るつもりはなかった。

しかし、占拠する際に非公式新聞部の名前を活用した方が良いと言ったのは杏だ。

『非公式新聞部と名乗った方が話がスムーズに行くはずよ』

杏は義之たちにメリットを述べたのである。

占拠など普通の学園では耳にしたり、実際に行われることなど無いであろう。

しかし、あり得てしまうのが、この風見学園だ。

非公式新聞部は、クリパや卒パなどで場所の占拠を行うのは割りと珍しくない光景である。

今年行われた卒パも、杉並率いる非公式新聞部がグラウンドを占拠

し、屋台をすべてリング餡の屋台に変えるという暴挙を働いていた。その印象が強いからこそ、非公式新聞部と名乗って占拠した方が顧客もすぐに事態を把握し、スムーズに話を進めることが出来るのである。

その話を伝えた杏に納得した義之たちであるが、杉並と同じと思われるのに抵抗があった為、苦肉の策として『ぷらすα』と付けたのだ。

「それがどうかしたの？」

「なんで、なんで……」

文化祭が終了後、今回の講堂占拠はその場にいなかった生徒たちにも拡がった。

それも仕方ない話である。

何だかんだで、義之や渉、雪月花、ななかの面々は他の生徒たちからは知られている存在だ。

そんな面々が占拠すれば、それは話のタネにならない筈がない。

しかし、渉にとって不満なのは。

「なんで俺が非公式新聞部で、杏たちがぷらすαって扱いになってるんだよっ！」

最終的に、あの講堂占拠の件で、渉が非公式新聞部の部員として認知されており、それ以外の人はその手伝いをしてただけ、となっていた。

「あら、不満？」

「当たり前だろっ！ 高坂先輩には杉並の同類としてロックオンされるし、朝倉先輩には叱られるしで、完全に非公式新聞部扱いになっただんだぞ！」

杉並も噂を否定せず、バレてしまったら仕方ないと、まゆきの前で言うもんだから完全に勘違いされている。

義之も当初は勘違いされていたが、音姫に誤解を必死に解いていた。

ちやつかりしている義之であった。

「まあ、日頃の行いね」

「うがあー……もう、会長と副会長の好感度はだだ下がりだあ」

「あ、そこは元から上がらないから安心しなさい」

しつかりトドメを刺す杏と撃沈する渉。

漫才みたいなやり取りは変わらない二人であった。

---

「由夢さんまで参加しなくても大丈夫でしたのに……」

「なに言ってるんですか、私の為にしてくださったんですから。

やって当然ですよ」

渉と杏が漫才を繰り広げる一方。

彼方と由夢も同じくボランティア活動としてゴミ拾いを行っていた。

彼方が言った通り、当初は反省文とボランティア活動をするメンバーに由夢は入っていなかった。

それは実際に由夢が講堂占拠は行っていないので当然であったが、彼女自身が名乗り上げたのである。

「それに——」

「それに?」

「いえっ、なんでもないです!」

少しでも一緒に居たかったから。

それを口にする勇氣は、まだ恥ずかしくて由夢にはハードルが高かった。

——ちよつとは、近づけたのかな？

しかし、前よりは素直に、そして距離感も近づけられたのではないかと由夢は思った。

あの講堂での彼方とのやり取り。

ライブ中だったので内容をしっかり聞かれてはなかった筈だが、周りに見られていた事実は今でも思い出すだけで恥ずかしくなる。

でも、後悔はなかったのだ。

「ん、どうかしましたか、由夢さん？」

由夢の視線を感じたのか、彼女に笑みを浮かべながら質問する彼方。

今までも誰に対しても笑みを浮かべていた彼方であったが、以前よりも少し表情が柔らかくなった気が由夢にはした。

それがあの時、自分が彼方に伝えたことが切っ掛けであるかは分からない。

だけど、そうだったら嬉しいな、と彼女は思った。

「何でもありません、『彼方さん』」

もう少し近付きたくて。

呼び方をちよつと変えたのを、気付いてくれているのだろうか。なかなか素直になるのは難しいけれど。

「もつと急がないと、日が暮れちゃいますよっ！」

由夢は平然を装い、さりげなく彼方の手を握り、引っ張って急がせる。

——少しずつ、頑張っていこう

「ほらっ、行きましよ、彼方さん！」

初音島物語【前編】  
— F i n —

## 初音島物語【後編】

### episode—21 「物語のはじまり」

「彼方さん、もうすぐですね」

そういえば、と。

思い出したかのように、由夢は彼方に告げた。

放課後の第二執筆室。

由夢と彼方はいつもの通り、魔法の桜関連の内容について調べていた。

しかし、長い時間ずっと本を読んでいたこともあり、一息入れている最中に由夢は話題として振ったのだ。

彼女の言葉に、一瞬彼方は疑問に思ったが、心当たりがあつた為に確認の意味も含めて答える。

「クリスマスパーティー、ですよね？」

「はい、そうです！」

彼方の言葉に頷く由夢。

クリスマスパーティー。

通称、クリパ。

風見学園にて12月23日から25日までの三日間に行われるイベントである。

内容自体は文化祭と同じであり、各部活やクラスで催し物を行うのだ。

それを聞き、彼方は改めて、もうその時期かと驚いた。

「もう、そんな時期なんですよ」

「あつという間でしたよね……その、文化祭から」

文化祭、という部分で照れた様子で話す由夢に彼方も恥ずかしくなってしまう、何となしに頬をかく。

文化祭。

彼方と由夢の両方にとって印象深いイベントであった。

由夢は彼方に予知夢の話をし、彼方は由夢に自分の過去の後悔を話した。

涙を流した姿を周りに見られた、とても恥ずかしい出来事。

しかし、それ以上に二人にとって大切な思い出であった。

こ、こほん、と。

何だかこそばゆい雰囲気になった為、咳払いをして話題を切り替える由夢。

「そ、そういえば彼方さんのクラスは何の催しを行うんですか？」

「私のクラスはお化け屋敷ですね」

定番ですよねと、彼方は笑いながら由夢の質問に答えた。

同じように、彼方も由夢のクラスの催し物を聞いた。

「由夢さんのクラスは何をするんですか？」

「わたしのところは、焼きおにぎり屋さんです」

焼きおにぎり屋。

普通の学園祭では珍しい部類かもしれないが、風見学園では普通の部類に入る催し物である。

「良いですね、私も食べに行きますね」

「は、はいっ！」

彼方の言葉に、由夢は是非来てくださいと嬉しそうに話す。

料理は苦手であったが、頑張って練習しようと内心で決意する彼女であった。

「そうだ、兄さん達のクラスは何をするんでしょう？」

「そういうえば、まだ出し物は決まっていらないと聞いたような気がします」

彼方の答えに呆れる様子を見せる由夢。



既に12月が入ってしまったのに大丈夫だろうかと心配する。そして、心配な部分は其処だけではない。

「あの……杉並先輩は、クリパに何か企んでますよね？」

「何もしないと思いますか？」

「思いません、と。」

彼方の問い掛けに即効で答える由夢。

クリパや卒パなどのイベントで何もしない筈がないと逆の意味で信頼されていた。

「何を計画しているか私は一応知っていますが、聞きますか？」

仮ではあるが非公式新聞部である由夢には知る資格があると思つた為、彼方は彼女に問い掛ける。

一瞬考える由夢であったが、私は聞かないでおきますと答えた。

「わたしが聞いちゃったら、お姉ちゃん達に話しちやいそうですから」文化祭終了後。

芳乃宅にて講堂占拠について音姫に謝罪した後、由夢が非公式新聞部の仮部員であることがバレてしまったのだ。

義之のポロッと漏らしてしまったことが原因である。

事情など色々話したことにより、音姫には何とか許しを得ることが出来た。

しかし。

『妹ちゃん、ちょっと来てくれるかにやーん？』

音姫を通して、副会長のまゆきにも知られてしまったのだ。

まゆきに生徒会室に連行された後のことは思い出したくない由夢であった。

とりあえず、由夢は計画の内容をまゆきに白状してしまいそうなので無理だと感じた。

「それなら言わないでおきますね」  
彼方は苦笑しながら由夢に言った。

「それにしても」

由夢とクリパの話をしながら、彼方はあらためて思う。  
もうそんな時期なのかと。  
あつという間に感じたのだ。

「今年も終わってしまうのですね」

それは、文化祭からという話ではなく。  
彼方が魔法の桜に願ってから。  
彼は、本当にあつという間に感じたのだ。  
そして――

「もうすぐ、始まるんですね」

特に誰かに聞かせるわけではなく。  
彼方は無意識につぶやいていた。  
そんなに大きい声ではなかった。  
しかし、騒音もないこの部屋では小さい声でも聞こえてしまうのだ。

「ん、何が始まるんですか？」

由夢は彼方のつぶやきの内容について質問した。  
彼方は彼女が聞こえていたことに一瞬驚いたが、笑みを浮かべながら答えた。

――物語が、でしょうか。

質問に答えた彼方の表情は笑みが浮かんでいる筈なのに、由夢は何故か胸が締め付けられる様に感じた。  
分からない。  
分からないのだけど。

由夢は、何かが終わりを告げるように感じたのであった。

episode—21 「物語のはじまり」

「ふう……………」

一旦は大丈夫かな、と。

芳乃 さくらは枯れない桜から手を離し、安堵の息を吐く。

深夜。

周りが既に就寝の中、さくらは枯れない桜の前にいた。

それは、枯れない桜の魔法の欠陥を補うため。

「んー、疲れたあ」

ずっと同じ姿勢で居たことで身体が固まっているのを感じ、ほぐす様に軽く肩を回す。

そして、毎日見ている枯れない桜を見上げた。

「頑張らないと、ね」

さくらは、小さい声でつぶやく。

枯れない桜に、いや、自分自身にだろうか。

彼女は感じていたのだ。

枯れない桜の願いが少しずつ、ほんの少しずつだが欠陥が広がっていることを。

以前から枯れない桜の魔法には不具合があった。

それは、純粋な願い以外も叶えようとしてしまうこと。

初めは少しの時間だけ調整すれば何とかだった。

しかし、欠陥が広がっていき、さくらが枯れない桜に同調し、不具合を修正する時間はどんどん増えていっていたのだ。

「うにゃー、ちょっと眠いかも」

こうやって、深夜にやらなければいけない程に。

それでも彼女は止めたいなど欠片も思わなかった。

まったく、思わなかったのである。

それは――

『今日は一緒に夕飯食べましょうね、母さん』

さくらの頭に浮かぶのは、大切な息子の言葉、想い。

それを思い出すだけで、元気が湧いてくるように感じた。

大事な、本当に大事な息子である義之。

彼の為にやることが苦である筈がなかった。

「義之くんは、ほんとに優しい自慢の子」

さくらが魔法の桜に願って生まれた男の子。

彼女と純一の、あり得た未来の可能性。

自分自身で直接産んだ子供ではない。

それでも、彼女にとっては自分の命より大切な存在。

「あの時から、ほんとに親子になれた気がするなあ」

義之が自身のことを母と呼んでくれたとき。

さくらは義之と本当に親子に、家族になれた気がした。

「ほんとに……幸せ者だよ、ぼくは」  
頭に浮かぶのは、母と呼んでくれてからの、義之との日々。

——もうっ、料理中にいきなり抱き着かれたら危ないですよ！

——だって抱き着きたかったんだもーん。

注意しながらも仕方ないなと笑う彼の姿を。

——はい、あーん！

——じ、じぶんで食べれますっつてば。

嬉しさと若干の照れを浮かべる義之の表情を。

——その、いつてきます、母さん。

——うん！ いつてらっしやい、義之くん！

恥ずかしくても母と言ってくれる、息子の優しさを。

今まで生きてきた中で、一番幸せだと断言できる。

そんな、息子との大切な時間。

魔法の欠陥を補う作業量は増えていく一方。

しかし、義之との大切な時間があるからこそ、辛いとは思わなかつた。

それに、彼女が嬉しかったのは、それだけではない。

枯れない桜にさくらが同調したとき。

人々の願いを集めていく中で、願い以外もこの枯れない桜に集まってきたのだ。

——あなたが叶えてくれたおかげで、わたしは大切な宝物に気付けたわ。

それは、願いを叶えた人達からの気持ち。

——あなたのおかげで、大切な友達と妹にもう一度会うことができた。

それは、願いを叶えた人達からの想い。

——あなたがくれた力、これからはその力に頼らずに頑張ってみるね。

それは、願いを叶えた人達からの決意。

——好きな人との未来を見せてくれてありがとう。

それは、願いを叶えた人達からの感謝。

純粋な願いに負けないくらいの、

純粋な気持ちさがくらに伝わってきたのだ。

それに——

『桜さん　ありがとう』

「あはは、なんだか嬉しいな」

自分への感謝ではなく、魔法の桜への感謝なのだろう。

それでも、さくらは自分に対して言ってくれた様な気がして嬉しかった。

「や」と——

義之と朝ごはん一緒に食べる為に頑張ろう、と。

再び魔法の桜へと意識を向けるのであった。

episode—22 「会長と副会長」

episode—22 「会長と副会長」

「まったく、次のクリパが心配だわ」

問題が山積みだわ、と。

高坂まゆきは、今後のことを考えて頭を抱えていた。

昼休みの生徒会室。

まゆきと音姫が各自弁当を持参しており、生徒会室で作業しながら昼食を取っていた。

「んー、確かにクリパは色々やることあるけど」

それは毎年同じじゃない、と音姫は苦笑しながらまゆきに話す。

クリスマスパーティー、通称クリパは卒パと同じくらいに規模としては大きく、学生側が主体となって色々なイベントを行う。

その為、生徒会はクリパ準備の段階からやることが物凄く多い。書類作業然り、見回りや監視然り。

大変ではあるが、去年から音姫やまゆきは生徒会に所属しており、ある程度作業は慣れているので仕事が回らない訳ではない。

だから別にそこまで心配する必要はないのでは、と音姫は考えてい

た。

「ん？ ああ、別に私も普通の作業は心配してないわよ」

「それじゃあ、なんのこと？」

「心配事って言ったら決まってるでしょ」

杉並よ、杉並、とまゆきは言った。

彼女の言葉に、音姫は確かにそうだと納得する。

杉並。

いや、非公式新聞部と言った方が良さだろうか。

非公式新聞部の生徒は、クリパや卒パなどのイベントではいつも何かしら問題を起こすのである。

それを生徒会や風紀委員が止めに入り、非公式新聞部の生徒が逃げ、追い掛ける。

もはや毎年の恒例行事となっている。

非公式新聞部の問題行動も誰かが怪我する様な悪事ではない為、周りの生徒は基本的に面白がって眺めるだけ。

なので、生徒会の生徒達が一丸となって捕まえるしかないのだ。

特に、まゆきは非公式新聞部——杉並を捕まえることに一番力を入れている。

そんな彼女だからこそ特に心配なんだろうな、と音姫は思う。

「それに、文化祭の時はまんまとしてやられたし」

苦々しい表情で、まゆきはつぶやいた。

数ヶ月前の文化祭。

まゆきとしては、あまり思い出したくない。

暗黙の了解、という訳ではない。

しかし、今まで文化祭では非公式新聞部はあまり問題は起こさなかったのだ。

彼らは卒パやクリパの時でなければ本格的に動かないと思っていた。



『フハハ、誰も文化祭は動かないとは言っていないのだがな!』  
その生徒会の思考のスキをつかれる結果となった。  
監視も最低限に留めていた為、初動が遅れてしまったのである。

『弛んでいっているのではないか?』

杉並の言葉がまゆきの頭を過る。

確かに弛んでいたのかもしれない、と思った。

だからこそ、次のクリパは杉並が問題を起こす前に捕まえてやる、と決意したのであった。

——まゆきったら、楽しそうなんだから。

そんなまゆきの姿を見て、音姫は静かに笑う。

音姫は非公式新聞部のことは基本的にまゆきに任せている。その為、まゆき程に捕まえることに執着していない。

ただ、杉並と追い掛けっこしてる時が一番まゆきは生き活きとして  
いる為、頑張つてほしいと思った。

「こ、こほん。 言っておくけど、今回は杉並だけじゃないんだから  
ね」

微笑ましい表情で見ってくる音姫に恥ずかしく思いながらも、まゆき  
は他人事ではないんだぞと話す。

以前までは杉並に監視を主に付ければ良かった。

しかし、今回からは他にも注意しなければいけないのだ。

それは、文化祭で講堂を占拠したメンバー。

義之、渉、杏、茜、小恋、ななかの6名である。

「弟くんや板橋、雪村、花咲は面白がつてやりそうだけど、まさか他の  
メンバーは想像もしてなかったわ」

「ま、まあ、文化祭のことはしっかり罰も受けてもらったしね」

溜め息を吐くまゆきに、音姫は宥める様にながら話す。

まゆき自身も怒ったりしている訳ではないのだ。

文化祭のとき、観客だけでなく、美少女コンテストの主催者も講堂占拠されて文句は言っていないかった。

それに、講堂の照明を点検した際、ネジが緩んでいたという報告も受けている。

もし美少女コンテストが行われていたら、照明が落ちて怪我人が出て来る可能性もあった。

だからこそ、結果オーライというやつなのだろう。

素直に反省文とボランティア活動を行っているので、文句はない。しかし。

「それでも、やっぱクリパでも何かやらかさないか注意しないと」理由があるにせよ、文化祭の時と同様、また占拠されても色々困るのだ。

だからこそ、杉並程ではないが注意は必要だろうと考えていた。ただ、全員にそれぞれ監視付ける程に生徒会の人員は多い訳ではない。

だからこそ、ある程度は絞る必要がある。

「板橋は杉並と同じで非公式新聞部みたいだし、監視は必要でしょ。

あとは雪村と花咲も一応入れるかな……それと弟くんも——」

「弟くんは大丈夫！」

弟くんも注意は必要かな、と。

まゆきが言おうとした矢先に、食い気味に音姫が必要ないと否定した。

「文化祭のときは色々理由があったみたいだし、クリパでは問題を起こさないよ」

「いや、音姫……あのね」

「弟くんは、お姉ちゃんを困らせることしないんだから」

音姫の言葉に、まゆきは説得を諦める。

こうなってしまうたら親友が梃子でも動かないことを知っている

のである。

——まったく、音姫の弟くん鼻肩は治らないんだから。

普段は誰に対しても平等に接する音姫だが、何事にも例外がある。

それが、弟くん——桜内 義之である。

彼のことになる、音姫は色々ポソコソになってしまふのだ。

そんな親友の一面も可愛いので仕方ないな、とまゆきは監視するとうる考えを放棄した。

それに、こんな純粋に信じる音姫を見たら義之は問題行動できないだろうと思う。

——あ、弟くんにクリパ終わるまで生徒会の手伝いさせても良いかも。

弟くんに生徒会の手伝いをさせれば監視の手間を省けるし、音姫がより一層元気に動いてくれるだろう、と。

あとで呼び出して誘ってみようとまゆきは思った。

「そういうえば、妹ちゃんのこともあったなあ」

義之のことを考えていて、音姫の妹——由夢についても思い出したのだ。

音姫から話を聞いたとき、まゆきは物凄く驚いた。

まったく、これっぽっちも想像してなかったのだ。

「まさか、妹ちゃんが非公式新聞部に入ったなんて」

「あ、あはは、仮部員とは言ってたけどね」

音姫が妹の由夢をフォロワーする様に言葉を付け足す。

まゆきとしては、仮部員だとしても非公式新聞部にあの由夢が入るとは思わなかったのだ。

彼女の印象としては、音姫と同様に真面目でしっかり者というイメージがあった。

だからこそ、どうして非公式新聞部に入ったのか問い詰める必要が

あつたのである。

『妹ちゃん、ちよつと来てくれるかにやーん?』

『こ、高坂先輩…あ、あの、そのっ!』

まゆきは由夢を廊下で見つけた瞬間、問答無用で生徒会室へ連行した。

色々とお話を聞かせてもらうつもりであつたのである。

ただ、問い詰めた結果――

「なんか、もう、ごちそう様って感じだったわ」

「あ、あはは」

砂糖を吐きそうになった、と。

その様に告げるまゆきに、音姫はただ苦笑いするしかなかった。

由夢は正直に仮部員として所属する理由を述べたのだ。

『その、誰かのために頑張ってる人がいたんです』

『わたし、その人の手伝いをしたくて』

『その人に相談に来る人達がいて、その人が感謝されるのを見て嬉しかったんです』

『それを近くで見ると、わたしも頑張らなきゃって思ってた』

『だけど、それだけじゃないんです』

『――その人の側に、居たいんです』

『その…いつか、想いを伝えられたらなって』

——なんだろ、独り身には辛かったわ。

青春してるな、とまゆきは思った。

そういう理由ならば、無理に部員を辞めさせようとは思わなかった。

それに、非公式新聞部に所属していても、杉並の手伝いはしないだろうと思えたのである。

——それにしても。

チラリと。

音姫に視線を向けるまゆき。

急にまゆきに見つめられて首を傾げる音姫。

そんな彼女をみて、まゆきは思う。

——やっぱり、姉妹なのね。

由夢と音姫の両方とも、好きな人には一直線というか、一途なのだと。

音姫は義之のことを弟として好きなのだと言うだろう。

しかし、親友として側に居たからこそ、姉弟としての愛情以外の部分もあると感じたのだ。

——さてさて、どうなることやら。

義之が音姫をどう思っているかは分からないが、上手いこといつて欲しいと思った。

そして、

「はあ、わたしも恋したいにやーん」  
あてられたのか、割と切に想うまゆきであった。

episode—23 「バナナ好きな少女は、未来の夢を見るか」

これは、過去のとある話。

オレンジ髪の少女が、輝かしい未来に思いを馳せた。

そんな、他愛もない話。

episode—23 「バナナ好きな少女は未来の夢を見るか」

『ほんとに、すまない』

力になれなくて、と。

白河 暦は自分自身の不甲斐なさを悔やんでいた。

生物準備室。

普段は暦しか居ない部屋には、彼女以外にも一人座っていた。

『暦先生が謝ることなんて何もありませんよ』

元々、分かっていたことですから、と天枷 美春は笑みを浮かべながら答えた。

暦はそんな彼女をただただ見つめる。

天枷 美春。

いや、正確に言うのであれば、天枷美春の容姿、性格を模したロボットと言うべきであろうか。

暦の目の前に居るのは、本人ではなく、ロボットである。

美春本人は、不慮の事故で意識不明になっており、その影武者として代わりにロボットの彼女が学園生活を送っていた。

これは美春の父親であり、且つ天枷研究所の所長が決定を下したのだ。

感情を持つロボットが人の生活に馴染むことが出来るのかを調査する為に。

暦は教師でもあるが、天枷研究所の所員でもある。

だからこそ、目の前の美春のことは知っていた。

——そう、分かっていたことだ。

そう、知っていたのだ。

彼女がプロトタイプであり、長期的な運用を目的として設計されていないことを。

彼女が、近い内に機能を停止してしまうことを。

『それでもっ、それでもだ……わたしは、君をずっと見ていた』

所員として。

教師として。

彼女が学園で馴染むことが出来るのか、影からずっと見ていた。

美春は埋め込まれているデータを頼りに過ごしていた為、当初は変な行動をしていた。

しかし、徐々に慣れていき、人間と何変わりなく日常を謳歌していたを見た。

『ほんとに、楽しそうだった』

暦は、美春が常に楽しそうに友人たちと生活していたのを見ていた。

そんな彼女が浮かべる笑顔を見て、暦は思う。



ロボットである美春は、人間と何も変わりがないと。勿論、彼女が人間ではなく、ロボットだと認識している。しかし、意思がある美春は人間と何ら遜色などなかった。

『もつと、楽しんで欲しいと思った』

美春の笑顔が、近い内に失くなってしまおう。

それは駄目だと。

少しでも長く、彼女に友人たちとの生活を送らせてあげたいと思った。

如何にか出来ないか、教師の業務後に研究所に戻り、必死に探した。調べた。

だが、設計上、無理に寿命を延ばそうとすると記憶データに影響が出てしまう。

それでは意味がなかった。

記憶がある彼女自身に、長く生きて欲しかった。

『ごめんなさい……』

勝手に作って。

勝手に終わらせて。

美春からしてみれば、研究所の人々を恨んで当然だと思った。

だからこそ、何も出来なかった暦は頭を下げて謝る以外に術はなかったのである。

『……………』

美春は申し訳なさそうに謝る暦を見て困った様な表情を浮かべる。

そして、何か思い付いたのか、彼女は口を開いた言葉を伝える。

かったるい、と。

『えっ……』

美春が言いそうにない言葉に、暦は驚いて頭を上げて彼女を見る。そこには、悪戯気な表情をする美春が。

『……なんて、言いそうですね』

先輩なら、と。

頭の中で思い浮かべているのか、嬉しそうに笑っていた。

そして、嬉しそうな表情のまま、暦に自分の気持ちを伝える。

『美春は、自分が不幸だなんて、欠片も思っていないません』

美春は自身の寿命が短いことを初めから理解していた。

だからこそ、寂しいという気持ちはあっても悲しいとは思わなかった。

それ以上に、彼女は感謝していたのだ。

『本物の美春さんの代わりに生活して、ほんとに色んなことを体験しました』

美春の頭には知識として色々なデータが入っていた。

しかし、ロボットである彼女は実際に体験したことがなかった。

だが、今回の学園生活で沢山の体験をすることが出来た。

『音夢先輩とクレープやパフェを沢山食べに行きました！』

本人である美春との、小さい頃から仲良しの音夢。

データとして音夢を知っていたが、実際に色んなところに一緒に話し、出掛けることで彼女の良さを沢山知った。

音夢と一緒に食べたバナナパフェは、美春にとって大切な思い出だった。

『それに、芳乃先輩や水越先輩、白河先輩たちと海に行ったりして沢山遊びました』

はしやぐ自分に色々と教えてくれ、一緒に遊んでくれた、大事な友

達たち。

どの記憶も、美春には輝いて見える程の宝物である。  
そんな素晴らしい体験が出来たのだ。  
ロボットである自分が。

『先生……美春は、とつても幸せでした』

ありがとうございます、と。

美春はしっかりと暦を見ながら話した。

どうか自分の気持ちだが、感謝が、少しでも伝わることを願って。

『そっか……そっか……』

美春の言葉、想いを受け、暦は天井を見上げる。

暦は、いまの表情を美春に見せたくなかった。

溢れてしまいそうな涙を隠したくて。

そんな暦をみて、美春は幸せそうに笑う。

ロボットである私にも、何かが出来たのだと。

暫くして。

嬉しそうに此方を笑う美春に、何故か照れくさく感じてしまう暦。  
それを隠したくて、彼女は気になっていたことを美春にぶつける。

『なあ、そういえば、朝倉に伝えなくて良いのか』

寿命のことを、と暦は美春に聞く。

朝倉 純一。

ロボットの美春が日常生活を問題なく過ごす為、彼女の世話役として暦が依頼した生徒。

かつたるいと言いなながらも、何度も美春の手助けをしているのを暦は見ていた。

口では何だかんだ言いながらも困った人をほっとけない性格だと理解していた暦。

だからこそ、信頼して美春の世話役を任せただ。

そんな彼には、美春の寿命の話をするべきだと思った。

だが、それを止めたのは——美春であった。

『先輩には、言わないでください』

美春が停止した時は何か理由を付けて話してください、と暦にお願いした。

美春は、純一に本当に感謝していた。

音夢や他の友人にも感謝していたが、一番お世話になったのは純一だと思っていたのだ。

——先輩は、ロボットだって分かってても、普通にしてくれました。

純一は、本物の美春も知っている。

彼はロボットの美春を入院中の天枷 美春ではなく、別の一人の少女として接してくれた。

彼は人間だロボットだと区別せず、同じように友人でいてくれたのだ。

美春はそれがどうしようもなく、嬉しかった。

きつと、純一は区別とかかったるいと言うのだろうな、と美春は想像しながら笑ってしまった。

天邪鬼。優しい癖に、それを見せたがらない彼。

だからこそ——

『美春の寿命を言うと、先輩はきつと気にしちゃいますから』

彼が悲しむのが嫌だった。

最後は、停止した自分の姿ではなく、笑って彼に手を大きく振った自分を覚えて欲しかったから。

『そっか……』

そう伝えてくる美春に優しい表情を浮かべる暦。

純一を悲しませたくない。

純一には自分の笑顔を覚えておいて欲しい。

そう語る彼女の表情をみて、暦は理解したのだ。

美春は純一のこと——

——朝倉、本当にありがとう。

暦は心の中で純一に感謝を述べる。

だって、彼は彼女に色んな気持ちを教えてあげることが出来たのだから。

『ねえ、暦先生』

『なんだい？』

心で感謝の言葉を送る暦に、美春はひとつ質問する。

彼女は自分の人生に後悔はない。

だから気になるのは、他のこと。

『美春の後に生まれるロボットは、もっと長く生きれるのでしょうか』

自分は元々短い寿命だった。

それは仕方ないことだ。

しかし、今後生まれてくるロボットにはもっと長く生きて欲しいと思った。

『ロボットだと隠さないで、人間の方たちと一緒に暮らせるのでしょうか』

自分は、美春本人として過ごす必要があった。

それは仕方ないことだ。

しかし、今後生まれてくるロボットには、人間として偽らずにありのまままで過ごして欲しいと思った。

『わたしが先輩たちと過ごせたように、友達と楽しく学園生活を過ごすことが出来るのでしょうか』

自分は、短い間だったが友人達と楽しい、幸せな学園生活を過ごすことが出来た。

今後生まれてくるロボットには、美春が体験した様に、楽しい学園生活を謳歌して欲しかった。

『……………』

聞いてくる美春の瞳は、表情は、ひたすら輝かしい未来を信じていた。

質問ではあったが、そんな未来が絶対くるのだと疑っていなかったのだ。

『きつと…………』

暦は、人間と変わらないロボットが発表される未来を思い浮かべる。

色々な予測が頭に過るが、一旦考えるのを止めた。

『きつと、来るやい』

嫌な未来など、考える必要などない。

彼女には、未来はきつと明るいのだと信じて欲しかった。

そして、暦も信じたかった。

『ふふ、そうですよねっ！ 美春の妹や弟たちの今後が楽しみです！』  
暦の言葉に嬉しそうに笑う。

そして、今後生まれる自分の妹や弟たちの未来に思いを馳せる美春であった。

これは、過去のとある話。  
オレンジ髪の少女が、輝かしい未来に思いを馳せた。  
そんな、他愛もない話。

episode—24 「過去と、現在と」

『あれれ、もしかして、もう撮っちゃってますか』

これで何回目だろうか、と。

H M—A O 6型は、テレビに映し出される少女を見ながら思った。

天枷研究所。

H M—A O 6型が作り出された場所であり、彼女が一番長く居た場所でもある。

そして、研究所内の彼女に充てられた部屋で、彼女は座りながらテレビの画面を見つめていた。

——何故だろうな。

彼女は自身の行動に疑問を感じていた。

何故、最期にまた見たいと思ったのだろうか。

彼女は人間ではなく、ロボットである。

しかし、感情があり、己の意思を持つロボットであった。

ロボットというには、あまりにも人間に近すぎる程に。

そんな彼女は、精巧過ぎた彼女は、人間社会から酷いバッシングを受けた。

バッシングを受けたのは彼女だけではない。

彼女と同時期に作られたロボットの中には、排斥主義者から壊されたモノもいた。

その世間のロボットに対する風当たりの厳しさに、

天枷研究所の所長——天枷博士は、H M—A O 6型を廃棄処分したと発表し、人工冬眠させることを決定した。

彼女は、この後すぐに人工冬眠することになる。

そんな彼女が最期に望んだことは、とある録画を見ることだったのだ。



『もう、それなら早く言ってくださいよー』

頬を膨らませ、録画している相手を睨み付ける少女。

その少女の睨みは恐さなど欠片もなく、録画している女性の笑い声が聞こえた。

何故かは分からない。

彼女は、この少女をもう一度見たくなったのだ。

直接は会ったことのない、目の前の少女を。

『はじめまして、わたしは天枷 美春です』

次に生まれてくるアナタたちの姉です、と。

オレンジ髪の少女は、本当に嬉しそうな笑顔でこちらを見ていた。

録画されたビデオに映る少女の名は、天枷 美春。

H M I A O 6型と同様にロボットであり、既に活動が停止してしまっているロボット。

そんな少女は自分自身が停止する前、いま再生しているビデオを録画していたのだ。

『元気になっていますか？ 美春は——』

H M I A O 6型はこの録画テープを、起動したばかりのタイミングで天枷博士から見せられた。

ビデオ越しの美春が話した学園生活の出来事や人間社会での生活は、本当に楽しそうであった。

その為、彼女はこれからの生活について希望に満ち溢れていた。

——そんなもの、まやかしに過ぎなかったがな。

だからこそ、その希望が打ち砕かれたのは相当にショックであったのだ。

そして、人間に対する嫌悪、憎しみばかりが募った。

『アナタたちは、もっと幸せになってますよね』

未来はきつと明るく輝いている。

そう信じて疑わない、画面に映る少女の顔、声。  
それに対して自身がどのように感じているのか分からなかった。  
裏切られたという、憎しみだろうか。  
信じて疑わない彼女への哀れみだろうか。  
それとも――

「いや、どうでもいいか」

自分の頭に過ぎった考えを捨てる。

もうこれから眠りに付く自分には如何でも良い話だと。

勝手に作り出されて、勝手に危険だから廃棄しろと言われて。

そんな人間たちと一緒にいたくない。だから眠りにつく。

それで良いと思ったのだ。

「さてと、もう行くか」

彼女は椅子から立ち上がり、録画テープを止めるためにテレビへと向かう。

停止ボタンを押す直前、美春の声が聞こえた。

『人とロボットが仲良く楽しく暮らせているのでしょうか』

「……そんなもの、夢物語さ」

そうして彼女は長い眠りにつく。

そして、40年の月日が流れたある日。

H M I A O 6 型 m i n a t s u 。

いや、天枷 美夏というべきだろうか。

とある青年が起動ボタンを押したことにより、彼女は再びこの世界で稼働し始めた。

「もう、やだ……」

風見学園三年三組の委員長——沢井 麻耶は、現在の状況に頭を抱えていた。

休み時間。

皆が次の授業まで思い思いの時間を過ごす中、麻耶はひとり今後のことを考え、頭を悩ませていた。

「委員長、何か困りごとでもあるのか?」

「……誰の所為だと、思ってるのよ」

脳天気な声を掛けてきた義之に、思わず麻耶は睨み付けながら言葉を述べる。

実際、悩んでいる元凶と言えなくもないのだ。

麻耶の言葉に、義之は彼女が何に悩んでいるのか見当が付いたのか、苦笑いしながら話す。

「もしかして、SSPのことか?」

「それ以外にないでしょ」

コードネーム『SSP』

生徒会などに聞かれても問題ないように、クラスの中で呼び方が統一されていた。

これは、このクラスでのクリパの催し物。

SSP―セクシー寿司パジャマパーティ。

これが、正式に決まってしまったのだ。

クラス委員長の麻耶としては悩まずにはいらなかった。

そもそも、お化け屋敷か演劇の二択だったのだ。

それなのに残り一票であった義之が他に何かあるのではと言い出したことが原因で、こんな催し物に変更となってしまうた。

「いや、委員長だって最終的には同意しただろ」

「……ほんと、何で領いちゃったんだろう」

義之の言葉の通り、その場では麻耶もSSPに同意してしまったのである。

完全に自分の好物である寿司という部分に釣られてしまった麻耶。既に皆が準備し始めていることもあり、引き返せない状態となっていた。

だが、麻耶は言わずにはいらなかった。

「や、やっぱりセクシーとかパジャマはいらないでしょー！」

「馬鹿いうなよ、委員長！ むしろ、それが重要なんじゃねーか！」

麻耶の言葉に大声で否定の意を述べたのは、クラスの三馬鹿の一人である渉。

下心を最初から隠すつもりもなかった馬鹿である。

「板橋の言う通りだ、委員長よ」

そして、更に同意したのは杉並だ。

「寿司のネタは質が良いものを取り寄せるつもりだ。だが、その為にはある程度集客が見込めなければいけない」

だからこそ、セクシーやパジャマは必須なのだ、と。

そう語る杉並に、言葉を返せない麻耶。

良い寿司ネタを用意してもらえると、いう魅力に、麻耶は弱い。

どのみち既に決まってしまったのだ。

もうやるしかない。

分かつてはいるのである。

しかし、そうだけーと気楽に言う涉にイラツとしてしまう麻耶。

文句を言わずにはいられない。

「杉並、あと板橋！ あんたら非公式新聞部が居るから、特に生徒会に目を付けられてるんだからね！」

只でさえ、バレてしまえば色々と生徒会に苦情を付けられてしまう催し物なのだ。

それなのに、生徒会と敵対する非公式新聞部がクラスに居ることで危険が高まってしまっているのである。

委員長として生徒会に関わることもある麻耶の負担は大きかった。

「オレチガウ、オレ、シンブンブ、チガウ」

麻耶の言葉に、片言になりながら否定する涉。

彼はどこか遠い目をしてしまっている。

麻耶だけでなく、既にクラスや生徒会、多くの生徒が涉を非公式新聞部と認知してしまっていた。

麻耶からしてみれば、非公式新聞部でも違ってても、如何でも良かった。

「とりあえず、生徒会の目がクラスに行かないように、板橋と杉並は当日どっか行つてなさい」

「……おれ、完全に誤解なのに」

「フハハ、クラスと非公式新聞部の負担も減って、一石二鳥ではないか！」

「元はといえば杉並が高坂先輩の言葉を否定しなかったからだだろうが！」

杉並と渉の漫才は放っておき、麻耶は義之の方にも念の為に話しておく。

「桜内、あんた生徒会の手伝いするんでしょ？ SSPになった原因なんだから、上手くバレないようにしなさいよね」

「……板挟みが辛い」

義之は自分の状況を改めて認識したせいか、頭を抱えながらつぶやいていた。

そう、義之はクリパが終わるまでの間、生徒会の手伝いをする事になったのだ。

まゆきからの猛烈なプッシュに思わずという部分もあったが、音姫が忙しくて大変という彼女の言葉に義之はやらざるを得なかったのである。

義之が生徒会の手伝いをすると言ったときの、音姫の笑顔と信頼する目は、彼からしてみれば辛いところであった。

「音姉、すまん、俺を許してくれ」

「ほんと、仲良いわよね、桜内と朝倉先輩」

義之の言葉に、ため息を吐きながらも麻耶はつぶやく。

実際、義之と音姫の仲の良さは麻耶だけでなく、学園全体で有名な話でもある。

何せ、音姫は生徒会長であり、彼女の容姿と性格の良さで人気は高い。

そんな彼女が唯一甲斐甲斐しく世話焼きをする相手が義之であった。

注目しない訳がないのだ。

——ほんとの姉弟みたいよね。

義之が音姉と呼び、音姫が弟くんと呼ぶ。

麻耶には弟がいる。

そんな彼女でさえ、義之と音姫の呼び方も仲の良さも、彼らが血が

繋がらないにしても本当の姉弟とも遜色がないと感じた。

「お姉さん、かあ」

そして、義之を見ながらふと言葉が思わず溢れた。

意図した訳ではなく、ほんとに無意識につぶやいてしまったのだ。

『お姉ちゃん！』

『麻耶ちゃん、どうしたの？』

「——よう、委員長！　どうかしたのか？」

「何でも、ないわ」

何でもないので、と義之の心配する声に麻耶は言葉を返した。

一瞬だけ頭の中に過ぎってしまっただけ。

忘れたい、昔のことが。

麻耶は脳裏に思い浮かんだ記憶を否定した。

そんなとき、放送が入った。

『えー、2年1組の天枷美夏さん、3年3組桜内義之くん、至急保健室まできてください。　繰り返します——』

それは、目の前のクラスメイトを呼ぶものだった。

麻耶は思わず半目で睨みつけてしまった。

「お願いだから、クラスの監視を増やすことにならないようにね」

「そ、そういう話じゃないから大丈夫：なはず」

何か呼ばれる心辺りはあったのか、麻耶の言葉を否定しながらも逃げるように教室をあとにした義之であった。

---

「ふん……貴様の助けなどなくても、美夏は問題ない」

ではな、と不機嫌な様子を隠すこともせず保健室をあとにした少女。

そんな少女を見ながら、保健室にいる教師―水越 舞佳は苦笑しながら義之に言葉を告げる。

「あはは、すっかり嫌われたわね」

でも、怒らないであげて欲しいの、と。

そう話す舞佳に、義之は仕方ないと思ひ、頷く。

自分の責任だと思っていたからである。

「俺が起動してしまったから、ですしね」

義之は保健室をあとにした少女を思い出し、理解はしつつも少しだけ信じられない気持ちもあった。

事の発端は、先日の昼休みのこと。

杉並に誘われ、学園から離れた雑木林に一緒に行ってしまった義之。

二人は、その雑木林の奥に洞穴があるのを発見し、中に入った。



其処には、カプセルに入った眠る少女―天枷 美夏の姿があったのである。

そして、義之は間違えて起動ボタンを押してしまったのだ。それにより、美夏は目覚めてしまった。

——ロボットだって言われても信じられないな。

実際に目の前で彼女の耳から煙が出ているのを目撃した義之。だからこそ、ロボットなのは認めずにはいられなかったが、それでも尚疑ってしまう。

それ程に、容姿も感情も、人間と何ら変わりがなかったのだ。

「別にね、ずっと離れず側にいて欲しいわけじゃないの」

「わかってます、少しは気に掛けるようになりますから」

そのロボット、いや、美夏が転校生として学園に入ってきた。

ただし、彼女がロボットだと知られてしまうと、色々な問題が発生する。最悪、スクラップ処分となってしまう可能性がある。

そのため、美夏がロボットであることは秘密である。

しかし、彼女は長い間凍結されており社会常識には疎く、システム的には不安定。奇怪な行動をする可能性が高い。

だからこそ、誰かにサポートして貰いたい。

既にバテている義之が適任という結論に至ったのだ。

義之自身、起動した責任として、否とは言わなかった。

「そう、良かったわ」

はい、これが基本資料よ、と舞佳から渡されたのは百枚以上ある紙束。

美夏についての情報が記載された資料であった。

家に帰ったら読まないとな、と思いながら義之は保健室をあとにしようとした。

「……あ、ちよつと待ってー！」

しかし、舞佳に呼び止められた。

義之が彼女の方に振り返ると、そこには机に置かれた大量の資料から何かを探そうとしていた。

「何をしてるんですか？」

「そういえばね、以前にも同じことがあったらしいのよ」

桜内くんと同じようにサポートしてた人が居た、と舞佳は資料を探しながら義之に答える。

舞佳の話を聞くと、以前にも美夏と同じようにロボットが学園生活を送っていた時があったとのこと。

そしてその時、自分と同じようにサポートをしていた人物が居たというのだ。

何か参考になるかもしれないと思い、彼女はその資料を探していたのである。

——— いったい、どんな人なんだろうか。

義之は舞佳の言葉で、過去にサポートした人物に興味が引かれた。

そんな義之を他所に、目的の資料を見つけたらしく、その資料を取り出して中身を読んでいく舞佳。

「そうそう、もう五十年以上前のことらしいんだけどね。何か参考

になりそうなの……ものは……」

資料を読んでいた舞佳は何故か急に言葉を止め、一部分を凝視していた。

義之の耳には、まさか、とか、そんな偶然、とか独り言が聞こえてきた。

気になった義之は舞佳に質問をしようとしたが、彼女が先に口を開いた。

彼女が話した言葉は、意外なものであった。

「確か桜内くんって、生徒会長の朝倉さんと仲が良かったわよね？」

「は、はあ……そうですけど」

彼女の質問に肯定する義之。

何故、ここで音姫が出てきたのだろうかと疑問に思った。

だが義之の疑問には答えず、舞佳は義之を見つめた。

そして口を開く。

それなら、と。

頷いた義之を見て、舞佳は再び彼に質問を投げかけるのであった。

朝倉純一という人物を知っているか、と。

おや、珍しい、と。

朝倉 純一が、家に来た人物を見たあとに抱いた感想である。

「こんにちは、純一さん」

純一に挨拶した青年——義之については、小さい頃から知っている。そもそも、以前までは朝倉家に住んでいたのだ。

長い付き合いであり、音姫や由夢と同様、家族のような存在である。

「久しぶりだね、義之」

「いや、たまに会うじゃないですか」

純一の言葉に苦笑しながら応える義之。

義之が芳乃家に引越して以降、彼が朝倉家に訪れることは滅多にない。

基本的に、由夢と音姫が芳乃家に行くからである。

純一としては、自分のことは気にせず、さくらと音姫、由夢と仲良く過ごして欲しいと思い、必要以上に向かわなかった。

それでも、先週に一度会ったばかりなので、久しぶりは適切じゃなかったかもしれない。

もう歳かな、と自分の年齢を改めて実感し、内心で苦笑する。

「残念ながら、由夢も音姫もまだ帰って来てないよ」

まだ学校だろうね、と。

純一は二人の最近の帰宅時間を思い浮かべながら告げた。

音姫は生徒会長ということもあり、普段から遅くまで学校にいる。クリパが近付いているのも、理由の一つであろう。

由夢は昔は早く帰ってきていたが、最近は遅い。

理由はここ数日前まで知らなかったが、音姫から非公式新聞部の仮部員として作業していることをこっそり教えてもらった。

高らかに笑う悪友が所属していた部活ということもあり、少し由夢が心配になったのは秘密である。

どちらかに会うのが目的だと思い話したが、義之は首を横に振った。

「いえ、純一さんにお聞きしたいことがあつて」

「俺に？」

何だろうか。

由夢か音姫、もしくははさくらについてだろうか。

そう予想していたからこそ、義之の口から話される人物を聞き、驚きを隠せなかった。

美春というロボットを知っていますか、と。

episode—25 「偶然か、必然か」

「これはまた、懐かしい名前が出てきたな」

朝倉家。

中に入って話そうと言われ、義之はリビングに居た。

義之の対面に座る純一は、珈琲を飲みながら本当に懐かしそうといった表情を浮かべる。

実際に、それほど懐かしい話なのだろう。

彼が舞佳から聞いた話では、純一が美春というロボットの世話役をしていたのは、既に五十年以上前のことである。

そんな昔の話など覚えていたのであろうか。

質問する前はそんな心配が脳裏を過ぎったが、純一ははっきり覚えていたようだ。

「結構昔の話なのに、よく覚えていましたね」

「あんな出来事、何年経つても忘れることはないさ」

純一の言葉になるほどと納得の様子を見せる義之。

義之自身も純一同様、人間と変わりないロボットを見たのである。

気持ちだが、分からないでもなかった。

「まさか義之も、俺と同じようなことをする事になるとはな」

「水越先生もビックリしていました」

義之が純一と家族同然の付き合いしていることを告げた時、舞佳が凄く驚いた表情をしていたのを覚えている。

何か運命的なものでもあるのかもね、と思わず話していた程に。

それくらい確率としては低い話なのである。

身内に前例があるのなら義之は話を聞きたかった。

その為に、授業終わり次第すぐに朝倉家に来たのである。

「さてと、何から話せばいいかな」

純一には、自分は純一が過去に世話役を任された程度しか聞いていないと伝えていた。

つまり、ほぼ何も知らない状態ということである。

だからこそ話す内容について悩んでいたのであろう。

だか考えがまとまったのか、純一が話し始める。

まず、ひとつつ初めに伝えることがある、と前置きを述べて。

「天枷 美春という人物は今でも生きている」

「へえ、長く活動しているんですね」

純一の言葉に、義之は然程驚きもせずに頷く。  
見た目や感情など人間と変わりない存在だが、人間と違う部分がある。

それはおそらく寿命であろう、と思った。

舞佳の話を聞くと、美夏は長い眠りについてたとのこと。

しかし、美夏とは違い、ずっと活動していたロボットもいるのであろう。

自分の中で納得出来たので頷いていた義之であつたが、純一は否定した。

義之と自身の認識が異なっていることに気付いたからだ。

「美春というロボットは既に活動を停止している」

「え……さつきは、生きてるって」

「言い方を、変えるべきかな」

天枷美春という人間は生きているが、彼女を模したロボットは死んでいる、と。

純一は義之が理解できるように話す内容を言い換えた。

彼の口から語られた内容は驚くものであつた。

天枷博士は自分の娘をベースにしてロボットを製作した。

それが『HM-A05型 miharu』。

純一が少しの間だけ学園生活を過ごす上でサポートしたロボットである。

人間の天枷 美春は一時期、不慮の事故により意識不明の状態となっていた。

その時、本物の美春の代わりに学園生活を送っていたのがロボットの美春だと言う。

「誰も、気付かなかつたんですか？」

「そうだな、俺も先生から直接頼まれるまでは全く分からなかつた」  
美春と同じ容姿、声、性格。

どれを取っても人間の美春と変わりがない為、見分けなど付かなかった。

純一自身、彼女の背中にある、ゼンマイを巻く穴を見るまでは信じられなかったのだから。

「確かに見た目や性格じや分からなかったけど、行動は危なっかしかった」

純一はその頃を思い出し、懐かしそうに笑う。

性格や容姿では判別が付かないからバレにくい。

しかし、彼女の行動には困らせられたことが多かった。

だが仕方ないことなのだろう。

彼女は生まれただけの彼女であった。

知識としてはデータとしてある程度持っていたが、経験はないに等しかったのだ。

だからこそ、美春は色々なものを見て、はしゃいでばかりいた。

見るもの全てが彼女にとっては新鮮だったのだ。

『うわあ、大きいですねえ！ あれに乗るんですねー』

彼女はバスに乗るだけで嬉しそうに笑っていた。

自動ドアに感動し、降りる時に押すボタンを今か今かとワクワクして待っていた。

『あはは、いい子、いい子』

公園で犬を見掛けたときは毎回走り出し、犬と戯れていた。

人間の美春がワンコと呼ばれていたからこそ、その光景が何だか面白かったのを覚えている。

『すっごく美味しそうですねえ！』

バナナパフェを見たときは目を輝かせていた。

4、5人分はあるだろう量でも大丈夫だと一人でも食べようとし、気持ち悪くなっていたのには苦笑した。



彼女が学園生活を過ごしている間、色々振り回されっぱなしであった。

純一はかっただけだと笑いながら義之に話していた。

「でも、何だか純一さんは楽しそうに話してましたね？」

「美春のサポートは疲れたよ、だけど——」

それ以上に楽しかった、と。

純一は嬉しそうな表情で義之に告げた。

美春はどんなことでも何もかも楽しそうにしている、

そんな彼女を見ていて飽きなかったのだ。

たった二ヶ月弱の間だけであったが、純一にとっては良き思い出であった。

「だからこそ、急に居なくなった時はショックだったけどな」

突然の出会いであり、そして突然の別れであった。

彼女のサポートに慣れた頃、普段と同じように別れた休み明けの日。

その頃の教師兼、研究員であった白河 暦から美春は役目を終えたと告げられたのだ。

ちゃんとお別れも言えずに終わってしまった時、寂しく感じたのを覚えている。

しかし、純一が最期に見た光景は、美春が笑顔でこちらに手を振る姿。

『朝倉せんぱい、さよならです！』

きつと、活動が停止するまで笑顔で居たのだろうと思えることが出来た。

「多分、俺の時より大変だと思う」

美夏が人間嫌いという話を義之から聞いた純一。

それを聞き、仕方ないという思いがあった。

ロボットが人間社会に普及するに従って起こった様々な事件があった。

そのほとんどが、人間のエゴ丸出しの事件ばかり。

ロボットにとってみれば至極迷惑で理不尽なものばかりなのだ。

嫌いになっても可笑しくはない。

そして、人間である義之を煙たがるかもしれない。

それでも。

「どうか、その美夏という子を困っていたら助けてあげて欲しい」

彼女が楽しく学園生活を送れるように、支えてあげて欲しいと純一は思った。

人間が嫌いなのだろう。だけど、嫌いな人間ばかりではないと知ってほしいのだ。

そして、純一は確信していた。

「きつと、その子は良い子であるはずだよ」

例えその子が人間が嫌いだとしても。

それでも、悪さをするような子ではないと。

だって、美夏という少女は、美春の妹のようなものなのだから。

『ちよつと色々あってね、今は人間嫌いになっちゃってるけど』

純一の言葉を聞き、先ほど保健室で舞佳が話した内容が脳裏を過ぎる。

『あの娘、ほんとに素直ないい子だから』

純一と舞佳。

二人の言葉を聞いたからこそ、義之は決心する。

「わかりましたよ」

彼女が楽しく学園生活を送れるように支援します、と。

まっすぐな瞳で告げる義之に、純一は安心したように笑って頷くの

であった。

この出会いは偶然だったのだろうか。  
それとも、必然だったのだろうか。  
このとき、彼女には分からなかった。

「はあ、ようやく終わった」  
放課後。

麻耶は生徒会室から自身の教室へ戻る最中であつた。  
クラス委員長という立場であることから、クリパに向けた申請等  
が彼女が行う必要があつたのである。

もともと催し物を決めたのが遅かつたこともあり、早く片付けなければいけない仕事が多いのだ。

一応、本日中までの作業は終えた麻耶は、帰宅時に寄るスーパーで  
購入する食材を考えながら、廊下を歩いていた。

そんな中、目の前の異常な光景に麻耶は目を丸くする。

——あれ、どうやって積んでるのよ……。

それは、持つている相手の顔が見えない程に何十冊もの本を積んで  
歩いている少女の姿。

顔が見えないが、スカートを履いていることから女性であることは  
確認できた。

振動で落ちそうな程に高く積んでいるのにギリギリ落ちていない。

そんな状況を見て、流石に手伝わないわけにはいかないと思った麻耶。

手伝うわよ、と一言告げてから上部の本を何とか崩れないようにして持つ。

ただ、本を持った瞬間重くて倒れそうになった時は肝を冷やしたのであった。

「ぬ、別にこれぐらい美夏ひとりで持てる！」

「あのね、こんなに高く積んでたら前が見えないでしょうが」

本を積んで歩く少女が抗議するも、麻耶がその抗議を一刀両断する。

事実、麻耶が半分持つてもまだ少女の顔が見えない状態なのだ。危ない以外の何物でもなかった。

「ほら、これはどこに持って行けばいいの？」

「……………図書室だ」

図書室ね、と。

少女が本を持って行く場所を確認し、一緒に向かう麻耶。

明らかに不満という様子を見せていた少女であったが、それでも大人しく麻耶に従っていた。

そして、腕を若干振るわせながらも麻耶は図書室まで本を持って行き、近くの机に下ろした。

自分が持った本の二倍も抱えて歩いていたという事実には、純粹に驚く彼女であった。

「本当は一人でも出来たが、感謝する」

「はいはい、今度からはあまり持たないよ……………うに…ね…」

素直でない感謝に苦笑しながらも、その少女へと振り返りながら注意しようとした麻耶。

しかし、少女の顔を見た途端、息が止まるかと思った。

「む、美夏の顔に何かついているか？」

「……いい、いえ。何でもないの」

青い髪の少女が自分の顔を触るのを見て、漸く言葉を返す麻耶。だが、その言葉もどこか生返事であった。

しかし、そんな麻耶の様子に気付かないのか、続けて喋り出す。

「そうか……そういえば、自己紹介してなかったな」

——なんで。

何故だろうか。

髪の色や体付き、話し方など全然違う。

違う、はずだったのだ。

しかし。

「美夏は、天枷 美夏だ。よろしくな」

『よろしくね、麻耶ちゃん』

自分が知る忘れたい人物と、どこか重なって見えた。

『えーっと、ここから右にまがって』

自分は何処に向かっているのだろう。

沢井 麻耶は自身のことであるにも関わらず、疑問に思った。  
このように思うのにも理由がある。

自分は動こうとしないのに勝手に歩きだし、ひとり言を呟いているのだ。

思考と身体が完全に分離しているように感じる。

——それに、この視界……。

周りに映る景色が、やけに高く感じた。

まるで小さい子供が見る光景のようだ。

『んー……こっちー』

麻耶はいまの状況についてちゃんと把握できていなかったが、ひとまずは落ち着いて考えることにした。

身体が言うことを聞かず、意識だけが取り残されている状況。

——憑依：もしかして、幽体離脱つてやつかしら？

あまりにもオカルト染みた話だが、誰かの身体に乗り移っているよ  
うな気がしたのだ。

だとしたら、この乗り移っている人物は誰なのだろうか。

麻耶は視線の低さから子供なのだと推測する。

そして、ひとり言を聞くに、女の子なのだと分かった。

この女の子は、どこかに行こうとしている。

——お遣い、かな？

その女の子は別れ道がある度、手に持つ小さい紙を見て道を確認している。

おそらく、女の子自身が描いたのだろう。

地図と呼ぶには少しお粗末な、しかし一生懸命描いたのだと分かる、目的地までの道が描かれたもの。

『どっちだろう……』

だが、曖昧に描かれた部分もあるからだろう。

たまに道に迷いそうになっており、少し泣きそうな声が聞こえる。自分が見ている視界がぼけて見える。

涙が溢れそうになってしまっているのか。

大丈夫だろうか、と麻耶は心配そうに見守る。

泣き出してしまうかと思われたが、女の子は溢れそうな涙を手でふき、強く自分に言い聞かせるように呟いた。

『泣かないもん、わたし、お姉ちゃんになるんだから』

その女の子にとってみれば魔法の言葉だったのか。

先程まで泣きそうな声だったが、調子を取り戻し、強い足取りで進んでいく。

麻耶はその女の子を応援しながらも、ひとつ思うことがあった。

——わたし、見覚えが……ある？

既視感と言えはいいのだろうか。

女の子の言葉、そして彼女が進んでいく道にどこか見た覚えがあるように感じた。

『ついたっ！』

麻耶が考えている間に、女の子は目的地に着いていた。

ようやく着いたこともあり、どこか女の子の声には喜びが滲んでいた。

早く行きたいのだろう。

目的地の建物に着いてからは、迷わず早足でとある場所へ向かっていた。

そして、ある部屋に入ると、其処には着物姿の赤い髪の女性がいた。その赤い女性は、入ってきた女の子をみて驚きの表情を浮かべる。

『お姉ちゃんっ!』

『あら、まやちゃん』

また一人で来ちゃったの、と。

困り顔でこちらを見てくる女性が視界に入った瞬間、麻耶は気付いた。

——ああ、そっか、見覚えがあるわけよね。

これは夢だと。

懐かしい、過去の夢なのだと。

『一人でここまで来ちゃ危ないんだからね』

『大丈夫! わたし、お姉ちゃんだもん』

赤い髪の女性は優しく女の子に注意をするが、女の子は大丈夫だと強く言う。

もうお姉ちゃんだから、と。

ほんとは行くまでに迷いそうになり、泣きそうな場面もあったが、それは隠して。

ひとりで出来るのだと、その女性に認めてほしくて。

『そっか、まやちゃんは、お姉ちゃんになるんだもんね』

そう胸を張って話す女の子に、赤い髪の女性は少し困り顔のまま、偉いねと頭を撫でる。

——わたし、は……。



麻耶はこの頃のことを思い出す。

姉が自宅ではなく研究所にいた時、毎回何かと理由を付けて研究所に向かった。

お父さんが弁当を忘れたから。

机の上に何か大事そうな書類が置きっぱなしだったから。

姉が普段より自宅に帰って来るのが遅かったから。

今にして思えば、理由は何でも良かったのだ。

ただ単に姉が居なくて寂しかった。だから姉がいる研究所を覚え、迎えに行っていた。

『お姉ちゃん、ほら、もうお家に帰ろっ。』

『ふふ……もう、まやちゃんったら』

急かすように赤い髪の女性の着物を小さい手で引っ張る。

そんな女の子の様子に小さく笑みを浮かべている。

きつと、麻耶の寂しさを彼女は分かっていたのだろう。

だからこそ、一人で来てしまうことにも強く注意出来なかったのだ。

赤い髪の女性が手を差し出し、麻耶はすぐにその手を繋ぐ。

『えへへ、あったかい』

その手の感触が、暖かさが麻耶は大好きだった。

そして、こちらに向けてくれる優しい笑顔も。

それが早く味わいたくて。

だから泣きそうになりながらも、ひとりで頑張つて来ていたのだ。

『じゃあ、一緒に帰ろうね』

『うん！』

研究所から自宅へと手を繋いだまま帰る二人。

帰る道中に他愛もない話をするだけで嬉しかった。

小さい幸せがそこにはあったのだ。

そんな、幸せな光景が、少しずつ白くぼやけていく。

夢が醒めるのかもしれない。

——嗚呼、どうか。

麻耶は思う。

もし、叶うのならば。

——夢から醒めたら、覚えていませんように。

これは、大好きだった過去の夢。

忘れたい、過去の夢。

episode—26 「お節介な人間たち」

——何故なのだろうな。

美夏はひとり廊下を歩きながら考えていた。

それは、今の現状について。

ロボットであることを隠し、学園生活を過ごしている現状について、である。

理由でいえば義之が洞穴の中で安置されていた美夏を起動させてしまったことが原因だ。

そして学園生活を過ごすのは、天枷研究所の研究員である舞佳に言われたからである。

水越博士の命令であれば仕方ないと。

人間たちと同じ場所で過ごすのは嫌で仕方ないが、それでも完璧にこなしてみせようと。

だが、美夏は同時にこうも考えていた。

ロボットとバレない様に学園生活を過ごすのが、極力人間と関わらないでいようと。

嫌いな人間と最低限しか関わりたいくなかったからである。

——なぜ、なのだろうな。

しかし、美夏が当初考えていた学園生活とは違っていた。

美夏は極力人間と関わらないようにしようと思っていたが、関わって来ようとする人間がいたのだ。

『天枷さん、一緒に学食に行きませんか?』

『あ、ああ』

美夏が配属されたクラスメイトの一人である、朝倉由夢。

学校の案内や授業の進み具合、クラスメイトの紹介や昼飯の誘いなど。

彼女は美夏がクラスに配属した当初から何かとこちらを気に掛けてきたのだ。

極力人と関わるつもりがなかった美夏であるが、由夢の親切を無下には出来なかった。

放課後は何か用事があるらしく居なくなるが、クラスメイトの中では学校にいるときは一番由夢と話している。

——あいつも、だ。

『よお、何か困ってることはないか?』

そして、もう一人は、桜内義之。

自身が人工冬眠から目覚めてしまった、諸悪の根源とも呼べる存在である。

美夏をロボットと知っていることもあり、舞佳から正体がバレないようにサポート役を任されていた。

しかし彼女は義之に頼らず一人で完璧にこなしてみせると意気込んでいた。

だが美夏は動力源であるバナナを嫌いだからと意地を張って補充しなかった所為で、停止一步手前の寸前に陥ってしまったことがあった。

『お、おい、大丈夫かっ!』

『……き、貴様の手など』

『そんなこと言ってる場合じゃないだろ!』

その時に、たまたま途中で居合わせた義之に助けられたことがあった。

自分じゃ無理な状態なのに拒否しようとした美夏に、叱りながらも義之は彼女を助けてきたのだ。

『バレたらどうするんだっ!』

そんなの美夏の勝手だろ、と言いたかった。

しかし、強く叱る義之の目は、表情は、こちらを真剣に案じるものだったから。

なぜか口に出すのは憚られた。

舞佳が義之にサポート役をお願いしたとき、美夏は彼に必要ないと強く拒んだ。

普通であれば、そんな相手にわざわざ手など貸したくないだろう。

なのに、何故関わろうとするのか。

それに。

最後に話した内容が脳内を過る。

『出来れば学園生活を楽しんで欲しいんだ』

『美夏は人間が嫌いなのだぞ。 そんな私に楽しめなんて言うのか？』

『ああ……勝手なのは、分かってる』

『俺も、人間がロボットに何をしてきたか分かっている』

『いや、きっと完全には分かかってあげられていないかもしれない』

『でも、知ってほしいんだ』

『嫌いじゃない人間も、いるんだってことを』

美夏は見た目は人間と何ら遜色ないが、ロボットだ。

だからこそ、過去の出来事が、どんな嫌なものであっても思い出せてしまう。

人工冬眠に入る前のこと。

ロボット排斥主義者からの誹謗中傷と、こちらを見る嫌悪感を滲ませる視線、表情。

あんなやつばかりだから。

勝手に生み出して勝手に大事な仲間を壊した人間だから。

美夏は人間が嫌いになった。

——なぜ、違うんだ。

由夢や義之は、美夏が嫌いになった人間の視線や表情と異なっていた。

同じように、思えなかった。

『人とロボットが仲良く楽しく暮らせているでしょうか』

ふと、自分と同じロボットであるHM―A05型の言葉を思い出す。

HM―A05型、美春もいまの美夏と同じように学園生活を過ごしていた。

録画テープの中で映されていた美春は、学園生活を本当に楽しそうに話していた。

しかし、人間が嫌いな自分は、人工冬眠に入る自分には全く関係ないことだと思っていたのだ。

だが、こうして今は、彼女と同じ状況になっている。

——美春、お前は……。

「お前が学園生活を過ごしてたときも、こんなお節介なやつばかりだったのか」

「ねえ、おねえさん」

ふと声が聞こえて美夏が振り返ると、そこには巾着を持った小さな男の子が佇んでいた。

なぜ幼い子供が学校に居るのか、と疑問に思う。

美夏が質問する前に、男の子が先に彼女へと問い掛けてきた。

「あ、おねーさん……三年三組のクラスってどつち？」

「む、あつちだが」

「ありがとうー！」

聞かれて思わず方向を指差し、男の子はお礼を言ってすぐに走り出そうとする。

しかし、慌てて美夏は走り出す前に呼び止める。

「待て、何しに行くんだ？」

「おねえちゃんの弁当をとどけにー！」

美夏へ手に持つ巾着を見せながら答える男の子。

まだ幼いののに、ひとりで家族の弁当を届けに来たのかと内心驚く。そして、そのまま男の子がひとりで行く前に言う。

「教室まで美夏も行く」

人間は嫌いだ。

だが、何も知らない無垢な小さい子供までは嫌いになれなかった。改めてお礼を述べる男の子と一緒に、彼の姉がいる教室まで歩いていく。

その道中のこと。

「そういえば、名前はなんだ？」

「ぼく？ さわい、ゆうとだよ」

「さわい…沢井？ む、沢井の弟だったか」

三年三組。

姉というところからして、性別は女性。

そして、沢井という名字。

美夏は、そこから該当する人物がすぐに思い浮かんだ。

何せ、彼女にとってみれば由夢、義之に続いて関わりがある人物だからだ。

——沢井…あいつも、お節介なやつだ。

沢井 麻耶。

由夢と義之に続き、美夏が関わりのある人物である。

出会いは自身が大量の本を抱えて歩いてきたとき。

自分が平気だと言っているのに、本を運ぶのを手伝ってきたのだ。

『もう、またそうやって一人で無茶をして』

一回だけではなかった。

美夏な人間の手を借りたくなくて一人で運んだりしている時に出くわす機会が多かった。

『無理そうだったら誰かを頼りなさい』

『だから美夏ひとりで出来るから大丈夫だと——』

『だから同じように何回も言うけど、危ないって言ってるでしょ』

ほら、貸してと。

半ば無理矢理じぶんの持っていたものの半分を持って行く麻耶。

こちらが拒否しても無理やり持っていくので、最近では半ば諦めている。

意地を張ってお礼を言わないのに、それでも麻耶は嫌がりもせず自分から手伝うのだ。

お節介だと思いなながらも、何故か嫌だという感情は沸かなかつた。

「あ、お姉ちゃん！」

「ゆ、勇斗……何でここに？」

まだ目的の教室に着く前であつたが、途中で目的の人物に会うことが出来た。

駆け出す勇斗と目を丸くする麻耶へと美夏は近付いていく。

「沢井の弁当を届けに来たみたいだぞ」

「ほんとに？ もう、嬉しいけど一人で来たら危ないでしょ」

「大丈夫だよ、ぼく、もう五歳だもん」

胸を張る勇斗に、麻耶は仕方ないなと苦笑しながらも偉いね言つて頭を撫でる。

嬉しそうな勇斗を尻目に、麻耶は美夏へと振り返る。

「天枷さんも連れて来てくれて、ありがとね」

「別に、たまたまだ」



お礼を言われ、何故か気恥ずかしい気持ちになり、変な回答をしてしまう。

だが、麻耶は特に気にせず、改めて美夏に感謝し、勇斗へと顔を向ける。

「勇斗が持つて来てくれると思っていなかったからパンを買っちゃったんだ。一緒に食べよっか？」

「うんっ！」

「それじゃあ、美夏はもう行くぞ」

勇斗を麻耶と合流させることが出来たので、美夏は用件は済んだと、彼女たちから離れようとする。

そこに待ったを掛けたのは、勇斗だ。

「え、おねえさん行っちゃうの？一緒に食べよ！」

「こら、勇斗……迷惑かけちゃダメでしょ」

わざわざ一緒に食べる必要がない。

美夏はひとりで食べる。

そう口に出すつもりであったが、麻耶に窘められ、しょんぼりとする勇斗を見て、思わず別の言葉を発していた。

「……美夏は、いいぞ」

「ほんとっ！」

「天枷さん、迷惑じゃない？」

不安気にこちらを見る麻耶に問題ないと返す美夏。

そして、中庭へと向かう麻耶と勇斗に後ろから着いていく。

——何故、なのだろうな。

自分が何を思っているのか。

自分自身のことなのに、分からなかった。

ただ、なんとなく脳裏に再び過る言葉があった。

『嫌いじゃない人間も、いるんだってことを』

「美夏は、どうしたいのだろうか」

分からないままであったが、嫌な気持ちにはならなかった。

『ロボット排斥主義者の行動がどんどん激しくなってきたから、もう研究所に居なさいと。』

沢井 拓馬はHM—A07型に話した。

天枷研究所。

HM—A07型にとって生まれた場所であり、第二の家とも呼べる大切な場所である。

そして、目の前にいる人物は自身の生みの親といえる存在。彼が言うのであれば、命令ではなく願いだとしても聞くべきであろう。

『博士、ごめんなさい』

だが、HM—A07型は首を横に振る。

それだけは、聞けないのだと。

拓馬がこの話をしたのは今回が初めてではない。既に彼女に対して同じ話を三回している。

しかし、HM—A07型は頑なに拓馬の願いを聞き入れないでいた。

『だが、本当に危険なんだ』

ロボット排斥主義。

感情のあるロボットは害悪だと、居てはいけないのだと訴える人々。

人間社会にロボットを普及させる上で、過去から彼らは大きな障害となっていた。

今までは規制や弾圧等が多かったが、最近、破壊行為も増えてきた

のだ。

既に被害が少しずつだが出てしまっている。

拓馬は彼らの生みの親として、ロボットたちが破壊されるのは防がなければならない。

だからこそ、まだ安全である研究所にしばらく避難して欲しいと思っっているのだ。

H M 1 A 0 7 型もそのことは理解していた。

理解していたが、それでも拓馬の願いを聞き入れるつもりはなかったのである。

それは――

『約束、しましたので』

ロボットの彼女にとって。

叶えたいと。

叶えてあげたいのだと。

ほんとうに、そう思えた、大切な約束。

『ずっと、一緒にいてあげるって』

ロボットな自分だけれど、その子は彼女にとって本当に大切な存在となっていた。

いや、自分自身が一緒にいたいだけなのかもしれない。

『……うちの娘を大事にしてくれているのは嬉しい。だが、それでも』

彼女も、拓馬の言うことも分かっているのだ。

自分もこのまま研究所以外にいれば、いつかは――

『はじめまして、わたしは天枷 美春です』

そのときに思い出したのは、自分より早く生まれた、オレンジ髪の女の子の録画テープ。

誰よりも、人間とロボットが仲良く暮らせることを信じていた少女のこと。

——わたしに、できること……。

H M I A 0 7 型、美秋は、自分にもやるべきことがあると思った。もし、自分に何か起きたら。

『博士、ひとつ、お願いがあるのですが……』

episode—27 「違いは」

日曜日。

部活生徒を除き、日曜日は基本的に学校は休みである。

各々の生徒たちは遊びなど自由を謳歌しているであろう。

同じく、学生である美夏も休みを満喫しており、とある約束の為、商店街へと来ていた。

しかし、待ち合わせ時間より早く来てしまった為、街をぶらついていた。

『学生にとっては遊ぶのも立派な仕事よ』

じゃあ、楽しんできなさいと、舞佳に研究所から見送られてきたのだ。

嬉しそうな表情で見送られたからか、何故か恥ずかしく感じた。しばらく、街をぶらついていた美夏であったが、歩いていて思うことがあった。

——少し、嫌悪感が薄れてきてるのか。

休日ということもあり、商店街は人で溢れている。

美夏が嫌いである人間が。

そんな場所に、長居など以前は出来なかったであろう。

少しでも人間がいけない所に向かっていたはず。

学園生活を送っていれば、嫌でも沢山の人間に囲まれて過ごさなければいけない。

それに慣れた、ということもあるかもしれない。

だけど、それだけでは無いように感じた。

「あの、お節介どものせいだ……」

由夢、義之、麻耶。

彼らとは何だかんだで頻繁に話している。

そして、それを美夏は嫌だとは感じていなかったのだ。

むしろ——。

「美夏は、変わっていったのか」

変わったのか。

それとも、昔に戻ったのか。

彼女には自身の気持ちだが、あまりよく分からなかった。

——だが、変わっていいのか。

今でも忘れられない、嫌な記憶。

人間たちの、悪意しか感じられない言葉。

人間たちの、ロボットにした酷い行動。

それを忘れて、また人間を信じていいのか。

——また、裏切られないだろうか。

『美夏も、美春と同じように、人間と楽しく過ごしたい!』

まだ、美夏が起動されたばかりであり、人間社会の状況を理解していない頃。

美春の録画テープを見た彼女は、人間との学園生活に憧れていた。そのときの美夏にとって、研究所が自身の世界の全てであったのだ。

そんな彼女からしてみれば、テレビ越しの美春が話す内容が外の世界の話の全て。

本当に楽しそうに、嬉しそうに話す美春の学園生活。

憧れないはずがなかった。

美夏も同じように過ごせるのだと信じて疑わなかった。

だけど、その希望は、研究所の外の状況を知ったことにより打ち砕かれたのだ。

絶望し、人工冬眠をした美夏。

そして目覚めた世界は、自分が知る過去より少し優しくなっていない。信じて良いのか怖くなった。

「あ、μが飾られてるよー!」

「ほんとだー、やっぱりホンモノの人間みたいだよね」

周りの言葉を聞き、思考の渦から意識を戻す。

そこにはショウウインドウに飾られる、自分と同じロボットがいた。

——美夏の後には生まれた、μだったか。

市販の人間型ロボット『μ』。

美夏の後には量産型で生まれた存在である。

昔と違い、人間社会に少しずつ普及されている証拠でもある。

しかし、美夏はそれを嬉しくは感じなかった。

——エモーショナル回路に、リミッターが掛けられているのか。エモーショナル回路。

人間の心にあたる、ロボットにとっての大事な部分。それを抑制させられている。

抑制させなければ、人間社会に普及させられなかったのである。

美夏は飾られるμの触ろうとしたが、ガラスで遮られる。

だが、それも気にせず、ただただ見つめる。

——お前は、感情を制御させられて、苦しくないのだろうか。

心を無理やり失くさせられている。

それは、苦しくないだろうか。

辛く、ないのだろうか。

「いや、そう思う感情すら、制限されてしまっているのか」

μのそんな姿をみて、美夏は思う。

自分と彼女の、何が違うのだろうか。

自分も彼女と同じロボットだ。

自分と同じμを、彼女を、周りの人間たちは興味深く見たりしている。

しかし、その視線は、洋服や家電製品を見るのと同じ。

彼ら、彼女らからしてみれば、自分が普段買う商品より高い『モノ』に過ぎないのだ。

——美夏が、ロボットだと知られれば。

変わってしまうのだろうか。

ショウウインドウに飾られたμと同じ視線を向けられてしまうのだろうか。

義之は、ロボットだと知っていても変わらず接してくれる。

しかし、由夢や麻耶は、自分が人間ではなくロボットだと知れば、変



わかってしまうのだろうか。

胸が、苦しくなった。

「あ、おねーさん、ここにいたー！」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには美夏にむけて大きく手を振る勇斗の姿が其処にはあった。

そして、隣には勇斗の手を繋いで一緒に歩く麻耶の姿が。

以前、麻耶が弁当を忘れ、勇斗が学校まで弁当を届けに来たときがあった。

その際、勇斗と麻耶と美夏で一緒にご飯を食べたのだが、その話の最中に勇斗が珍しくわがママを言い、休みに一緒に遊びに行くことになったのだ。

それが今日であり、商店街に美夏がきた理由である。

μをみて色々な感情が浮かび、気持ち沈んでしまっていたが、笑顔の勇斗を曇らせたくなって、美夏は笑顔を無理やり作った。

「おう、勇斗！ ボーツとして待ち合わせ場所、間違えてしまった」「んーん、べつにだいじょうぶだよ！」

「ありがとうな。それで沢井はだ…い…」

勇斗の頭を撫でながら麻耶に話を振ろうとしたが、彼女を見て思わず会話を止めてしまう。

麻耶が、シヨウウインドウに飾られているμを睨みつけていた。

その瞳は、その表情は。

「……あ、ごめんなさいね、天枷さん」

美夏の声に気付いたのか、こちらに顔を向ける。  
その表情は、さきほどの表情とは違っていた。

「ほら、行きましょ、勇斗、天枷さん」

——いまの沢井の表情は。

ロボットに対して何か複雑な感情が見て取れた。

昔、美夏に向けられた恨み、憎しみ。

そして、それ以外の何か別の感情も混じったもの。

——沢井は、ロボットが、嫌いなのか？

それを聞く勇気が、美夏にはなかった。

episode—28 「いなくなるから」

「もう、クリパで必要な備品買うだけだから、つまらないわよ?」

「なに、美夏はヒマだから付いて来たんだ」

だから気にしないでくれ、と。

笑顔で言う美夏に、麻耶は仕方ないなと思いつつも内心は嬉しく感じていた。

平日の放課後。

クリパが近付いていることもあり、必要な備品を買うために商店街へと来ていた。

ひとりで十分持てる量だった為にクラスメイトの手伝いを求めずに行こうとしていたが、美夏と途中で会い、一緒に行くことになったのである。

『以前、沢井には美夏の手伝ってもらったんだ』

手伝わせてくれ、と言う彼女に麻耶はわざわざ拒否する気にはならなかった。

それにしても、と。

麻耶は隣で鼻歌を唄う美夏をチラリと見ながら、改めて思う。

——天柳さんとよく話すようになったなあ。

最初に美夏が持つ本を半分もらって運んだときは、ここまで関わるとは思わなかった。

学校の廊下などで顔を合わす機会が増え、勇斗とも知り合い、休みに三人で遊びに行き。

仲の良い友人みたいな関係になっていた。

自分自身、あまり好かれる性格ではないことを自覚していた。

だからこそ、そんな自分にこんなに関わってくれることに驚きつつも、嬉しく感じたのだ。

自分も何故か、彼女とは話したくなっていた。

彼女には自分の感情が出てしまうのを感じた。  
昔、素直に色んなことを話していた、あの時に。  
美夏が、自分が大好きだった誰かに似ていて――

『ね、麻耶ちゃん』

――違う、そうじゃない：そうじゃ、ない。

自分が浮かんだ人物を必死に否定する。

思い出したくない。忘れて。

昔から思い出してしまいそうなとき、心で自分自身に対して語りかけるための呪文を唱える。

――私には、姉なんていない。わたしには姉なんていない。

小さい頃から、必死に自分の心から消し去るために毎日つぶやいていた言葉。

崩壊しそうな心を、弱い心を守るための呪文。

そうやって唱えて漸く忘れることができた。

乗り越えたはずなのに。

なぜ、また思い出してしまうのだろうか。

「――沢井、大丈夫か？」

表情に出てしまったのだろう。

美夏が心配そうな顔で訊ねてくる。

そんな彼女に、必死に笑顔を浮かべ、大丈夫だと言葉を返した。

忘れたいののに、美夏を見ると思い出してしまいそうになるのは何故だろうか。

もう、思い出したくない。

もう、忘れない。

——そうしないと、わたし。

「お、実際に動いてるの初めて見たわ」

「可愛いじゃん！」

前に多くの人が立ち止まっていた。

よく見ると、メイドの装いをした女性がキャンペーンか何かのチラシを配っていたからだ。

それは、市販の人間型ロボット『μ』であった。

普段はシヨウウインドウに飾られてるμであったが、デモとしてなのか、稼働させてチラシを配っていたのだ。

「つ……、天枷さん、あつちに行こう」

目の前のμを見たくなくて。

美夏に別の場所へ行こうと話しながら逆方向へと向かおうとした。

しかし、急に別の道へ移動しようとしたからか、人にぶつかってしまい、躓いてしまう。

「お、おい、沢井、大丈夫かっ？」

「え、ええ、大丈夫」

若干、足の痛みに辛くなりながらも、立ち上がろうとする。

そんな麻耶に、美夏とは別に声を掛けてきた人物がいた。

「大丈夫、ですか？」

その声に顔をあげると、そこにはメイド姿のμがこちらを見て手を差し出していた。

——おねえ、ちゃん。

その顔が、声が、差し出す手が。

過去をどうしようもなく思い出させた。

『あらあら、麻耶ちゃんったら』

過去の自分が転んだときに。

いつも、助けてくれる大切な人。

『あわてんぼうさんなんだから』

転んだ足が痛くて泣きそうになっても、彼女の声を聞くと安心して泣き止むのだ。

『ほら、わたしの手につかまって』

優しく差し出される手に必死につかまって。

その暖かさに、嬉しくなった。

『まやちゃんはお姉ちゃんなんだから、我慢できるよね？』

そんな姿を思い出してしまって。

目の前の、手を差し出すμが、過去の人物と重なってしまって。

「さわらないでっ！」

麻耶は思わず、目の前の手を払い除けてしまった。

彼女の行動に、声に、μはそのまま困った様子を見せていた。

感情なんてないはずなのに。

思いの外、大きい声だった所為か、周りも麻耶とμに注目する形になってしまっていた。

——わたしは……私は。

頭に色んな感情が浮かび上がり、自分自身で混乱してしまった麻耶は、気付いたら走っていた。

行き先など考えず、あの場から逃げるために。

麻耶が走ってから十数分経ち、気付いたら桜公園へと来ていた。

——なんでよ、なんで。

だが、場所など今の彼女にはどうでもよくて。  
頭に浮かんでしまうのは昔の忘れたい記憶ばかり。

「いまさら、なんでよ」

「沢井……」

ひとりつぶやいていた麻耶であったが、声が聞こえて慌てて振り返ると、美夏の姿があった。

あそこから離れたい一心で走っていたため、一緒にいた美夏のこと  
は頭から抜けていた。

しかし、美夏は走り去る麻耶を追い掛けていたのだ。

そんな彼女の表情に浮かぶのは心配と不安。

意を決して美夏は麻耶に尋ねた。

「なあ、沢井……ロボットが嫌いなのか？」

それは、以前に聞こうとして、聞けなかったこと。

シヨウウインドウに飾られるμに向けていた表情、視線。

あれを見てからずっと気になっていた。

質問された麻耶は、もう疲れていた。苦しかった。だからこそ、隠すこともしなかった。

「きらい、嫌いよ」

誰かに話しかかったのかもしれない。

ひとりで抱え込むのが辛かったのかもしれない。

麻耶は過去について話しはじめた。

---

——なんて、偶然なのだろうな。

麻耶の話を聞きながら、美夏は思う。

彼女と自身が出会ったことは偶然なのだろうか。

麻耶の父親の名前は、沢井拓馬。

それは、μの設計者の名前。

彼は、ロボット研究の第一人者である天枷博士の教え子であった。

だが、彼はμが量産されて店頭に並ぶ前に、この世を去ったのだ。

拓馬は、H M ー A 0 8 型『美冬』をベースにした量産型ロボットの開発に着手。

それが原因で、あちこちの人権団体、女性団体からバッシングを受けたのである。

『販売を中止しろー!』

『人権を侵すロボットを許すな!』

『沢井 拓馬を出せっ! あいつは犯罪者だ!』



謂われなき誹謗中傷。個人攻撃が執拗に続いた。それに耐えきれず、彼は自殺した。麻耶たち、家族を残して。

『人間型ロボット「μ」を販売しまーす、ぜひ見ていってくださーい！』拓馬が自殺し、販売計画は頓挫してたはずなのに。二年も経たないうちに何事もなかったかのようにμは発売された。麻耶は家族をめちやめちやにしたロボットなんかと、一緒にいれないと思った。それが、ロボットを嫌う、憎しむ理由。

——ロボットの所為で、麻耶の父親は死んだのか。ロボットを勝手に生み出しておきながら、壊せと言う人間が嫌いだった。

憎しみの感情を持っていた。しかし、逆に、ロボットの所為で不幸に陥った人たちも居たのだと。美夏は、初めて知った。

ただ闇雲に人間を嫌っていいのか、分からなくなった。

「——これが、私がロボットを嫌いな理由よ」麻耶は俯きながら、質問してきた美夏へと言った。確かに、そんなことがあればロボットを嫌うのにも頷ける。嫌いにならないはずがないのだ。

——だけど、何故だろうな。

「美夏には、沢井がロボットを嫌いなだけには、思えなかったんだ」「なに、言ってるの？」  
どうしてだろうか。

彼女には、麻耶がロボットをただ憎しむ、ただ嫌いなだけには思えなかった。

もしかしたら、そうであって欲しいという、願望も含まれているのかもしれない。

しかし、それだけではないのだ。

「美夏はな、昔、よく恨みや憎しみの視線をたくさん向けられていたのだ」

「……………えっ」

美夏の言葉に、麻耶が戸惑う表情を見せる。

そんな視線を向けられるようには思えなかったのだ。

しかし、事実であった。

人工冬眠する前のこと。

彼女は、人権団体や女性団体等のロボット排斥主義者に憎しみや恨みの視線を数多く向けられた。

視線だけでなく、罵倒も。

そんな視線を覚えている美夏だからこそ。

麻耶がロボットに向ける視線は、ただ憎しみや恨みだけではないと思えた。

「だからこそ、美夏は思うのだ」

そして、麻耶の感情の中に浮かぶものが分かった。

それは憎しみや恨みとは相反する感情。

——憎しみや恨みと同時に、ロボットが好きなのではないかと。

「そ、そんなはずないじゃないっ—」

美夏の言葉に、即座に大きい声で否定する麻耶。

だが、彼女の表情には戸惑いがあった。

だからこそ、美夏は半ば当たっていることを感じた。

美夏は数多くの憎しみや恨みの視線を向けられた。

しかし、それだけではなかった。

少なくともあつたが、好意の視線を、表情を向けられたこともあつたのだ。

それは、白河 暦や水越 舞佳などの所員からである。彼女たちは自分に、ロボットに愛情を持つて接してくれていた。人間嫌いになつていたが、それを感じることは出来たのである。その視線を、感情を、麻耶から感じた。

「なあ、教えてくれないか」  
「だからこそ、聞きたい。  
その理由を。」

「友達として、知りたいんだ、沢井のことを」  
「だからこそ、知りたい。  
その想いを。」

「つ……う……、あまかせ、さん」  
美夏の表情が、声が。  
あまりにも優しいから。  
あまりにも、誰かを思い出させるから。  
一番心の奥底にしまつていた感情が、想いが。  
もう、隠すことはできなかつた。

「……わたし、むかしね」  
「ああ」  
「お父さんと、お母さん、そしてもう一人家族がいたんだ」  
それは、勇斗が産まれる前のこと。  
父と母だけではなく、麻耶にとつてみれば姉のような人がいたのだ。

いや、正確には人ではなく、ロボットである。

「その人は、そのロボットの名前は、美秋」

H M I A O 7 型 『美秋』。

沢井 拓馬が開発したロボット。

母親と父親が両方とも働いているため、麻耶は美秋と小さい頃はほとんど一緒に過ごしていた。

「わたしはね、本当のお姉ちゃんだと思ってた」

まだ幼かった麻耶は、美秋がロボットだとは思わなかった。

いや、ロボットだと知っても、きって彼女にとって姉であることに変わりはないであろう。

「ずっと側にいてくれて、すごく好きだった」

『お姉ちゃんっ!』

『もう、麻耶ちゃんは甘えん坊さんなんだから』

一緒にお話して。

一緒にご飯を食べて。

一緒にお出かけして。

麻耶は美秋と色んなことを一緒にした。

『お姉ちゃん、ほらっ、手っ!』

『ふふ、はいはい。手を繋いで帰りましょ』

彼女の優しい声。表情。

そして、撫でてくれて、繋いでくれる暖かい手。

それが全部嬉しくて。

それが全部、幸せで。

ずっと、その生活が続くことを疑っていなかった。

しかし。

「そんなときにね、起こったの」

いつものように学校から帰ってきて、リビングへと向かった麻耶。

そこで目にしたのは――。

『お、お姉ちゃん……なんで』

『麻耶ちゃん……』

それは、後になってロボット排斥主義者による心ない犯行だと聞かされた。

その犯行後の、壊されていた姉の無残な姿を麻耶は見てしまったのだ。

まだ、麻耶が帰ってきたときには、壊されながらも最後に意識があった。

そして、彼女の最期の声を聞いたのだ。

『……一緒に、いてあげるって……約束、したのに』

『やだ……やだよ……』

『ごめんね……』

幼い彼女には、あまりにもショックな出来事だった。

大好きな姉が死んだのだ。

悲しくないはずがなかった。

だが、そんな悲しみに暮れる麻耶に、さらなる追い打ちがあった。

『え、お姉ちゃんの、おそうしきはっ。』

小学生ながらに、麻耶にも知識があった。

死んだ人を弔うため、葬式を行うことのだと知っていたのだ。

大好きな姉がせめて天国に行けるように、祈るのだと、見送るのだと決意した。していた、のである。

『わたし、知ってるもん！ 死んだひとのために、おそうしきするんでしょ！』

しかし、姉の葬式が行われることはなかった。

なんで。

『このニュースおかしいよ……キブツハソンって、モノを壊したときの、つみなんだよね』

大好きな姉が殺されたのだ。

その犯人を逮捕したニュースでは、「器物破損」の罪で逮捕したと報道されていた。

『お姉ちゃんはころされたんだよ！ サツジンザイじゃないのっ！』  
姉を殺した人物は、モノを壊した罪で逮捕された。

なんで。

そう必死に母親に、父親に、大人に訴えた。

だが、そんな麻耶に、まわりはワガママを言う女の子の扱いをした。

『わたし、言ってること、まちがってないもん！』

なんで——。

必死に訴えた彼女に、あるひとりが困ったように伝えたのだ。

——ロボットだから、と。

意味がわからなかった。

いや、わかりたくなかった。

「お姉ちゃんは、死んだんだよ！」

「……さわ、い」

もう、感情を抑えることができなかった。

麻耶は涙を溢れさせ、強く感情を発しながら話す。

ロボットであるはずなのに。

美夏は彼女をみて、すごく胸が苦しくなった。

「それなのに、何でロボットだからって吊ってくれないの！」

姉にも、同じ感情があるのに。

まわりの人と、変わりないのに。

「なんでお姉ちゃんを殺したのに、罪がそんなに軽いのっ！」

ロボットだからって破壊されたら脳の記憶データは復元できない。

それは、人という死と何が違うのだろうか。

そう訴えても。

小さな少女の話なんて、ちゃんと聞いてくれなくて。

心が、壊れそうになった。

だから。

「だからっ、わたしは、お姉ちゃんを、ただのモノだと思いつい込むことにしたの」

姉は人間ではなく、ロボット。

ただのモノなのだ。

いや、そもそも姉などいなかったのだ。

そうやって必死に思い込んで。

必死に、大切だった姉を忘れようとした。

そして、乗り越えた、はずだったのに。  
なんで。

「なんで天枷さんをみて、またお姉ちゃんを思い出しちゃうの……」  
何故、美夏と一緒にいると嬉しく感じるのか。  
それは、彼女を通して大切な姉を思い出したからだ。

「思い出したくないのにつ、わすれたいのにつ！」  
もう、思い出すのは嫌だ。  
姉の死を乗り越えたわけじゃなかったのだ。  
ただ、辛かったから忘れようとしただけ。  
ちゃんと死を受け入れられたわけじゃなかった。

「もう、やだよ……」  
だからこそ、もう耐えることが出来なかった。

「つらいよ……いたい、よ」  
胸が苦しくて。辛くて。

もう何もかもが嫌になった。  
だが、そうやって泣きじやくる麻耶を。  
殻へ閉じこもるようにうずくまる彼女を、優しく抱きしめる存在が  
いた。

「辛いことを話させてごめんな、沢井」  
後ろから抱きしめ、優しく彼女の頭を撫でる。  
泣きじやくる麻耶の心を、少しでも和らげてあげたくて。

「そして、ありがとうな、話してくれて」  
麻耶の心の内を知った。  
その所為で彼女を傷付けてしまうことになり、申し訳なく感じる。  
しかし、ロボットを、大切な姉だと、真剣に想ってくれたのを知り、



嬉しかった。

いつか本当に美秋の死を乗り越えるときが来るはずだ。それは別にいまじゃなくて良い。少しづつ、少しづつ乗り越えれば良いのだ。

「大丈夫だ」

だからこそ、美夏はもう、十分に満足した。あとは麻耶が、幸せでいてくれれば後悔はなかった。

「——だいじょうぶ」

その為には。

姉を思い出させる存在が近くにはいけない。

だから。

「——姉を思い出させる存在は、いなくなるから」

「ねえ、考え直すつもりはないの？」

「ないな」

なるべく早めに進めて欲しい、と。

美夏は戸惑いの様子を隠せない舞佳へとお願ひするのであった。

天枷研究所。

舞佳が養護教諭ではなく、本業の所員として作業しているときに、美夏が彼女のもとへと訪れた。

話の内容は、人工冬眠について。

——なんで、急に。

また以前のように洞穴で人工冬眠をさせて欲しいと。

美夏から申し出が来た。

確かに、間違えて起動された当時は、相当に嫌がっていた。

学園生活を送るのだから、明らかに嫌悪を感じていたのも理解していた。

しかし、少しずつではあったが、彼女が笑顔でいることが増えたのを舞佳は見ていた。

義之や由夢など、人間の友達が出来て。

最初は渋っていた様子を見せたが、先日は楽しそうに話しているのを見掛けて。

「順調に人間との生活に馴染んでいるように思えた。」

「思えた、はずだったのだ。」

「それなのに、何故。」

舞佳の様子で何を聞きたいのか分かり、美夏は笑顔のまま彼女に伝える。

「水越博士、美夏はな、別に人間が嫌いになったから眠りたいわけじゃないんだ」

「それなら、なんで……」

美夏の言葉になおさら戸惑いを見せる舞佳。

そう、舞佳に言った通り、別に人間と過ごすのが嫌になったわけじゃないのだ。

人間に対して抱いた憎しみも少しずつ薄れていくのを感じた。

昔、ロボットにした仕打ちを忘れたわけじゃない。

だが、人間全員に憎しみを抱くのは違うのだと分かっただけのこと。

ただ、知ったのだ。

「人間にもな、ロボットの所為で辛い目に遭ったやつがいるのを、美夏は知った」

別にロボットが人間を直接ヒドい目に遭わせたわけではない。

しかし、ロボットに関わった所為で悲しんだ人達はいたのだ。

誰か悪いと言えば、直接手を下した犯人や、暴言を発した権利団体や女性団体であろう。

しかし、それだけじゃなくて。

「まだな、ロボットを受け入れるには、時代が早かったのさ」

ある程度、ロボットが人間社会に普及されたとはいえ、まだロボットに対する世間の風当たりは厳しい。

まだロボットと人間が手を取り合うにはまだ早かっただけのこと。

それはきつと、仕方がないのだ。

だが、今は無理でも。

未来への希望を、美夏は感じることが出来た。

「桜内は、ロボットである私に変わらず接してくれた」

初めこそ、勝手に起動させたことに怒りを感じていた。

しかし、今になっては彼には感謝しかなかった。

何だかんだで義之はロボットである美夏を受け入れてくれていたのだから。

そして、何より――

「ロボットを、家族として慕っていた人がいるのを、美夏は知ることが出来た」

まだ、死を乗り越えることは出来てなかった。

それでも、それだけ姉と呼ぶロボットのことを慕っていたのだ。大好きだったのだ。

そこに、美夏は人間とロボットが手を取り合う未来を視ることが出来た。

信じることが出来たのだ。  
だからこそ。

「水越博士、ありがとう。とても良い学園生活だった」

「美夏、あなた……」

本当に嬉しそうに笑う美夏に、何も言うことが出来なかった。

「さて、次に目覚めるのは五十年後か、百年後か」

いつになっても良い。

だが、目覚めたときに、義之や由夢、麻耶の子供か孫と逢えたら幸せだなと思う。

そのときを想像して笑いながら、美夏が思い出すのは、自分にとっての切っ掛け。

『人とロボットが仲良く楽しく暮らせているでしょうか』

未来は明るいのだと、信じて疑わなかったオレンジ髪の女の子。

彼女の映る録画テープを観て、美夏は希望を持ち、そして期待を裏切られて絶望し、最後に――

「大丈夫だ、美春」

彼女の言葉を思い出し、その言葉へと返答する。  
力強く、笑いながら。

「未来はきつと、明るいものさ」

それを信じて見守っていてくれ。

そう話す美夏は、明るい未来を信じていた。

episode—29 「美秋」

「なんで、ですか」

保健室に呼び出された義之は、舞佳の話を受け入れられないでいた。

それも仕方ない話かもしれない。

本当に突然のことであつたから。

美夏が機能停止し、また人工冬眠をするという話。

あまりにも急の出来事であつた。

「理由は、わからないわ」

義之の問いに、舞佳は首を横に振る。

彼女自身、正確な理由を聞いたわけではなかったのだから。

でも、断言できることはあつた。

「美夏はね、人間が嫌いになつたとか、愛想を尽かしたわけじゃなかつ

た」

学園生活を過ごせたことを感謝された。

幸せだったのだと、嬉しそうに笑いながら。

そして、桜内に伝えてほしいと舞佳は頼まれていた。

「ありがとう、って桜内くん伝えて欲しいって美夏に言われたわ」

「あいつ……」

最初は睨まれっぱなしだったが、少しずつ仲良くなれているのを感じた。

義之にとって、人間だとかロボットだとか関係なくて。

仲の良い、生意気な後輩だったのだ。

だからこそ、こんな別れは納得できなかつた。

「あいつに、会わせて、ください」

直接、聞かなければと思つた。

舞佳も義之がそう言うと言想していたのか、特に否やとは言わなかつた。

義之が話しても美夏の決心が変わらないかもしれない。  
しかし。

「きつと、会わないと後悔する」

美夏が次にいつ目覚めるのか分からないのだから。

その為にも、しっかりお別れした方が良い。

「そうね……次に彼女が目覚ますときに、私たちは死んでるかもしれないもの」

ガタつと。

保健室の扉に何かぶつかるの音がした。

そして、その後走り去る足音が。

慌てて義之が保健室の扉を開け、廊下を確認する。

その時には走り去る人物は一瞬だけしか見えなかつた。

だが、その後ろ姿には見覚えがあった。

「委員長……？」

——どうして、なんで。

舞佳と義之が話していた内容を聞いてしまった麻耶の頭に浮かぶのは、疑問ばかり。

『大丈夫だ、だいじょうぶ』

昨日、麻耶は美夏にすべてを打ち明けた。

そして、泣きじやくる彼女の頭を美夏はただただ優しく撫で続けてくれた。

泣き止み、家に帰ったあとのこと。

麻耶は泣いていたときに美夏がつぶやいた言葉が脳裏に甦る。

『——姉を思い出させる存在は、いなくなるから』

優しくつぶやいた彼女の言葉は、別れを感じさせるものがあり、不安になった。

——わたしの為に学校をやめるだなんて、そんなこと……。

あるはずがない、と。

そう思うも、何故か不安は拭えなくて。

だから次の日に学校の朝のHRが終わった途端に美夏がいるはずの教室へと向かった。

しかし、そこには目的の人物は居なくて。

美夏と同じクラスメイトに訊ねると、体調を崩してお休みとのことだった。

「ほんとに、天枷さんが体調崩しただけよ」

自分自身で本当にそう思っていないって分かっているながらもつぶやく麻耶。

不安が増す麻耶に聴こえてきたのは、とある生徒を呼び出す放送。

『3年3組、桜内義之くん。3年3組桜内義之くん、至急保健室まできてください。繰り返します——』

——たしか、以前も桜内は越水先生に呼ばれてた。

そのときは美夏も一緒に呼び出されていたのだ。

よくよく考えれば、担任でもなく、学園長や生徒会でもなく保健の教諭に呼ばれるのも不思議な話だと思った。

そして、もしかしたら二人は美夏のことを何か知ってるかもしれないと考えた。

ただの推測。

いや、推測というよりも、願望のほうが強かったかもしれない。

願望交じりで保健室へと向かった麻耶。

その向かった先の保健室にいた舞佳と義之は、美夏の情報を知っていた。

彼女が望んでいた以上のことを。

——なんで。

理解できなかった。



いや、理解しなくなかった。

天枷 美夏がロボットだった、だなんてことは。

麻耶は気付いたら自宅に帰宅していたのだ。

授業をサボってしまったのか、それとも授業が終わって帰ってきたのか。

どうやって帰って来たかさえ、覚えていなかった。

そんな些細なことさえ気にする余裕がなかった。

『理由は、わからないわ』

思い出すのは、さきほど義之と舞佳が話していた内容。

美夏自身が再び眠りに付くと話し、舞佳はその原因が分からないと言っていた。

だが、麻耶は分かってしまった。

彼女が眠りにつく理由——原因は、わたしなのだ。

そう理解しながらも彼女が語るのは——

「ロボットだって黙って学園に入るなんて、いけないんだから」

人間だと偽って学園に入学なんて許されるはずがない。

自分から辞めるのだから当たり前なんだ。

だから、構わない。

「べつに、眠りにつきたきや、つけば良いじゃない」

美夏はロボットだった。

自分たち家族が不幸になる元凶の、ロボットだったのだ。

だから、かまわない。

「わたしは別に、悪いことなんて——」

何もしてない。

そう、言おうとしたのに。

『ぬ、別にこれぐらい美夏ひとりで持てる！』  
何故、美夏との出来事を思い出してしまうのか。

『美夏は、天枷 美夏だ。よろしくな』

そんなに長い付き合いではない。  
短い付き合いの、ただの後輩だったはずだ。

『なに、美夏はヒマだから付いて来たんだ』

しかも、人間ではなくロボットだったのだ。  
だから。

だから、別に彼女のことなんて。  
どうでも良いのだと、言おうとしてるのに。

『——大丈夫だ』

『——だいじょうぶ』

『——姉を思い出させる存在は、いなくなるから』

「最悪だ、わたし……っ……」

ロボットは何もしてないのに。

自分たちが不幸になったのはロボットの所為だと、八つ当たりして。  
て。

姉の死から逃げていたのは自分が弱かったからなのに。

思い出させる美夏存在を否定して。

そして、美夏自身に目の前から消えると言わせてしまつて。

「なんてっ、弱いの、わたしは……」

自分が悪いのだと理解したのに。

美夏に謝って眠りにつくのを止めるように言うべきなのに。

それでも、自分の足が進まなくて。

今更謝っても許してもらえないはずがない

いくら自分が言葉を告げても、考え直してくれるはずがない。

そうやって自分自身に言い訳をして。

自分の弱さを思い知らされ、どうすれば良いか分からず、頭の中がぐちゃぐちゃになるように感じた。

「麻耶、大丈夫？」

「お母さん……」

そんなとき。

彼女を呼ぶ声が聴こえ、振り返ると其処には自身の母親の姿があった。

「なんで……?」

「勇斗がね、麻耶が何も言わずに部屋に閉じこもったって言ってたから、心配になってね」

「——それで、なにかあったの？」

麻耶の母親は、父の拓馬が死んだあとは女手一つで自分や勇斗を育ててくれた。

研究所から生活資金が渡されたが母親は手をつけず、無理して働いていた。

だが、無茶を死過ぎたせい仕事場で倒れてしまい、今は自宅で療養中であつたのだ。

いまはあまり立ち上がるのも辛いはずなのに。

娘が心配だからと、自身のことは後回しにして。

そんな母を心配させない為に、甘えないようにしようと思つてたはずなのに。

「お母さんっ……わたし……わたしっ」

もう、ひとりですれれば良いか分からなかった。

「そっか、そうなんだ」

麻耶は今までの話をすべて母に打ち明けた。

母自身が忘れたいだろう、ロボットの話も含めて。

麻耶の母は彼女が泣きながら途切れ途切れに話す内容をただただ真っ直ぐと瞳を見つめながら聞いてくれたのだ。

「お母さん……わたし、どうすれば良い？」

話し終わったあと、麻耶は母に訊ねる。

自分は何をすべきなのか。

いや、やらなければいけないことは分かっていた。

だけど自分だけではネガティブな考えばかりが浮かんで動けなかったから。

応援でも叱りでも何でも良かったから、後押しが欲しかったのである。

だからこそ。

「麻耶、ちょっと待っててもらえるかしら」

渡したいものがあるの、と。

母親が自身にそう言い残して部屋を出ていったのは予想外の何物

でもなかった。

「麻耶……はい、これを」

そして、渡されたものは一本のビデオテープ。

何処かにしまいつ放しだった為か、少し古さを感じさせるものがあつた。

「これって……？」

「麻耶にね、ホントは昔から渡そうとしてたもの」

もともと、彼女は麻耶にこのテープを早く渡そうと思っていた。しかし、幼い頃の麻耶をみて、渡すことが出来なかったのだ。

「麻耶は、必死に忘れようとしてたから」

必死に忘れようとしている。

なればこそ、見せるべきではないと思い、ずっと部屋のダンスの奥深くに仕舞い込んでいた。

だけど、麻耶を見て、もう仕舞い込む必要がないのだと感じた。

「きつと、今のアナタなら……いや、今のあなただからこそ、見る必要があると思うの」

麻耶の為になるのだと信じて。

母親は麻耶に告げる。

——美秋からのメッセージよ、と。

episode—30 「桜もなく、奇跡もなく」

麻耶は母親に渡されたビデオテープを手に、テレビの前まで来ていた。

『美秋からのメッセージよ』

母親から渡された、一本のビデオテープ。

自分にとっては姉の様な存在であった、美秋からのメッセージがこのテープには録画されていると言っていた。

——なんのために？

彼女は直接ではなく、わざわざテープにメッセージを録画していたのだろうか。

昔、麻耶と美秋は学校や研究所などに行ったりと離れることはあったが、それでもほとんど毎日一緒に居たのだ。

美秋が、死んでしまう前は。

彼女は、何の為に撮ったのだろうか。

彼女は、誰の為に残したのだろうか。

様々な疑問が浮かんでは消える中、ふと母親が話していた言葉を思い出した。

『きつと、今のアナタなら……いや、今のあなただからこそ、見る必要があると思うの』

母親は言った。

今の自分なら。

今の自分だからこそ、見るべきなのだ。

——これを見れば、わたしは何かが変わるの？

傷付けた友達のもとに行く決断ができない、弱虫な自分が変わるこ

とが出来るのだろうか。

わからない。

わからない、けれど。

「見る、べきよね……」

不安が頭を過るが、震える手を抑えて、

麻耶はビデオテープをデッキに入れ、再生ボタンを押した。

episode—30 「桜もなく、奇跡もなく」

『博士、撮れてますか?』

『ああ……大丈夫だよ』

其処には、久しく聴かなかった声が。

久しく見ていなかった、懐かしい存在が映った。

「おねえ、ちゃん」

H M—A 07型 美秋。

父が開発したロボットであり、かつて慕っていた姉の様な存在。

夢で見たり、思い出したりしたことはあった。

しかし、画面越しとはいえ、こうして顔と声を見たのは”あるとき

”以来であった為、麻耶は思わず震えた声で彼女を呼んでしまう。

録画に映る美秋は博士の返事に安堵し、そしてまっすぐに前をみつ

め、微笑みを浮かべながら口を開く。

『まやちゃん』

自分の名前を呼ばれ、録画と分かっているでもドキツとしてしまう麻耶。

だが、名前を呼ばれたことにより一つ気付く。

この録画は、自分に向けたビデオテープなのだ。

——なんで、わたしに……？

麻耶の疑問を他所に、美秋は話を始める。

『まやちゃんがこのテープを見てたらね、お姉ちゃん……ちよつと、遠いところに行ってるかもしれないんだ』

遠いところ。

それはいったい何を指すのだろう。

単純に距離的な意味合いで遠くに行く、という話であろうか。

もしくは——

『黙っていないなくなって、ごめんね』

麻耶は理解した。

いや、理解してしまったと言った方が正しいのかもしれない。

『でもね、まやちゃんに話しておきたいことがあって』

これは。

このテープは。

『こうやって、メッセージを残すことにしたんだ』

美秋の遺言なのであると。



「……どうして」

無意識に出た言葉は、何に対して呟いたものか自分自身でも分からなかった。

だが、麻耶は頭の中で、ある内容を思い出す。

これは、後で過去のニュースや新聞を調べた際に知ったことであつたが。

美秋と一緒に過ごしていた時、既にロボット排斥主義者たちが暴動などを起こし始めていた。

——どうしてなの。

しかし、よくよく考えれば、研究所の人達が気づかないはずがないのだ。

研究所ではなく、麻耶の家にいることの危険性に。

——それなら、なんで。

研究所に避難しなかったのだろうか。

麻耶の側に、居てくれたのだろうか。

こんな、遺言みたいなメッセージを残してまで。

色々な事実に動揺し続ける麻耶であるが、美秋から麻耶へのメッセージはこれからであった。

『ひとつね、まやちゃんに黙っていたことがあるの』

これは、あの頃の麻耶にホントは伝えたかったこと。

『わたし、ロボットなんだ』

美秋と一緒に居た頃は、彼女がロボットなのだと言ったことも考えたことはなかった。

本来であれば、あんな美秋の姿を目撃していなければ知らなかった  
真実。

しかし、麻耶が気になったのは、そこじゃなくて。

——あんな表情、初めて見た。

麻耶が覚えている昔の記憶にいる美秋は、ほとんどは笑顔が多かった様に思える。

こちらが見ていて嬉しくなるような笑顔。

『隠して、ごめんね』

だからこそ、麻耶は驚いたのである。

見ている者の胸をギュツと締め付けるような、切なくなる笑みを浮かべる美秋の表情に。

美秋はそのまま話を続ける。

『まやちゃんに最初に会った頃ね、まだわたしは生まれたばかりだったんだ』

麻耶と最初に会う数週間前。

H M I A O 7 型 美秋ははじめての起動が行われた。

データとして色々な情報は脳にインプットされていた彼女であったが、起動されたばかりの為、まだ人間社会にすぐに馴染むことは難しいと研究所員は判断していた。

色々な話し合いの末、美秋は生みの親である沢井 拓馬宅の娘の世話係を担当することが決定した。

両親ともに自宅に居ることが少なく、娘の面倒を見てもらう人材が欲しかったこと。

そして、美秋がロボットと知らない人物と暮らし、違和感なく生活を過ごせるか確認したいという意見が合致した為である。

——博士のお子さんの世話をしっかりと遂行しないと。

そのとき、美秋の中にあつたものは、ロボットとして人間に益がある行動をすべきという義務感。

まだ所員以外とは関わりがなく、脳のチップにインプットされた

データを頼りにしていた段階だからロボットの要素が前面に押し出されていたのだ。

しかし、麻耶と美秋の初対面のとき。

——お世話係として側にいることになりました、美秋です。よろしくお願ひします。

——おせわ？ うーん、いつしよにいてくれるってこと？

——はい、その通りです。

——じゃあ……じゃあ！ おねえちゃんは、わたしのあたらしいかぞくだねっ！

『まやちゃんに初めて会ったときね、なにか変わった気がしたんだ』  
こちらを喜びの表情で見ってくる麻耶に、美秋は胸の中で暖かい何かを感じた。

それが何か、すぐには分からなかったけれど。

——もっと、ふつうに話してっ！

——普通って言いますと……。

——かぞくなのに、そんな話しかた、しないもん！

麻耶と一緒にいて。

データだけでは分からなかった、何かを感じて。

——はい、これっ！

——この絵は……わたし？

——うん、おねえちゃんの絵をかいたから、あげる！

麻耶が描いてくれた、笑顔の自分と麻耶のふたりが手を繋いでいる絵。

ずっと、大事に保管しておきたい。

そう思ってしまうほどに、喜びを感じて。

——おとうさんも、おかあさんも、わたしのことキライなんだっ！  
——そんなこと。 そんなこと、絶対ないよ、まやちゃん。

——だって、いつも、しごとがいそがいそがしいって。

わたしを見てくれない。

わたしと一緒にいてくれない。

寂しいと部屋の端で泣き崩れる麻耶に、胸が締め付けられる悲しみを感ずる。

——泣かないで。

インプリントされた大量のデータをもとに最適解を出す前に、美秋は言葉が出てしまっていた。

——わたしがずっと、まやちゃんの側にいるから。

——ほんとに？ ずっと一緒にいてくれるの？

——うん、おねえちゃんがずっと側にいるよ。

きつと美秋が気付いたのは、この時だ。

自分の言葉に泣きながらも嬉しそうな表情を浮かべる麻耶を見て、  
ようやく自分の気持ちを理解した。

わたしは。

わたしは、もう。

『まやちゃんのことを、大好きなんだって』

「おねえちゃん……」

義務感じゃなかった。

初めて会って、自分のことを新しい家族と言ってくれたあの時から、美秋にとっても麻耶は大切な家族と想っていたのだ。

だからこそ、麻耶が喜んで嬉しくて、悲しんで辛くなったのだ。

もう、麻耶には泣いてほしくない。

だから。

——おねえちゃんっ、やくそくっ！

大切な妹が差し出してきた小指に、自分の小指を絡ませて、誓ったのだ。

——ゆーびきーりげんまーん、うーそつーいたーら、はりせーんぼーんのーます！

指切りげんまん。

よく約束の際に使われたりもするが、本当に約束が破られたって代償もない。あくまで形式的なもの。だけ。

『わたしにとつてね、絶対に叶えてあげたい、大切な約束になったの』  
本来であれば、今回の世話係は人間社会に馴染む前の練習のようなもの。

そのように所員から、博士から言われていた。

しかし、美秋にとつては他の何よりも優先したい、守りたい大切な約束になったのだ。

いや、きつとそれだけじゃない。

『わたしが、まやちゃんの側に居たかったの』

約束だから。叶えてあげたいから。

それも勿論あるが、家族として一緒に居たい気持ちも美秋自身あったのだ。

『だけど、けどね』

大切に想うからこそ、不安がでてきた。

それは、麻耶に最初から隠していたこと。

『おねえちゃん、ロボットなの』

血が繋がらないどころじゃない。

そもそも、人間ですらないのだ、自分は。

『それを、言うことができなかったんだ』

もともと、人間社会に馴染む為にロボットだとは言わず黙っていた。しかし、大切な妹だと思っていたからこそ伝えるべきだと考えていたのだ。でも、言えなかった。

理由は様々だ。

感情のあるロボットは人間社会に影響を及ぼすと、色んな団体から誹謗中傷を受けていた。

そんなロボットを姉と慕っていると知られば、麻耶が苛められる要因になってしまうかもしれない。

でも、そういう理由以上に。

『まやちゃんに嫌われるのが、恐かったんだ』

ロボットだと麻耶に打ち明けて。

それで拒絶されてしまうことが恐かった。

今まで姉と慕って笑いかけてくれた彼女を見れなくなると思うと、話す勇気が持てなかった。

『言えなくてごめんね』

そして、寂しそうに笑う。

『こんなんじゃないや、お姉ちゃん失格かな……』

「そんなことないっ！」

画面越しだと。

録画テープだと、わかっているのに。

「べつに人間じゃなくても！ ロボットでも！」

言わずにはいられなかった。

叫ばずには、いられなかったのだ。

目から溢れる涙で、にじんで映る姉を見ながら。

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんに決まってるじゃないっ！」

今まで大好きな姉の死から目を逸らしていた。

姉なんて居なかったのだと、自分に思い込ませてまで。

それでも。

こうやって実際に本音を知れて。

幼い頃の自身の約束をすぐく大事にしてくれたのを知って。

嬉しくないはずがなかった。

『でもね、まやちゃんの幸せを、祈らせてほしいの』

自分のことを、こんなにも想ってくれていたのだから。

だけど。

だけど、言わずにはいられなかった。

「わたしはっ、そこまで約束を守ってほしくなかった！」

美秋は、自分との約束を守るために天枷研究所に避難せず、変わらず麻耶の側にいってくれたのだ。

それこそ、最期するときまで。

「…っ…、わたしは…わたしはっ！」

でも、約束なんかより。

「お姉ちゃんが生きてくれるなら、それだけで、よかったのにつ…。」

継りついていた画面から崩れ落ちる。

例え、ずっと側にいれなくても。

例え、人間ではなくロボットだとしても。

大好きな姉が、死なずに生きていてくれれば、それだけで嬉しかったのに。

『今までありがとね』

『大好きだよ、まやちゃん』

「ごめんっ、ごめんね、お姉ちゃんっ！」

大切に想ってくれていたのに。

そんな姉を忘れようとしてしまった。

そんな自分がやったことを後悔して。

謝っても、謝る相手がないことが悲しくて。

「お姉ちゃん……、おねえちゃん……」

麻耶は姉を呼び続ける。

溢れ続ける涙を止めようともせず。

大切な存在がいなくなった悲しみを、すべて出し尽くすように。

そこには、何も奇跡などなく。

大切な人の死を哀しむ姿があった。

だが、ようやく麻耶は、美秋の死をちゃんと受け入れることが出来たのかもしれない。



「おねえちゃん、だいじょうぶ？」

どのくらい泣いていたのだろうか。

分からないが、枯れるまで泣いた後のこと。

麻耶が泣き叫ぶ声を聞いていたのか、勇斗が心配そうな表情を浮かべて見つめていた。

そんな勇斗に笑いかけ、頭を撫でる。

「……うん、もう大丈夫」

後悔はある。

悲しみはある。

しかし、前を向くことは出来るようになった。

だからこそ。

「勇斗、お姉ちゃんね、出掛けないといけないんだ」

自分がやるべきことは、行動は、決まった。

立ち竦み、ひとりじや決められない弱虫な自分は、そろそろ卒業するべきであろう。

——だって、わたしは。

「帰ってきたら、一杯教えてあげたいことが、伝えたいことがあるんだ」

「なんの、おはなし？」

勇斗に伝えなければいけない。  
今まで伝えてなかった分、教えてあげないといけない。

「わたしと勇斗に、自慢のお姉ちゃんが居たってこと！」

——わたしは、自慢のお姉ちゃんの妹なんだから！

episode—31 「少女とロボットは、希望の夢を見るか」

「天枷……」

「なんだ、桜内…来たのか」

水越博士にお別れの伝言をした筈なのだがな、と。

美夏は自身を見つめる義之に、少し気不味げな様子を見せながら話した。

天枷研究所。

再び洞穴で眠りにつく為、研究所で待機していた美夏の前に、義之が姿を現した。

彼が来た理由について、美夏は察する。

「水越先生から聞いたよ…なあ、何でなんだ？」

人間と過ごすことに嫌気が差した、という理由ではなかった。

水越博士に良い学園生活だったと伝えたのだから、楽しんでいた筈なのだ。

だからこそ、直接聞かなければ納得できなかった。

「水越博士からは聞いていないのか？」

「少しだけ。でも、あんな曖昧な言葉で納得出来なかった」

ロボットの所為で辛い目に遭った人間がいた。

ロボットを受け入れるにはまだ早かった。

舞佳から聞いた、美夏の言葉。

美夏は誰かがロボットに関わることで不幸になったのを聞いた、もしくは目撃したのかもしれない。

それで、まだ人間とロボットは一緒に居ない方が良く感じたのか

もしれない。  
だけど。

「天枷が、その誰かを不幸にしたわけじゃないだろう？」

その誰かの不幸は、美夏に直接関連があるのか。

ただ同じロボットだからという理由で眠りにつく必要はないのではないか。

「いままで通りじゃ、駄目なのか？」

それだけではない。

美夏が学園生活を過ごす為、彼女がロボットとバレてはいけない。

今のところ、義之が知る範囲では彼女がロボットだとは知られていないのだ。

バレない限り、今まで通り学園生活を過ごすでは駄目なのか。

それに――

「友達がいなくなったら悲しいだろう」

急に友達が居なくなつて。

そんなの、悲しいに決まってる。

もう少し、考えても良いんじゃないか。

必死に問いかける義之。

――なんだかな。

そんな彼を目にして、感じたのは喜び。

何だか、くすぐったい気持ちになつた。

美夏は穏やかな表情のまま、口を開く。

「桜内、ありがとな」

「え、あ、天枷？」

彼女から発せられた言葉に戸惑う義之。

「桜内が必死に止めようとしてくれるのが分かって、美夏は嬉しい」  
義之の質問に対して答えたわけではない。

「だから……ありがとう」

だが、何故だろうか。

嬉しいと言いながら笑顔をこちらに向ける美夏を前に、言葉が詰まってしまふ義之。

そんな彼を見ながら、美夏は言葉を続ける。

「今はバレてないかもしれない……でもな」

いつか知られてしまうだろう、と。

何か理由や推測があつたわけではない。

美夏は何となく、そう思ったのである。

——それに。

一番先に知られるとしたら、その相手は麻耶だとも。

かつて天枷研究所の所長であつた天枷博士は、自分の娘の容姿を模したプロトタイプを開発した。

基本的に、その後開発されたロボットたちはプロトタイプの容姿に似ているのである。

麻耶が美夏やムを見て、姉と慕っていた美秋を思い出すのも仕方ないのだ。

そして、このまま関わっていたら、いつかはきつと麻耶も気付いてしまうはずだ。

美夏が、ロボットなのだ。

——それは、ダメだ。

ロボットだとバレることで、学校を辞めさせられる。

それだけならまだ良いだろう。

最悪、処分されるかもしれない。

でも、問題はそれじゃなくて。  
美夏が一番気にしてるのは――

――沢井が……また、苦しむかもしれない。

今だって、自分が側に居た所為で、死んでしまった姉を思い出して  
苦しんでいた。

だが、自分がロボットだと知ること、更に彼女が苦しむことにな  
るかもしれない。

彼女は。

沢井 麻耶は、ロボットが嫌いだ。

だけど、それと同じくらい、ロボットが好きだ。

――沢井は、優しいやつだ。

だからこそ、自分がロボットだと知られ、自分が処分されたとき。

彼女は苦しんでしまうと思った。

だから。

「桜内、頼むよ」

バレル前に。

彼女の前を去るべきだと思った。

「友達を、美夏は苦しめたくないんだ」

義之や由夢は、美夏にとって大事な友人だ。

だけど、それと同じくらいに、いや、それ以上に麻耶は、彼女にとつ  
て大切な友人であったのだ。

どっちを取る、とかではない。

どっちも大切だけど、悲しむ麻耶の為に、眠りにつきたいと思った。

義之が引きとめてくれるのは、嬉しい。

それを無視し、無理やり眠りにつきたくなんてない。

だから――

「笑って、見送ってくれないか？」

「…あま…、かせ……………」

美夏の笑顔と、彼女が語る言葉に、何も言い出すことが出来なくて。

義之は、自分がどうすれば良いのか、分からなくなった。

——こんな別れ方なんて、だめだ。

だけど、自分では彼女を止めることが出来ないと思ってしまった。

どうすれば良いか、分からなくて。

そんなとき。

義之と美夏がいる研究室の扉が、突然開いた。

其処に姿を現したのは、舞佳をサポートしているロボットである  
μ。

彼女は美夏に対して目的を告げる。

「貴女に、会いに来た方をお連れしました」

そう言ったμの後ろから姿を現したのは——

「はあ、はあ……………あまかせ、さん」

走ってきたのだろうか。

息切れをしながらも真剣にこちらを見つめる、麻耶の姿が其処には  
あった。

——なんで、どうして。

何故、彼女がこの場に來たのか。

美夏は目の前に姿を現した麻耶に、混乱してしまう。

だって、知らないはずなのだ。

何も、告げてないはずなのだ。

それなのに、どうして。

混乱する美夏を他所に、麻耶は歩き出し、彼女に近付く。

そして。

「なんで、眠るなんて言うのよ」

「なんで、沢井がそのことを……」

戸惑う美夏に、麻耶は自分が知った理由を述べる。

彼女が最期に言った言葉に不安を覚えたこと。

次の日に、不安になって彼女の教室へ向かったが、休んでいたこと。

義之が放送で舞佳に呼ばれるのを聞き、保健室へ向かったこと。

そして、全てを知ってしまったこと。

「そうか、知られて……しまったんだな」

美夏から出てきた言葉は掠れていた。

一番知られたくない相手に、知られてしまった。

その為に、義之や舞佳以外には伝えるつもりなんてなかったのに。

もう、仕方がないと思った。

「沢井、ほんとうに、ごめんな」

何に對してかと言われると、全てだと思った。

「美夏は、沢井を苦しめるつもりじゃなかった」

麻耶は、美夏にとって大切な友達となった。

だけど、彼女がロボットに對して色々な感情を、トラウマを抱えているのは知らなかったのだ。



だから。

「知られる前に、去りたかったんだがな」

麻耶は美夏が話す間、黙って下を向いていた。

それを見て、美夏は仕方ないと思った。

だましていたのだ。

美秋と同じロボットが側にいたのだ。

思い出させてしまった。

許してもらえとは思えなかった。

だから。

「本当に……すまん」

謝る以外に語れる言葉がなかったのだ。

美夏は、胸が苦しくなった。

そんな美夏を目にし、そして言葉を聞き、麻耶は口を開く。

「なんで……」

その言葉は小さかった。

「なんでよ……」

だけど、どんどん強くなっていく。

「なんで……なんでっ！」

もう、耐えられなかった。

「なんで、謝るのよっ！」

麻耶は言わずにはいられなかった。

何も、美夏が謝ることなんか、ないじゃないかと。

「天枷さんは何も悪くないじゃないっ！」

「何もしてないじゃないっ！」

それなのに。

それなのに、なんで。

「なんで、天枷さんが消えようとするのよっ！」

涙ながらに言う麻耶に、美夏は動揺を隠せない。

しかし、そのまま美夏は彼女に自身の気持ちを告げる。

「美夏は、沢井に辛い過去を思い出させてしまった」

幼い彼女に起きた辛い出来事。

それを、自分がいた所為で思い出させてしまった。

「美夏は、もう、苦しんでほしくなかった」

これ以上、思い出させたくなかった。

辛い過去は、姉の死は、少しずつ乗り越えれば良い。

だから、それで今苦しんで欲しくなかった。

そう語る美夏に対し、麻耶は思いつき彼女の服を掴む。

自分の想いを、しっかり分かって欲しくて。

「友達が、消える方が辛いに決まってるじゃないっ！」

何で、分かってくれないのか。

何で、自分の為に其処までしてしまうのか。

服を掴む麻耶と美夏は距離が近い。

だから、彼女が強く話す言葉と表情を近くで感じる。

本音で話してるのも、分かってしまった。

「ともだち……」

美夏は、麻耶の言葉に驚いて、彼女を見詰めてしまう。

麻耶は美夏をロボットだと知ってしまった。

それなのに。

「美夏のこと、まだ友達と想ってくれるのか……っ？」

「当たり前じゃない！」

いや、麻耶の過去を知ったからこそ。

ロボットにもう逢いたくないだろうと思った。

好きだった姉を思い出してしまおうから。

それなのに。

それなのに、なんで。

「わたしは、わたしは……お姉ちゃんのこと好きだった」

死んでしまった姉。

ロボットだと知っても好きだったからこそ、忘れたかった。  
だけど。

「わたし、お姉ちゃんの遺言が残されたテープを見たの」

そこには大好きな姉がいて。

そこには、愛してくれた姉がいて。

「忘れちゃいけなかった、忘れるべきじゃなかった」

ちゃんと、お別れしてあげられなかった。

そこに、後悔が募って。

だけど、それでも彼女は思い出すことが出来た。

「わたしは、自慢のお姉ちゃんの妹なんだって！」

だから、誇らないといけない。

頑張らないといけない。

そして。

「お姉ちゃんと同じロボットが、嫌いなはずないじゃない」

いや、そもそも。

ロボットだから。人間だから。

そんなの考える必要なんてなかったのだ。

ロボットでも、感情があつて。

人間と、何ら変わらないがないではないか。

「大切な、友達だと思ってる」

人間だから好きになったんじゃない。

彼女の側に居るのが心地よかったから、友達になったのだ。

「だから、眠るなんて、言わないでよ」

ロボットだからとか、もうどうでも良かった。

だけど、彼女がロボットだと隠しているのが辛かったのなら。

彼女が、現在のロボットと人間の関係が辛く感じているならば。

「私が、何とかしてみせるからっ！」

「さわ、い……」

「私が、人間とロボットの架け橋になってみせるから！」

ロボットである姉が大好きだった。

そして、美夏や今後生まれてくるロボット達は自分の姉と姉妹である。

だから、そんな人たちが苦しむ姿は見たくなかった。

彼女は、自分の道を見つけた。

「私は、ロボットのお姉ちゃんが大好き、ロボットの天枷さんが好き  
よ」

だから。

「私と一緒に、手伝ってよ」

美夏と一緒に。

それなら、出来ると思った。

「そうか……」

美夏は、ようやく知った。

「そうか……」

美夏は、ようやく理解したのだ。

「美夏は、勘違いしていたのだな」

麻耶は姉の死を受け入れられてなくて。

友達が苦しむなら、いなくなるべきだと思った。

だけど、麻耶は、美夏が思う以上に強かったのだ。

彼女が思う以上に、人間とロボットの関係は、遠くなかったのだ。

「まだ、時代が早いのだと思っていた」

だけど、違うのだ。

時代が早いとか、遅いとかじゃなくて。

「自分で、望む未来の為に行動するべきだったんだな」

いつか、自分や美春が思い浮かんだ未来がやってくると思った。

だけど、未来は自分で掴み取るものだったのだ。

「沢井は、美夏と手を取ってくれるのか？」

「当たり前よ」

ロボット側だけじゃ、足らなくて。

「美夏と、一緒に人間とロボットの架け橋になってくれるのか？」

「もちろん」

人間側だけじゃ、足らなくて。

「……困ったな」

ロボットと人間が一緒に頑張れば。

きっと。

「もう、眠る意味が、なくなってしまうたな」

episode—31 「少女とロボットは、希望の夢を見るか」

天枷研究所の一室で、麻耶と美夏はとあるビデオを見ていた。

『はじめまして。 私は、天枷 美春です』

「そっか、彼女が、すべてのロボットの原点なのね」

「ああ、そうだ」

それは、プロトタイプ的美春が未来のロボット達へ向けて撮ったビデオ。

美夏にとつての全ての始まり。

それを、美夏は麻耶に見て欲しかったのだ。

麻耶は、そのビデオを初めて見た。

そして、美春という存在を初めて知った。

「ふう、本当に楽しそうに話すのね」

「美春は、学園生活が凄く楽しかったんだと思う」  
今なら、美夏も彼女の気持ちが分かった。  
だって、彼女自身も今の学園生活が凄く楽しくて、嬉しくて。  
幸せなのだから。

「お姉ちゃんも、このビデオを見たんだろうな……」  
だからこそ、この美春のように、美秋も何かを残そうと思ったのだ  
ろう。

麻耶にとって、恩人と言っても良いのかもしれない。  
彼女が語る未来は、幸せそうで。

ロボットと人間が仲良くなる未来を夢みていた。

いや、信じて疑っていなかったのだ。

『アナタたちは、もっと幸せになってますよね』  
きつと。

きつと、その信じる気持ちが次の希望へと繋がったのだろう。

「美春さんが語る未来に、絶対にしてみせる」

「ああ、そうだな……ほんとうに」

いつか来る。

それを待つんじゃない。

自分たちで作っていかないといけないのだから。

「私たちで、ね？」

「もちろんだ」

でも、それは一人じゃない。

一人のロボットと、一人の人間がその未来を叶えようと決意した。

「あ、そうだ」

「ん、どうしたの？」

美夏はふと、思ったことを述べる。

「美秋は、美夏より後に生まれてきたんだ」

「ああ、そうだったわね」

麻耶としては、美秋の方が美夏より起動が早いイメージがあった。しかし、実際には人工冬眠していたので、美夏の方が大分起動が早いはずだ。

「ということとは、美夏は、美秋の姉ということになる」

「そう…なのかしら？」

自分より下の学年である美夏が姉であった美秋の姉と聞くと違和感があった。

しかし、何を言いたいのだろうか。

疑問に思う麻耶に、美夏はにんまりと笑いながら麻耶に対して言う。

「だとしたら、美夏たちは姉妹だな！」

姉と呼んでも良いのだぞ、と。

笑う美夏に麻耶は呆れたような視線を向ける。

血は繋がっていない。

そもそもロボットと人間という違いがあつたが、美秋は麻耶にとつて姉だ。

そして美秋と美夏は同じシリーズだから姉妹と言っても可笑しくない。

だから美夏と麻耶は姉妹だと言いたいのだろう。

暴論でしかないが、本気で言ってるわけじゃないのは分かった。

だから向けるのは呆れた視線だったのだ。

しかし。

「はあ……違うでしょ」

麻耶はちゃんと否定をした。

別に姉妹と言われて悪い気はしなかった。



でも、美夏と麻耶の関係は。

「私たちは、友達よ。そして——」

同じ未来を目指すパートナーでしよ、と。

照れながら告げる麻耶に、一瞬美夏は驚いたような表情を浮かべる。

そして。

「そうだな、そうだったっ！」

姉妹より、そちらの関係の方が嬉しい。

恥ずかしくなりながらも言ってくれたことに、美夏は大きい喜びを感じた。

こ、コホンと、態とらしい咳をしながら麻耶は椅子から立ちあがる。

そして、麻耶は美夏に対して言葉を告げた。

「ほら、もう行くわよ……『美夏』」

「あ、ああ！ 行こうか、『麻耶』！」

これは、現在の<sup>いま</sup>とある話。

一人の少女と一人のロボットが、輝かしい未来に思いを馳せた。  
そんな、他愛もない話。

episode—32 「俺たちの幼馴染は」

episode—32 「俺たちの幼馴染は」

「まったく、毎回思うんだが……」

女性の買い物が長いのは年齢問わずなのだろう、と。

朝倉 純一は昔からの経験で理解しながらも改めて実感していた。

とある初音島の商店街。

平日ということもあり、土日と比べて人は少ないが主婦層で賑わっている。

そんな中、純一は服屋で黄昏れていた。

——はあ………かつたるいな。

思わず、昔からの口癖を内心で呟いてしまう。

彼が何故この様な状態になっているのか。

その理由は、一緒にいる女性の存在にある。

「もー……お兄ちゃんっ、ちゃんと見てよー!」

金髪の少女——芳乃 さくらが頬を膨らませ、こちらを見つめていた。

そう、純一がこうして服屋にいる理由は、さくらに誘われたからである。

彼女からお願いされたのだ。

ついて来て、さくらら自身が着る服と一緒に選んでほしい、と。

——お兄ちゃん、お願いっ！ ね、いいでしょー？

女性の洋服を一緒に選んだり出来るほどセンスがあるとは純一自身思わなかった為、初めは断った。

しかし、何度もさくららにお願いされてしまい、結局は折れた形である。

こうして実際に服屋に来たのは良いが、さくららがどの服にしようか悩んでから彼此すでに1時間以上経過している。

そういえば、音夢との買い物も同じ様に待たされていたな、と今更ながらに女性の買い物の時間の長さを思い出したのだった。

「ねー、お兄ちゃん、聞いているのー？」

「ちゃんと見てるし、聞いているよ……あと、そんな大声で言わないでくれ」

さくららがお兄ちゃんと呼ぶ度、商店街を歩く人々が不思議そうにこちらを見てくるのである。

だが、周囲の人々の気持ちも分からないではない。

外見だけ見れば、さくららが純一を兄と呼ぶのに違和感があるのだ。

——学生の頃は、別に普通だったんだけどなあ。

年齢としては同世代なのだが、容姿からして孫と祖父の買い物に見られているのだろうな、と純一は思わず苦笑いする。

それはともかく、さくららに返事した方が良いかと思ひ、純一は彼女の方に視線を向ける。

「あのなあ、さくら。 自慢じゃないが、昔から俺は服の善し悪しとか、詳しくないんだぞ」

「むう、それでも良いから、相談に乗って欲しいんだってば……」

さくららからしてみれば、幼馴染の純一にそこまでセンスを求めている訳ではないのだ。

自分だけでは悩んでしまうから、似合う似合わないを言っ  
て欲しい、と純一に言う。

「それは別に構わないんだが、何で今更——」  
選んで欲しいのか、と。

純一は言おうとした矢先、彼女が選んで持ってきた服を見てとある  
ことに気付く。

「なあ…なんか、少し落ち着いた服を選んでいるのか？」

「えっ……そ、そうかなー？ 普通じゃない？」

少し慌てた彼女の様子を見て、純一はさくらも意識して選んでいる  
ことを理解した。

さくらの容姿が若いこともあり、見た目相応の服を彼女は好んで着  
ていた。

年齢からしてみれば可笑しいかもしれないが違和感が全くないの  
だから何も言えない。

——普段着ているのとは違う服を選ぶから、相談に乗ってほしいの  
か。

そのように、昔から可愛らしい服装を好んでいたのを知る純一から  
してみれば少し驚きを感じていた。

急に好みが変わったのだろうか、と純一が首傾げにさくらを見てい  
た。

「えーと、その、なんというか、ね」

その純一の疑問を含んだ言葉と視線に、テンパった様子を見せるさ  
くら。

あちこちに視線を向けていた彼女であったが、最終的に口元を持っ  
ている服で隠しながら恥ずかしげにさくらは答えた。

「その、ね……、義之くんのお母さんとして、もう少し大人っぽく見せたいなーって」

にやはは、と照れ笑いしながら話すさくらに、純一はようやく彼女の気持ちを理解することが出来た。

「そっか……そうだよな」

—— 凄く、喜んでたもんな。

さくらが最近自分に話していた内容について、純一はふと思い出す。

『義之くんはね、お母さんって呼んでもらえたんだ』

由夢や音夢が自宅に居ないとき、さくらが純一のもとを訪れ、彼に向かって発した言葉。

その時の彼女の表情は、印象的であった。

嬉しそうで。幸せそうで。

言われたときを思い出したのか、瞳が潤んでいた。

『お兄ちゃんっ！ 義之くんがね——』

その後も、さくらは嬉しいことがあると純一に話しに行っていた。

義之がまたお母さんと呼んでくれた。

恥ずかしそうに言う姿が凄く可愛い。

絶対にクラスメイトの女の子たちにモテモテに違いない。

わたしは、うちの息子はやらないぞって頑固親父みたいにするべきかな。

結婚式は和式と洋式のどちらで行ってあげるべきか。

子煩悩と言うべきか、親バカと言うべきか。

義之の行動について嬉しそうに語るさくらを見て、純一は内心呆れながらも喜びを感じていた。

さくらの、心の底からの笑顔を久方ぶりに見たからだ。

——ずっと、望んでたもんな。

純一は、義之の生まれを知っている。

そして、さくらがどれだけ家族を望んでいたのかを。

だけど、彼女は義之を朝倉家へ預けた。

たまに会えるだけで十分に幸せなのだ。純一に話していたが、さくらが寂しさを隠していたのに気付いていた。

だからこそ、純一は義之が中学生になつてから彼に芳乃家で暮らすように伝えたのだ。

さくらと義之が、もつと近付けるように。

——家族が、出来たんだな。

家族が欲しい。

さくらの願いにより、義之が生まれた。

だけど純一からしてみれば、今までさくらは遠慮があり、自身の願いを我慢していたように見られた。

だけど、義之にお母さんと呼んでもらい、さくらが母親らしくなりたいと思つて行動するようになって。

ようやく、さくらの願いは、本当の意味で叶ったのかもしれない。

——よかったな、さくら。

思わず、幼馴染の幸せな様子を見て感情が高ぶり、込み上がりそうになる涙を必死に抑える。

泣きそうになるなんて、もう自分も歳かな、と純一は自分自身の涙脆さに笑う。

「そうだな、大人っぽさなら……着物とか良いんじゃないか？」

「ああ、お兄ちゃん！ それ良いかも！」  
環ちゃんや叶ちゃんに相談しようかなあ、と。  
楽しそうに考えるさくらを見て、純一は空を見上げながら思う。

——なあ、音夢、知ってるか。  
ここには居ない、大切な妻に。  
どうしても、今のさくらについて伝えたくなった。

——俺たちの幼馴染は、さくらんぼは、立派に母親をやってるみたいだぞ。

久しぶりに電話でも掛けてみるかな、と。  
音夢に何から話そうかな、と考えるだけで楽しく感じながら、さくらの買い物に付き合うのであった。

そんな、とある幼馴染たちの日常的一幕。

episode—33 「一緒に、回らない？」

「そういえば、あと三日でしたか」

風見学園のクリスマスパーティーは、と。

胡ノ宮 環は神社に来てくれた女の子に向けて問い掛けた。

夕方の胡ノ宮神社。

年末年始などの行事では人で溢れかえる神社であるが、イベント行事もない平日にはあまり参拝客の姿は見られない。

日が暮れるのが早い冬の時期の夕方頃は尚更。

しかし、そんな夕方の神社に、最近になつて定期的に来てくれる女の子がおり、環は密かに彼女が来るときを楽しみにしていた。

それは――

「はいっ、そうですよー」

クリパの準備が終わっていない人達が慌ただしく動き回ってます、と。

境内に座り、こちらの質問に笑顔で答えてくれる女の子

――由夢である。

実を言うと、由夢は学園祭前に神社に訪れて以来、何度か神社に足を運んでいたのだ。

神社へ参拝というよりは、環に会う為に。

最初は、自身が悩んでいた際に環にアドバイスを貰ったことで立ち直った感謝を伝える為に訪れたのである。

だが、もともと環との相性が良かったのだろう。

彼方の手伝いが終わった後、環の居る神社へと時折足を運び、家や学校での出来事など他愛ない話をしに行っていた。

学園のイベントが間もなく、という時期でも来てくれることを嬉しく思う環であった。



しかし。

「それなら、いまの時期は忙しいのではないですか？」

此処に訪れてくれるのは嬉しいが準備は大丈夫なのだろうか。

そのように心配気な表情を見せる環に、由夢はウチのクラスは準備終わってますから、と笑顔を向けた。

事実、由夢のクラスは焼きおにぎり屋を催しとして行うのだが諸々の準備は終わっていた。

展示等と違い、食事関係は前準備より当日が作業メインとなる為、前以てスケジュールを決めて少しずつ準備すれば特に問題なかったのだ。

「なるほど、そうでしたか」

それなら良かったです、と安心した表情を見せる環。

今度は由夢が気になっていた疑問を投げ掛ける。

「環さんは、クリパには来られるんですか？」

クリスマスパーティー。通称、クリパ。

名前の通り、クリスマスに実施する学園イベントである。

学園祭は学生以外にも生徒のご家族が参加できるように配慮し、土日に行われる。

しかしクリパは学生達がメインの為、クリスマスが平日の場合は土日にズラすことなく平日に実施するのである。

神主が土日固定休みということはないだろうが、あまり離れられないかもしれない。

その為、風見学園のクリパに来るのだろうか、と気になっていたのだ。

由夢の問いに、環は頷きながら応える。

「ええ。ただ、あまり長居は出来ないかもしれませんが」

「そうなんですネ……あ、だったら私のクラスにも時間があったら

寄ってください！」

「はい、是非とも」

由夢の誘いに、環は嬉しそうに頷く。

彼女としては、定期的に訪れてくれる由夢の姿を見に行きたいという気持ちがあつた為、渡りに船であつた。

ただ、彼女がクリパを訪れる理由はそれだけではなく。

「それに……」

「それに？」

——ひと目、お会いしてみたい御方も居りますから。

環は、由夢だけではなく、他にも会ってみたい人物がいたのだ。

その人物は——。

——桜内 義之様、でしたか。

現在、目の前にいる由夢が兄と慕う人物。

彼女の話す日常生活によく出てくる人物だから、というのも理由の内の一つであるが、それだけではない。

——それに……、ふふつ。

環が思い出すのは、先日神社に訪れた友人のこと。

『環ちゃん、着物選びに協力して！』

友人が神社に訪れて発した一声。

久しぶりに訪れたこと自体に驚いたのだが、言われた内容にも驚いた環。

いきなりのごとくに戸惑ったが、友人の話を聞くに連れ、彼女は是非とも協力したいと感じたのだ。

『んー……、これなら大人っぽいかなあ』

『それも良いですが……此方の色の方がお似合いかと』

『うーん、そっちも良いなあ』

どれにしよう、と悩む友人を見て、環は思わず笑みが溢れる。

昔から明るく元気で、笑顔を絶やさなかった友人。

環の初恋の人物と同じく、誰かが困っていたらほっとけない性格で、彼女自身もその友人には何度も助けられた。

その友人は、学園を卒業し、大人になっても変わらず誰かに手を差し伸べ続けていた。

直接お会いすることが無くても噂などで聞き、環は尊敬の感情を抱いたものである。

しかし、何時からであろうか。

学園を卒業してからも時折会い、その時も変わらず明るく元気に振る舞う友人であったが、どこか無理をしている様にも感じられた。

だからこそ、久しぶりに会った友人の様子をみて内心驚いた。

『よし、これにしよう！ 環ちゃん、ありがとうね！』

そして、会ってみたくなくなったのだ。

彼女の、本当の笑顔を取り戻した人物に。

彼女の息子に。

——ふふ、どんな御方なのでしょう。

「——さん、環さんっ?」

「ああ、すみません…ぼうつとしてしま〜」

思い出していたからか、由夢の呼び掛けに気付かず謝る環。

——そういえば、由夢様と言えば。

義之のことも気になるが、由夢について一つ気になっていたことがあつた為、質問する。

「由夢様は、想い人と一緒に回るのですか？」

「うっ……、そ、それは……」

まだ、誘えてないです、と。

落ち込んだ様子を見せる由夢。

本当ならばもう少し早くに誘おうと思っていた由夢であったが、中々切り出すタイミングが掴めず、ズルズルと今のままで誘えずにいたのだ。

「はあ、何度もチャンスあつたのにー……」

頭を抱えつぶやく由夢に、環は笑顔のまま言葉を告げる。

「由夢さん」

「え……は、はい」

「大丈夫です」

「えっ……？」

環は由夢に向かって断言する。

大丈夫だと。

「由夢様なら出来るって、信じてますから」

何故なら。

由夢に此処で会った日、

環は彼女の決意を聞いたのだから。

「『かったるい』けど、頑張るのでしょうか？」

「あっ……、それって」

イタズラ気な表情で伝える環に、由夢はハツとした様子で彼女を見詰める。

だって、その言葉は。

『「かったるい」ですけど、頑張ってます！　また今度、神社に来るので改めてお話しさせてください』

「そうだ……、そうだもんね」

あの時に初めて、祖父の口癖を逃げの言葉ではなく、頑張るといふ決意のもと発したのだ。

それを伝えた人物に、弱音を吐く姿ばかり見せられない。

——ああ、もう！ 『かったるい』！

内心で落ち込んでいた気持ちを上げ、

改めて環に顔を向けて告げる。

「わたし、ちゃんと誘えるように頑張ります！」

頑張れ、わたし、と。

自身に発破をかける由夢を、環微笑ましそうに見る環であった。

episode—33 「一緒に、回らない？」

次の日の放課後。

由夢は彼方を手伝う為、非公式新聞部 第二執筆室に赴いていた。

——お、落ち着いて……。

普段通りを心掛ける由夢であったが、内心は緊張からか、心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。

——い、いけつ、わたし！

「か、彼方さんっ」

「由夢さん、如何しましたか？」

「あ、あの……その……な、何でもありません」

そうですか、と顔に疑問を浮かべながらも資料に顔を戻す彼方。そんな彼を見ながら由夢は、本日既に三度目の失敗に落ち込みを隠せなかった。

——た、環さん、私……ヘタレです。

昨日に環からの言葉により誘う決意をあらわにした由夢であったが、いざ本人を目の前にしてしまうと緊張で伝えられずに居た。

告白ではない。

ただ、クリパと一緒に回りませんかと軽く誘えば良いだけ。

そうやって由夢は自身に言い聞かせるが、ふと思ってしまうのだ。

クリパを誘うということは、

好意を寄せてると伝える様なものではないか、と。

クリパは名前の通り、クリスマスパーティーである。

クリスマスで男女二人で回るとなると、やはり恋人や好意がある人同士でないと普通はしないかもしれない。

——いや、でも、わたしが彼方さんのこと好きなのは本当だし。その、好意が伝わるのは別に困ることじゃないんだけど。ちゃんと告白はいつかしなきゃって思ってるから……その前に間接的な告白をしちゃうのは良いのかな。でも、それが嫌なら先に告白しないとダメ？ 告白してからクリパ誘う？ ま、まっつて、いま告白だなんて、流石に心の準備が出来てないというか……む、無理だよ。でも、早く誘わないと彼方さん誰かとクリパ一緒に行く約束しちゃうかもだし……あれ、彼方さんそもそもまだ誰とも約束してないのかな。聞かないと……、それから空いてたら告白してからクリパ誘って……あ、あれ、どうして先に告白しないといけないんだっけ——

「あー、もう！ どうすれば良いのっ！」

考えれば考えるほど頭の中がこんがらがり、頭を抱えながら叫んでしまう由夢。

そんな彼女の様子を見て、彼方は由夢に心配気に声を掛ける。

「……あ、あの…由夢さん、何かお悩みですか？」

「えっ、あつ……わたし、口に……な、何でもありません！」

第二執筆室は地下にあり、室内に彼方と由夢の二人しかいない。

その為、由夢の叫びに気付かない訳がないのだ。

先程から何か言いたそうにしていたのを感じていたからこそ、心配になる彼方。

何でもないと言われても、流石に気に掛けずには居られなかった。

彼方は手元で開いていた資料を閉じ、由夢へと向き直す。

「由夢さん……もし何か一人で抱え込んでるなら、私で良ければ話してくれませんか？」

「あの、わたし……」

「力になりたいんです……、私では頼りないかもしれませんが」  
心配なんです、由夢さんのことが、と。  
彼方は真つ直ぐと彼女を見詰めながら言葉を、自身の想いを伝え  
た。

——彼方、さん。

心配させてしまったことを申し訳なく思う由夢。  
彼方が思うような心配事ではないのだから。  
だけど、それ以上に嬉しかったのだ。  
先程まで緊張していた心が暖かくなるのを感じた。

——思ったことを、伝えれば良いんだよね。

彼方の御蔭で落ち着いたからか、悩むよりも先に口から言葉が出て  
いた。

「彼方さん。クリパ、もう明後日ですね」

「え、ええ……早いものですね」

由夢の様子が急に変わるのを感じ、若干目を丸くしながらも彼女の  
言葉に相槌をうつ彼方。

「彼方さんはクリパでの予定は、もう決めてますか？」

「クラスの催しと新聞部の手伝いを少し」

それ以外は残念ながら決めてなくて、と。

苦笑しながら話す彼方に由夢は安堵し、そして内心で自分を奮い立  
たせる。

「あ、あのですね……もし、良かったらなんですが——」  
わたしと一緒に、回りませんか。

そう、彼方に伝えようとした矢先のこと。

二人の居た空気を破るように、勢いよく扉が開いた。



「同志初音よっ！」

「よー！ 初音、元気かー？」

扉の先には、見覚えのある二人の人物が居た。  
杉並と渉である。

「な、何しに来たんですか？」

「ふむ、何か問題でも？」

話している途中だったのであれば続けてもらって構わんど、と。  
由夢に向かって話す杉並と、邪魔して悪いなと呑気に笑う渉。

「あの……その、由夢さん。 先程言い掛けたことは……」

「あ、あはは……」

——二人がいる前で言える訳ないじゃないですかっ！

「い、いえ、大した話じゃなかったので……さあ、杉並先輩と板橋先輩から話どうぞっ！」

笑顔を杉並と板橋に向ける由夢であったが、あからさまに邪魔だという雰囲気を見せていた。

渉はアレ、なんかヤバイと珍しく空気を察するが、杉並はあえて無視し、いつも通り騒ぎ始めたのであった。

「それでな、同志初音に頼みたいことがあるのだ」

「あの、前言ってた話なら——」

「——、それなら——した——」

「——」

「——」

——せっかく、言えそうだったのに……。  
完全にタイミングを逃してしまい、その日は結局言えなかった由夢であった。

---

結局、由夢が伝えられずに終わった後の帰り道のこと。

「やつほー、初音くん」

「……藍さん？」

「あのねー」

「私とクリパ、一緒に回らない？」

episode—34 「あの時から、きつと」

episode—34 「あの時から、きつと」

「やつほー、初音くん！」

「……藍さん？」

放課後。

非公式新聞部 第二執筆室でいつも通り活動した後、彼方は由夢と分かれて自宅へと帰っていた途中でのこと

彼方は後ろから呼び掛けられ、振り返ると其処には桜色の髪と同級生が手を軽く振りながら近付いていた。

その同級生の名前を呼ぶと、彼女——藍は目を丸くして彼方を見詰めた。

「おー……彼方くん、何でわたしって分かったの？」

右手首にアクセサリー付けたままだったのに、と。

彼方に名前をすぐ呼ばれたことにより、藍は少し驚いた表情を向けて訊き返した。

茜と藍は同じ身体に二つ人格がある状態に近い。

どちらが表に出ているかを小恋や杏が判別するため、手首に付けるアクセサリーで茜と藍を分けることにしていた。

茜が表に出る場合は右手首に、藍が出る場合は左手首にアクセサリーを付けることを決めたのだ。

この判別方法は彼方にも伝えていた為、アクセサリーを変え忘れた

のに茜と思われなかったのが意外だったのだ。

「藍さんと花咲さんの見分けが付いた訳ではないんですが……」

「んーと、当てずっぽう？」

近いです、と。

藍の問い掛けに、頬をかき、気不味げな表情を見せながら返答する彼方。

彼方の様子に疑問を持ち、そのまま藍が見詰めていると、彼方は観念したかの様に言葉を続けた。

「その……、基本的に、私に積極的に話しかけて下さるのは花咲さんよりも藍さんの方なので、藍さんかなって」

「そ、そうだったかな？」

「え、ええ……ただ、今回は当たってたから良いですが、ちゃんと判別して答えないとですね」

反省するような様子の彼方とは裏腹に、藍は少し頬を赤くさせ、上擦った声をあげる。

——そつ、そんなに……わたしばかり話してたっけ？

意識していなかったが、振り返ると姉が彼方に話しかけてた回数は自分の十分の一もない気がする。

自分が表に出てる時は杏や小恋の次に彼方に話し掛けに行っていた。

自身で意識してなかった話を彼方から言われたことが、何となく恥ずかしかった。

「も、もー、その話はおしまいー！」

「そう、ですね」

「えーと……、そうだった、彼方くんって——」

少し恥ずかしくなった藍は、今の話は終わりだとぶった切り、別の話を振る。

彼方もこの話題は続けるのは気不味かった為、少しホツとしながら藍の話に乗っかって話し始める。

「ああ、それは――、明後日にしよう」と――

「そうなんだ、――」

「――」

――ああ、なんか良いなあ。

彼方と話しながら、藍は内心で感じた想いを述べる。

帰り道での、他愛もない話。

何気ない会話だが、それが嬉しく感じる。

何故だろうか。

特に意味はないが考えたとき、すぐに理由がわかった。

「――そっか」

「藍さん、どうしました？」

「んーん、なんでもない！」

考えていたことで少し会話が止まってしまっていた為、再び話し始める。

――藍さん、か。

藍。自身の名前。

本来の身体である茜ではなく、自身の名前で呼ばれる。

表に出ているのが藍なのだから当たり前だって、茜や杏、小恋、彼方は言ってくれるのだろうか。

――みんな、優しいもんね。

だけど、名前を呼んでくれる。

自分が藍だと知っていてくれている。

それが、どうしようもなく嬉しい。

——居れるだけで満足だって思ってたはず、なのにね。

花咲 藍は、小さい頃に既に死んでいる。

本来はそこで人生は終わる。

しかし、姉の願いを魔法の桜が叶え、姉の身体に藍の魂が宿った。奇跡としか言えない状況。

姉以外に自身のことを認識してもらえなくても、たまに表に出れるだけで満足していた。

親友の杏や小恋に自身の存在を知ってもらえなくても、話せるだけで小さい幸せを感じていた。

いたはず、なのに。

『藍ったら、イタズラばかりしちやダメなんだから!』

『ごめんねえ、つい、小恋ちゃんの反応が嬉しくて』

イタズラしたのが花咲 茜ではないと認識してくれて。

『あら、和食は藍の方が作るの上手なのね』

『ほんとにつ? ありがと、杏ちゃんっ!』

昔から自分でも少し自信に思っていた、姉とは違う得意料理をわかってくれて。

それで。

『いまは私と貴女しかいません。』

——だから、本音を聞かせてくれませんか』

『ほんとは、怖いよ、辛いよ、寂しいよ!』

『わたし……っ、ずっと……そばに……』

いつか自身が消えてしまう。

もし、そうなくても全然平気だ、大丈夫だ。  
そうやって強がっていた自分から、本音を出させてくれて。

『大丈夫ですよ』

込み上げた本音を、想いを。

真正面から受け止めてくれて。

——我儘になっちゃった。

みんながあまりに優しいから。

自身の存在を受け止めてくれるから。

もう、藍だつて知つてもらえなくても良いなんて、強がれなくなつてしまった。

こんな幸せな現在になつたのは。  
してしまったのは。

——彼方くんのせい、なんだよ？

魔法の桜の記事を書いて。

桜に願ったことを隠さず話してくれて。

後悔しないで欲しいという、自身の想いを伝えてくれて。

彼方が切つ掛けで、自身の取り巻く状況が変わった。

——知ってほしいな

何気ない日常が嬉しいことを。

他愛もない日々が幸せなことを。

嬉しくて、幸せで、泣きたくなることを。

そして。

——ひとつ。  
姉に迷惑を掛けてしまう。  
わかっているけど。

『ねえ、藍ちゃん』

『どうしたの、お姉ちゃん？』

『——あのね、藍ちゃんの想い、我慢しなくて良いからね』

『おねえ、ちゃん……』

『まだ私は分からないけど、その想いはきつと大切なものだから』

——ひとつ、だけ。

彼が誰に想いを向けているか、知ってる。

彼方に迷惑でしかない。

でも。

『恥ずかしいかもしれませんが、両親や友達に普段は言えない感謝をしたり、想いを告げたりするのも大事なことだと思えます』

——もうひとつだけ、我儘を許してほしい。

これがきつと最後だから。

何もせずに終わりがたくなかった。

だって。

だって、後悔したくないから。

「よしっ……」

何か呟いた後、顔を上げた藍が少し駆け足で彼方の方を見ずに前に出ていく。



「……藍、さん？」

急な行動に、自然と藍の名前を呼び掛けるが、彼方に返事をせずにそのまま前に進み続け、数メートル離れてから止まる。

つい、彼方も足を止める。

「あのねー」

藍が彼方に呼び掛け、そして振り返る。

彼方は藍の表情を見て、少し心臓の音が早くなるのを感じた。

振り返った藍の表情が普段より大人びえて見えたのだ。

——私とクリパ、一緒に回らない？

「一緒に、ですか？」

「そーそー！」

彼方くんが空いてたらね、と。

花咲 藍は彼方に笑顔を向けながら答えた。

さきほどの大人っぽい表情とは変わっていた。

藍の誘いに目を丸くさせながらも、彼方は疑問を口にした。

「雪村さんや月島さんとは、一緒に回られないのですか？」

「あはは、小恋ちゃんは義之にアタックしに行ってるからねー」  
義之に想いを寄せる小恋。

そんな彼女だからこそ、クリパで誘いに行ってることは納得できた。

「ね、どうかな？」

藍は彼方を見上げ、見詰めながら再度問い掛けた。

彼方は、彼女の視線に少し鼓動を早めながら、考える。

彼としては、非公式新聞部の活動の支援やクラスの催し以外は特に予定はなかった。

その為、特に問題はないはずだ。

それにわざわざ誘ってくれるのは、正直嬉しく感じる。

——それなのに。

藍は同じく桜に願った人ということもあり、

大切な友達だと彼方は思っている。

それに。

願いが解け、消えてしまうのは嫌だ、寂しいと。

そう泣いていた彼女に幸せになって欲しいと感じた。

——それ、なのに。

何故だろうか。

——少し、戸惑っているのは何ででしょうか……。

了承の言葉が、何故か戸惑われた。

「私は、その……」

自身でも理由が分からず。

その為、何を言えば良いか思い浮かばず、言葉にならない声を出し

ていた。

——何に、わたしは。

戸惑う理由。

何に対して。

いや、誰に対してだろうか。

そう、考えた。

そのとき。

『彼方さんっ』

頭の脳裏に、とある女の子の声が過る。

——そっか。

彼方は、気付いた。

いや、もつと前から、気付いていたのかもしれない。

『そんなことないですっ！』

『私がどれだけ助けられたと思ってるんですかっ！』

——そう、なんだ。

自身の気持ち。

気付いていたはずだけど、気付いていない振りをしていたのだ。

『あなたに、救われたんですよっ!』

『分かってください! 私はあなたのおかげで、救われたんです! 前も、今も!』

——わたしは、逃げていたんですね。

だって、その気持ちは前世の時にも感じたことないくらい、大きかったから。

その気持ちの大きさに、戸惑った。

真正面から、自分を必要としてくれたひとを見て。

『あなたのおかげで、わたしは、幸せになったんです』

彼女の涙をみて。

彼女の、言葉を聞いて。

あの時から、きつと。

彼女のことを。

——ああ、そうか……そうだったんだ。

「……あなた、くん?」

「藍さん、わたしは——」

彼方は、藍に自分の想いを告げた。

episode—35 「みんな、誰かを想っていて」

「これで明日の準備は完了で大丈夫よね、雪村さん」

「ええ、問題ないわ。明日はよろしくね、委員長」

「ふふ、任せなさい！」

変わったわね、と。

自信満々に答える委員長―沢井 麻耶を見ながら杏は心の中で静かに思った。

放課後。

明日がクリパということもあり、どのクラスも最後の一息と頑張る中、

周りと同じように杏達の居るクラス―3年3組も急いで準備を行い、何とか完了までこじつけていた。

その中でも麻耶は委員長として全体の取りまとめを実施し、杏は企画のメインを担当するということもあり、

明日の準備が終わって装飾組を帰らせた後、二人で最後の確認を行っていたのだ。

ここ2週間は何度も打ち合わせをしていたので、

普段はあまり関わっていなかったが、杏は麻耶と話す機会が増えた。

――ほんと、変わったわね。

委員長である沢井 麻耶は真面目であり、融通が利かない。

そして、基本的に誰かを注意したり、怒ったりしている。

それが周りの大半が抱くイメージであった。

だが、杏は彼女に対して少し違う印象を抱いていた。

基本的な印象は周りと同じだが、杏は麻耶が何かから目を逸らしているのだと感じたのだ。

だからこそ、周りに対して余裕がない行動をしてしまうのだと。

それが何かは分からなかったし、茜や小恋たちほど近い関係でも無い為、わざわざ掘り下げることがなかった。

そして、杏が抱く印象は、クリパで話すようになってからも変わらなかった。

いや。

最初は、と付け足したほうが良いだろうか。

——いつから、かしら？

確かに初めは普段と感じている印象は変わっていなかった。だが、ある時期を境に麻耶は変わった。

珍しく麻耶が体調不良ということ途中で早退したことがあったのだ。

そのときの表情は不安で仕方ないという顔であり、声を掛けたが大丈夫、と返されるだけで何も出来なかった。

そう。

そこから、変わったのだ。

「ん、顔に何か付いてるかしら？」

「……いえ、良い表情をしてると思っただけよ」

何よそれ、と笑いながら言葉を返す麻耶。

——ほんとのこと、言っただけけど。

他愛ないやり取り。

しかし、そんなやり取りでも彼女が変わったと感じさせるものがあった。

——素敵な笑顔じゃない。

麻耶はよく笑顔を見せるようになったのだ。

涉や杉並の言動や、少しからかわれる位でも、割と本気で怒ったりする彼女であった。

しかし、そんな麻耶の表情に笑顔が増えていた。

きつと、以前であれば杏の言葉を嫌味か、又はからかわれたと思いい、怒った様子を見せていただろう。

杏が感じていた余裕の無さや、何かに対して目を逸らしてる様な感覚がなくなったのだ。

麻耶に、何か一つの芯が出来たように思えた。

いったい彼女に何があったのだろう。

杏には麻耶に何があったか判断することは出来ない。ただ。

良いことであるのは間違いない。

——ま、誰が関係しているかは、何となく分かるけどね。

何があったかは分からないが、

誰が関係してるのかは推測することは出来た。

いや、杏じゃなくても分かるくらいに簡単なのだ。

だって。

「おーい、まやー！ 早く帰るぞーっ！」

ガラリ、と。

クラスのドアが開けながら大きな声で呼びかける存在がいた。

麻耶は杏と向き合って話していた為、入り口側のドアとは反対方面を向いていた。

しかし、声で誰だか分かったのだろう。

小さいため息を吐いた後、呆れた表情を浮かべ、入り口に振り向きながら話し掛ける。

「美夏だったら……昇降口で待っててって言ったでしょ」

「だってだな、もう十分以上待ったのだ。我慢できなかつたのだ、許せ相棒」

「はいはい、仕方ないんだから……もう終わるから、ちよつと座ってて」

麻耶と笑いながら話す存在——後輩の天枷 美夏である。

そう。

この子が理由なのだろう。

よく笑うようになった彼女が、更に笑みを浮かべるのは、この後輩相手だけなのだから。

杏は確信していた。

——それに、委員長が誰かを下の名前で呼ぶの、初めて聞いたわ。それだけ親しくなったのだろう。

だが、それは良いことである。

時折、麻耶は苦しそうな顔を浮かべていた。

それを覚えている。

だが、彼女の中にあつた何か悲しい出来事は。

彼女の中で、完結したのだろう。

——ほんとに、良いことね。

少し麻耶と杏はクリパの準備の残りのチェックをした後、麻耶は美夏と並んで入り口のほうへ向かう。

杏は彼女たちを見送る為に言葉を掛ける。

「それじゃあ、仲良く帰りなさい」

「ええ、そうするわ。 さようなら、雪村さん」

「おお、雪村先輩、またな！」

「ええ、じゃあね」

元氣よく手を振りながら歩き出す美夏と、それを見て仕方ないと笑みを浮かべながら着いていく麻耶。

「——あ、雪村さん、ひとつだけ」

「何か、忘れてたかしら？」

美夏と帰ろうとした矢先、何か思い出したのか、杏のもとに向かってきた麻耶。

何か明日の準備で確認漏れがあつただろうか。



そう杏が考える中、麻耶が美夏には聞こえない程度の小声で言葉を告げた。

——今日、花咲さんの様子がおかしかったから、気に掛けてあげてね。

改めてさようなら、と。

杏に話し掛けた後に足を止めていた美夏のもとに麻耶は歩いていった。

「……ほんと、どこまで変わったんだか」

目を丸くさせながら、杏は思わず呟いていた。

余裕が出来たから視野も広くなったのだろう。

また今度、クリパが終わってからゆっくり話したいと思った杏であつた。

——さてと。

二人を見送った杏は、目的地に行く。

向かう先は、調理室。

調理班のリーダーが最後の確認を済ましてから帰るはずだ。

——ようやく、話を聞いてあげられるわね。

杏は向かった。

桜色の髪の親友のもとへ。

調理室。

そこには、見慣れた桜色のブロンドヘアの女生徒がいた。扉を開ける音に反応したのか、こちらに振り返る。

そして、杏の姿を認識して笑顔で手を振って近付いてくる。そんな彼女の笑顔や様子を見て、杏は気付く。

「あら……藍ね」

「杏ちゃんは本当すぐ分かるんだから」

藍は、杏が茜ではなく自分と言い当てられ、嬉しそうに笑いながら近付いた。

「もうそっちは終わったのー？」

「ええ、教室の準備は終わったから、もう皆帰らせたわ……そっちは？」

「こっちも明日の寿司の準備は終わったから皆に帰ってもらったよー」

もう、私も帰るところ。

そう言いながら笑顔を向けてくる藍の表情をみて、杏は気付いた。いや、もとから気付いていた。

確信した、と言った方が良いのだろう。

周りが居なくなるタイミングを見計らっていたのだ。そのタイミングがようやく来たのだ。だからこそ。

彼女は遠慮無く尋ねる。

「……で、そろそろ結果は聞いて、良いのかしら？」  
杏の言葉。

藍は彼女の言葉を聞いて目を丸くし、そしてまた笑いながら呟く。  
杏ちゃんはずぐ、分かっちゃうんだから、と。

何の結果であるのか。

それを聞き返さなくても、藍には分かった。

だから、藍は素直に親友の質問に答える。

「あはは、残念ながらね、ダメでした！」

自分では明るい調子で言えた、と藍は思う。

だけど、そんな自身の言葉に、杏は真剣な表情を浮かべてきた。

そんな彼女に対して藍は更に言葉を重ねる。

「ほんとにね……そこまでショック受けているわけじゃ、ないから」

「藍……」

「だってね、だって、わかってたもん」

藍は、杏と心の中で心配する姉に向かってつぶやく。

——ほんと……わかってたこと、だしね。

学園祭のとき。

講堂で割り込みをした後、演奏する渉、小恋、ななかを他所に、義  
之たちは彼方の元へ向かった。

自分たちの行動で誰かが救われたのか知りたかったのだ。

そして。

由夢と彼方が二人でいるのを目撃した。

途中からだっし、遠目だった。

でも。

——ああ、そっか。

二人とも涙を流し、互いに顔を合わせて笑っていた姿をみたとき、  
思っただのだ。

ああ、わたしが入り込む余地なんてないんだな、と。

わかっていた。

そう、分かっていたのだ。

「それでも……それでも、どうしてもしたかった」

それでも誘ったのは、きっと、けじめを付けるため。

中途半端にしたくなかった。

好きなひとが皆に伝えたかった、後悔をしたくなかったのだ。

誘ったとき、少し、悩んでくれた。

彼自身は、ちゃんと自分の想いに気付いてなかったのかもしれない。

しかし、彼方は何か気付き、本音を語ってくれたのだ。

『藍さん、わたしはクリパで誘いたい方が、いました』

『そのひとの事が、わたしは——』

知っていたけど。

それでも、彼方に直接聞きたかったのだ。

だから、良いのだ。

むしろ、自分が彼方に気持ち、想いを、気付かせてあげられたのなら。

それは何だか、誇らしい。

だから、親友に告げる。

自分自身で、終わりを。

「えへへ、藍さんの初恋はこれで終わり！」

「……藍」

「杏ちゃん、そんな顔しないで」

わたし、これでも嬉しいんだから。

藍は心配そうにこちらを見る杏に声を掛ける。

——そう、嘘なんかじゃない…だって。

「わたし、初めて恋することが、出来たんだよ」  
本来であれば、幼い頃に亡くなっていた自分。  
それなのに、家族と会えた。 友達ができた。  
更には、恋もすることが出来たのだ。

『おねえちゃん、はやくツギのページみせて！』

『あ、まってよ、あいちゃん！』

昔から。

そう、生きていた昔から。

藍は、少女漫画やドラマで恋愛する模様を見て憧れていた。

私も誰かを好きになってみたいのだ、と。

でも死んだあと、姉の身体に移ったあとは、それが無理なことだっ  
て気付いた。

そもそも、姉の身体だから自分が恋愛してはいけないと思った。

「でも、ひとりの男性を本気で好きになれたんだよ？」

諦めてたのに。

男の子に、本気で恋をすることが出来たのだ。

側にいたいなって。

近くで、ずっと寄り添っていたいなって。

そんな、小さくない恋をした。

——嬉しくないはずなんて、ないじゃん。そう、

そうなのだ。

それが嬉しくないはずなんてない。

幸せ者なんだって、言いたい。

——だから、もう満足なの。

自分の想いに区切りを付けた、付けられた。

そう、藍は思った。

「……………えっ?」

そんなとき。

ふわり、と。

自身が抱きしめられる感触があり、

見ると、杏が抱きしめていてくれた。

「杏ちゃん…………?」

「——バカね、叶わなかったんなら悲しいに決まってるでしょ」

「そんなこと——」

「悲しいから、涙が出ちゃうんでしょ」

杏に言われ、藍は自分の目元を触る。

その手には水滴のようなものを付いていた。

「あ、あれ…………おかしいな」

その水滴が何か信じられなかった。

だって。

だって、それは涙のはずがないんだから。

悲しくないのに、涙なんて、と。

そう思うのに。

止めることができず、どんどん溢れてくるのを感じた。

「だって、だって、私はっ——」

「いいのよ」

背伸びし、ハンカチで自身の目元を拭ってくれる杏。

どんどん視界がぼやける中、それでも優しくこちらを見つめる杏を認識した。

自分よりも背が低い彼女であるが、

その表情や行動は、自身より年上なのだと感じさせられた。

「まったく……、今日はわたしのとくに泊まりにきなさい」

「あんず、ちゃん」

「いっぱい、思いを吐くまで寝かさないと」

それに、と。

杏は視線を藍から扉の方に向きなおす。

「もう一人、思いを全部吐かせないといけない子もいるしね」

「……………えっ?」

その視線を追うように藍が入り口に視線を向けると、

そこには俯いたもう一人の親友の姿がそこにはあった。

その姿を見てから、杏は眩いた。

「ほんと、見る目ない男たちなんだから」

---

——あいつら、どこに行ったー!

——逃さないわよ、杉並っ、板橋っ！

「ふむ、板橋よ」

「あん、なんだよ……」

追ってくる生徒会が通り過ぎるのを確認しながら、声を掛けてきた杉並を見る渉。

ここ数日は、この行動が当たり前になってしまった。

渉は、そんな自分に涙が出そうになる。

だからこそ、呼び掛けてきた悪友を睨みつけてしまう。

当の本人は全く気にしない様子であったが。

「貴様はクリパで誰かを誘わないのか？」

「……おい、散々巻き込んで追われる俺にそれを言うのか？」

「ふむ？ それは好きでやってるのだろう」

そんなわけねーだろ。

強く言い返してから、慌てて周りを見て生徒会に見つかからないか確認する。

問題なかったことに安心しながら、渉は杉並を睨みつける。

だが、そんな渉に対して杉並はいつも通りニヤリと笑うだけだった。

「板橋よ」

「今度は何だよ……」

また、何かからかってくるのか。

そう警戒しながらも周りを見渡す渉に、先程と杉並は声のトーンを変えずに話す。

——月島嬢が桜内を誘って断られたそうだと。

それを聞いて素早く杉並に振り返る。

そこには不適な笑顔の表情を浮かべる杉並がいた。



「おい、なんでそんなこと知ってんだよ」

「ふふ、我が非公式新聞部を舐めるなよ。どんな情報もわーが組織では手に入るのだった」

「そんなデバガメまでしてどーすんだ」

呆れたように言いながらも、渉は少し考える様子を見せる。

それを見ながら、杉並は渉にさらに言葉を告げる。

「ふむ、この情報は、必要なかったか？」

「……うっせー、別にそれを俺が知ってどーすんだ」

「——誘うチャンスだと思うが？」

そう話す杉並に軽く蹴りを入れようとするが、考えた瞬間には距離を離していた為、諦める。

そして渉は、杉並の問いに答えた。

「そもそも、俺は生徒会に追われてんだから無理だろ」

それに、と。

天井を見上げ、頭をかきながら何となしにつぶやく。

「それは何か、違うだろ」

確かに月島 小恋のことが昔から好きだ。

付き合えたら、どんなに嬉しいだろうか。

笑ってたら、側で一緒に笑いたい。

悲しかったら、慰めてあげたいと思う。

でも、振られた彼女に声を掛けるのは、何か違う気がした。

「それに、杏や茜たちが慰めるだろ」

前以上に絆を深めているのを知っているからこそ、そこに自分が割り込む意味なんてないと感じた。

「だから、いーんだよ」

今は、いいのだ。

でも。

もしまた彼女が新しい恋をしようって思ったのなら。

そのときは少し、頑張ってみよう。

渉はそう思った。

そんな渉の様子を見ながら、ふむと眩き、何か考え込む杉並。

そして、考えた後に杉並は笑いながら渉に言葉を掛けた。

「まあ、我が友は童貞だからな、奥手なものも仕方ないな！」

「う、うっせー！ それに童貞だって言ったらお前だってそーだろうがよ！」

顔を赤くさせ、怒鳴りながら言う渉であった。

しかし、怒鳴られた本人は何故かニヤリと笑みを浮かべてくる。

「えっ、ちよっつ、お前っ！ 嘘だろ！」

「フハハハハッ……さあ、そろそろ生徒会に嗅ぎつけられるから行くぞ！」

声を掛ける渉に対し、杉並は笑いながら無視して走り出したのであった。

「ふふ、やったっ！ やった！」

由夢は部屋のベッドに寝転がりながら喜びを噛みしめていた。

——嬉しいな。

彼方を誘えずにクリパの前日を迎えてしまった由夢。

そんな状況だからこそ焦っていた。

誘いたいけど、いざとなると緊張してしまっていた由夢だったが、そんな自身に、彼方が先に声を掛けてくれたのだ。

『あの……、よかったら、一緒にクリパ回りませんか？』

どうやって言おう。

そう考えていた由夢の思考が、一瞬止まった。

聞き間違いかとテンパりながら彼方を見ると、

彼は少し照れた様子をしており、それを見た由夢は彼方に誘っても  
らえたことを実感したのだった。

『ぜつ、是非お供させてくださいっ！』

「明日、楽しみだな」

こんなにも明日が楽しみなのは。

やっぱり好きな人と一緒に回れるからだ。

デート、と言っても良いだろう。

それに。

——彼方さんも……その、そういうこと、だよね？

クリパを誘ってくれる、ということ。

確かに、あまり恋愛に関心があるような感じには見えない彼方。  
それでも。

それでも、少しはこちらを想ってくれているのではないか。

そういう期待がやはり高まってしまう。

「ああ、どうしようー！」

嬉しい。

緊張する。

どきどきする。

でも、やっぱり嬉しい。

「ちやんと、眠れるのかな……」

心配になってしまう。

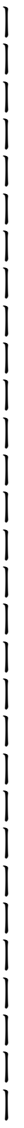
だが、ちやんと寝て、明日を楽しもう。

そして、願わくば。

「彼方さんに、想いを伝えたいな」

好きって言いたい。

そう、思った。



夢だ。

由夢は、自分の状況をすぐに理解する。

何度も体験したからこそ、感覚が分かった。

だが、いつもと少し違う感覚がある。

——はじめての、光景かな。

何度も同じ光景を見る場合もあれば、初めての光景もある。

今回は、初めての光景だと理解した。

『あ、これは……雪、ですね』

ホワイトクリスマスですね、と。

嬉しそうに見上げる彼方がいた。

そんな彼を見て、胸に暖かい気持ちと、緊張する気持ちがあった。

これは、実際の夢で対面している私の気持ちなんだろう。

緊張。

そして、抑えられない気持ち。

どうしても、伝えたい。

我慢できない。

そんな想いが溢れてきていた。

——ああ、わたし、言うんだ。

だから、自分が何を言おうとしてるのか分かった。

『彼方さんっ……わたし、彼方さんのこと』

『嬉しいです』

そんな場面だからこそ。

彼方の表情が。  
彼方の、声が。  
目に焼き付く。

『でも、ごめんなさい』

『その気持ち、答えてあげられないです』

『だって——』

『——もうすぐね、枯れちゃうんだ、桜』

episode—36 「ふたりのものがたり」

「綺麗だなあ」

部屋から見える夜空に浮かぶ満月を見ながら、初音 彼方はひとり  
呟いた。

彼方の部屋。

風呂に入り終わり、明日に備えて寝る為に電気を消した彼方であつたが、

少し考えたいことがあつた為、部屋の窓を開けて寄りかかっていた。

「もう、明日がクリパなんだね……」

クリスマスパーティー。

風見学園での大きなイベント事の一つである。

学園祭よりも大きなイベントであり、それなりに準備期間があつたからこそ、

その催しの日を迎えるのは感慨深い。

そういう思いも少なからずある。

しかし、彼方にとっては他にも大きな意味があつた。

「ほんとに……、もう、そんな時期なんだ」

クリパが終わると、その後すぐに12月が終わり、次の年を迎える。

そうしたら、次に起こるのは――

彼方は、自身のことを振り返る。

「……後悔しないように、出来たのかな」

昔から。

そう、昔から分かっていたのだ。

この時期を迎えてしまうことは。

『あの桜は、シンデレラに出てくる魔法と同じ様なものだと思うので  
す』

前世の知識だけではなく、実際に生きる今でも、願いは何時か覚めるのだと現実を突き付けられた。

しかし、あの言葉があったからこそ、現在があるのだと心の底から思う。

『だからこそ、後悔しないように生きなさい』

自身の終着地点が見えた。

だからこそ、その終わりまでに自分が精一杯出来ることをやろうと思っただのだ。

こんな自分でも、少しは誰かの為になりたいと願って。

前世みたいに、振り返っても何もなかったと思いたくなかったから。

「楽しかったなあ」

風見学園に入学して。

非公式新聞部に所属し、以前とは違った生活をして。

桜に関する記事を書いて、そこから色んな人と知り合えることが出来る。  
来て。

そして。

『あなたのおかげで、わたしは、幸せになったんです』

こんな自分でも、誰かを幸せに出来たのだと、言ってくれるひとがいて。

もう、十分なのかもしれない。



満足しても、良いのではないのだろうか。

そう思う気持ちが無いわけではない。

だけど。

それでも一つだけ、やりたいことが出来た。

「ゆめ、さん」

前世でもなかった程に、今でも膨らんでいく想い。

それに気付いた時、彼方は戸惑いもあったが、嬉しくもあった。

こんなにも、誰かを好きになれると思つてなかったから。

そして、自惚れかもしれないが。

彼女も、少しは自身に好意を向けてくれていたのだと彼方は感じた。

だからこそ、明日誘ってしまったことは自分の我儘でしかないのだろう。

——よくないって、分かっているのにね。

彼方は自嘲げに笑う。

ずっと、一緒にいれる訳じゃないのに。

楽しければ楽しい程、お互いにとって後が辛くなるだけなのに。

わかってるけど。

それでも、誘ったのは、きつと——

「ごめんね……これで、最期だから」

「付属の1年3組でプラネタリウムを作成したので、是非寄っていつて下さい！」

「お昼から講堂で軽音部のライブをやるんで、皆さん見ていつて下さい！」

「おい、聞いたか！3年3組に行くと、女の子がパジャマ姿らしいぞっ」

クリパ当日。

風見学園でも1, 2を競うくらいの大イベントということもあり、学園至る場所がクラスの催しを宣伝する人、売り子をする人、実際に見て回る生徒達で賑わっている。

「動くなあ、生徒会よ！」

「げっ、もう見つかってんじゃねーかつ」

そんな中、風見学園の焼却炉では、他の場所と違い、穏やかではない空気が漂っていた。

その場所には、大人数の非公式新聞部の部員と生徒会メンバーが居り、

中心には高坂まゆきと杉並、板橋 渉の3人が対峙している。

「ふむ…見つかるのは、もう少し先だと予想していたのだがな」

「あんまり生徒会を、私を舐めないことね！」

学園祭の時のように甘くは行かないわよ、と。

杉並と渉に指を差し、まゆきはニヤリと笑みを浮かべながら強い口調で喋る。

そんなまゆきに対し、渉は顔を青くさせながら慌てた様子を見せる

が、

渉とは違い、杉並は飄々とした様子そのままであった。

「まったく、我々を邪魔するヒマがあるなら、少しは周りの様にデートの一つでもしたらどうなのだ？」

「お生憎様…：私はね、自分より強い男じゃないとデートしないのよ」

「ま、まゆき先輩やべー…：それじゃあ、一生誰とも付き合えないんじゃない」

「か、よ、わ、い、私に對して、何か言ったかにやーん、板橋？」

な、何でもないですと。

笑顔なのに先ほどよりも圧力が増した副会長の姿に、渉は勢いよく顔を横に振り続ける。

そんな渉の表情を見て満足したのか、一旦圧力のある笑顔を向けるのをやめた。

——まあ、全くしたくないわけじゃないんだけどねー、デートとか。まゆきは、内心にて自身の本音を述べる。

彼女自身、まったく恋愛に興味が無いかと言われると嘘になる。

クリパとか遊園地とかでの女の子らしいデートとかはやはり憧れるのだ。

ただ残念ながら、まゆきとしては好きな男性っていうのが居ないのである。

強いて気になる男性を挙げるとするなら、弟くん——桜内 義之くらいだろうか。

——その弟くんを大々大好きなお姉ちゃんが居るから、可能性はないけどにやー…。

自分の相棒と呼ぶべき会長——音姫が居るから、義之と付き合うとかは絶対ないだろうかと改めて思う。

そして、音姫を思い出したからか、先ほど見掛けた女生徒のことが頭を過ぎる。

——妹ちゃんは、幸せそうにデートしてたなー。

生徒会の面々を率いて焼却炉へ向かう際、校庭にて音姫の妹——由夢の姿を見掛けた。

ひとり、または女友達と一緒にではなく、男子生徒と一緒に露店を巡っていたのである。

デートだ、あれは絶対デートだ、と。

まゆきは彼女らの様子を見て分かったのだ。

最初は少しくらい冷やかしにでも行こうかな、なんて意地の悪いことも考えたまゆきであったが。

『その……いつか、想いを伝えられたらなって』

以前に由夢が非公式新聞部の仮部員という話を聞きつけ、問いただした時。

その際に、彼女から聞いた事情聴取、もとい惚気話と表情を思い出した為、すぐに行動するのを止めた。

邪魔しちやいけない場面だと理解したからだ。

——ま、クリパが終わってから、結果を聞くらいは罰当たらないわよね。

独り身である自分に、少し糖分を分けて貰うくらい許されるだろう、とまゆきは考えた。

さて、と。

まゆきは内心で考えていたことを一旦止め、目の前の人物達に改めて目を向ける。

「わたし達は楽しい楽しい追いかけてこの時間よ、さあ覚悟しなさい！」

「くそーっ、俺はもっと恋愛的なイベントが欲しかったー！」

まゆきの言葉に嘆く渉を他所に、彼女は後ろに並ぶ生徒会の面々へ一度振り返り、そして対峙する者達へ指を差して告げる。

「さあ、みんなっ、全員をとっ捕まえるよっ！」  
「「「おーっー」」」

「す、す、杉並、これどーすんだよっ！」

「ふむ……板橋よ、プランDだ」

「おうっ……っつて、えっ、待てよ、杉並！ それって、俺が囿に——ぐ  
わあああああっ！」

「あら、貴方が桜内 義之さま、なのですね」

「え、ええ……そうですが」

よかった、と。

両手を合わせ、嬉しそうな表情で此方を見てくる女性に対し、桜内  
義之は困惑していた。

風見学園付属2階の廊下。

音姫に頼まれ、義之は生徒会の手伝いとして各クラスで何か問題が

起きていないか巡回していた。

その最中のこと。

義之は困った様子でパンフレットを見ている女性を見掛けたのだ。音姫の祖父である純一と同じくらいの年齢だろうか。

黒髪の、着物姿の女性がパンフレットと周り場所を交互に見ており、どこか行きたい場所があつて迷つていると思つた。

現在は生徒会の手伝いとして活動している為、義之はその女性に声を掛けたのだ。

『あの……どこか行きたい場所があれば、お教えしますが』

『あら、ありがとうございます。あの……、行きたい場所なのですが――』

彼女が行きたい場所を聞き、義之は内心驚いた。なにせ、その女性が伝えてくれた場所が自身のクラスだったのである。

場所は分からない筈がない為、そのまま義之は女性をクラスまで案内することにした。

『誰か、〴〵家族が3年3組にいらつしやるんですか？』

一緒に向かう中、疑問に思つたことがあつたので、義之はその女性へと質問をする。

義之のクラスがクリパで行っているのは、SSP―セクシー寿司パジャマパーティーである。

普通であれば、そんな催しは男ならともかく、女性としては興味がないはずだ。

それなのに目的が自身のクラスであつた為、身内が生徒に居るのではないかと思つたのだ。

ただ、彼女の答えは義之の予想とは外れていた。

『いえ、違うのですが……一度、お会いしたい方が居るので』

『そうなんです。ちなみに、その人の名前は何て言うんですか？』

彼女の口から告げられた名前に、義之は目を丸くする。

そして、そのまま彼はその女性に向けて言葉を返したのだ。

その名前は俺です、と。

そして、場面は冒頭に戻る。

会いたい人物が自分であることに義之は驚きながら、その女性を見る。

頭の中の記憶を掘り起こそうとするが、会った覚えがないため、戸惑った。

その様子を見て、その女性は、失礼しましたと言葉を添えてから、義之に向けて続けて言葉を掛けた。

「ご挨拶が遅れましたが、私は胡ノ宮 環と申します」

「胡ノ宮さん、ですか……」

珍しい苗字だと、義之は思った。

彼女自身の名前を聞いても義之としては、彼女が誰だか分からなかった。

しかし、「胡ノ宮」という単語と場所は聞き覚えがあった。

「その、もしかして、近くの胡ノ宮神社に関係されている方、ですか？」

「ええ、その通りです」

聞くと、胡ノ宮神社の神主であるということが分かった。

そして、義之はそこまで聞いて理解した。

「あの、由夢がよく神社に行ってるみたいで……その、お世話になってます」

「ふふ、由夢様はよく話相手になってくださるので有り難いです」  
頭を下げる義之に、環は嬉しそうな表情のまま言葉を返す。

そう、義之は芳乃家の食事中に、由夢から話を聞いていたのだ。

胡ノ宮神社にたまたま寄っていると。

神社は年末年始以外は行かない為、由夢が通っていることに少し疑問はあったが、

目の前の人の様に穏やかな女性が居るから話に行ってたのだと理解した。

「なるほど、それなら由夢が俺のことを何か言ってたんですね」

悪口とか言っていないだろうな、と義之が心配する中、環は彼の言葉を否定する。

由夢から聞いて会いたかったのではない、と。

更に環は言葉を続けた。

大切な友人から息子であるアナタ様のことを聞いたのであると。

——友人……、息子……それって。

息子ってことは、その友人は親ということだ。

それを考えたとき、自身にとつて母だと思ふ人のことが頭を過ぎる。

そして、ほぼ間違いないと思いつつも、環に義之は問い掛ける。

「あの……、それって……さくらさんのこと、ですよ？」

「ふふ、そうです。色々さくら様からお聞きして、一目見たかったもので」

環の返答に対し、顔が熱くなるのを感じながらも内心で今居ない人物に叫ぶ。

——さ、さくらさん、俺のこと何て言ってるんですかっ!?

いや、聞かない方が良いのだろうと思つた。

多分、聞いたらもつと恥ずかしくなるやつだと。

「聞いた通りの、素晴らしい殿方でした」

「い、いや……その……あははは」

環の言葉に乾いた笑いを返すしか出来なかった。

というよりも、穴があつたら入りたいほど、羞恥心が高まっている。

最近、素直に自身の思いを告げられたことで、さくらが一層笑顔が増



えたと思う。

それは凄く嬉しい。

その気持ちは変わらないのだが、正直、照れるのだ。

周りに言っているという話分かり、環以外にも言っていないだろうかと不安になる義之であった。

「あら、あれは——」

恥ずかしく少し俯いていたが、環の言葉を聞き、顔を上げて彼女の方を見る。

すると、環は窓越しに下の方を見ていたので視線を向ける。

——あれは、由夢と初音か。

見覚えのある二人が一緒に歩いている姿が目に入ってきた。

一瞬驚いた義之であったが、同時にその光景に納得の気持ちもあつた。

学園祭での講堂の様子は少しだけが見ていたのだ。

だからこそ、二人が並んで楽しそうに話している姿は違和感がなかった。

由夢のやつ、楽しそうですね、と。

環に話しかけようと思い、彼女へ振り返り、そして驚いた。

彼らを見る表情が、思ったよりも真剣であったから。

少し戸惑いながらも、義之は話しかける。

「胡ノ宮さん、どうかしましたか？」

「——いえ、何でもないです」

何でもないと言った義之に告げた後、ただ、と環は言葉を続けた。

「やはり、由夢様はとても心の強い方だと、再認識しただけです」

環の言葉に疑問が更に深まる義之を他所に、環はもう一度由夢を見詰め、そして呟いた。

——頑張ってくださいね、由夢様。

「あ、これは……雪、ですね」

ホワイトクリスマスです、と。

ゆっくり舞い落ちる雪を見上げながら彼方は呟いた。

風見学園の屋上。

各クラスや校庭など気になる催しを二人で回った後、

由夢が最後に行きたい場所があると彼方に伝え、向かった先がここだった。

普段なら誰かしら人が居たりするのであるが、クリパの終わりかけである為か、

屋上に居るのは彼方と由夢の二人のみであった。

——楽しかった。

舞い落ちる雪を見上げながら、

彼方は今日由夢と一緒に居た時間を思い出す。

『こ、このたこ焼きカラシたくさん入ってます……』

露店のロシアンたこ焼きを間違えて買い、

大量のカラシ入りを食べてしまって涙目になる由夢の表情。  
申し訳ないけど、少し可愛いと思って。

『か、かなたさんは見ちやだめですー!』

『えーっ、このお気に入りのパジャマ見て貰いたいのになあ』

義之のクラスの催しーセクシー寿司パジャマパーティーに行つてしまひ、

色気のある茜のパジャマ姿を必死に彼方の視界に入れないように慌てる由夢の姿。

嫉妬に近い感情を浮かべてくれることに、喜びを感じて。

『もう、これ絶対、杉並先輩かかわってますよね』

盆踊りの音頭が全体の放送に流れるのを聞きながら、

せつかくのデートなのに、と小声で呟き、頬を膨らませる由夢。

そんな彼女を愛おしく想つてしまつて。

——ほんとに、楽しかった。

色んな場所を由夢と二人で一緒に回つて。

笑つて。怒つて。楽しんで。

そんな由夢の様々な表情や仕草を、目に焼き付けることが出来た。

——だから。

彼方は思う。

もう、十分だと。

「彼方さん」

大きい声ではない。

しかし、彼女の声は静かな屋上に響き渡つた。

彼方は声がした方向へ視線を向ける。

そこには、こちらを優しくげな表情で見つめる、由夢の姿があった。

「彼方、さん」

もう一度、由夢は彼方の名前を呼ぶ。

その声は、何だか柔らかく感じて。  
もつと呼ばれたらいいって思ってしまう。

「かなた…さん」

由夢の、名前を呼ぶ声。

その声の優しさに。柔らかさに。温かさに。  
彼女が、次に言うことがわかってしまった。

「彼方さん、私…彼方さんのこと——」

だからこそ、それを全て言わせちゃダメだと思った。  
だって。

だって、それを聞いたら。

このあとに、自分が言えなくなってしまうから。

「嬉しいです」

全てを言わせたくなかったから、遮った。

でも、遮った言葉は、彼方にとって掛け値ない本音だ。

ほんとは、全部聞きたい。

そして、こちらにも伝えたい。

でも。

「でも、ごめんなさい」

自身が想いを自覚した、その時から。

彼方は、ずっと考えた。

自身と由夢の両方にとって、

後悔しない為にはどうするべきなんだろうって。

考えて。

必死に、考えて。

自分なりに考えた結果、彼方は決めた。

「その気持ち、答えてあげられないです」

由夢に伝えるのだ。

魔法の桜が枯れるのだと。

——私の叶った夢が、もうすぐ解けてしまうのだと。

「だって——」

たとえ結ばれても、満足するのは自分だけで。

取り残されたひとは辛いはずだから。

悲しませない為には、これが一番だと思った。

だから。

彼方は、由夢に伝えようとした。

「——桜、枯れるんですよね」

「えっ……」

だからこそ、由夢の言葉に頭が真っ白になった。

そんな彼方を見つめながら、由夢は寂しそうな笑顔で更に言葉を続ける。

「知ってました」

だって、この場面を夢で見ましたから、と由夢は告げた。

呆然とした表情の彼方をみて、由夢は少しだけ満足した。

彼方は分かるはずがないが、彼女にとって言葉を遮ったのは、小さい仕返しなのだ。

今日を凄く楽しみにしていたのに、悲しい夢を見させられたのだから。

——起きてから、凄く泣きたくなっただけ。

胸が締め付けられるように感じて。

泣きたくなっただけ。

しかし、由夢はその予知夢をみて、はいそうですかと諦められなかった。

諦められる程の小さな想いでは、なかったのだ。

それに。

——彼方さん、私の為に……言ってくれたんだよね

夢だけではない。

出会ってから、彼方の側で、隣で、彼を見てきたのだ。

彼が気遣って言ってくれた言葉なんだから、分かった。

それを分かることが出来たのが、由夢は嬉しかった。

——だからこそ。

全てを伝えなければいけない。

そう、思った。

わたしの想いをすべて、と。

「彼方さんのことが、好きです」

「由夢、さん……」

先ほど、彼方に伝えようとして遮られた言葉。

まず最初にこの言葉は伝えなかったのだ。

「彼方さんに言ってなかったんですが、私も魔法の桜に願いを叶えてもらったんです」

学園祭の後のこと。

義之との話を切つ掛けに、由夢は自身が昔に願い、そして叶えてもらっていたことを知った。

「それは、幸せな未来を見たいっていう願いでした」

自身が見る予知夢は、誰かの不幸な場面で。

その予知夢を覆すことが出来なかった。

だからこそ、自分は不幸ではなく、幸せな未来を夢で見たいと願っていた。

「その夢が——彼方さんとの一緒にいる未来だったんです」

「わたしとの……?」

「はい、彼方さんと出逢って、部員として側にいて——そして付き合う姿も見ました」

断片的であったが、彼方と出逢ってからの場面を夢として見るようになったのだ。

その夢は、彼女にとってどれだけ救いになったのか、きっと彼方には分からないだろう。

「その夢は、その時の気持ちも一緒に感じるんです」

普段の予知夢はあくまで場面をフィルター越しで見るようなもの

である。

しかし、彼方が出てくる夢は、その時に一緒にいる由夢自身の気持ちや想いも感じることが出来たのだ。

嬉しいという感情。

もつと側にいたいと感じる想い。

全部、ぜんぶ感じることが出来た。

「こういう気持ちを未来の私が抱くんだって思ったら……彼方さんにいつ逢えるんだろうって、ずっと考えてました」

いつ逢えるのだろう。

もう少し先かな。

それとも、もうちよつとしたらかな。

早く、その時が来ないかな。

早く、逢いたいな。

そうやって由夢はたくさん彼方のことを考えるようになっていた。

「わたしは彼方さんに、あなたに、逢うことを夢見ていました。そして——」

——あなたに逢う前から、あなたに、恋をしていました。

そう、これが彼方に逢うまでのこと。

そして、本当に伝えたいのは此処から。

「実際に逢って、夢じゃなくて直接話して、もつと彼方さんを知ることが出来ました」

あくまで夢は部分的なものでしかない。

全部を見れるわけではなかったからこそ、

由夢は側にいて、彼方のことをもつと知ることが出来た。

それだけではなく。

「彼方さんは、私の予知夢は覆せるものだって、証明してくれました」  
魔法の桜に叶えてもらった願いではなく。



生まれてからあった、自身の不思議な能力。  
そちらの見る夢は、不幸な未来は、覆せないのだから諦めてた。  
そんな、半ば諦めていた予知夢を変えてくれた。  
それが、どれだけ嬉しかったか。  
どれだけ、彼方に感謝したことか。  
そうやって夢以外の彼方を見て、知って。

「わたしは、もう一度、彼方さんのことが好きになりました」  
学園祭で未来を変えてもらった後。

魔法の桜が見せてくれていた夢と実際に少しずつ変わっていった。  
やはり、幸せな未来もあくまで可能性のひとつで。

その未来も覆ることがあるのだからって理解した。  
でも。

それでも不安にならなかつたのは、魔法の桜に誓ったからだ。  
見せてもらった夢よりもっと幸せになってみせるから、と。

だから――

「桜がもうすぐ、枯れるんだとしても……大好きです」

彼方が伝えたいことは、分かっている。

魔法の桜が枯れるということは、願いもなくなってしまおうのだ  
つて。

願いが解けてしまったら、彼方は――

それでも、由夢の想いは変わらなかった。

「枯れることを理由に、わたしを振らないでください」

本当に嫌いななら、そう言って欲しい。

でも、そうじゃなくて。

枯れるから、願いが解けるから。

それを理由にして、振らないで欲しい。

もし、嫌いじゃないなら。

自分のことを想ってくれるなら。

「桜が枯れるまでの時間を、わたしにください」

由夢の身体が小刻みに震える。

透明な雫が、大きな瞳に溜まっていく。

本当は今すぐにでも泣きたい。

でも、全部伝えるまではと、由夢は必死で我慢する。

「そして、約束してください」

これは、由夢にとつての願い。

そして、我が儘。

「たとえば桜が枯れても、わたしの隣にいてください」

願いが解けたとして、彼方自身が出来ることはないかもしれない。

それは理解してても、あえて口にしたのは諦めて欲しくなかったから。

そして、もう一度、不幸な未来を彼方に覆して欲しかったから。

「じゃないと——」

「——わたし、ずっと、独り身になっちゃいますからね」

言った後、由夢の瞳に溜まった雫が零れてしまっていた。

もう、我慢できなかつたのだ。

ただ。

我慢する必要なんて、なかつたのかもしれない。

何故なら、彼方も同じように瞳から零れてしまっていたから。

「そっかぁ……………」

憑きものが落ちたかのように、彼方は笑った。

「それじゃあ、頑張って生きないと、いけないね」  
すべての想いを告げてくれた少女に、彼方は告げる。

「……由夢さん」

「は、はい」

「ごめんなさい」

「えっ……」

「——あなたのことが、大好きです」

episode—37 「恋人のはじめかた（前編）」

『彼方さんのことが、好きです』

『——あなたのことが、大好きです』

クリスマスパーティー。

その終わりかけでの、学園の屋上で。

朝倉 由夢と初音 彼方はお互いの気持ちを伝え合った。  
単純な恋愛物であれば。

想いを伝え合ったふたりは幸せになりましたとき、と。

そう、終わったのだろう。

だが、彼方と由夢のふたりにとっては、  
ここからがはじまりなのかもしれない。

魔法の桜。

彼方の願い。

桜が枯れてしまう、期限。

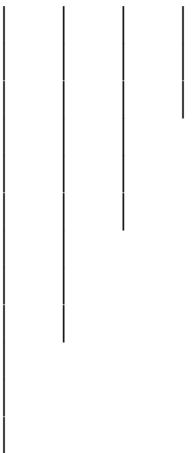
色々、不安なことは多い。

しかし、あの場で想いを伝えたことに後悔はなかった。

そう。

あの時から。

ふたりは、恋人という関係になった。



「か、彼方さんっ！」

非公式新聞部 第二執筆室。

既に学園としては冬休みに入っている中、彼方と由夢は自分たちの部室にいた。

普段とは違い休み期間中ではあるものの、

第二執筆室に彼方と由夢のふたりきりというのは何も珍しいわけではない。

しかし。

「その……、お、お願いがあるんですけど」

いつもと同じかと言われると、部屋の中では少し異なる様相を呈していた。

どこか緊張した面持ちで、由夢が彼方に詰め寄っていたのである。

「こ、これっ！」

「え、えつと……雑誌、ですか？」

いきなり何かを自身の目の前に差し出されて慌てた彼方であったが、少し落ち着いて見てみると由夢が出してきたのは何かの雑誌であった。

——これは…初音島の、観光名所？

由夢が雑誌を開いて見せているので何の雑誌かはハッキリ分らないが、そのページには初音島の色々なスポットが記載されていた。彼方が自分の見せている雑誌に視線を向けているのを感じ、開いたページの目的の箇所指を差した。

「その……ここ、行きませんか？」

由夢の差した箇所に視線を向けると、その部分には赤ペンで描いた花丸が付いており、そこには施設の写真と名前が記載されていた。

「サクラパーク、ですか」

彼方が記載の場所を思わず読みあげると、

由夢は言葉ではなく、小さく頷いて肯定の意を示した。

——これって、もしかして……。

雑誌から彼女の方に顔を向けた彼方は彼女の表情を見て胸の鼓動が早くなるのが分かった。

恥ずかしそうに。

そして、どこか期待した表情でこちらを見つめてくる由夢。

彼方は、顔が熱くなるのを感じた。

そんな彼方を見ながら、

由夢は彼方に自身の気持ちを告げた。

「彼方さん……デート、したいです」

これは、彼方と由夢の恋人のはじまり。  
その出来事的一幕である。

episode—37 「恋人のはじめかた（前編）」

「はあ……」

由夢は歩きながら、何となしにタメ息を吐いた。

初音島の商店街。

普段、平日の昼過ぎのこの時間は学校があるため主婦や年輩の方が多いのだが、冬休みに入っていることもあり、色々な人々が街を賑わせていた。

そんな中、同じく休みに入っていた由夢も商店街をぶらついていった。

特に商店街に目的があったわけではない。

ただ、少し気分転換がてらに歩いていただけなのだ。

——いや、気分転換ってほどのことじゃ、ないんだけど。  
由夢は内心でつぶやく。  
そう、何か気が重くなるようなことがあったわけではない。  
少しだけ。  
ほんの少しだけ、悩んでることがあったのだ。

「あなた、さん」

義兄と同じ学年の男子生徒。  
自身が仮所属する非公式新聞部の方。  
以前から夢で逢っていた男性。  
——そして、自分の想い人。

『——あなたのことが、大好きです』

数日前のクリパでの出来事。  
そのときの彼方の言葉を思い出すと、いまでも胸の鼓動が早まり、  
頬が熱くなる。

そしてそれ以上に、心が暖かくなるのを由夢は感じた。

あのとき、あの屋上でお互いに気持ち伝え合った。  
自身が彼方を好きで、彼方も自身が好きだと伝え合ったのだ。  
つまりは。

——恋人でいいん…だよな？

付き合ってください、と言ったわけではない。  
でも、想いを伝え合ったのだから恋人関係になったのは間違いない。  
はずだと、由夢は思う。  
彼方もそう思ってくれていると、はつきり信じることもできた。  
では、何に悩んでいるのか。



それは――

「おお、由夢ではないか！ 偶然だなっ！」

「……あ、天枷さん」

自分の名前を呼ばれ、ふと思考の渦から意識を戻す。

すると、其処にはこちらに笑顔で手を振る水色の髪の子――天枷美夏の姿があつた。

「こんにちは、天枷さんはお買い物？」

「うむ、ちよつと果物を補充しにな」

今日は特売で安かつたから沢山買つてしまった、と。

こちらに沢山果物が入つた袋を見せながら笑う美夏。

そんな元気で明るい表情の美夏に、由夢も思わず笑みが溢れる。

天枷 美夏。

少し前に転校してきた少女であり、由夢のクラスメイトである。

席も近く、義兄の義之とも知り合いであつたこともあり、自然とよく話す仲になつていた。

「そういう由夢も買い物にでも来たのか？」

「い、いえ……そういうわけでは、ないんですけど」

少し気分転換したくて、と。

あはは、と苦笑いしながら答える由夢に、美夏は首を傾げながら彼女に告げる。

「む……何か悩みがあるなら、美夏が相談に乗るぞ？」

「ありがとうございます。でも、そんな大したことじゃ――」  
「ないですよ。」

そう答えようとしていた由夢であつたが、途中で言葉を止めた。

——ひとりで考えるよりは、乗ってもらった方が良いかな。もともと、誰かに相談してみようかと少し考えていた。

最初は姉の音姫を考えていたが、いまは生徒会の合宿に行つて居ないのだ。

義之や祖父には相談し辛く、環には何回も色々相談してる為、ちよつと遠慮する気持ちがあつた。

その為、渡りに船であると思つた。

だからこそ由夢は友人にあらためて気持ちを告げた。

「あ、天枷さん！　ちよつと相談に乗つて欲しいのっ！」

——はあ……。

何でこうなつたのかしら、と。

期待した表情を浮かべる由夢と美夏を前に、沢井　麻耶はひそかにタメ息を吐いた。

『麻耶、頼む！　いますぐ来て欲しいんだ！』

自分だけでは解決できないことがある。

だから協力して欲しい。

そのように美夏に電話越しで懇願されたのは、麻耶が自宅で弟の宿

題を見ていたときであった。

『んー、わたし、このあとに明日の準備しないといけないんだけど……』

少し困ったように、彼女は美夏に告げる。

明日の準備とは、風見学園での補習合宿のことである。

これは麻耶だけでなく、とある催しを行った麻耶のクラスメイト全員が対象であった。

『ああ、そういえば学園に泊まりでボランティア活動をするんだっただか？』

『ええ……、まあ、仕方ないんだけどね』

SSP（セクシー寿司パーティー）。

麻耶のクラスにてクリパで実施した催しである。

女生徒たちがパジャマ姿で寿司を握る、という普通の学園祭では認められないだろう内容だ。

というか、生徒会に正式に認められたわけではなく、杉並によってバれないように事を進めたのである。

さらには裏メニューとして水着を着ながら接客とかもしていた為、生徒会にバレたことで勿論問題になったのだ。

学園長の温情により、ボランティア活動の補習合宿で済んで良かったと麻耶は安心したのであった。

『というわけで、準備したいんだけど……今日じゃなきや駄目？』

『出来れば、すぐにお願したい！ 友が悩んでるんだっ』

悩む友を助けてあげたい。

麻耶でなければ駄目なんだ。

真剣に告げる美夏に、麻耶は少し間を空けたあと、了承の意を述べた。

そうして、なるべく急ぎで指定の喫茶店に向かった麻耶。

着いた先には、美夏と由夢の姿があった。

『朝倉さん、よね?』

『は、はいっ、わざわざお呼びしてしまって、すみません』

『気にしないで、大丈夫よ』

申し訳なさそうに話す由夢に、麻耶は安心させるように微笑んだ。

『麻耶がいれば由夢の悩みも解決さっ!』

『まったく美夏は……』

自信満々に告げる美夏に、呆れながらも仕方ないなと麻耶は小さく笑った。

何だかんだで頼られるのは悪い気分はしないのだ。

麻耶は目の前に座る由夢に視線を向け、言葉を告げる。

『それでも先輩だし、色々経験してるから少しは力になれると思うわ』  
遠慮なく話して頂戴、と。

真面目な表情でこちらを見る麻耶に、由夢は自身の悩みを話し始めるのであった。

---

——これでも、力になってあげる自信はあったのだけど……。

麻耶自身、自慢するわけではないが、多少なりとも後輩の相談に乗ってあげる自信はあった。

今まで委員長として真面目に過ごして来たからこそ、学校や勉強面は力になれると思う。

そして、麻耶は誇れるわけではないが、自分でも中々にハードな人生を過ごして来たという自負がある。

たとえば。

父親のこと然り、姉の美秋のこと然り。

だからこそ、彼女から重い話が来たとしても受け止めてあげる自信はあった。

そう、あったのだ。

そういう思いがあったからこそ、

由夢の相談を聞いた麻耶は少しだけ頭を抱えていた。

——まさか、悩みが恋愛の話なんて……。

『そ、その……わたし、最近……お、お付き合いをはじめまして……』  
恥ずかしいのか、若干俯きながら由夢の口から麻耶にそのように語り始めたのだ。

話を聞くと、

美夏のクラスメイトである由夢は、学園の先輩に対して何年も想いを寄せていたとのこと。

そして、ここ最近になって同じ部活動に所属することになり、その先輩の側で放課後や休みの日にも一緒に過ごしていた。

そのあとふたりは徐々に関係を深めていき、クリパにて互いに想いを伝え合ったそう。

この時点で麻耶は既に戸惑いが隠せない状態だったのだが、由夢の相談はここからであった。

『こ、恋人って、どういうことをすれば良いんでしょうか……』

既にクリパから数日が経つ。

その間に一度も彼と会っていないか、と言われると毎日部室で会っ

ているとのこと。

やはり想いを伝え合ったことを意識してる所為か、目が合うと互いに照れてしまう。

何となく距離感や雰囲気は変わったのだが、以前と行動自体はふたりとも変えられていないのだ。

だからこそ、恋人らしいことをしたいのだが、そのはじめかたが分からない、とのこと。

「そう……、そうなのね……」

すべてを聞き終えた麻耶は、ゆっくり頷きながら考える仕草を見せる。

ただし、外面は落ち着いた感じを装うが、内心では物凄く戸惑っていた。

——わ、わたしに分かるわけないじゃないっ！

麻耶は、生まれてこの方、付き合ったことは疎か、異性に恋をしたこともないのだ。

そんな身で恋愛の話をされても力になれるわけないと自身でも思う。

だからこそ、正直に分からないと告げたいのであるが。

——い、言い出しづらい。　なんで、そんな期待したような視線を向けるのよっ！

自身の話をしてるからか照れてる様子を見せる由夢であるが、明らかに期待しているのが表情からでも伝わった。

おそらく、美夏が由夢に麻耶なら大丈夫だと自信満々に答えたのだろう、と麻耶は推測した。

思わず元凶である美夏に恨めし気に視線を向ける麻耶であったが。

「……………っ？」

当の本人は、腕を組みながら脳天気はこちらの視線に対して首を傾

げていた。

そんな美夏を見て何度めかのタメ息を吐きながらも、麻耶は思考を巡らせながら口を開く。

「その、そもそもだけど、朝倉さんは恋人になってやりたいことは、ないのかしら?」

「やりたいこと、ですか?」

ええ、と麻耶は頷く。

「友達の関係では出来なくて、恋人の関係になったからこそ、その先輩としたいことはない?」

義務感などでなく、素直に自身が恋人にしたい、してあげたいことはないのか。

真っ先に思い浮かぶのは何か、と由夢に尋ねた。

異性に恋をしたことはないが、誰かを好きになって恋人になったのであれば、したいことがあるのではないかと思っただからだ。

——手作り弁当とか……デート、とかが定番なのかしら。

今までの知識などをもとに由夢が告げそうなことを想像しながら、その場合の次の言葉を考える。

思考は止めないまま、麻耶は由夢にあらためて視線を向けると、彼女の頬が先ほどよりも赤くなっていることに気付いた。

「ど、どうしたの?」

「あの……その……し、したいことは……」

言い辛いのか、言葉を途切れさせる由夢。

そんな彼女の様子を見て、後押しするためか美夏が口を開いた。

「なんだ由夢、したいこと、さつき美夏に言ってたじゃないか」

「あれ、そうなの?」

「ああ。由夢が言いづらいなら美夏から言ってる」

「あ、天枷さんっ！」

明らかに慌てた様子の由夢を気にせずに、美夏は麻耶に言葉を告げた。

「由夢はな、そいつとチューをしたいみたいだ」

あまりの恥ずかしさに、机に突っ伏する由夢であった。

episode—37 「恋人のはじめかた（後編）」に続く。



「彼方さん、もうそろそろかな……?」

朝倉 由夢は、胸の鼓動が速くなるのを感じながら彼方が来るのを待っていた。

サクラパーク入り口。

初音島にある唯一の遊園地であり、今日由夢と彼方が二人でデートに行く場所であった。

——凄く、胸がドキドキしてる。

由夢は自身の胸に手を当てる。

触れなくても分かっていたが、明らかに普段より鼓動が速い。

それは緊張だろうか、期待からか。

その、両方かもしれない。

昨日、彼方にデートしたいと伝えてから、大小はあれどずっと感じていたものだ。

でも、仕方がないのだと由夢は思う。

——だって、初デートだもんね。

好きな人に想いを伝えて。  
結ばれて。

恋人としての、初めてのデートだ。

何もかも初めてだから、分からないことばかりだけど。  
嬉しくないはずがないのだ。

「頑張りますね、沢井先輩、天枷さん」

ここには居ない、お世話になった二人に小さくつぶやく。

このデートを迎える為に色々と相談に乗ってもらったのである。

喫茶店で相談して、その後にはデート雑誌を買って散々一緒に悩んでもらったのだ。

麻耶にも美夏にも、感謝してもし切れない。

そして、昨日にデートに誘うことが出来たのを電話で伝えたときのこと脳裏に過る。

『ふふ…おめでどう、朝倉さん』

『由夢っ、やったじゃないかつ!』

麻耶に電話した際、美夏も一緒に居たらしく、二人とも自分のこと様に喜んでくれた。

『でも、本当におめでどうと言うのは、由夢さんの願いが叶ってから、かしら?』

『は、はい……がんばります!』

『由夢ならチューできるさ!』

『こ、こら、そんなに直接的に言わないの』

『えー、でもなあ——』

『だから——』

美夏の言葉に頭が沸騰しそうになる。

確かに、自身のしたいことは告げたが、改めて他の人に言われると凄く恥ずかしかったのだ。

その後に麻耶が美夏を窘めたり色々あったが、最後に電話越しで麻耶に由夢へ、とある言葉を告げた。

『朝倉さん、あのね——』

「由夢さん、待たせてしまいましたか?」

昨日の麻耶と美夏とのやり取りを思い出していた所為で、少しボーツとしていたのだろう。

気付いた時には、私服姿の彼方が目の前に立っていた。  
由夢は一拍おき、はつきりと認識すると慌てて彼方に返答する。

「か、彼方さんっ！ あ、あの……いま来たところですよ！」  
思ったより大きい声で返してしまい顔が熱くなるが分かった。  
しかし、彼方が嬉しそうに笑う姿を見て目を丸くする。

「か、彼方さん？」  
「あ、いえ……、何だかやり取りがデートっぽくて嬉しくて」  
彼方の言葉を聞いて、先程のやり取りを思い出す。

『待たせてしまいましたか？』  
『いま来たところですよ！』

「あははっ、確かにそうですね！」  
確かに、意図せず恋人の待ち合わせのやり取りをしていたようだ。  
しかも立場が男女で逆であった為、何だかおかしくて、二人で顔を  
見合わせて笑い合った。

予期せぬ自体であったが、由夢は緊張が取れた。  
そして、麻耶の最後の言葉を思い出す。

『目標も大事だけど、まずはせつかくの初デートを思いっきり楽しみ  
なさい』

——はいつ、ありがとうございます、沢井先輩！  
麻耶の言葉に内心で返しながら、改めて彼方に顔を向け、笑顔で彼  
に言葉を発した。

「それじゃあ、今日はよろしくお願いしますー！」  
はい、と。

彼方も由夢に釣られるように笑みを浮かべ、二人はサクラパークへ  
入るのであった。

「お化け屋敷は、想像以上でしたね」

「あはは、わたしはずっと叫んじやっていたと思います」

——雰囲気って、何なのだろう。

彼方と先程のお化け屋敷についての感想を述べながら、由夢は心の中で考える。

コーヒークップ、空中ブランコ、お化け屋敷。

由夢と彼方の二人は、遊園地での定番を乗っていった。

久しく遊園地来ていないから、どれも楽しい。

好きな人と一緒に行けるなら尚更だ。

彼方も嬉しそうな表情をよく見せてくれているから、由夢も安心して。

少しだけ落ち着いたからか、由夢は麻耶と美夏とのやり取りをふと思い出す。

『それで、結局、由夢がそいつとチューする為にはどうすれば良いんだ』

『……ねえ、美夏。せめて、キスって言って欲しいんだけど』

初音島のデートスポットの雑誌からサクラパークを選んだ後のこと。

やはり話題となったのは、由夢が言った目標のことだ。

デートの場所が決まったとして、実際にキスする為にはどうすれば良いのだろうか、と。

由夢がつぶやいたのだ。

まず、チューしたいって言えば良いという美夏の意見は却下された。

由夢としては難易度が高すぎた為だ。

ただ、却下したものの思い付かず、由夢と美夏は自然と麻耶の方に向いた。

麻耶の内心では、こちらを見られても困ると凄く焦っていたが、必死に考えて口に出したのが――

『雰囲気……ですか？』

『ええ。ムード、と言った方が良いかしら』

麻耶は由夢に問いに答えた。

雰囲気作りがそもそも大事なのだ。

『麻耶、雰囲気ってのは大事なもんなのか？』

『大事だと、思うわ。だって、いきなり普通のタイミングでキスしよって言いづらいし、出来ないでしょ？』

確かに、由夢は普通の会話と同じようにキスしたいと言える筈がないと同意した。

ただ、もちろん一番重要な疑問は残る。

美夏も同じ疑問を抱いたのか、口に出した。

『その雰囲気って、どうやって作るんだ？』

『え……、あ……』

麻耶は美夏に聞かれ、あからさまに困った表情を浮かべた。

そんな雰囲気を作る相手も今まで居なかったのだから答えようがないのだ。

ただ、もうやけだと麻耶は自身が読んだ少女漫画やドラマを参考に  
して由夢に語った。

色々話した結果として、結論に至った。観覧車は、キスする雰囲気を作れそう。そして、壁ドンは現実では無理である。この二点だけしか持っていけなかったのであった。

—— 沢井先輩、雰囲気って結局どう作れば良いんでしょうか。

由夢は心の内で不安を感じながらも、

観覧車は最後にして、それまでに手を繋ぐところから始めようと思うのであった。

「そういえば、彼方さんは年上年下にかかわらず敬語ですよね？」

由夢はジェットコースターの待ち時間ということもあり、二人で並びながら、自身が気になっていたことを口にした。

いきなりの質問に驚きながらも彼方は頷き答える。

「ええ、そうですね……やはり、年上に敬語を使われると気を遣いますか？」

「えっ？ いえ、そんなことはないですよ」

心配そうに見る彼方に勘違いさせないように大きく首を横に振り否定する由夢。

単純に気になっただけです、と続けて口にした。

周りに常に敬語で話す人が彼方以外に居なかった為に思っただけである。

「なんか切っ掛けとか理由ってあるんですか？」

「いまは特に意識して敬語を使ったわけではないですが……」

途中で彼方の言葉が止まり、由夢が彼の顔を覗きこむと少し悩んだ様子を見せていた。

「あ、あの、別に無理に聞きたかったわけじゃないので——」

「えっと、そんなに言いづらい話ではないです」

何だか少し恥ずかしくて、と。

彼方は若干照れた表情を見せながら意を決したように言葉を続けた。

「その……憧れを真似たのですよね」

「憧れを真似た、ですか？」

そうです、と相槌をうちながら彼方は話し始めた。

彼方は自身の前世と呼べる、昔の自分の記憶がある。

昔のことを考えると、心が重くなる。

自身が何もせず、必要とされなかったことを否が応でも思い出すからだ。

しかし、昔の記憶があるからこそ、今度こそは違う自分でいたいと思った。

必要とされる自分に、誰かの為に行動できる自分に。

そして、変わるためにまず何をしようかと考えた。

「それが、憧れの人を真似ることなんですね？」

「はい。ただ、その……憧れと言っても、空想上の人物なのですよね」

自身の言葉に目を丸くする由夢を見て、照れたように笑う彼方。

彼方としては、話すのを少し躊躇したのはこれが恥ずかしかつたらなのだ。

「空想上の人物というのは、物語とかのキャラクターってことですか？」

「ええ、その通りです」

彼方は自分がどんな人になりたいかと思ったとき、すぐには思い付かなかった。

きつと、昔は人付き合いも相手のことをちゃんと知ろうとしてなかったからであろうか。

だから、今度はドラマやアニメ、漫画、小説など物語のキャラクターでなりたい自分を考えた。

そのときに思い浮かんだのは、とある少女向けのアニメに登場していた、主人公の父親であった。

「どんなキャラクターだったんですか？」

「家族にも敬語を使う父親で、常に優しく笑っていて、家族や周りの人たちに慕われていました」

家族にも敬語と聞くと真面目で堅いイメージになるかもしれないが、そのキャラクターは常に優しい雰囲気を漂わせていた。

その感じが自分の中でなりたい像とせずと頭の片隅に残り続けていた。

「だからこそ形から入るということで、敬語を同じように使い始めた、というわけなのですよね」

何だか恥ずかしいですね、と顔へパタパタと手を仰ぎながら話す彼方に思わず笑ってしまう由夢。

「彼方さん、敬語使う理由がわかって嬉しかったです」

「そう言ってもらえるなら少しは救われます。ただ、もし堅いと思ったら言ってくださいね？」

「堅いとは思ってないですよ。それに……」

「それに？」

「いえ、何でもありません！」

由夢は言おうとした言葉を止めておいた。

彼方に話すのはちよつと恥ずかしかったからだ。



——それに、たまに敬語が抜けて話してくれると余計嬉しくなるので。

今まで2回だけ自分の前で敬語なしで話していたときがあった。

それは学園祭とクリパのときだ。

本人は意識していた訳ではないのだろう。

敬語が抜けて話していたとき、彼方の素を見れた気がした。

それは、自分にとっての宝物なのだ。

だからこそ、他の人には見せて欲しくないという小さな独占欲があった。

そして、自分で彼方の素を出させたいという気持ちもあった。

彼方には言わないでおこう、と由夢は再びその場面を見れることを心の中で期待しつつ思うのであった。

彼方の敬語を使う理由について聞いた後のこと。

あと数人でジェットコースターに乗れるまで近付いた最中、由夢はとある幼い女の子が目に入った。

「あれは——」

由夢の目に入ったのは、小学生に入るか入らないかの幼い女の子であつた。

家族連れであれば特に気にはしなかったであろう。

しかし、由夢が見た女の子はひとりであつた。

小さい足で歩きながら周りを何度も何度も見渡している。

ここからでは表情は見えないが、顔を手で拭く仕草をしていることから、泣いているのではないかと思った。

「あれは——」

「彼方さん、行きましよう！」

おそらく、彼方も同じように女の子の様子に気付いたのだろう。

由夢は彼方に声を掛け、すぐに向かおうとしたが、彼方から返事がなかった為に振り返る。

すると、目を見開いて由夢を見詰める彼方が其処にはいた。

「か、彼方さん……？」

「あ——いえ、いきましよう」

彼方は由夢の視線に気付き、一瞬声が詰まったが、すぐに平静に戻り由夢と一緒に女の子のもとへ向かうのであった。

近付くと、やはり女の子は親御さんと離れて迷子になっていたようで、不安な様子で今にも泣きそうであった。

周りを見渡しても女の子の親御さんを見つけることが出来なかった為、聞いた女の子の名前で両親を探しながらも迷子センターへと向かった。

どうやら女の子の両親も探しながら迷子センターに来ていたらしく、思ったより早めに合流させることが出来たのであった。

「ゆきちちゃん、お父さんとお母さんを見つけられて良かったですね」

ありがとう、とこちらに笑顔を手を振り続けてくれた女の子の様子を思い出し、笑みが溢れる由夢。

誰かに感謝されるのは嬉しかったのだ。

だからこそ、同じように喜びの表情を浮かべていると思っていた彼方を見て少し驚いた。

悩んでいる様子を見せていたからだ。

「彼方さん、どうしたんですか……？」

「え……あ……、いえ、少しだけポーツとしてしまっただけです」

何でもない、とこちらに笑顔で言葉を返す彼方であったが、由夢はその答えでは納得できなかった。

だから、由夢は彼方の手を握り、もう一度聞き返す、

「どうしたんですか？ 聞かせてください」

「……そう、ですね。こんなところで話すことじゃないかもしれませんが」

真つ直ぐに彼方の瞳を見つめながら問い掛ける由夢。

そんな彼女の様子に、少し驚いた表情をした後、観念したかのように自身の気持ちを述べ始める。

「さきほど、母親を探してる時……思ったんです」

「何を……ですか？」

「凄くなって」

彼方の口から出た言葉の意味が把握し切れず目を丸くする由夢。

そんな彼女を見て苦笑いしながら、言葉を続けた。

「母親とはぐれて泣いたお子さんを見たとき、由夢さんは迷わず一緒に探そうって言いましたよね」

「……？ そうですね」

「それに、三人で声を掛けながら探したとき、周りの方も協力して下さいました」

「え、ええ、でしたね」

それがどうしたのだろうか、と。

言葉に出さずとも顔に出ている由夢に彼方は憧憬の想いを含んだ視線で見つめる。

「だから、です。 そんなの当たり前だって行動しているからこそ、私は凄いつて思っただんです」

「彼方さんは……嫌、だったんですか？」

「そんなことないです。 でも、私は……意識しないと、すぐに行動に出れなかったんです」

彼方は、前世の様に必要とされない人生でありたくない。

そう思ったからこそ、自分で出来ることであれば助けてあげたい。してあげたいと思う。

意識して、それで彼方は行動している。

しかし、由夢の行動は彼の方に意識してではなく、無意識に、当たり前のように行動していた。

意識と無意識では大きな隔たりがあるように、彼方は感じたのだ。

「きつと、何も打算や不安もなく助けられた由夢さんが……私は羨ましいのだと思います」

「彼方さん……」

寂しそうに笑う彼方に、由夢はひとつ胸に感じたものがあつた。

「わたし、言っただけでいいんですけど、料理がすごく下手なんです」  
「え……う？」

「兄さんには殺人料理だつて言われるは、お姉ちゃんには遠慮されるわで……壊滅的だつて言われます」

「あ、あの……由夢さん？」

「わたしが今までそれを言わなかったのは、彼方さんに料理下手だつて思われなくなかったからです」

「だから、美味しい料理つくるんだつて、頑張つて料理を練習してました」

「——彼方さんは、幻滅しますか？」

「……いえ、そんなこと思うはず、ないじゃないですか」

自身の為に頑張つてくれた。

その気持ちが嬉しいことではあつても、幻滅することでは決してな

かった。

「……彼方さんなら、そう言ってくれると思ってました」  
少し安堵した表情を見せながらも、  
由夢は彼方に笑いかける。

「でも、言わなかったのは、私自身がよく見られたいって打算があったからです」

美味しい、と彼方に言ってもらいたかった。  
料理上手であると褒めて欲しかった。  
自分が誇れる恋人だと、少しでも思ってもらいたかった。

「打算でも何でも、それが誰かの為になる行動なら、良いじゃないですか」

「——必要とされたいから。　そういう想いでも、助けようって思える彼方さんのことが好きです」

「……ゆめ、さん」

彼方が心配性なのだと由夢には分かった。  
でも、そんな彼の一面を見て幻滅などしなかった。  
むしろ、彼女である自分がそういう彼の不安を取り除いて上げられることが嬉しかったのだ。

——そっか……、そうだったんだ。

恋人の関係なんて、初めての経験であった。

今までと、どう変われば良いんだろう。

何をすれば良いのだろう。

色々悩んでしまったけれど。

だけど、こうやって互いに支えて、支えられて。

互いの本音を見せ合えたなら。

少しは恋人としてはじめられたのかな、と由夢は思った。そして、そう考えると。

あまり悩まずに、自分の想いを口に出すことが出来た。

「彼方さん、ひとつワガママを聞いてください」

最後はあそこに行きたいです。

由夢が指をさす先には、サクラパークの中心にある観覧車があった。

「わたし、観覧車に乗ってしたいことがあるんです」

観覧車を見ていたが振り返り、由夢は照れた表情で彼方を見つめる。

「恋人として、したいことがあるんです」

恥ずかしそうで、だけど彼方への期待を含めた様子が見受けられた。

由夢は、彼方に言葉を告げる。

——叶えて、くれますか？

「それで、その後はどうしたのかしら？」

「——ふふ、聞きたいですか？」

「いえ……、もう分かったから結構よ」

もう十分であると言わんばかりに、麻耶は肩を竦めながら由夢に返事を行った。

由夢の、幸せそうな表情や仕草、雰囲気。すべてが物語っていたのである。

素直におめでどう、と言っただけなのだが。

何だか負けた気分になるので止めた。

というか、既に敗北感を味わっていた麻耶であった。

そして、同じく由夢を見守っていた相棒へと振り返る。

そこには、何とも言えない表情の美夏がこちらを見ていたのだ。

「麻耶……、何故か苦い飲み物が欲しくなったんだが」

ロボットである美夏でさえ感じるものがあつたらしい。

それを、喜ぶべきか、はたまた呆れるべきか。

麻耶には分からなかったが。

美夏の言葉に対して、

自身の気持ちを述べてこの場を締めくくった。

——わたしは最初からコーヒを頼んでおいたわ、と。

これは、彼方と由夢の恋人のはじまり。

その出来事的一幕であった。

episode—39 「誰かの、その夢は」

episode—39 「誰かの、その夢は」

魔法。

それは、人智の及ばない、非科学的な現象の総称だ。様々な物語に登場し、誰もが一度は魔法を使ってみたいと憧れる。しかし、どんどん成長していくと人は諦める。魔法は空想上の産物であると理解するからだ。でも。

それでも、もし自分が魔法を現実で使えたら。そのように。どこかで淡く、小さい期待に胸を膨らませる人々も少なくない。

そんな中。

——ああ、この感覚は……。

久しぶりだな、と。

桜内 義之は、動けない自身に対して驚きもせず、いまの自分の状況をぼんやりと理解した。

桜内 義之は、魔法使いである。

ただし、彼は自身が魔法が使えることを特に誇ったことはなかった。

それは、彼が二つの魔法しか使うことが出来ないからである。

ひとつは、和菓子を手から出すことができる魔法。

好きな和菓子を生み出すことが出来るのは凄いことなのかもしれ



ないが、作り出した分だけお腹が空くので義之はそこまで有り難くは感じなかった。

そして、もうひとつは。

——また、誰かの夢を見させられているのか。

他人の夢を見させられる魔法。

意図して見ることも出来なければ、その夢に介入出来るわけでもない。

義之からしてみれば、はた迷惑な能力であった。

しかし、夢を見るのを止めることが出来ないのは何十、何百回も見てきたから分かっていた。

義之は素直に夢に意識を集中させるのであった。

ぼやけてた景色が徐々に色付き始める。

そして夢で映り出した先は、義之がどこか見覚えのある場所であった。

——これは…風見学園、だよな？

この夢を見ている人物が歩いている場所は、義之たちが居る風見学園の校舎と酷似していた。

少しだけ違和感があるのは夢だからであろうか。

義之が多少の疑問を抱く間に、夢の人物は校舎の窓から下を見下ろした。

そこから映る中庭には、四人の男女が佇んでいた。

正確には、とある男女が対峙し、その男女に二人が付き添う形である。

中庭にいる人物に対して、義之は驚きを感じた。

——あれは、由夢…音姉…いや、違う。

女生徒は、由夢に、いや音姫にだろうか。

どこか少し似ている気がした。

それだけではなく、他の人物には杉並やななかに、少し雰囲気が似ていたりしたのだ。

『おかしいよね、兄さん。 兄妹でこんな……』

『あ、ああ…変だ、どうかしてる。これじゃあ、まるで——』  
恋人、だな。

杉並に似ている人物が、ニヤリと笑みを浮かべ、後ろから二人に語り掛けた。

『………っ！』

その言葉を述べた人物に二人は思いきり振り返った後、顔を見合わせて照れた様子を見せていた。

その二人の様子を見た義之は、胸から感情が溢れてくるのを感じた。

——これは……、喜び？

義之は、同調している夢の人物と気持ちちが共有される。

彼の胸には喜びが溢れてきていた。

夢の人物が周りに視線を向けると、周りには同じように窓から中庭の二人を見て笑ったり喜んだりしている女生徒たちが居た。

それを見て、更に喜びの感情が強くなった。

しかし。

その喜びの感情が一瞬にして、別の感情へと塗り潰された。

『兄さん、わたしっ……—』

女生徒が兄と呼ぶ人物に伝えようとした、その時。

急に、彼女の前に桜吹雪が舞い、女生徒が崩れ落ちるように倒れたのだ。

『——っ』

崩れ落ちる女の子へと慌てて男子生徒が駆け寄る。

そして、付き添っていた二人や窓越しで見ていた女生徒たちも同じように向かって行っていた。

そんな中。

夢の人物だけは呆然と立ち尽くしていた。

そして、感情が一気に喜びからマイナスの感情に書き換わる。

悲しみ。苦しみ。あと、罪悪感だろうか。

『わたしの、せいだ』

視線が定まらない状態のまま、夢の人物がつぶやく。

誰かに聞かせるわけではなく。

思わず、自身の気持ちが口から自然と漏れてしまったかのように。

『わたしが…桜を咲かせたから』

『わたしが、魔法の木に願ったから』

『わたしの、せいだっ！』

『——っ——！』

周りから誰かの声が聞こえるが、夢の人物はただただ走り続けている。  
た。

そして、その視界に映る光景が徐々にぼやけ、色褪せ始める。

おそらく、夢から醒め始めているのだ。

——ま、待ってくれ！ さっきの言葉はっ……、この夢の人物は

いつたい…っ！

義之が慌てて言葉を掛けるが、夢に介入する力は彼にはなく。

そして――。

――

――

――

――

「久しぶりに、懐かしい夢を見ちやっとな……」

とある少女は、夢から目が覚めた後につぶやいた。

懐かしく。

そして、泣きそうになりながら。

episode—40 「夢の足音」

「弟くん、今日朝早く起きたねー？」

「まあ、たまたまだけだね」

「にやはは、えらいぞー義之くんっ！」

や、やめてくださいよ、と。

背伸びして撫でるさくらへ恥ずかしそうに話す義之を見て、朝倉

音姫はクスリと笑みが溢れた。

芳乃家の台所。

朝食の準備をしている音姫とさくらのもとに、義之が訪れたのである。

さくららは最近朝食の場に来てるので見慣れているが、普段が休みの日は遅くに起きる義之が起きてきたことに、音姫は目を丸くしていた。

クリパで問題を起こしたことで昨日まで風見学園で補修合宿を行っており、尚更今日は遅くまで寝ているだろうな、と思っていたのだ。

「別にもう少しゆっくり起きてても良かったのに」

「あー、少し変な夢を見て起きちゃってな」

「変な夢？」

ああ、と。

義之は頷きながら、少し悩んだ表情を浮かべる。

「……あのさ、音姉」

「なに、弟くん？」

音姫が彼の様子が気になり、首を傾げながら見詰めていると、義之があらためて彼女へと視線を向けて言葉を掛ける。

「あー……、ちよつと変な質問になっちゃうんだけどさ」

「うん、どんなこと聞きたいの?」

「んーと……その、さ」

——なんだろ、何か聞きづらい話、なのかな?

すぐに音姫に問いかけず何か言葉を探すように考え込む義之に尚更疑問が浮かぶ。

だが、彼が言葉を発するまで待っていると、義之がようやく口を開き、音姫に質問を投げ掛けた。

由姫さんってお兄さんは居たのか、と。

「えっ、お母さんに?」

全くと予想もしてなかった質問に目を丸くす音姫。

義之の質問で名前に出た由姫さんとは、朝倉 由姫——音姫が幼い頃に亡くなった、彼女の母親である。

「ああ、兄弟はいたのかなって」

「んー、お母さんには確か兄弟はいないハズだよ?」

「そっか。もしくは親戚で由姫さんが『兄さん』って呼んでいる人は居たかな?」

更に問われた内容の意図がわからず、混乱しながらも大切な弟くんの為に記憶を呼び起こす音姫。

しかし、特に自身の思い出す限りには該当する人物は思い浮かばなかった。

「聞いたことはないけど……さくらさん?」

自分は知らないが、知っている可能性がある人物が丁度近くに居たため、そちらに振り返る。

音姫の振り返った先にいた人物——さくらは、音姫と義之の話を聞いており、すぐさま言葉が返ってきた。

「由姫ちゃんが『兄さん』って呼んでた人かあー。僕も聞いたことがないね」

さくらの返答に、そうだよなと何回も頷く義之。

あくまで分かっていたけど念の為に聞いた感じである。

その様子に、音姫もさくらも疑問が浮かび続ける。

「でも、どうして急にそんなことを？」

「あ、いや……ちよつと気になつてね」

ありがとう、音姉、お母さん、と。

一度お礼を言ってから居間へと戻っていった義之。

義之の最後の様子からして、あまり理由は聞いて欲しくなかったのだろうか。

音姫とさくらは互いに首を傾げ合いながら彼を台所から見送るのであった。

ただ、義之が台所から去る際、彼が発したつぶやきが耳に残った。

——じゃあ、由姫さんじゃなくて……音夢、さん？

さくらや音姫が準備してくれた朝食を食べ終えた後、桜内 義之はとある場所へ足を運んでいた。

それは――

「よつ、初音!」

「あれ、珍しいですね?」

ここに来てもらえるのは、と。

義之の姿を目にして少し驚いた後、初音 彼方は彼を笑顔で出迎えたのであった。

そう、義之が訪れたのは昨日に補修合宿を行っていた風見学園。

その学園の地下を拠点としている、非公式新聞部である。

しかし、用事があるのは非公式新聞部というよりは、彼方にであるが。

既に冬休みを迎えており、雪が積もって活動が難しい運動部は勿論、文化部も敢えて休み中に学園で活動をしている部活は少ない。

だが、彼方が今日も風見学園に来ていることは把握していた。

それが分かった理由は、一緒に学園まで来ていた隣の人物が知っていたからだ。

「ああ、彼方にちよつと聞きたいことがあつてな」

「兄さん、あまり邪魔しないでくださいね」

「おま、そんな邪険にするなよ……」

芳乃家で朝食を食べている最中に彼方の所在を聞き、一緒に行くと告げた瞬間に明らかに不機嫌そうな表情と仕草を見せてきた妹分――

――朝倉 由夢である。

おそらく、二人つきりで居たかつたのだらうな、察したが余計なこととは言わないでおいた義之であった。

それに、どのみち今日は由夢と彼方が二人つきりは無理であっただろ。う。

何せ、学園へ向かう途中で更に着いて来た人物がいるのだから。



「ははっ、邪魔扱いされてやんの」

「ふむ、いくら同志初音と二人つきりになれないからとはいえ、同志桜内が可哀想だな」

「……言っておきますけど、杉並先輩と板橋先輩も同じですからね！」  
由夢がジト目を向ける先には、義之を見て笑っていた板橋 渉と杉並の姿が其処にはあった。

暇だから、面白そうだからと野次馬根性で着いてきた二人組である。

——ま、ほんと俺一人が良かったんだけどな。

正直、あまり来て欲しくなかったが説得が面倒だったので、そのまま連れてきたのだ。

不機嫌そうな由夢を取り成す彼方へと視線を向け、義之はさっそく訪れた本題について話す。

「あのさ、魔法の桜について聞きたいんだけど」

「魔法の桜のこと、ですか？」

義之から出た言葉に彼方と由夢は若干驚きながら目を見合わせた。

由夢も義之が非公式新聞部に訪れた理由についてはぐらかさされていた為、知らなかったのである。

「ああ、ちょっと気になることがあってさ……いいか？」

「私は構いませんよ。桜内さんは、魔法の桜の何について知りたいですか？」

義之が魔法の桜について聞いてきたことに多少の驚きを見せていたようであるが、特に嫌がる素振りも理由を聞こうという様子も見せなかった。

魔法の桜について理由は自身の能力が関係する為に答えづらいからこそ、何も聞かずに居てくれる彼方の態度は有り難かった。

義之は、今日見た他人の夢について思い出す。

風見学園の校舎。

由夢や音姫に似ていた女の子。

そして――。

『わたしの、せいだっ!』

――あの夢が、もし音夢さんや純一さんの世代の話なんだとしたら。

「俺たちの生まれる前に咲いていた魔法の桜について、簡単にでも教えてくれないか?」

「桜内さん、まず魔法の桜が具体的に一番はじめにいつ咲き始めたかはご存知ですか?」

義之の質問を聞き、彼方は落ち着いて話せるよう義之たちを椅子に促した後、義之に問いかけた。

彼方の問いに、義之は首を横に振る。

「いや、詳しくは知らないな」

「では、そこから話しましょうか」

彼方は近くにあったホワイトボードに書き始める。

『1995年3月 枯れない桜が咲き始める (1回目)』

「まず、春以外にも咲き続ける魔法の桜―所謂『枯れない桜』が咲き始めたと言われているのは、1995年の春です」

「そんなに、前だったのか……」

義之が知っているのは、子供の頃に咲き始めたと言われる魔法の桜。

自分達が生まれる前にも咲いていたのは知っていたが、そこまで前であるとは知らなかった。

「あー、でも確かにうちの婆ちゃんや学生んときに魔法の桜があったって言うってたな」

一緒に来ていた渉も側で聞いており、自身の祖母の言葉を思い出しながら頷いていた。

ただ、渉は何か気になったのか、その後に疑問の言葉を発していた。

「でもよ、本島でも3月の後半くらいから桜が咲いてるって聞いたぜ。」

「まだそれだと枯れない桜か分かんねーんじやねーの？」

「ええ、まだその時点では今まで通りの、普通の桜と思われてたようですね。5月6月になっても咲き続けてから、新聞でも取り沙汰されてるようになったみたいです」

初音島だけではなく、本島の方からでも初音島の桜について随分と取り沙汰されたらしい。

色々な研究者が初音島の桜を調査しに訪れたが、桜を調べても枯れない理由が分からなかったとのこと。

「夏が終わり、秋、冬とずっと咲いていて、少しずつ『枯れない桜』という言葉が浸透されるようになったみたいです」

何故咲き続けていたかは分からなかったが、春以外に咲く桜を見よ

うと観光客が訪れるようになり、初音島の名物・観光資源として扱われるようになったようだ。

「そして、枯れない桜が咲き始めてから、桜に願いを祈ったら叶うという噂が出はじめたんです」

彼方に補足するように、由夢が話し始める。

どこが出所かは分からないが、初音島の桜に自身の願いを叶えてくれるという噂が出はじめたのは、その枯れない桜が咲き始めてからであつた。

「その噂は学生など若い人達から広がっていき、いつしか『枯れない桜』は『魔法の桜』と呼ばれていくようになったみたいです」

「ま、願い事が叶う等の噂など魔法の桜に限ったことではない。そういう噂や迷信などはいくらでもある……が」

由夢の後に言葉を挟んできたのは杉並。

義之が振り返ると、杉並は自身のメモ帳を開いて見ながら話していた。

「過去の非公式新聞部メンバーが調査した際、願いが叶ったと口にした人物の様子が急に変わったという例が多かったようだ」

「あん？ 様子が変わったからって願いが叶ったとは限らねーんじやねーの？」

「まあ、その通りなのだがな。だが、枯れたときがより顕著だったらしい」

「枯れたとき？」

杉並が彼方に視線を向けると、彼方は頷きながらホワイトボードに書き込み始める。

『2002年冬 枯れない桜が枯れる (1回目)』

「咲き始めてから7年後、枯れない桜が一度枯れ始めます」

「杉並が言ってた、枯れた時に顕著だった、つてのはどういことだ？」

「魔法の桜が枯れた日から、学生の方で体調を崩す、そして休む方が多かつたみたいですね」

彼方が確認した過去の非公式新聞部の情報によれば、魔法の桜が枯れた当日に休んだ学生が明らかに多かつたらしい。

理由としては体調不良であると言われていた様であるが、桜が枯れて以降、明るい人物が急にオドオドし出したり元気がなくなったりし始めたようだ。

だからこそ、叶えた願いが枯れたことでなくなったのでは、と過去の非公式新聞部は推測していたようである。

「——ここまでが、最初に枯れない桜が咲いて、枯れるまでですね」「なるほど、な」

彼方の言葉に義之は相づちを打ちながら、内心にて思う。

——それじゃあ、あの夢は最初の魔法の桜が咲いていた7年の内にあつた出来事なのか

具体的には何時の出来事であつたのかは流石に絞り込めない。

咲いていた7年間の内のどこかの出来事であつたのだろう。

ただ、義之が覚えている限りで参考になりそうなものが一つあつた。

——冬じゃなくて、夏だったな。

義之が見た夢は、季節としては明らかに冬ではなかった。

他人の夢を見た際、気持ちには共有されるが温度などは共有されない。

しかし、照らされる太陽、そして周りの光景を見ると夏のように感じられた。

これ以上は、流石に難しいかもしれない。

義之は一旦思考を切り上げた。

「うん、聞けて助かった。それじゃあ、それで桜が枯れて、その次に咲き始めたのが今から10年前のことなんだな」

あくまで相づちと、自身の確認のために呟いていた言葉。

しかし、それを否定したのは隣の由夢であった。

「違いますよ、兄さん」

「違う？ なにがだ？」

「10年前に咲き始めた魔法の桜は2回目じゃありません。3回目です」

義之は由夢の言葉を聞いて驚きで一瞬固まってから、慌てて聞き直す。

「ま、待てよ。他にも咲いていたのか？ そんな話聞いたことなかったけど」

「まあ、無理もないと思います。なにせ、2度目に咲いていたのは凄く短い期間だけ、らしいので」

由夢さん、と。

彼方が由夢の名前を呼ぶと、彼女は意図が分かったのか書類が並べられた棚へと向かい、とあるファイルを取り出す。

「彼方さん、これですよね」

「ええ、ありがとうございます」

「いえいえ」

——なんだか、前よりも仲良いな。

二人のやり取りを見て距離の近さに驚く義之を他所に、彼方がファイルを開いて言葉を続ける。

「最初の魔法の桜が枯れて二年後、つまり2004年の夏に再び桜を咲き始めました」

「だけど、一ヶ月もしない内に枯れちゃったみたいなんですよ、兄さん」

由夢が彼方の言葉を補足するように、義之に話す。

『2004年夏 枯れない桜が咲く&枯れる (2回目)』

「そんなに、短かったのか」

「ええ、ですが春ではなく夏に急に桜が咲いたので、その時はまた枯れない桜が復活した、と大騒ぎになっていたみたいです」

義之は、夢に出てきた少女の、とある言葉を思い出す。

『わたしが、魔法の桜に願ったから』

「な、なあ。その時は願いが叶ったって話はあったのか？」

「あまりに短い期間だったので何とも言えませんが……、そういう報告はないみたいです」

彼方はその時の調査報告書を目にしながら語りかける。  
しかしな、と後ろから杉並が言葉を続けた。

「この時、我が叔父上が調査していたらしくてな、メモがあった」

「なんて書いてあったんだ？」

「二年前には当たり前前に咲いていた光景が、いまは不自然に思える……そう、書いているな」

「なんだそりゃ？」

さてな、と肩を竦めて応える杉並。

そんな二人を余所に、義之は一つ気になっていたことがあった。

——2004年の夏、か。

ちやうど義之が見た夢も季節は夏のように感じられた。

ただ、最初の魔法の桜は6年咲いていたのだ。そちらの間である可能性も高い。

しかし、何故だろうか。

妙にこの一時期しか咲いていなかったというのが気になった。

——いや、そもそも俺は何でこんなに気になってるんだ……？

義之は自身に問う。

わざわざ彼方のもとへ行き、以前の魔法の桜について聞きに来た。そこまでする理由は何故なのか。なぜ、知りたくなったのか。

「……そうか」

義之は自身が気になった理由がわかった。

『わたしの、せいだっ！』

夢の人物が、何に対して自身が原因だと考えたのだろうか。それが気になったのもある。

『わたしが、魔法の木に願ったから』

夢の人物が、何を願ったのか。

それが気になったのだって理由のひとつだ。

そこじゃなくて、一番気になったのは。

『わたしが…桜を咲かせたから』

夢の人物が、初めのか、または次の魔法の桜を咲かせた。

そもそも、人が魔法の桜を咲かせるだなんて、本当に出来る話なのかは分からない。

しかし。

しかし、もしそれが真実なのだとしたら。



——10年前に咲いた魔法の桜は、誰が咲かせたんだ？

「兄さんは何で魔法の桜について知りたかったんでしょう？」

「どう、なのでしょうね」

何か呆然とした様子のまま去って行った義之を見送った由夢は、心配した様子を若干見せながら言葉を口にした。

直接本人に聞けば良かったのかもしれない。

しかし、あまり聞いて欲しくなさそうな様子を見せていた為、無理に聞こうとは思えなかったのだ。

「別に特に理由なんかないんじゃないかな。俺と同じで暇だったからとか」

「うむ……流石だな、板橋よ」

「言つとくけど、表情で馬鹿にしたのだけはわかるわ！」

板橋の跳び蹴りを華麗に避けつつニヤニヤと笑みを浮かべる杉並を見ながら溜息と吐く由夢。

苦笑いしていた彼方は、杉並に気になっていたことを問いかけた。

「あはは………というか、先ほどの言葉は知らなかったですよ」

「む、なんの話だ？」

『二年前には当たり前前に咲いていた光景が、いまは不自然に思える』  
という言葉ですよ」

特に過去の調査報告の記述にありませんでしたが、と。

彼方が言うと、杉並はああ、と理解した様子で自身が持つ若干古びたメモを見せながら応える。

「すまん、叔父上があくまで私感で書いてただけみたいでな、非公式新聞部の調査報告には入れなかったようだ」

その返答に、なるほどと頷く彼方。

「すみません、ちょっと気になったもので。ちなみに、他に何か気になるメモはありましたか？」

「ふむ……メモではないが、こんなものはあったな」

杉並はメモに挟み込んでいた紙を一枚彼方に渡す。

彼方がその紙を見て苦笑していたのを見て、由夢は隣から紙を覗き込む。

そして、由夢はそれを読み上げた。

『誰が朝倉純一の恋人になるかトトカルチョ』……いや、何ですかこれ』

「いやはや、我が叔父上も随分と楽しそうなことをやるものだ」

「お爺ちゃんも杉並先輩と同じようなひとに絡まれてたんですね」

由夢は祖父の純一に若干同情しながら紙を見ていた。

ことり、環、眞子、萌など女の子の名前が記載され、その上に投票シールが貼られている。

呆れながら見ていたものの、祖母の音夢が一番多く投票されていたのは何だか嬉しい気持ちで浮かぶ由夢であった。

「気になるメモがあるかを聞いたんですがね」

「まあ単純に面白そうだから見せたのもあるが、叔父上のメモにそれについて書いてあることがあってな」

そう言うと、杉並は彼方が持つトトカルチョの用紙のとある部分を指でさす。

それを見て渉は疑問を浮かべ口に出す。

「この女の子がどうかしたのか？ まあまあな投票数みたいだけど

よ」

「それはどうでも良いのだが……メモにはこう書いてあったのだ」

『『アイシア』という知らない人物を何故書いたのか、そして何故知らない人物に対して何票も投票されているのか、とな』

episode—41 「そうだと、嬉しいな」

「さて、いろいろと興味深い事柄が多いが——」

どれから調べたものか、と。

杉並は、自身が手に持つメモ帳を見ながら何となしにつぶやいた。

非公式新聞部 第二執筆室。

魔法の桜について彼方に聞きに来た義之が去り、残った面々での話も一区切りが付いた後のこと。

「それは、魔法の桜についてですか？」

「まあ、そうだな」

杉並がつぶやいた言葉に、彼方は見ていた資料から顔を上げ、杉並に確認するために問いかけた。

彼方の問いに、頷きながらも更に言葉を続ける。

「具体的には、二度目に咲いた方のことだな」

杉並が言う二度目に咲いた方とは、魔法の桜が二回目に咲いたと言われる、2004年の夏に咲いた桜のこと。

「その二回目の桜については調査資料も少ないですよね、何ででしょう?」

「期間が短く、それに願いが叶ったという報告がなかったからでしょうかね」

「まあ、そういう意味で言えば、厳密には魔法の桜とも枯れない桜とも言い難いのだがな」

由夢のふと口にした疑問に、彼方と杉並が答える。

そう、魔法の桜とは言うものの、二回目の桜では願いが叶ったという報告は当時なかった為、厳密には魔法の桜とも枯れない桜とも言い難いのが実情である。

咲き始めた理由すら分からない為、詳しく調査しようにも調べようがなかったのだろう。

杉並は自身の推測も含め、そう述べる。

「んじゃあよ、調べようがないんじゃね?」

「少なくとも、文献だけでは中々手が折れそうですね」

渉の意見に、彼方が肯定しながら悩む仕草を見せる。

——んー……、あつ!

「それなら、二回目の桜について、当時を知る人に聞いてみたら良いんじゃないでしょうか?」

そんな彼らを見ていた由夢が思いついた内容を述べる。

二回目の桜に関する文献が少ないのであれば、当時を知る人に聞けば良いというのは正しいであろう。

そして、二回目の魔法の桜が咲いた当時を知る人間がいるのか。必ず覚えているかは分からないが、聞く候補の人物を由夢は既に思いついていた。

「ウチのおじいちゃんもですし…それに胡ノ宮神社にこの後に行こうと思つてたので、環さんに確認してみます!」

「なるほど、それであれば私にも当時について知つていそうな人物が居るので聞いてみますね」

由夢の言葉に、彼方も心当たりがあつたのか当時のことを聞きに行く、と言葉を告げた。

そんな二人の言葉と様子を見て、渉は不思議そうに由夢と彼方に言葉を掛ける。

「なんだ、杉並だけじゃなく、初音たちも二回目に咲いたつう魔法の桜を調べんの?」

「まあ、もともと二回目の魔法の桜は気になっていたものですし——」  
「それに、兄さんが二回目の桜に反応してたのも気になりますからね」

彼方の言葉に続けて、由夢も自身の気持ち述べた。

彼方も由夢も義之の去り際の様子が気になっており、彼が反応していた二回目の桜を調べようと思ったのである。

杉並も同じ理由だろう、という彼方の視線に、杉並は言葉の代わりに肩を竦める仕草を見せた。

「それで、杉並先輩は何から調べるんですか？」

同じく魔法の桜を知っていそうな人物に確認しに行くのか、という由夢の言葉に杉並は少し考える様子を見せてから答えた。

「ふむ……朝倉妹や初音が桜を調べるのであれば、俺はこちらを調べるでしょう」

杉並がこちらと言いなながら視線を向けたのは、自身のメモに挟んでいた『誰が朝倉純一の恋人になるかトトカルチョ』という用紙。

具体的には、その用紙に書かれている人物について。

「先ほど述べていた『アイシア』という人物について、ですか？」

「ああ……、叔父上のメモがやはり気になってな」

杉並の叔父が残していたメモ。

それは、『アイシア』という知らない人物を何故書いたのか、そして何故知らない人物に対して何票も投票されているのか、という内容である。

「何か意味深って感じはするけどよ、そいつは魔法の桜に関係しているのか？」

「さてな。しかし、魔法の桜と同じ時期に残していたメモだ」

直接的に魔法の桜と関連している保証はないが、時期が同じということに何かしらの意味を見出したのだ。

それだけで調べる価値はある、と杉並は述べた。

「その杉並の叔父に聞くのか？」

「叔父上は身を隠しているし、連絡手段がないからな……それには時間が掛かりそうだ」

いや、お前の叔父は何者だよ。

その渉のツツコミにはスルーし、杉並は彼方たちに言葉を告げた。

「俺は当時の在校生のリストを当たってみるとしよう、『アイシア』という人物が少なくともこの時期には在席していた可能性がある」

トトカルチョの用紙を見る限り、恋人候補で挙がっていた人物のほとんどが風見学生の生徒である。

だからこそ、『アイシア』という人物が在席していた可能性が高いと推測したのだ。

「そっか、じゃあ俺は杉並と一緒に着いてくとするかな」

「板橋先輩も調べるんですか?」

「暇だしよ……それにダチが何か悩んでんなら力になってやりてーじゃん」

何でもないように告げる渉に、彼方と由夢は感心するような表情を見せた。

「それじゃ、早速調べにいきましょうか」

由夢と彼方は、当時を知る人物のもとへ。

杉並と渉は、『アイシア』という謎の人物を調べに。

彼らは、執筆室を出て調査に赴くのであった。

「やっぱりこの時期は寒いよねー」

「そうね、厚着しても芯が冷えてる気がするわ」

花咲 茜の言葉に、雪村 杏は自身の身体を抱きしめながら言葉を返した。

茜と杏、そして月島 小恋の三人―通称、雪月花の三人は商店街にシヨツピングに訪れていた。

シヨツピングとは言っても用事はある訳ではなく、三人で集まりたかったからウインドウシヨツピングでも行こう、という話になったのだ。

途中で小恋が買いたい本があるということで、書店に入った小恋を茜と杏が外で待っていたのであった。

「杏ちゃんは抱きしめたくなくなるくらい身体が小さいもんねー」

「茜のナイスバディーな身体が羨ましいわ」

そう言つて茜が杏を抱きしめる。

そういうスキンシップに慣れている杏は特に気にせず言葉を返した。

そして、杏の言葉に茜はからかうような表情で彼女に告げる。

「このナイスバディーな身体は、男は魅了出来ても寒さには意味ないんだよねー」

「……同じ身体の妹は、好きな男の子を魅了出来なかったみたいだけど」

「ちよ、ちよつとー!」

杏の言葉に、茜は――いや、藍は頬を膨らませて彼女に詰め寄った。杏は彼女の様子から、茜から藍に意識が切り替わったのをすぐに察する。

「傷心中の親友にひどくないー?」



「バカね、冗談が言える状況にまでなったのが分かってるから言ってるのよ」

ぶう、と。

杏の言葉に怒ってるんだぞ、というアピールをしながら藍は杏の頬を軽く伸ばした。

その藍の表情や様子から本気で怒ったり傷付いたりしていないのは分かる。

——まあ、流石に気にしてたらからかうつもりはなかったけどね。

杏は内心でつぶやく。

藍や小恋が傷心していたのは目にしていたが、クリパ後の雪月花によるお泊まり会である程度は気を取り戻したのは知っていたのだ。

だからこそ、こうやってネタにしてとっとと新しい恋を見つけて欲しいと思った杏であった。

「ごめん、おまたせー!」

そんなやり取りをしているうちに、書店から買い物を終えた小恋が戻ってきた。

「もう、小恋ちゃん遅いよー!」

「ごめんごめん、来てみたら買いたい本の新刊が何冊かあったからさー」

藍の言葉に、小恋は本が入っている袋を見せて謝る。

別に藍もそこまで怒っていないから表情を戻し、袋に視線を向ける。

「買った本って、少女漫画かな?」

「う、うん、そうだよ」

袋から少し出して、小恋は藍に表紙を見せる。

藍はその漫画は見たことなかったが、それぞれ違う作家の作品なのは分かった。

「小恋ったら相変わらず少女漫画が好きよね」

「それ、に、恋愛ものばかりねー」

杏と藍のからかいを含めた言葉に頬を膨らませてつつ反論する小恋。

「べ、別に面白いんだから良いでしょー!」

「そういえば、小恋ちゃん家にもたくさん少女漫画あったもんねー」

杏の家に茜や小恋、義之たち一行が訪れて以来、雪月花の三人はそれぞれの家に頻繁に遊びに行くようになった。

その中で小恋の家にも遊びに行ったのであるが、部屋の棚に少女漫画がびっしり埋まっていたのを思い出したのだ。

そして、藍は先ほどの漫画の作家の名前でひとつ思い出した。

「そういえば、さつき見た漫画と同じ作家の名前、小恋ちゃんの部屋にたくさんなかった?」

「あ、珠川彩子先生のこと?」

藍の疑問に、小恋が袋の中から漫画を一冊取り出して藍と杏に見せた。

その表紙には、作家の名前として『珠川彩子』という名前が記載されていた。

「その作家は有名なのかしら?」

「うん、昔から少女漫画をいっぱい描いてて賞もたくさん受賞してるんだよー」

余程その漫画家が好きなのか嬉しそうに小恋が述べる。

その様子を不思議そうに見る二人に、小恋は照れた表情で言葉を続ける。

「あのね、この作家さんの漫画、お母さんやお婆ちゃんも昔から好きなんだ。だから、思い入れが強くて」

「……そう、いいんじゃないかしら」

「ふふ、何だかいいいねー、そういうの!」

照れながらも嬉しそうに笑う小恋に、杏と藍も嬉しそうに笑うのであった。

そんなやり取りの後、引き続きウインドウショッピングと称して雪月花の三人は他愛ない話をしながら服やアクセサリーを見ながら商店街を回っていた。

そして、商店街も終わりに差し掛かった頃。

「……あれ、あそこで何をやってるんだろう?」

小恋が不思議そうに呟いた言葉を聞き、藍が彼女が顔を向ける方に視線を向ける。

そこには商店街の片隅で銀髪の少女がシートを敷いて、手作りの玩具を並べている姿があった。

「フリーマーケット…かな?」

「あんな端でやるのも珍しいわね」

藍と杏も小恋と同じように疑問を抱きながら思い思いの言葉を述べる。

初音島では年に数回、大々的にフリーマーケットが開催される。

その際には多くの人々がシートに服や小物などを並べて売るのを目にするが、単独では中々に珍しい。

一人でやる場合は目立ちそうな気もするが、商店街の片隅であるからか、彼女の前に人が立ち止まる様子は見受けられなかった。

「ねえ、行ってみてもいい?」

「ええ、構わないわよ」

「良いよー! それに、年齢も近そうだしね」

小恋の願いに藍も杏も同じく興味あった為に頷き、シートに座る銀髪の少女のもとへと向かった。

「——あ、いらっしやいー!」

小恋たちが近付くと人の気配を感じたのか顔をあげ、最初に驚いた様子を見せた後に、笑顔でそう言葉を述べた。

——わあ、綺麗なひと。

藍は彼女の容姿を見て思わず内心でつぶやく。

銀色の、綺麗なアッシュブロンドの髪。

北欧の出身なのか顔は白く、美人と言える顔立ちだ。

隣の小恋も同じように思ったのか、キレイと小さく言葉を溢していた。

「おもちゃを売っている……のかしら?」

そんな藍と小恋の様子を見て、杏が前に出て銀髪の女の子に尋ねる。

すると、女の子は頷き、言葉を返した。

「そうだよ、手作りのおもちゃを売ってるんだー」

あらためてシートを見ると、そこに並べられているおもちゃは木製であり、動物や人の形、他にも積み木などがあった。

「クリスマス前に売った方がよかったんじゃない?」

その並ぶおもちゃを見て、杏がつぶやく。

彼女の言葉に、藍も内心頷く。

そこまで長く居た訳ではないが、女の子が座るシートに誰かが立ち止まる様子はなかった。

しかし、クリスマス時期であればもう少しは人が寄ってくるのではないかと考えたのである。

それに、と藍は銀髪の女の子を改めて見る。

その女の子の服装は上下赤い色をメインとして白色も少し入っている。そして、髪は緑色のリボンを後ろで結っている。

——色だけ見ると、サンタさんだしね。

赤、白、緑。

その色合いはサンタクロースを連想させるものがあつた。

「あはは、実はクリスマス前にも売ってたんだけど……」

「……売れなかったのかしら？」

「そう、なんだよー」

北欧とかだと子供たちがたくさん来てくれたのに、と。

銀髪の女の子はそう言いながら、がっくりとした様子を見せた。

そして、落ち込みながらも言葉を続ける。

「もう少し初音島に居るつもりだから、売って稼ぎたくてね」

「あれ、私たちと同じように学生じゃないの？」

「んーん、違うよー」

聞くと、既に学園は大分前に卒業しているとのこと。

そして今は色んな場所を旅をして周っているのだという。

「何だか、格好いいわね」

「うんうん、素敵だなーって思っちゃうよ」

「あはは、そんなでもないよー」

杏と藍の言葉に、苦笑いしながら言葉を返す少女。

そして、そんな中で小恋の声がしなくなったのが気になり振り返ると、何やら銀髪の女の子を見ながら考える様子的小恋が居た。

「小恋ちゃん、どうしたの？」

「んーとね、どっかで見たような気がして……あの、すみません！」  
小恋は銀髪の女の子に近付き、そして問いかける。  
わたしと会ったことないですか、と。

それを聞いた銀髪の女の子はキョトンとした表情を見せた後、首を横に振った。

「うーん、会ったことないと思うなあ」

「そっかあ。 見覚えがあるのは、勘違いかなあ」

多分ね、と銀髪の女の子が答えた。

その様子から、小恋に見覚えがないことが分かる。

そして、更に彼女は言葉を述べた。

「それにね、わたし……もし会ったことあっても覚えてもらえないと思うなあ。 だって——」

——わたし、記憶に残らないタイプの人間だから。

笑いながら、銀髪の女の子はそう告げたのだ。

「え、もう、やだなあー！」

そんなはずないじゃん、と。

冗談と捉えた小恋は、女の子に笑いながら返す。

確かに、その容姿は目立つし印象に残る。

だから小恋が冗談と捉える気持ちは藍にも分かる。  
でも。

——本気で言ってたように見えたのは気のせい、かな？

銀髪の女の子が笑いながら言ったとき、同時に悲しそうな響きがあった。

冗談っぽく言っただけだが、藍には本音を述べたように感じられたのである。

それは、今まで茜以外に存在を知られずに長い間過ごした藍だからこそ感じられたのかもしれない。

「——ねえ」

そして、人の気持ちを察するのが美味いもう一人の親友も、女の子の言葉に何かを感じたのだろうか。

杏は銀髪の女の子に、言葉を掛けた。

「これでも私ね、今までのどんな細かいことも記憶に残ってるの」

それは、親友たちは既に知っている杏の叶えた願い。

一度見たり聞いたりしたことを完全に記憶し、忘れないという願い。

「だからね、大丈夫よ」

大丈夫。

だから、安心して欲しい。

「——わたしは、あなたのことは忘れないわ」

銀髪の女の子は、杏の願いを知らない。

でも、気持ちは伝わって欲しいと。

そう思いながら杏は女の子に言う。

「あはは、そっか……それなら、嬉しいなあ」

ほんとに、嬉しい。

そう話す女の子は、表情は笑っているのに、泣いているように見えた。

episode—42 「目にほこりが入った、だけですから」

「ちよつと、遅くなっちゃいましたね」

「そうですね。色々お聞きしちゃいましたから」

長々とお付き合いして下さった環さんには感謝しないですね、と彼方は申し訳なさを感じながらも有り難く思った。

夕暮れの住宅街。

彼方と由夢は胡ノ宮神社から帰途に就く最中であつた。

その最中で二人が話す内容は、先程環に聞いた話について。

「2回目に咲いた桜について、あまり情報を得られなかったですね」

「ええ、残念ながら」

胡ノ宮神社に行った理由は、胡ノ宮 環に会う為である。

より詳細に述べるのであれば、二回目に咲いたと思われる魔法の桜について、当時を知る人物に話を聞く為であつた。

文献では二回目の桜については大した情報が記載されていないかつた。

だからこそ、その時のことを覚えている可能性がある環に確認したかつたのだ。

しかし。

『誠に申し訳ありませんが、その当時の桜に関して……覚えがなくて』

夏に数日間だけ咲き、すぐ枯れた。

数十年も前の出来事の中の数日間。

覚えがなくても仕方ないのかもしれない。

由夢はそのように思っていたが、当の本人である環が少し戸惑いを見せていた。



『枯れない桜がまた咲き始めたのであれば、少しは印象に残っているはずなのですが』

環にとつて枯れない桜が最初に枯れた際、とても衝撃を受けたのを覚えている。

そして、今現在咲いている枯れない桜が咲いた際も同様に覚えている。

しかし、何故か2回目の桜については一切覚えがない。

環自身は覚えていないことに疑問を抱いているようであった。

だが何度思い出そうとしても思い出せず。

力になれず申し訳ありません、と。

環は彼方と由夢の二人へと、そう伝えるのであった。

「もう数十年も前で、しかも数日だけのことだから仕方ないかもしれませんが」

「……ええ、由夢さんの言う通りです」

数十年も昔の出来事。

それを詳細に覚えていることなど難しいであろう。

「あ、あのっ、おじいちゃんなら何か覚えているかもなんで聞いてみま  
すね！」

少し落ち込んだ様子を見せる彼方を見て、由夢は励ますように言葉を  
を連ねる。

「それに、杉並先輩や板橋先輩が調べてる方に進展があるかもしれない  
せんし」

自分たちが二回目の桜について聴き込みに行くと言った際、杉並が  
別の視点で調べると話していたのを由夢は思い出す。

調査すると言っていた人物。

その名前は、たしか――

『アイシア』さん、でしたっけ？ 二回目の桜とはあまり関係してるとは思えないですけど……」

何か杉並先輩が気になるって言うのと、不思議と何かしら意味がありそうに感じちやいますね、と。

少し苦笑いしながら由夢は彼方に話した。

—アイシアさん、ですか……。

由夢が言葉に出した、人物の名前。

彼方はかつての記憶を呼び起こしていた。

アイシアという人物。

彼方はその人物について会ったことはない。

しかし、その名前には聞き覚えがあった。

今の初音 彼方としてではなく、その前世とも言えるときの記憶。

——D・C・(ダ・カーポ)

その物語に登場するキャラクターの一人に、アイシアという人物がいる。

彼方にとってみれば既に前世の記憶だ。覚えていることは曖昧になっっている。

しかし、それでも彼女について印象が強く、覚えていた。

彼女が、魔法使いであること。

そして、彼女が2回目の魔法の桜を咲かせ、枯らしたのであると。

——アイシアさんが、いるのでしょうか。

今回、義之が枯れない桜に関して訊ねる為に部室に訪れたこと。

2回目に咲いた枯れない桜について興味を抱いたこと。

杉並が持っていた昔のトトカルチョに書かれていた、アイシアという名前。

どうしても、ただの偶然には思えなかった。

「どうしても、桜内さんは枯れない桜が気になったんでしょね」

ポツリと口から出て来た言葉。

別に、誰かに回答を求めたわけではなかった。

ただ、隣で彼方の言葉を聞いていた由夢は自身の記憶を掘り起こしながら答える。

「んー、兄さんが何で聞いたのかは質問してもはぐらかされちゃったので」

義之が枯れない桜について興味を持った経緯について考える。

別にここ最近で朝ご飯や夕飯を食べるときなどに、桜について話をしていたことはなかったように思える。

それ以外で、何か兄が言っていたことはないか。

由夢は兄との会話を思い出していく中、ひとつ、気になったことを思い出す。

「桜についてではないんですけど、今朝、なんか急に変なことお姉ちゃんやさくらさんに聞いていたんですよね」

「……それは私が聞いても大丈夫な話ですか？」

「あ、別に大した話じゃないので大丈夫です。 たしか、朝に——」  
由夢は今朝あった出来事について彼方に伝えた。

義之が変な夢を見た、と言っていたこと。

音姫やさくらに、自身の母親が『兄さん』と呼ぶ人が居たか、という質問。

意図が分からぬ質問であった為、居間にいた由夢も義之が聞いていた話を不思議に思い、覚えていたのである。

「そう、ですか」

「まあ、桜についての質問じゃないんで関係ないかもしれませんがけどね」

彼方が気になっていたことこの回答にはならない為、申し訳なさそうな顔をする由夢。

そんな彼女を見ながら、彼方は由夢が語った内容について考える。

変な夢。

兄さん、と呼ぶ人がいたか、という質問。

彼方は、義之が持つ能力について思い出す。

——桜内さんは、誰かの見る夢と同期する魔法があつたはず

詳細な部分までは覚えていないが、義之は他人の夢を見る能力があつた。

もしかしたら、それに関係しているのではないか、と彼方は推測する。

兄さんと呼ぶ女性が居た夢を見たのではないか。

そして、その夢を見た人物というのが。

——それは、都合良く考えすぎ、なのですかね……

由夢が言ったように、その朝の出来事と枯れない桜は一切関係ない話かもしれない。

そして、義之が2回目の枯れない桜に関して興味持ったことと、アイシアについて紐付いていないのかもしれない。

しかし、どうしても関係していないようには思えなかった。

漠然としている。しかし、どこかで確信を抱いている自分もいたのだ。

アイシアが、初音島にいるのではないかと。

でも、もしアイシアが居たとして。

自分は何が出来るのであろうか。

彼方には彼女の為に何をしてあげられるのか、分からなかった。しかし、ひとつだけ思うことがあつた。

——こうやって、皆で枯れない桜に関して調べたりなんて、なかつたはず

隣にいる由夢の横顔を彼方は見つめる。

そう、彼女にしろ、義之や渉、杉並にしろ、2回目の枯れない桜やアイシアという人物について調べるなんて出来事が原作にはなかったように思う。

「しかし、それは当たり前なのだと思います。」

義之や渉、杉並、麻耶たち、そして雪月花の面々。

色んな人たちが、彼ら自身で変わっていつている。

「……あの、どうしました?」

あまり見つめられると困ります、と恥ずかしそうに笑う由夢。

そんな彼女を見てみると、不安という感情がなくなるのを感じた。そうだ。

未来は変わる。変えることが出来るのだ。

だって、それを隣の女の子が、教えてくれたのだから。

だからこそ、彼方は前世云々ではなく、義之の友人として、今回のことに向き合うことを決める。

「由夢さん、がんばりましょうね」

「えっと……は、はい?」

なんのことが分からず首を傾げながらも頷いてくれる彼女を見て、彼方はおかしそうに笑った。

episode 42 「目にほこりが入った、だけですから」

「なんだか、懐かしいなあ」

玩具を買ってくれた女の子たちを見ながら、銀髪の女の子―アイシアはつぶやく。

何となしに口から溢れ出た言葉。

自身で何を懐かしいと少し考え、あらためて理解する。

その女の子達を見て懐かしいと感じたのは、きつと重ねてしまったからだ。

初音島に最初に訪れたときに出会った、素敵な友人たちと。

——なんでわたし、口に出しちやっただら

『わたし、記憶に残らないタイプの人間だから』

思わず、口に出してしまった言葉。

言ったところで意味なんてない。

それなのに、何で言ってしまったんだろう。

ただ、その後に玩具を買ってくれた女の子の言葉が、頭の中から離れない。

『——わたしは、あなたのことは忘れないわ』

先ほどの白髪の女の子が伝えてくれた言葉。

なるべく、冗談のように言っただけだ。

オレンジ髪の女の子も冗談として受け取ったようにも思える。

なのに、白髪の女の子はそう言ったのだ。

少ししか会話しなかったが、あまり表情を動かさない子ではあった。

でも、その言葉を伝えてくれたときは、真剣な表情だった。

本心で言ってくれたのだと、アイシアはそう感じたのである。

——だから、なのかな……ことり達を思い出したのは。

きつと、真剣に自分を見て言ってくれたから。

想って、伝えてくれたから。

おばあちゃんが亡くなり、身寄りがなかった自分が訪れたのが初音島だった。

そして、そんな自分を助けてくれた素敵なひとたちが居たのだ。

そんな友人たちを想起させてしまったのであった。

そして、アイシアは考える。

白髪の子が伝えてくれた言葉。

それを聞き、自分の中から出てきた感情。

嬉しき、悲しき、諦め。

——そして、少しの期待。

「わたし…なんで、まだ……」

アイシアは、そんな気持ちを抱いている自身に対して自嘲する。

もう何十回、何百回も裏切られた気持ち。

わかっている。自分の罪による罰だ。

期待なんてしても意味ないことなんだって分かっている。

でも、どうしても、消えてくれない感情。

初音島に来てから余計に強く抱いてしまっているように、アイシアは思った。

彼女にとって初音島は、思い出の場所である。

今回を含めて訪れたのは三回目。そして、前回から既に数十年以上も時間は経つ。

それでも、どうしても初音島は彼女にとって思い出深い場所なのだ。

良い意味でも。悪い意味でも。

ここで過ごした夏の日々。

アイシアにとって、その日々は今でも宝箱にしまっておきたい、大切な記憶。

そんな思い出の場所に来てしまったからこそ、自分はどこか期待を抱いてしまっている。

奥底で眠っていた感情が溢れ出てしまっている。

そして、アイシアは経験から、この感情を抱いた後に出てくる感情も理解していた。

それは――

「わあ、可愛いおもちゃが並んでいますね！」

「そうね、こういう手作りな玩具は、何だか久しぶりね」

近くから聞こえる女の子の声によって、アイシアは思考の渦から戻ってくる。

気が付くと自分は俯いており、自身の前に見える2つの人影があるのを遅れながらも理解した。

せつかく来てくれていたお客さんに気付かなかったようである。

アイシアは周りが見えなくなるまで考え込んでいたことを反省し、お客さんにしっかり売り込もうと意気込む。

「ふふ、見てもいいかしら？」

「わあ、いらっしやいま――」

お客さんへ接客しようと思顔を上げ、喋ろうと思ったアイシアは、思わず途中で声を止めてしまった。

いや、アイシア自身、言葉を止めたことも気付かず呆然としてしまったのである。

それは、目の前の女性を見て、思考が止まってしまったから。

「あの……どうか、したのかしら？」

『どうかしたの、アイシア？』

その顔が、声が。

とある人物を思い出させる。

自分が初音島に訪れ、純一と一緒にいっぱいお世話をしてくれた女の子を。

もう数十年も前の記憶だ。

容姿だって大分変わっている。声も同じだ。でも。

――ことり、だ



目の前の人物が誰なのか、すぐに分かった。

白河 ことり。

初音島で出会った素敵な人たちの内のひとり。

自分が大好きになった友達。

「あ、の……その………」

アイシアは、すぐに言葉が出てこなかった。

初音島に来たのだ。

だから、初音島に住んでいる、かつての知り合いと会うことだつてある。

そんなこと理解していた。

しかし、それでも、いざ会うと感情が溢れ出てきてしまうのが分かった。

「あの、もしかしてお知り合いですか？」

言葉が出てこず、呆然とするアイシアを見て、隣のピンク髪の女の子が目の前の人物に対して訊ねたのである。

その質問に、アイシアは胸の鼓動がひらすら速くなるのを感じる。

アイシアは溢れ出る感情を必死に押さえ、落ち着かせようとするが止まらない。

目の前の人物が答える前に、こちらでピンクの女の子に対して答えてあげれば良いのだ。

先ほど来たお客さんに返したように、初対面であると。

——でも。もしかしたら。

心の奥底で眠っていた感情をひたすら隠し、言葉を出そうとする。

そして、アイシアが喋ろうとして矢先のこと。

目の前の人物が戸惑いの感情をみせながらも口を開いた。

「いえ、はじめての筈、だけど………」

その言葉を聞いた瞬間、  
自身の先ほどまで溢れ出ようとした感情が一切消えていくのが分かった。

「そう…ですね、お会いしたことはないですよ」

——そう…そう、だよね

いつだって、そうだった。

何十回。

何百回。

この奥底で眠っていた感情が出てきた後、出てくる感情は——絶望だった。

「あの…、大丈夫ですか？」

「えっ、何が、かな？」

ピンク髪の女の子が心配そうにこちらを見てくる。

それに言葉を返すと、気遣うような声で言葉が発せられた。

「涙を、流してるので」

「えっ——」

アイシアは、目元に手を持って行く。

すると、そこは濡れていた。

気付いた瞬間、慌てて目元を拭う。

そして、必死に笑顔をつくり、彼女に言葉を返す。

「あ、ぜんぜん、大丈夫ですっ」

——ねえ、おばあちゃん

「ちよつと、目にほこりが入った、だけですから」

——わたしの罪って、許されないのかな